

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第195集

石 岸 遺 跡

2015

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第195集

石^{いし}岸^{ぎし}遺跡

2015

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

新城市の須長地区は、かの有名な長篠・設楽原の戦いの決戦地で、付近には復元された馬防柵などがあり、多くの歴史ファンの方々が訪れています。

このように戦国時代のイメージが強い地区で、奈良時代の大型倉庫群が見つかったことは、大きな驚きとともに、ここが古代から重要な地域であったことを示す証左であろうと思います。

この重要な調査成果が収められた本報告書が、この地域の歴史研究に寄与することを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成に際し、多大なご協力を賜りました原因者をはじめとする多くの方々に感謝いたします。

平成 27 年 3 月

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 伊藤克博

例 言

1. 本書は、愛知県新城市八束穂に所在する石岸遺跡（いしぎしいせき：県遺跡番号 760285）の発掘調査報告書である。遺跡の所在地は、北緯 34 度 55 分 33 秒、東経 137 度 32 分 4 秒（世界測地系）である。
2. 調査は、第二東海自動車道横浜名古屋線建設にともなう事前調査として、愛知県埋蔵文化財センターが愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。調査対象面積は 800 m²である。
3. 発掘調査は、平成 20 年 4 月から平成 20 年 9 月にかけて実施し、整理および報告書作成作業は平成 25 年 4 月から平成 26 年 3 月にかけて実施した。
4. 現地における発掘調査は、は朝日航洋（株）の支援を受けて、宮腰健司（現・統括専門員）・樋上 昇（調査研究専門員）・岡久雅浩（調査研究主事—現・愛知県立岡崎北高等学校教諭）が担当しておこなった。
5. 調査にあたっては、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、新城市教育委員会、中日本高速道路（株）をはじめとして、多くの関係諸機関のご協力を得た。
6. 本書の執筆は、小林克也・佐々木由香・バンダリ スタルシャン（以上、（株）パレオ・ラボ）、井上 巖（（株）第四紀 地質研究所）、蔭山誠一・川添和暁・鬼頭 剛・樋上 昇（以上、愛知県埋蔵文化財センター）が分担し、編集は樋上がおこなった。執筆分担については、目次に執筆者名を記した。
7. 整理作業は、樋上 昇が担当した。作業にあたっては次の方々、諸機関の助力を得た。
瀧 智美・時田典子、（整理補助員）、金子知久（写真工房 遊）、アルケリサーチ（株）、（株）イビソク、国際文化財（株）、（株）ラング
8. 本書に示す座標数値は、国土交通省に定められた平面直角座標第 VII 系に準拠する。海拔表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。ただし、表記は旧測地系（日本測地系）とした。
9. 本書に示す土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』による。
10. 遺物の登録は、本書図版の掲載番号を元に整理をおこなった。
11. 本書中の各遺構番号については、以下のアルファベットによる分類記号を調査時のまま使用した。
SB：掘立柱建物、SD：溝、SK：土坑、SI：堅穴建物、NR：自然流路、SX：その他の遺構
10. 写真および図面などの調査にかかわる記録類は、愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（0567-67-4161）
11. 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
愛知県埋蔵文化財調査センター
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（0567-67-4164）
12. 本書を作成するにあたり、次の方々、諸機関から多くのご指導とご助言を得た。記して感謝したい。
安 昭炫・伊藤 茂・伊藤正人・岩山欣司・大塚達朗・長田友也・小林克也・小林紘一・佐藤正教・城ヶ谷和広・贅 元洋・平井義敏・廣田正史・増子康真・松本泰典・山形秀樹・Zaur Lomatidze・Ineza Jorjoliani（敬称略、50 音順）

目次

第1章	調査の概要	(樋上 昇)
1.	調査に至る経緯と調査の経過	1
2.	歴史的環境	2
第2章	遺構	(樋上 昇)
1.	概要と基本層序	4
2.	A区	5
3.	B区	26
第3章	遺物	
1.	土器・土製品	57
(1)	1期の土器・土製品 (川添和暁)	57
(2)	3期の土器・土製品 (樋上)	61
2.	石器・石製品 (川添)	63
3.	木製品 (樋上)	65
4.	金属製品 (蔭山誠一)	66
第4章	自然科学分析	
1.	新城市中央部、石岸遺跡の地下層序と堆積年代 (鬼頭 剛)	116
2.	石岸遺跡出土木材の樹種同定 (小林克也)	122
3.	石岸遺跡出土の大型植物遺体 (佐々木由香・バンダリ スダルシャン)	129
4.	石岸遺跡の黒曜石原産地同定 (井上 巖)	133
第5章	総括 (樋上)	137

[遺構写真図版](#)

[遺物写真図版](#)

[抄録](#)

挿図 目次

図 1-1	新城市位置図	1
図 1-2	周辺遺跡分布図 (1:25,000)	3
図 2-1	調査区位置図 (1:5,000)	4
図 2-2	A 区第 2 面遺構平面図 (1:200)	6
図 2-3	A 区第 1 面遺構平面図 (1:200)	7
図 2-4	A 区西壁土層断面図 (1:50)	8
図 2-5	A 区南壁土層断面図 (1:50)	9
図 2-6	A 区土層注記	10
図 2-7	A 区 003・191SD 遺構平面図 (1:50)	11
図 2-8	A 区 003・191SD 土層断面図 (1:50)	12
図 2-9	A 区 031・033・034・035・036・037・042・ 144SI 遺構平面図 (1:50)	13
図 2-10	A 区 033・035・036・037・042・144SI 土層断面図 (1:50)	14
図 2-11	A 区 034・035・036・042SI 土層断面図 (1:50)	15
図 2-12	A 区 032SI 遺構平面図 (1:50)	16
図 2-13	A 区 032SI 土層断面図 (1:50)	17
図 2-14	A 区 038・095SI・093・101・110SD 遺構平面図 (1:50)	18
図 2-15	A 区 038・095SI 土層断面図 (1:50)	19
図 2-16	A 区 093・101・110SD 土層断面図 (1:50)	20
図 2-17	A 区 101SD・046NR 遺物出土状態図 (1:50)	21
図 2-18	A 区 001SD-A 遺構平面図・ 土層断面図 (1:50)	22
図 2-19	A 区 004SD ほか遺構平面図・ 土層断面図 (1:50)	23
図 2-20	A 区 100SB 遺構平面図 (1:50)	24
図 2-21	A 区 100SB 柱穴土層断面図 (1:50)	25
図 2-22	B 区第 3 面遺構平面図 (1:200)	26
図 2-23	B 区第 2 面遺構平面図 (1:200)	27
図 2-24	B 区第 1 面遺構平面図 (1:200)	28
図 2-25	B 区西壁土層断面図 -1 (1:50)	29
図 2-26	B 区西壁土層断面図 -2 (1:50)	30
図 2-27	B 区南壁土層断面図 -1 (1:50)	31
図 2-28	B 区南壁土層断面図 -2 (1:50)	32
図 2-29	B 区 600・671・672SI 遺構平面図 (1:50)	33
図 2-30	B 区 671・672SI 土層断面図 (1:50)	34
図 2-31	B 区 670・675・676SI 遺構平面図 (1:50)	35
図 2-32	B 区 670・675・676SI 土層断面図 (1:50)	36
図 2-33	B 区 673・678SI ほか遺構平面図 (1:50)	37
図 2-34	B 区 673・678SI ほか土層断面図 (1:50)	38
図 2-35	B 区 674SI ほか遺構平面図・ 土層断面図 (1:50)	39
図 2-36	B 区 679SK 遺物出土状態図 (1:50)	40
図 2-37	B 区 502・511・512・513・514SI 遺構平面図 (1:50)	41
図 2-38	B 区 502・511・512・513・514SI 土層断面図 -1 (1:50)	42
図 2-39	B 区 511・512・513・514SI 土層断面図 -2 (1:50)	43
図 2-40	B 区 503・507SI 遺構平面図・ 土層断面図 (1:50)	44
図 2-41	B 区 504・505SI 遺構平面図 (1:50)	45
図 2-42	B 区 504・505SI 土層断面図 (1:50)	46
図 2-43	B 区 650SB 遺構平面図・柱穴 433SK 遺物出土状態図 (1:50)	47
図 2-44	B 区 650SB 柱穴土層断面図 (1:50)	48
図 2-45	B 区 1013SB 遺構平面図・ 柱穴土層断面図 (1:50)	49
図 2-46	B 区 1014SB 遺構平面図・ 柱穴土層断面図 (1:50)	50
図 2-47	B 区 1015SB 遺構平面図 (1:50)	51
図 2-48	B 区 651・1016SB 遺構平面図 (1:50)	52
図 2-49	B 区 651・1016SB 柱穴土層断面図 (1:50)	53
図 2-50	B 区 1017SB・1018SA 遺構平面図 (1:50)	54
図 2-51	B 区 1017SB・1018SA 柱穴土層断面図 (1:50)	55
図 2-52	B 区 500SD 遺構平面図 (1:50)	56
図 3-1	安山岩剥片 法量散布図	66
図 3-2	金属製品実測図 (1:2)	66
図 3-3	1 期遺物出土分布図 -1 (1:400)	67
図 3-4	1 期遺物出土分布図 -2 (1:400)	68
図 3-5	1 期遺物出土分布図 -3 (1:400)	69
図 3-6	1 期遺物出土分布図 -4 (1:400)	70
図 3-7	1 期遺物出土分布図 -5 (1:400)	71
図 3-8	1 期出土土器・土製品実測図 -1 (1:3)	72
図 3-9	1 期出土土器・土製品実測図 -2 (1:3)	73
図 3-10	1 期出土土器・土製品実測図 -3 (1:3)	74
図 3-11	1 期出土土器・土製品実測図 -4 (1:3)	75
図 3-12	1 期出土土器・土製品実測図 -5 (1:3)	76
図 3-13	1 期出土土器・土製品実測図 -6 (1:3)	77
図 3-14	1 期出土土器・土製品実測図 -7 (1:3)	78
図 3-15	1 期出土土器・土製品実測図 -8 (1:3)	79
図 3-16	1 期出土土器・土製品実測図 -9 (1:3)	80
図 3-17	1 期出土土器・土製品実測図 -10 (1:3)	81
図 3-18	1 期出土土器・土製品実測図 -11 (1:3)	82
図 3-19	1 期出土土器・土製品実測図 -12 (1:3)	83
図 3-20	1 期出土土器・土製品実測図 -13 (1:3)	84

図 3-21	1 期出土土器・土製品実測図 -14 (1:3) ……	85
図 3-22	1 期出土土器・土製品実測図 -15 (1:3) ……	86
図 3-23	1 期出土土器・土製品実測図 -16 (1:3) ……	87
図 3-24	1 期出土土器・土製品実測図 -17 (1:3) ……	88
図 3-25	1 期出土土器・土製品実測図 -18 (1:2/1:3) …	89
図 3-26	3 期出土土器・土製品実測図 -1 (1:4) ……	90
図 3-27	3 期出土土器・土製品実測図 -2 (1:4) ……	91
図 3-28	3 期出土土器・土製品実測図 -3 (1:4) ……	92
図 3-29	3 期出土土器・土製品実測図 -4 (1:4) ……	93
図 3-30	3 期出土土器・土製品実測図 -5 (1:4) ……	94
図 3-31	3 期出土土器・土製品実測図 -6 (1:4) ……	95
図 3-32	3 期出土土器・土製品実測図 -7 (1:4) ……	96
図 3-33	3 期出土土器・土製品実測図 -8 (1:4) ……	97
図 3-34	1 期出土石器・石製品実測図 -1 (1:2) ……	98
図 3-35	1 期出土石器・石製品実測図 -2 (1:2/1:3) …	99
図 3-36	1 期出土石器・石製品実測図 -3 (1:3) ……	100
図 3-37	1 期出土石器・石製品実測図 -4 (1:3/1:4) …	101
図 3-38	1 期出土石器・石製品実測図 -5 (1:2/1:3) …	102
図 3-39	1 期出土石器・石製品実測図 -6 (1:3) ……	103
図 3-40	1 期出土石器・石製品実測図 -7 (1:2) ……	104
図 3-41	1 期出土石器・石製品実測図 -8 (1:2/1:3/1:4) ……	105
図 3-42	1 期出土石器・石製品実測図 -9 (1:3) ……	106
図 3-43	1 期出土石器・石製品実測図 -10 (1:3) ……	107
図 3-44	1 期出土石器・石製品実測図 -11 (1:3) ……	108
図 3-45	1 期出土石器・石製品実測図 -12 (1:3) ……	109
図 3-46	1 期出土石器・石製品実測図 -13 (1:2/1:3) …	110
図 3-47	1 期出土石器・石製品実測図 -14 (1:3/1:4) …	111
図 3-48	1 期出土石器・石製品実測図 -15 (1:4) ……	112
図 3-49	003SD 出土木製品実測図 -1 (1:4) ……	113
図 3-50	003SD 出土木製品実測図 -2 (1:8) ……	114
図 3-51	その他の出土木製品実測図 (1:4) ……	115
図 4-1	石岸遺跡における深掘地点 ……	117
図 4-2	石岸遺跡 A 区 (地点 1) における 深掘層序断面 ……	117
図 4-3	石岸遺跡 A 区 (地点 2) における 深掘層序断面 ……	118
図 4-4	石岸遺跡 B 区 (地点 3) における 深掘層序断面 ……	119
図 4-5	石岸遺跡出土木材の光学顕微鏡写真 -1 ……	126
図 4-6	石岸遺跡出土木材の光学顕微鏡写真 -2 ……	127
図 4-7	石岸遺跡出土木材の光学顕微鏡写真 -3 ……	128
図 4-8	石岸遺跡から出土した大型植物遺体 ……	132
図 4-9	石岸遺跡 Rb－Sr 図 ……	136
図 5-1	石岸遺跡 3 期の遺構変遷 (1:500) ……	138
図 5-2	石岸遺跡 3-3 期と周辺の地形 (1:2,500) ……	139

表 目次

表 2-1	遺構面と所属時期の対応表 ……	5
表 2-2	3 期の遺構変遷表 ……	5
表 4-1	石岸遺跡 A 区 (地点 1) における 放射性炭素年代測定結果 ……	120
表 4-2	石岸遺跡 A 区 (地点 2) における 放射性炭素年代測定結果 ……	120
表 4-3	石岸遺跡 B 区 (地点 3) における 放射性炭素年代測定結果 ……	120
表 4-4	石岸遺跡出土木材の樹種同定結果 ……	122
表 4-5	石岸遺跡から出土の大型植物遺体 ……	129
表 4-6	石岸遺跡から出土した 計測可能なモモ・スモモ一覧 ……	131
表 4-7	化学分析表 ……	136
表 4-8	原産地対比表 ……	136
表 5-1	3 期の遺構変遷表 ……	137

写真図版

遺構写真図版 1	A 区	3 面	遺物写真図版 1	1 期	土器
遺構写真図版 2	A 区	3 面	遺物写真図版 2	1 期	土器
遺構写真図版 3	A 区	3 面	遺物写真図版 3	1 期	土器
遺構写真図版 4	A 区	1・2 面	遺物写真図版 4	1 期	土器・土製品
遺構写真図版 5	A 区	2 面	遺物写真図版 5	3 期	土器・土製品
遺構写真図版 6	A 区	2 面	遺物写真図版 6	3 期	土器
遺構写真図版 7	A 区	1 面	遺物写真図版 7	3 期	土器
遺構写真図版 8	B 区	3 面	遺物写真図版 8	3 期	土器
遺構写真図版 9	B 区	3 面	遺物写真図版 9	3 期	土器・土製品
遺構写真図版 10	B 区	1・2 面	遺物写真図版 10	3 期	土器・土製品 /1 期 石器
遺構写真図版 11	B 区	2 面	遺物写真図版 11	1 期	石器・石製品
遺構写真図版 12	B 区	1 面	遺物写真図版 12	1 期	石器・石製品
遺構写真図版 13	B 区	1 面	遺物写真図版 13	3 期	木製品
遺構写真図版 14	B 区	1 面	遺物写真図版 14	3 期	木製品・金属製品
遺構写真図版 15	B 区	1 面			

第 1 章 調査の概要

1. 調査に至る経緯と調査の経過

石岸遺跡は愛知県新城市須長字石岸に所在している。地形的には豊川およびその支流によって形成された狭い平野と、その北に聳える雁峰山（標高 628.3m）の境に位置し、雁峰山から派生する尾根を削り出した標高約 80m の平坦面に位置している。西には長篠・設楽原の戦いで織田・徳川連合軍と武田軍の決戦場となった連吾川が北から南に流れ、豊川に注いでいる。

本遺跡は第二東海自動車道横浜名古屋線（新東名高速道路）建設の事前調査で、中日本高速道路株式会社豊川工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業としておこなった。橋脚部分のみの調査であるため、東から A・B の 2 調査区、合計 800 m² の調査面積である。

本調査に先立つ試掘調査では特に重要な遺構・遺物を確認しておらず、遺構面も 1 面のみの設

定であったため、当初は平成 20 年 5 月下旬から 7 月までの約 2 ヶ月の調査期間を予定していた。しかしながら、実際には最初に着手した A 区において 2 面、次の調査区である B 区では 3 面もの遺構面と、1000 を超える遺構数が確認されたこと。また、B 区が本調査開始時点においてまだ耕作されており、作物の収穫時期である 7 月中旬まで調査に入れなかったことなどの事由により、結果的に石岸遺跡の調査完了は 9 月 20 日と 2 ヶ月近くずれ込むことになった。

調査担当者は宮腰健司・樋上 昇・岡久雅浩の 3 名である。

入札による支援業者は朝日航洋株式会社で、調査体制は以下の通りである。

現場代理人	浅田良治
調査補助員	城前喜英
測量技師	尾崎祐司
測量補助員	安藤貢一

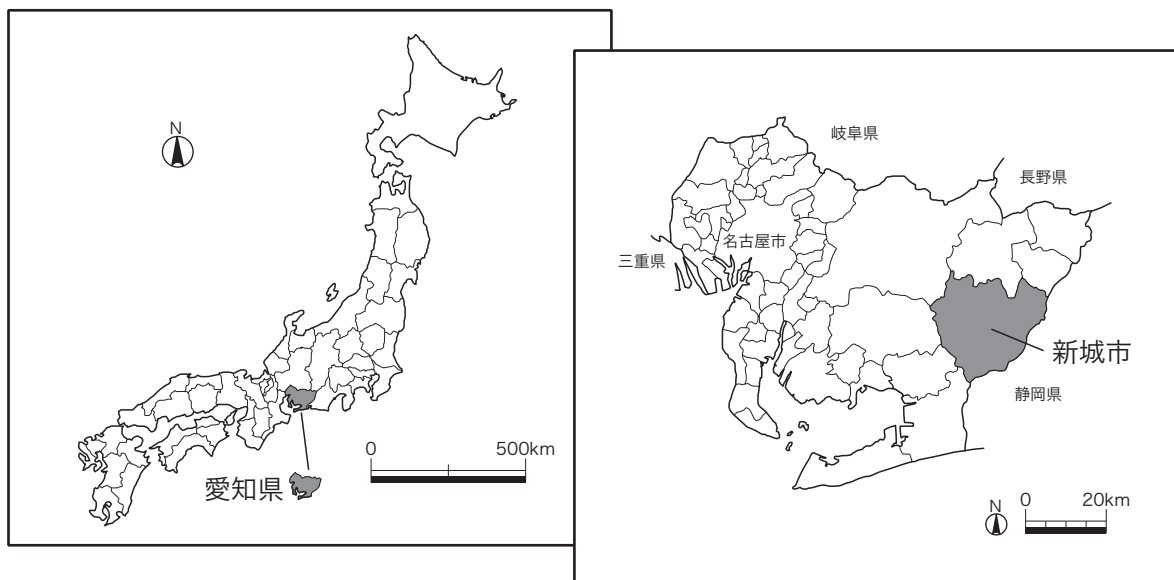


図 1-1 新城市位置図（須長 10 号填報告書より転載）

前述の理由によってB区の調査着手が著しく遅れたことにより、厚さ1m以上におよぶ古代の遺物を大量に含む整地層(調査時は包含層と認識)を人力ではなく、重機で掘削せざるを得なかった。そのために、本来なら包含層上面で確認し得たはずの掘立柱建物柱穴の多くを破壊してしまったことは、調査担当者として慚愧に堪えない。

調査は、A区が5月12日にフェンス張りとは基準杭の設置。5月20日より表土はぎを開始し、5月30日から上面遺構の検出と掘削。6月25日に全景撮影。下面遺構の検出と掘削は6月27日から開始し、7月11日に全景撮影をおこなった。

B区は7月17日より表土はぎ開始。7月28日より第1・2面の遺構検出と掘削。8月22日に全景撮影。8月26日より第3面の遺構検出と掘削。9月12日に全景撮影。

調査終了直前の平成20年9月13日には地元説明会を開催し、70名の参加者を得た。

埋め戻しは9月16日からで、9月20日に完了してフェンス・資材の撤去をおこなった。

遺物整理業務は樋上を担当者として、平成25年度の1カ年で、コンテナ23箱の出土遺物は愛知県埋蔵文化財センターにおいて瀧 智美・時田典子(整理補助員)が選別・接合・復元作業をおこなった。また、土器の実測・デジタルトレースは株式会社イビソクに、木製品の実測・デジタルトレースは株式会社シン技術コンサル、石器の実測・デジタルトレースは株式会社ラング、金属器のデジタルトレースは国際文化財株式会社に委託した。

遺物の写真撮影は写真工房遊の金子知久氏に依頼し、遺構図の編集作業および遺構・遺物写真のレイアウトは有限会社アルケリサーチに委託した。

2. 歴史的環境

石岸遺跡は連吾川によって形成された南北に細長い谷筋の東にある残丘状の低い尾根筋の東側緩斜面に位置している。

連吾川は前述のように天正3(1575)年5月

21日に織田・徳川連合軍と武田軍による長篠・設楽原の戦いの最終決戦地で、両軍が対峙したことでその名を知られており、本遺跡の約600m南には織田・徳川連合軍が築いたとされる馬防柵が復元されている。

本遺跡の東約250mの丘陵部上には須長9号墳と同10号墳が築かれている。このうち9号墳の所在が現状では不明だが、10号墳に関しては平成21年度に愛知県埋蔵文化財センターによって発掘調査がおこなわれ、尾根の先端に堀割をもって築かれた径約14mの円墳で、横穴式石室の主体部を有することが確認されている。出土遺物から7世紀後半頃の築造であることが判明しており、後述するように本遺跡ときわめて密接な関わりをもつと考えられる(愛知県埋蔵文化財センター2014)。

また、本遺跡の西約250mの加原遺跡では平安時代の竪穴建物群が、西約600mには古墳時代前期の大集落である石座神社遺跡が存在している。石座神社遺跡の東側斜面には溝で区画された奈良時代の掘立柱建物と竪穴建物からなる遺構群が存在し、両遺跡ともこの石岸遺跡とはなんらかの有機的な関連性を有する可能性がある。

石座神社遺跡では縄文時代早期から晩期までの遺構・遺物群も確認されており、この点においても本遺跡との関わりを考慮しておく必要がある。また、本遺跡の約750m東にあるモリ下遺跡では縄文時代早期前半と後・晩期の遺構・遺物を調査している。このほか本遺跡の約2km南にある萩平遺跡では旧石器～縄文時代早期の遺構・遺物、夜燈遺跡で縄文時代早期の遺構・遺物、上ノ風呂遺跡で縄文時代後期の遺物、大ノ木遺跡でも縄文時代後・晩期の遺構・遺物が確認されている。

南貝津遺跡、吉竹遺跡、石座神社遺跡、モリ下遺跡などから弥生時代中期の土器が出土している。

引用文献

愛知県埋蔵文化財センター 2012『柿下遺跡』

2014『須長10号墳』

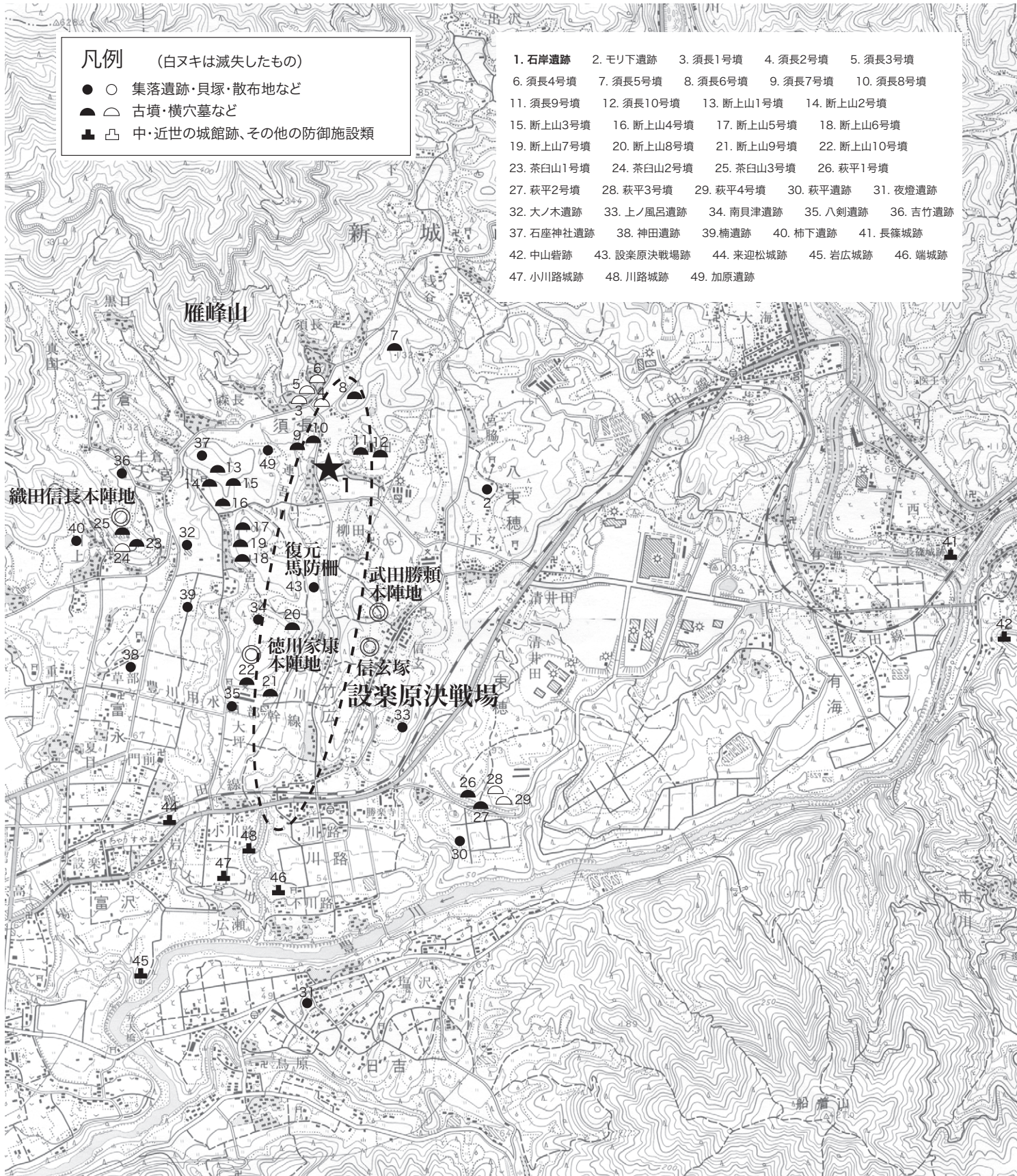


図 1-2 周辺遺跡分布図 (国土地理院 1 : 25,000 「三河富岡」「三河大野」 須長 10 号墳報告書第 3 図を改変)

第2章 遺構

1. 概要と基本層序

地形的にはB区が高く、第1面の検出面で標高約82m、A区は約81.5mである。ただし後述するように、B区は古代の遺物を大量に含む整地層を二次堆積によって後世に形成された遺物包含層と誤認して1～1.5mも重機で除去したうえでの検出面であることから、本来の遺構面はB区北西隅で標高約83.5m、同じくB区南東隅で約82mと、同一調査区内で1.5mもの比高差がある。

これは7世紀後半から11世紀代にかけての度重なる整地によるもので、整地層は最も分厚い箇所では1m近い厚さとなっている。このB区の整地層は、調査区西側の南北に伸びる残丘を削り取ったものと考えられる(図2-1)。

一方、A区は現代の水田耕作土を除去した面が

遺構検出面である。

A区では2面、B区では3面におよぶ遺構面を確認した。それぞれの所属時期は表2-1のとおりだが、A区に関しては7世紀後半から11世紀までの遺構がほぼ連続的に形成されている。

それに対してB区は第1面がA区の1・2面に対応し(3期)、第2面が弥生時代中期頃(2期)、第3面が縄文時代中期～後期(1期)の遺構面となる。

本遺跡の東に位置する丘陵上には7世紀後半に築造された直径約14mの円墳である須長10号墳が所在する(愛知県埋蔵文化財センター2014)。地理的にも近く、時期的にも本遺跡の存続期間と重なることから、きわめて密接な関わりがあったと考えられる。



図2-1 調査区位置図(新城市都市計画図を1:5,000に改変)

表 2-1 遺構面と所属時期の対応表

	1期（縄文中期～後期）	2期（弥生中期後葉？）	3期（7世紀後半～11世紀）
A区			1・2面
B区	3面	2面	1面

表 2-2 3期の遺構変遷表

		3-1期 (H-50～I-17)	3-2期 (I-17～C-2)	3-3期 (I-25～O-10)	3-4期 (K-14～H-72)
A区	河道	046NR			
	溝	(086SD) 190SD 091SD	003SD 101SD 110SD(001SD-B) 093SD		004SD 002SD (001SD-A)
	竪穴建物	037SI 144SI 042SI 036SI	035SI 033SI 095SI	034SI 031SI (038SI)	
	掘立柱建物				100SB
B区	土坑 溝	145・150・161・163・164SK 058SK			
	掘立柱建物	(1014SB) (1015SB)	500SD (1016SB) (1017SB)	650SB 1013SB	(651SB)
	柵列		(1018SA)		

須長 10 号墳

※ タゴチックは時期の明確な遺物が出ている遺構、かつ付は所属時期の決め手に欠ける遺構

2. A区

A区では掘立柱建物1棟、竪穴建物11棟、溝9条、自然流路1条、土坑多数を検出した。

全ての遺構についてはCD-ROMの遺構一覧表に記載してあるため、ここでは主要遺構に絞って、表2-2に従って時期ごとに概略を述べる。

3-1期 調査区の東側には自然流路046NRが北から南へと流れる。この自然流路と微高地の境には南北溝086SDと190SDが掘削される。

その後、微高地上には竪穴建物037・144・042・036SIと、ほぼ同一地点に重複しながら連続して築造される。また032SIも遺構の重複完形から当該期とみられ、建物の軸線からみて037・144・042SIのいずれかと同時期である可能性が高い。091SDはこの032SIに切られることから、3-1期に属する。

当該期の竪穴建物で全体の規模がわかるのは032SIのみである。この竪穴建物には南側に焼土の詰まった土坑039SLがあり、カマドの可能性がある。平面形は東側がやや幅広になる台形を呈する。同様に平面台形の竪穴建物として、037・

042SIがある。

この時期の竪穴建物として最も規模が大きいのは036SIで、一辺が約8mを測る。ここからは東山50号窯式期新段階～岩崎17号窯式期併行の須恵器杯Hが出土している。

046NRの調査区北東隅からは、古代の木製品としては珍しい素木弓が、火鑽白や矢板などとともに出土している。共伴する須恵器はおおむね東山50号窯式期併行。

3-2期 046NRの西岸の溝は086・190SDから003SDに替わり、003SDから枝分かれする溝101・110(001SD-B)SDが掘削される。さらに101・110SDの埋没後は093SD・095SIが築かれる。

調査区南側では、035SIが当該期の竪穴建物とみられる。この035SIの廃絶後、間層の堆積を経て033SIが築造される。

035・033SIは一辺が6m強の標準的な規模の竪穴建物。095SIからは8世紀前半の須恵器杯B蓋が出土している。

003SDは最も遺物の出土量が多く、東山50号窯式期～高蔵寺2号窯式期併行と、やや時期幅

がある。

101SD からはほぼ完形の須恵器杯 H とハソウ（東山 50 号窯式期～岩崎 17 号窯式期併行）が相伴している。

同様に 110SD からは東山 50 号窯式期併行の須恵器杯 H が出土している。

岩崎 41 号窯式期併行の遺物がほとんどみられず、前述のように 035SI と 033SI には間層を挟

むことから、この 3-2 期は 7 世紀末～8 世紀初頭頃にやや断絶期を有する可能性がある。

3-3 期 後述する B 区では大型の総柱建物 650・1013SB が築かれる。A 区においては明確な遺物の出土はないが、遺構の重複関係から 034・038・031SI が当該期に相当すると考えられる。

034・031SI はいずれも東辺が確認できている

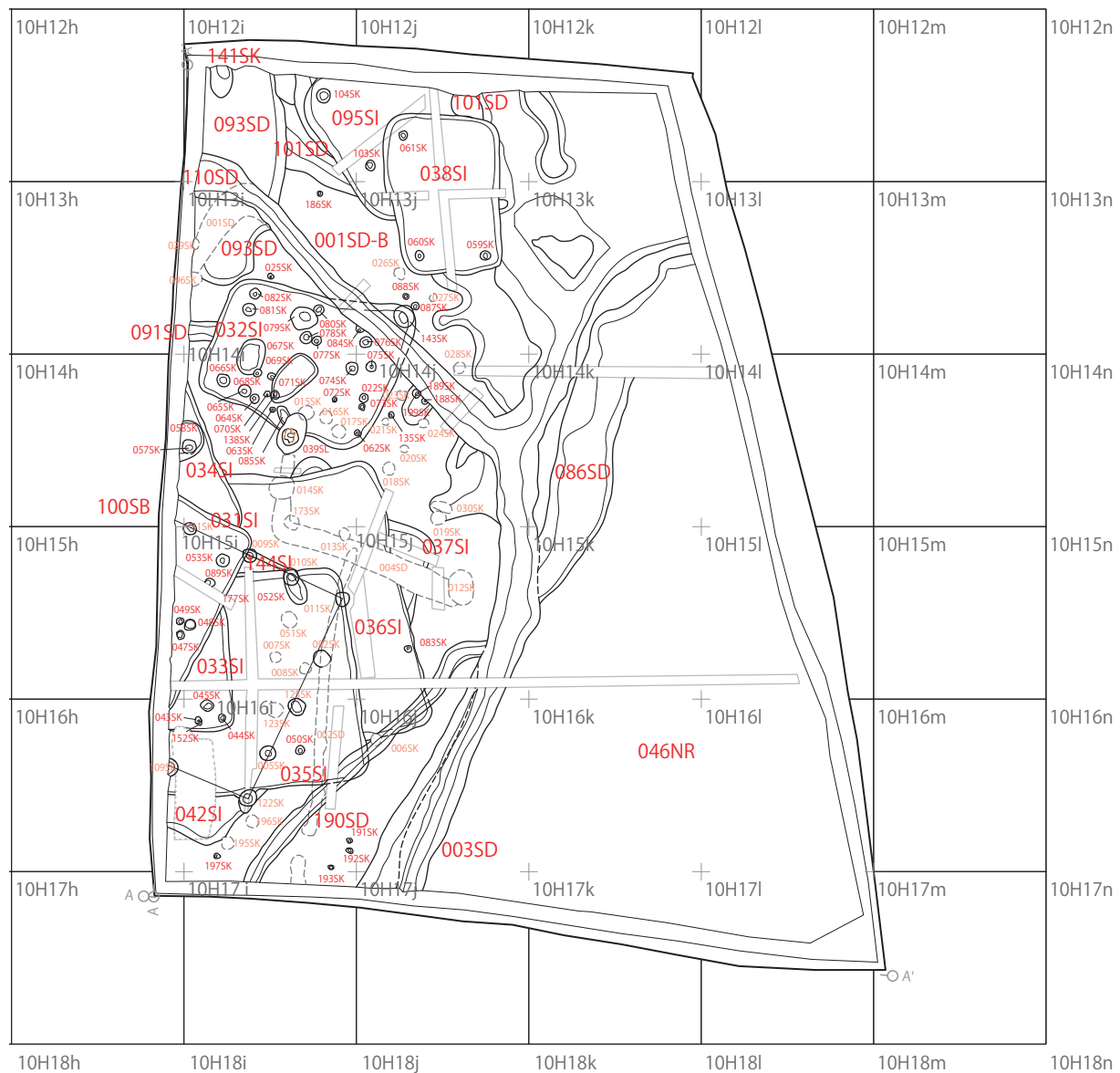


図 2-2 A 区第 2 面遺構平面図 (1:200)

ただ、おおむね一辺が6m 前後の標準的な規模と推測される。

038SIは3-2期の095SIを切って築かれており、長軸が4.6m、短軸は3.4m のやや台形を呈する竪穴建物である。

3-4 期 第1 面において検出した遺構の時期に相当する。竪穴建物はなくなり、L 字状の溝

004SD、次いで南北溝 002SD が掘削される。

さらに 002SD を切って、軸線を北でやや東に振る掘立柱建物 100SB が築かれる。西辺が調査区外に伸びるために、東西の規模は不明だが、南北が4 間、東西は3 間以上。柱の掘り方は直径50cm ほどの円形で、柱の径は20cm 程度。建物の軸線は、北で26°東に振れる。

この100SB よりも方位はさらに北で東に振れ

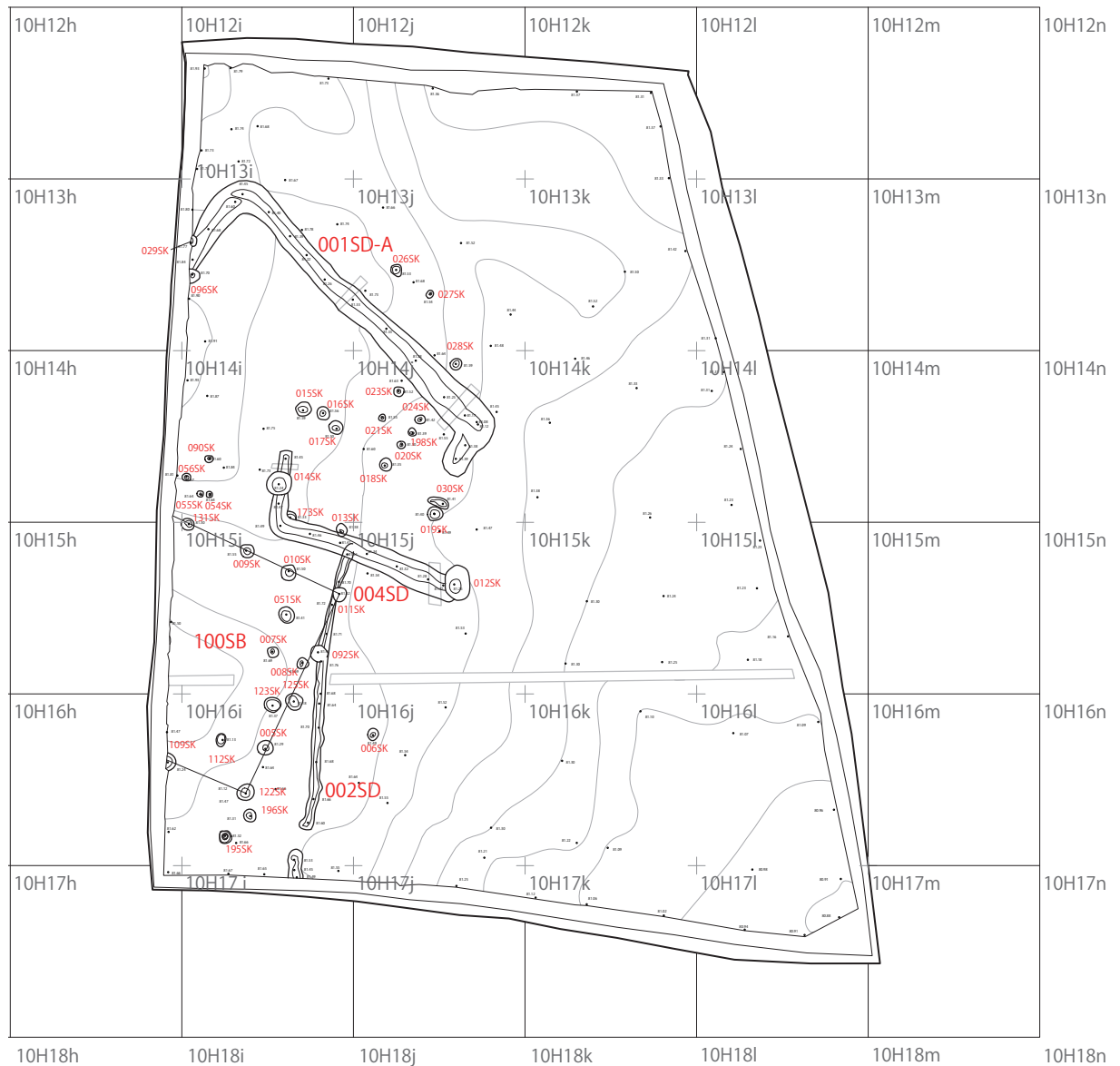


図 2-3 A 区第1 面遺構平面図 (1:200)

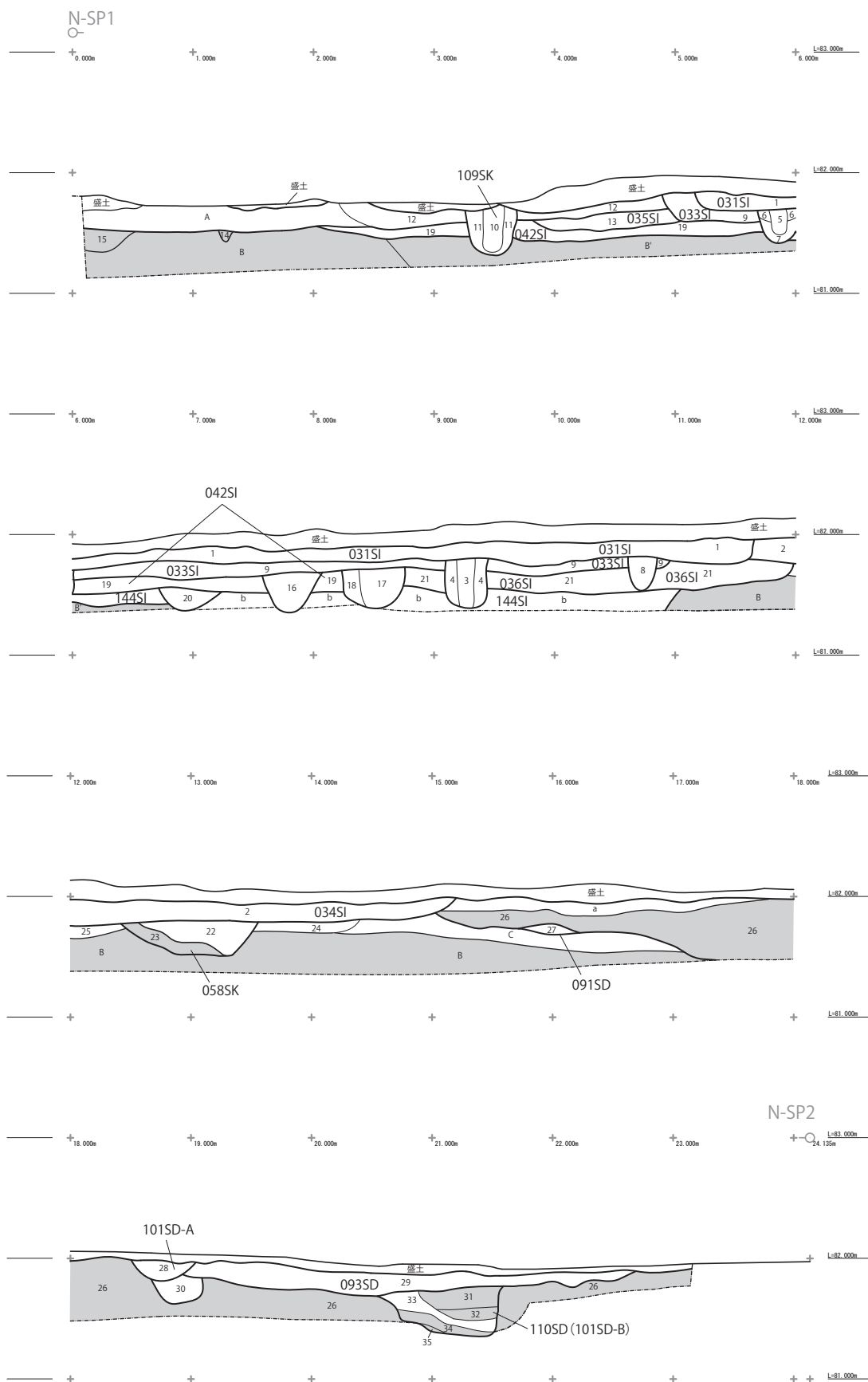


図 2-4 A 区西壁土層断面図 (1:50)

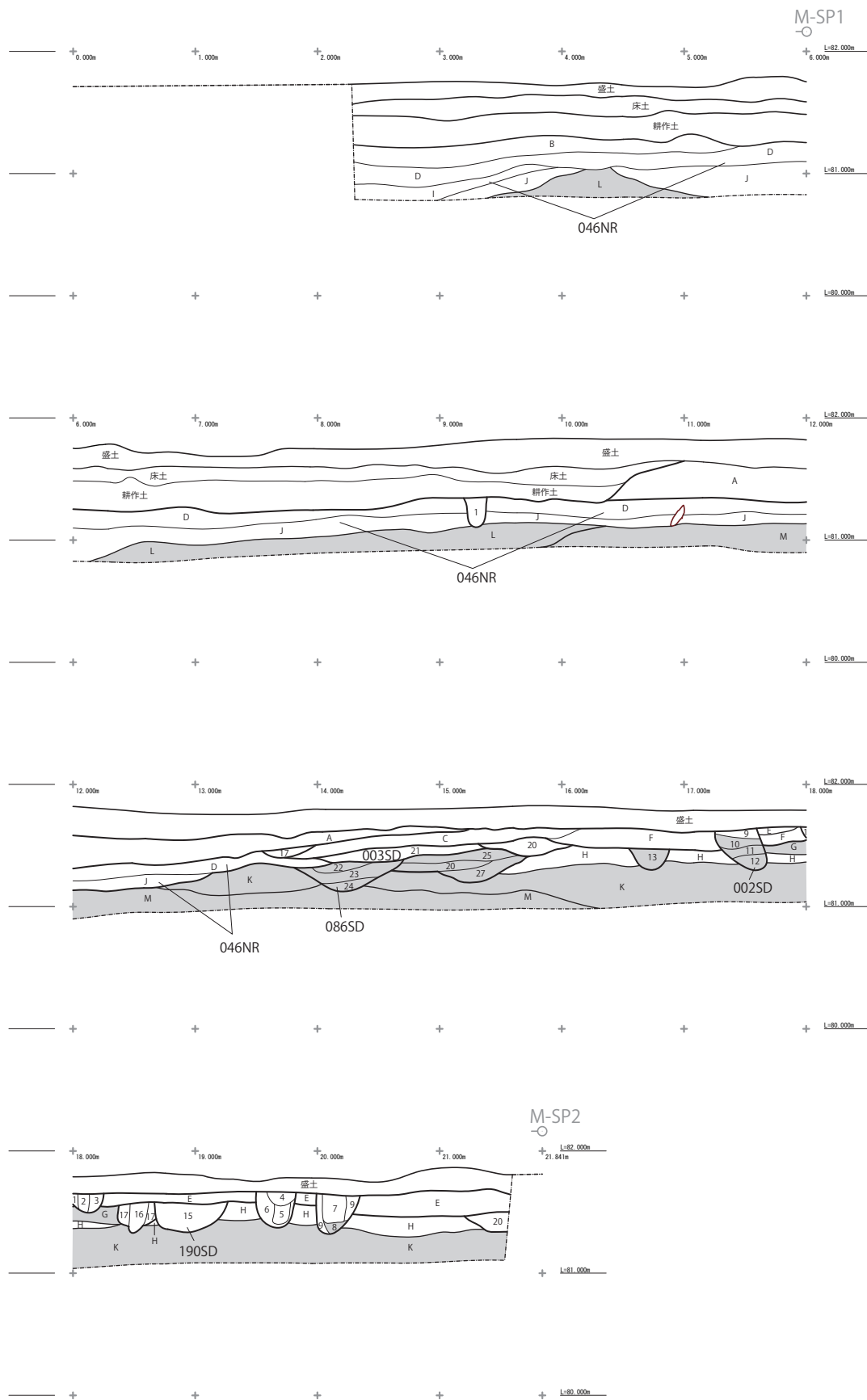


图 2-5 A 区南壁土层断面图 (1:50)

A区西壁土層断面注記

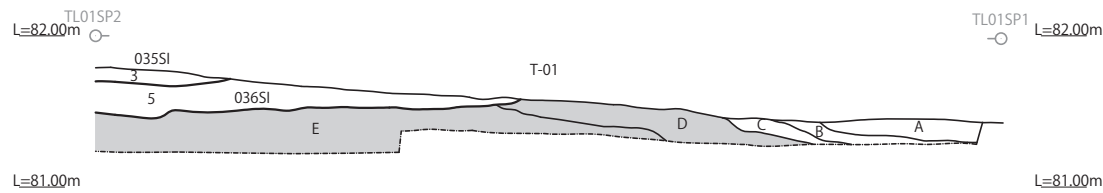
A.	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	硬質	粘性やや強い	暗サビ質土強い斑状に含む
B.	7.5Y5/2	灰オリーブ色	シルト質砂	硬質	粘性ややあり	サビ質土まばらに含む
C.	10YR3/2	暗緑灰色	シルト	やや軟質	粘性やや強い	サビ質土まばらに含む
a.	2.5Y4/6	暗褐色	砂質シルト	硬質	粘性やや弱い	暗褐色土斑状に含む
b.	5Y2/2	黒褐色	砂質シルト	やや硬質	粘性ややあり	黒褐色土斑状に含む
1.	031Si	覆土				
2.	034Si	覆土				
3.	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	やや軟質	粘性強い	
4.	2.5Y3/1	黒褐色	粘土質シルト	やや硬質	粘性強い	
5.	7.5Y3/2	オリーブ黒色	シルト	軟質	粘性ややあり	
6.	7.5Y3/2	オリーブ黒色	細砂質シルト	硬質	粘性ややあり	
7.	10Y4/2	オリーブ灰色	細砂質シルト	やや硬質	粘性ややあり	
8.	10YR2/3	黒褐色	シルト	軟質	粘性あり	
9.	033Si	覆土				
10.	5Y3/2	オリーブ黒色	細砂質シルト	やや軟質	粘性ややあり	
11.	5Y3/1	オリーブ黒色	シルト	硬質	粘性ややあり	
12.	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	やや軟質	粘性強い	
13.	035Si	覆土				
14.	2.5Y3/2	黒褐色	シルト質細砂	軟質	粘性あり	
15.	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粗砂	軟質	粘性なし	
16.	5Y3/2	オリーブ黒色	細砂質シルト	硬質	粘性ややあり	
17.	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	軟質	粘性ややあり	
18.	2.5Y3/1	黒褐色	シルト	硬質	粘性ややあり	
19.	042Si	覆土				
20.	5Y3/1	オリーブ黒色	砂質シルト			
21.	036Si	覆土				
22.	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	細砂質シルト	やや軟質	粘性ややあり	
23.	5Y5/3	灰オリーブ色	シルト質細砂	やや硬質	粘性ややあり	
24.	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	軟質	粘性あり	
25.	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	軟質	粘性あり	
26.	2.5Y5/4	黄褐色	砂	粗砂60% 極細礫10% 中砂30%		
27.	2.5Y5/3	黄褐色	シルト	軟質	粘性やや強い	
28.	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	やや硬質	灰黄色シルト斑状に含む	
29.	2.5GY3/1	暗オリーブ灰色	細砂質シルト	やや軟質	粘性やや強い	
30.	7.5Y4/2	灰オリーブ色	細礫質シルト	硬質	粘性弱い	
31.	5Y4/2	灰オリーブ色	粗砂	軟質	粘性弱い 極細礫少し含む	
32.	5Y4/2	灰オリーブ色	シルト質砂	軟質	極細礫少し含む	
33.	7.5GY3/1	暗緑灰色	粘土質シルト	軟質	粘性やや強い	
34.	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	軟質	粘性弱い	
35.	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粗砂	軟質	粘性なし	

A区南壁土層断面注記

1.	10G5/1	緑灰色	砂質シルト	軟質	粘性あり	
2.	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	軟質	粘性弱い	
3.	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	硬質	粘性やや強い	
4.	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト	やや硬質	粘性やや強い	
5.	2.5Y3/1	黒褐色	シルト	やや軟質	粘性ややあり 砂質ブロック少し含む	
6.	5Y3/2	オリーブ黒色	シルト	やや硬質	粘性強い サビ粘質土斑状に含む	
7.	10YR2/3	黒褐色	シルト	粘性やや強い 褐色粘質土強い斑状に含む		
8.	5Y4/2	灰オリーブ色	シルト質砂	軟質	粘性ややあり	
9.	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト	やや硬質	粘性やや強い	
10.	2.5Y5/4	黄褐色	砂	軟質	粘性弱い	
11.	5Y4/3	暗オリーブ色	砂	軟質	粘性弱い	
12.	5Y3/2	オリーブ黒色	シルト質砂	軟質	粘性弱い	
13.	5Y5/4	オリーブ色	粗砂	軟質	粘性なし 極細砂少し含む	
14.	7.5Y3/2	オリーブ黒色	砂質シルト	やや軟質	粘性ややあり	
15.	5Y3/1	オリーブ黒色	シルト	やや硬質	粘性ややあり 所々砂質ブロック斑状に含む	
16.	5Y4/2	灰オリーブ色	細砂質シルト	軟質	粘性ややあり	
17.	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	粘性ややあり		
18.	5GY4/1	暗オリーブ灰色	細砂質シルト	やや硬質	粘性弱い	
19.	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粗砂	軟質	粘性なし	
20.	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	やや軟質	粘性あり	
21.	2.5Y5/3	黄褐色	細砂質シルト	やや硬質	粘性ややあり サビ質土やや強い斑状に含む	
22.	10Y4/2	オリーブ灰色	シルト質細砂	やや軟質	粘性ややあり サビ質砂まばらに含む	
23.	7.5Y5/3	灰オリーブ色	砂	軟質	粘性なし	
24.	7.5Y4/2	灰オリーブ色	シルト質細砂	軟質	粘性ややあり サビ質土少し含む	
25.	7.5Y5/2	灰オリーブ色	砂	軟質	粘性弱い 粗砂少し含む	
26.	7.5Y5/3	灰オリーブ色	砂	やや軟質	粘性弱い サビ質砂層状に含む	
27.	10Y4/2	灰オリーブ灰色	細砂	やや軟質	粘性ややあり サビ質土少し含む	
28.	7.5Y5/2	灰オリーブ色	細砂	やや軟質	粘性弱い サビ質土斑状に含む	
A.	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	やや軟質	粘性やや弱い	
B.						
C.	10GY4/1	暗緑灰色	砂質シルト	硬質	粘性やや弱い サビ質砂斑状に含む	
D.	046NR埋土					
E.	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	硬質	粘性やや強い 暗サビ質土強い斑状に含む	
F.	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	硬質	粘性ややあり 明サビ質土斑状に含む	
G.	5Y4/3	暗オリーブ色	シルト質細砂	硬質	粘性ややあり 明サビ質土斑状に含む	
H.	5Y4/2	灰オリーブ色	砂質シルト	粘性ややあり		
I.	046NR埋土					
J.	5B6G4/1	暗青灰色	細砂質シルト	サビ質土斑状に含む		
K.	7.5Y5/2	灰オリーブ色	シルト質砂	硬質	粘性ややあり サビ質土まばらに含む	
L.	5B6G5/1	青灰色	砂	硬質	粘性なし サビ質土まばらに含む	
M.	5GY4/1	暗オリーブ灰色	砂	粘性弱い 所々細砂～粗砂		

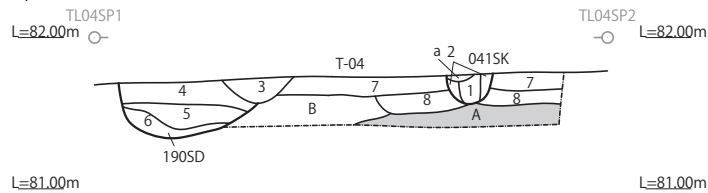
図 2-6 A 区土層注記

A区T-01



T-01			
1. 2.5GY2/1	黒色	シルト	やや硬質 粘性やや強い サビ質土やや強い斑状に含む
2. 5Y3/2	オリーブ黒色	シルト	硬質 粘性やや強い
3. 2.5Y3/2	黒褐色	シルト	硬質 粘性ややあり サビ質土斑状に含む
4. 5Y3/2	オリーブ黒色	シルト	やや硬質 粘性ややあり 下底にサビ質層一部含む
5. 10Y3/2	オリーブ黒色	シルト	硬質 粘性やや強い 硬質サビ粘質土含む
A. 5Y3/2	オリーブ黒色	粘土質シルト	やや硬質 粘性やや強い 硬質サビ粘質土含む
B. 5Y4/2	灰オリーブ色	細砂質シルト	軟質 粘性ややあり
C. 5Y3/2	オリーブ黒色	シルト	やや軟質 粘性やや強い
D. 7.5Y3/2	オリーブ黒色	シルト質砂	硬質 粘性弱い
E. 2.5GY3/1	暗オリーブ灰色	シルト質砂	やや軟質 粘性ややあり

A区T-04



a. 2.5GY2/1	オリーブ灰色	シルト	軟質 粘性ややあり 下面に層厚の明橙褐色サビ質土挟む
耕作痕			
1. 10Y3/1	オリーブ黒色	シルト	やや軟質 粘性ややあり サビ質土少し含む
2. 5Y3/1	オリーブ黒色	シルト	硬質 粘性ややあり サビ質土やや強い斑状に含む
3. 5Y3/2	オリーブ黒色	シルト	硬質 粘性やや強い 明サビ質土斑状に含む
4. 5Y4/2	灰オリーブ色	シルト	硬質 粘性ややあり 明サビ質土少し含む
5. 10Y3/2	オリーブ黒色	砂質シルト	やや硬質 粘性ややあり
6. 5Y4/2	灰オリーブ色	砂質シルト	粘性弱い 砂質ブロック斑状に含む
7. 2.5Y3/2	黒褐色	シルト	硬質 粘性ややあり サビ質土斑状に含む
8. 10Y3/2	オリーブ黒色	シルト	硬質 粘性やや強い 硬質サビ粘質土含む
A. 2.5GY3/1	暗オリーブ灰色	シルト質砂	やや軟質 粘性ややあり
B. 10Y3/1	オリーブ黒色	砂質シルト	硬質 粘性ややあり サビ質土斑状に含む

図 2-8 A 区 003・190SD 土層断面図 (1:50)

るが、3-2 期の 110SD (101SD-B) をコの字状に再掘削した溝 001SD-A は、東端が 100SB の東側柱列にほぼ揃うことから、同時期に属するとみられる。

101SD-A と 100SB の間にも若干の柱穴が認められることから、同時期の掘立柱建物ないしは柵列が存在した可能性が高い。

A 区において、この 3-4 期に属する遺物は少ないが、002SD から折戸 53 号窯式期～東山 72 号窯式期併行の灰釉陶器碗が出土している。

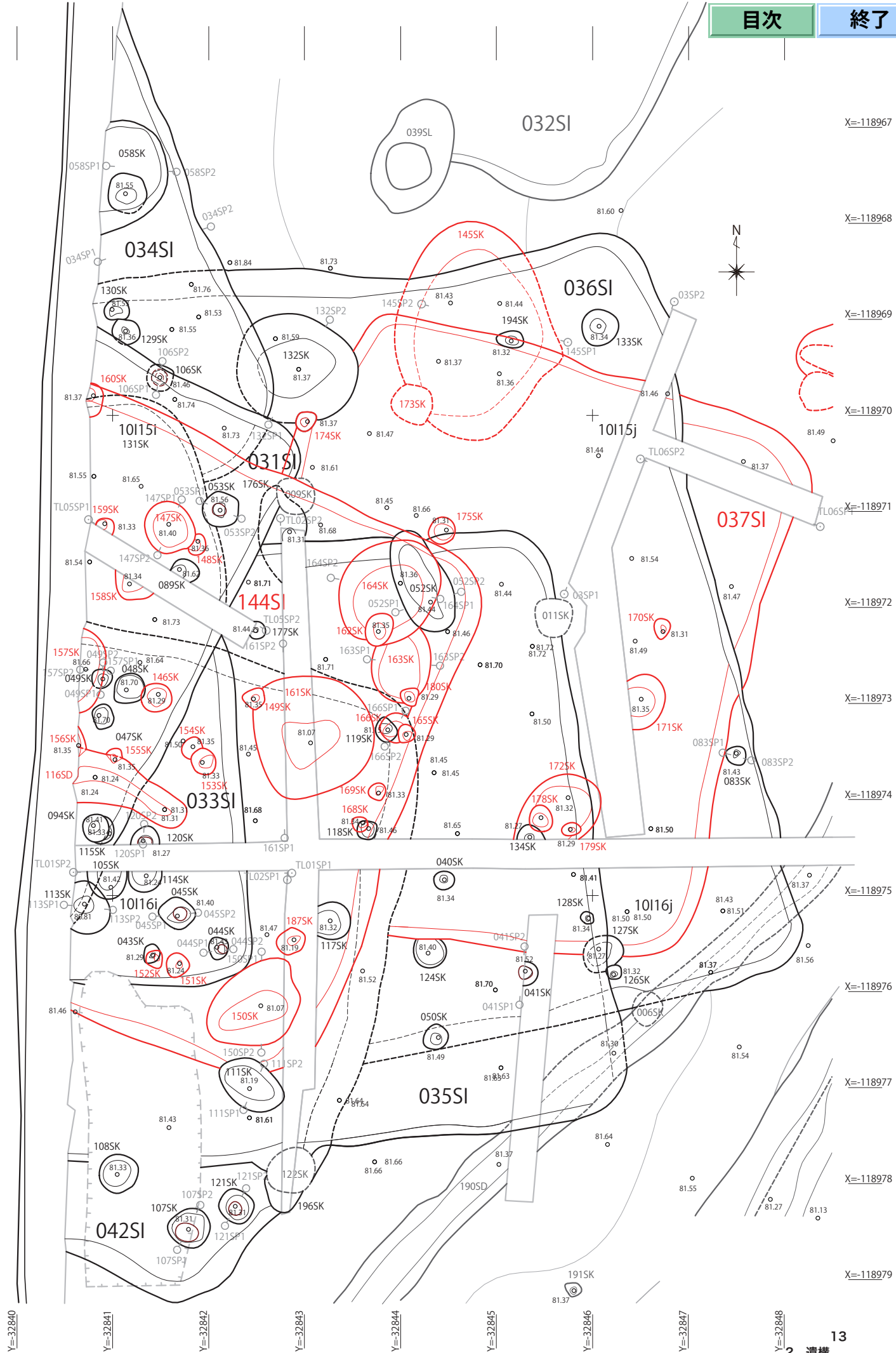
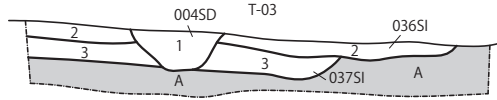


図 2-9 A 区 031・033・034・035・036・037・042・144SI 遺構平面図 (1:50)

A区T-03

TL03SP1
L=82.00m

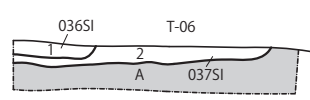


L=81.00m

- | | | | | | |
|-------------|---------|--------|------|--------|--------------|
| 1. 2.5Y4/2 | 暗灰黄色 | 細砂質シルト | 硬質 | 粘性弱い | サビ質土強い斑状に含む |
| 2. 10Y3/2 | オリーブ黒色 | シルト | 硬質 | 粘性やや強い | 硬質サビ粘質土含む |
| 3. 5Y4/3 | 暗オリーブ色 | 細砂質シルト | 硬質 | 粘性ややあり | 硬質サビ粘質土斑状に含む |
| A. 2.5GY3/1 | 暗オリーブ灰色 | シルト質砂 | やや軟質 | 粘性ややあり | |

A区T-06

TL06SP2
L=82.00m



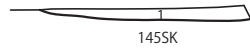
L=81.00m

- | | | | | | |
|-------------|---------|--------|------|--------|--------------|
| 1. 10Y3/2 | オリーブ黒色 | シルト | 硬質 | 粘性やや強い | 硬質サビ粘質土含む |
| 2. 5Y4/3 | 暗オリーブ色 | 細砂質シルト | 硬質 | 粘性ややあり | 硬質サビ粘質土斑状に含む |
| A. 2.5GY3/1 | 暗オリーブ灰色 | シルト質砂 | やや軟質 | 粘性ややあり | |

L=81.00m

A区145SK

145SP1
L=82.00m

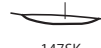


L=81.00m

- | | | | | | |
|-----------|--------|-------|------|------|---------------|
| 1. 10Y4/2 | オリーブ灰色 | 砂質シルト | やや軟質 | 粘性弱い | 明サビ色砂質土まばらに含む |
|-----------|--------|-------|------|------|---------------|

A区147SK

147SP1
L=82.00m



L=81.00m

- | | | | | | |
|----------|--------|-------|----|--------|-----------|
| 1. 5Y4/2 | 灰オリーブ色 | 砂質シルト | 軟質 | 粘性ややあり | 灰黄色砂斑状に含む |
|----------|--------|-------|----|--------|-----------|

A区150SK

150SP1
L=82.00m



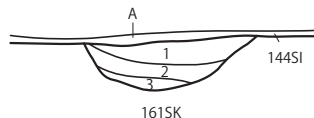
L=81.00m

- | | | | | | |
|------------|--------|--------|--------|-------------|------------|
| 1. 7.5Y5/2 | 灰オリーブ色 | 細砂質シルト | 粘性ややあり | 淡灰黄色細砂塊少し含む | |
| 2. 5Y4/2 | 灰オリーブ色 | 細砂質シルト | やや軟質 | 粘性ややあり | 灰黄色粘質土少し含む |

L=81.00m

A区161SK

161SP1
L=82.00m

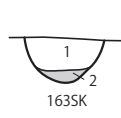


L=81.00m

- | | | | | | |
|------------|--------|--------|-------|--------|--------|
| A. 144SI | 覆土 | オリーブ黒色 | 砂質シルト | やや硬質 | 粘性ややあり |
| 1. 7.5Y4/2 | 灰オリーブ色 | 砂質シルト | やや軟質 | 粘性ややあり | |
| 2. 5Y3/2 | オリーブ黒色 | 砂質シルト | やや軟質 | 粘性やや弱い | |
| 3. 10Y4/2 | オリーブ灰色 | 細砂質シルト | | 粘性やや弱い | |

A区163SK

163SP1
L=82.00m

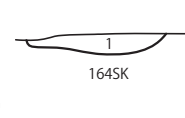


L=81.00m

- | | | | | | |
|------------|--------|-------|----|--------|---------------|
| 1. 7.5Y4/2 | 灰オリーブ色 | 砂質シルト | 軟質 | 粘性やや弱い | サビ質土やや強い斑状に含む |
| 2. 5Y4/2 | 灰オリーブ色 | 砂 | 軟質 | 粘性弱い | |

A区164SK

164SP1
L=82.00m



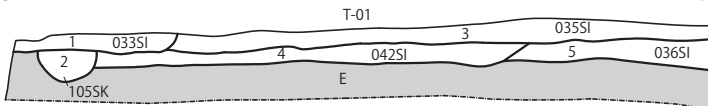
L=81.00m

- | | | | | | |
|------------|--------|-------|----|--------|--|
| 1. 7.5Y5/3 | 灰オリーブ色 | 砂質シルト | 軟質 | 粘性ややあり | |
|------------|--------|-------|----|--------|--|

L=81.00m

A区T-01

TL01SP2
L=82.00m



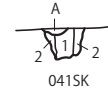
L=81.00m

- | | | | | | |
|-------------|---------|--------|------|--------|---------------|
| T-01 | | | | | |
| 1. 2.5GY2/1 | 黒色 | シルト | やや硬質 | 粘性やや強い | サビ質土やや強い斑状に含む |
| 2. 5Y3/2 | オリーブ黒色 | シルト | 硬質 | 粘性やや強い | |
| 3. 2.5Y3/2 | 黒褐色 | シルト | 硬質 | 粘性ややあり | サビ質土斑状に含む |
| 4. 5Y3/2 | オリーブ黒色 | シルト | やや硬質 | 粘性ややあり | 下底にサビ質層一部含む |
| 5. 10Y3/2 | オリーブ黒色 | シルト | 硬質 | 粘性やや強い | 硬質サビ粘質土含む |
| A. 5Y3/2 | オリーブ黒色 | 粘土質シルト | やや硬質 | 粘性やや強い | 硬質サビ粘質土含む |
| B. 5Y4/2 | 灰オリーブ色 | 細砂質シルト | 軟質 | 粘性ややあり | |
| C. 5Y3/2 | オリーブ黒色 | シルト | やや軟質 | 粘性やや強い | |
| D. 7.5Y3/2 | オリーブ黒色 | シルト質砂 | 硬質 | 粘性弱い | |
| E. 2.5GY3/1 | 暗オリーブ灰色 | シルト質砂 | やや軟質 | 粘性ややあり | |

TL01SP1
L=82.00m

A区041SK

041SP1
L=82.00m



L=81.00m

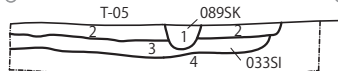
L=81.00m

L=81.00m

- | | | | | | |
|-------------|--------|-----|------|--------|----------------------|
| SP1. 10Y5/2 | オリーブ灰色 | シルト | 軟質 | 粘性ややあり | 下面に層厚の明橙褐色サビ質土挟む 耕作痕 |
| 1. 10Y3/1 | オリーブ黒色 | シルト | やや軟質 | 粘性ややあり | サビ質土少し含む |
| 2. 5Y3/1 | オリーブ黒色 | シルト | 硬質 | 粘性ややあり | サビ質土やや強い斑状に含む |

A区T-05

TL05SP1
L=82.00m



L=81.00m

- | | | | | | |
|-------------|--------|-------|------|--------|--------------|
| 1. 5B6G3/1 | 暗青灰色 | 砂質シルト | やや軟質 | 粘性やや弱い | |
| 2. 7.5GY3/1 | 暗緑灰色 | シルト | 硬質 | 粘性やや強い | 褐色砂質土斑状に少し含む |
| 3. 5Y3/2 | オリーブ黒色 | シルト | 硬質 | 粘性あり | 褐色砂質土斑状に少し含む |
| 4. 5Y3/1 | オリーブ黒色 | 砂質シルト | 硬質 | 粘性ややあり | |

L=81.00m

A区044SK

044SP1
L=82.00m



L=81.00m

- | | | | | | |
|------------|-----|--------|------|--------|--|
| 1. 2.5Y3/1 | 黒褐色 | シルト | やや軟質 | 粘性ややあり | |
| 2. 2.5Y3/2 | 黒褐色 | 細砂質シルト | やや硬質 | 粘性ややあり | |

A区045SK

045SP1
L=82.00m

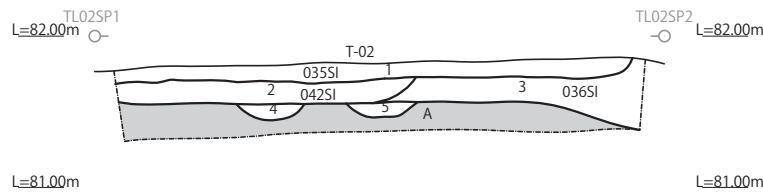


L=81.00m

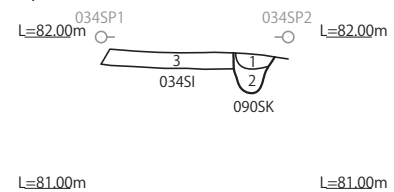
- | | | | | | |
|------------|--------|--------|------|------|--|
| 1. 5Y3/2 | オリーブ黒色 | 砂質シルト | やや軟質 | 粘性弱い | |
| 2. 2.5Y3/2 | 黒褐色 | 細砂質シルト | 硬質 | 粘性弱い | |

図 2-10 A 区 033・035・036・037・042・144SI 土層断面図 (1:50)

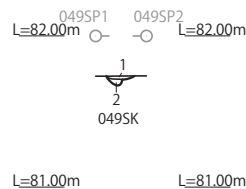
A区T-02



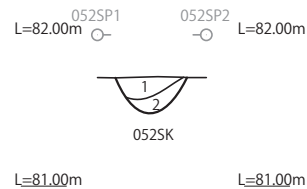
A区034SI



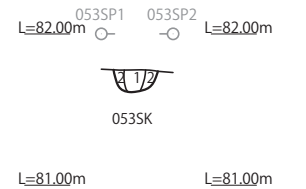
A区049SK



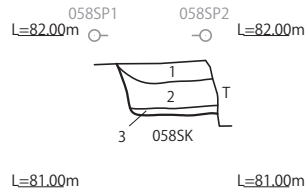
A区052SK



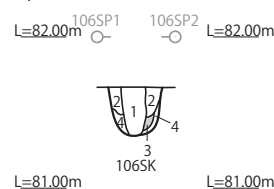
A区053SK



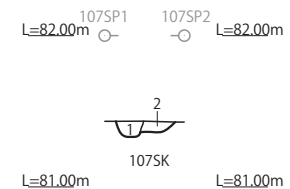
A区058SK



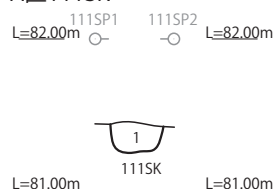
A区106SK



A区107SK



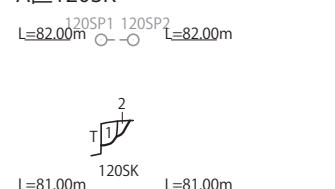
A区111SK



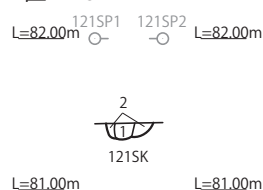
A区113SK



A区120SK



A区121SK



A区132SK

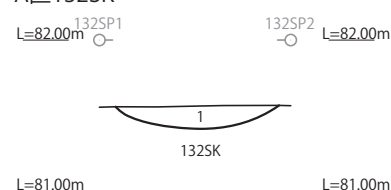
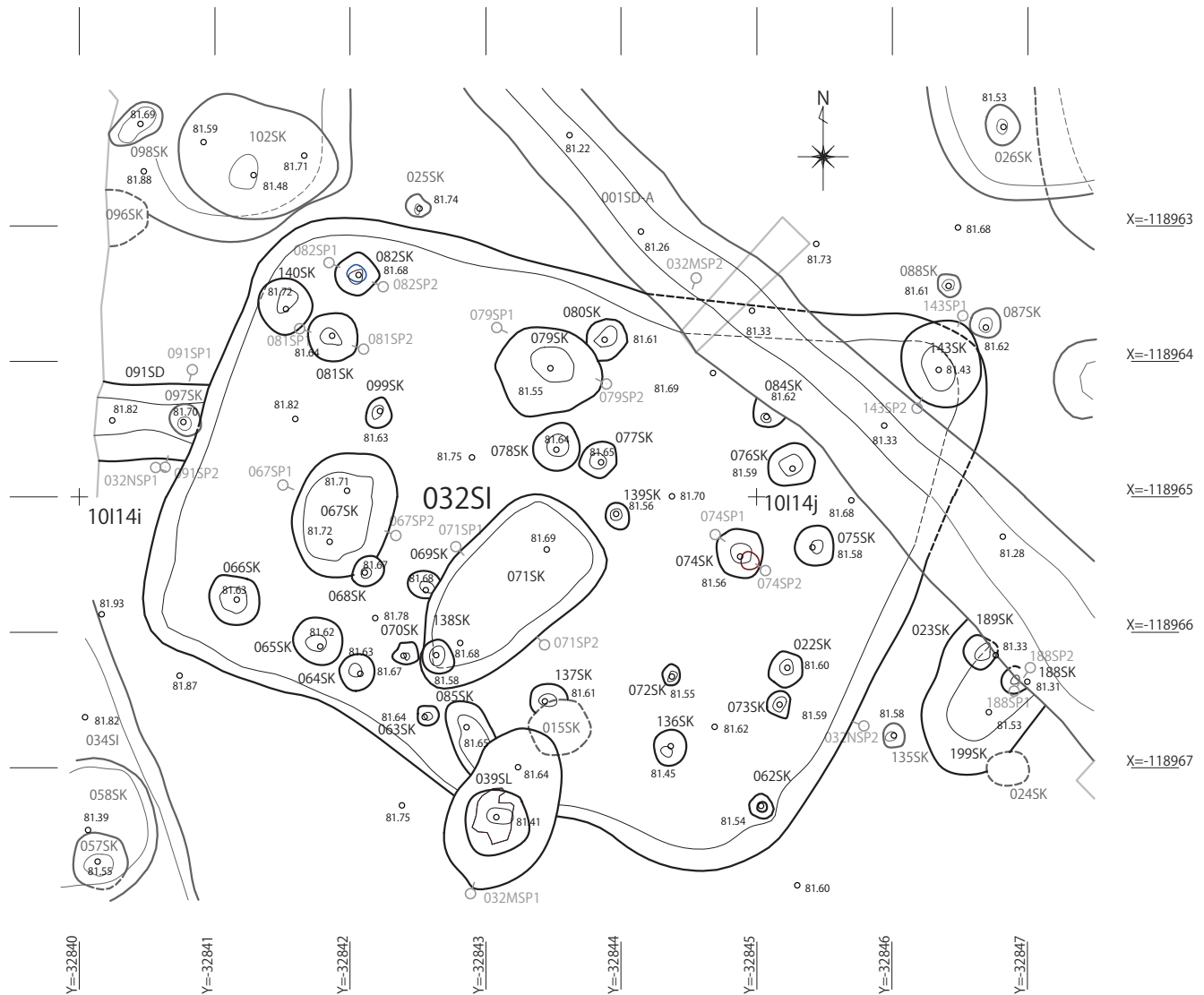
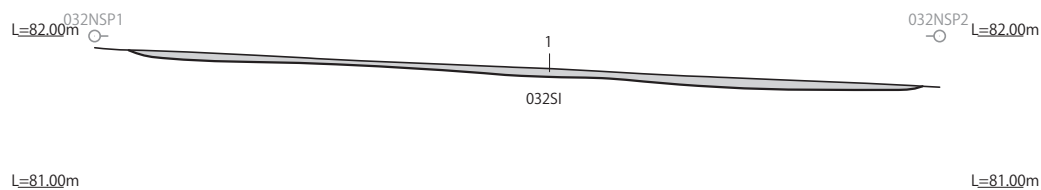


図 2-11 A 区 034・035・036・042SI 土層断面図 (1:50)



A区032SI



L=81.00m

L=81.00m

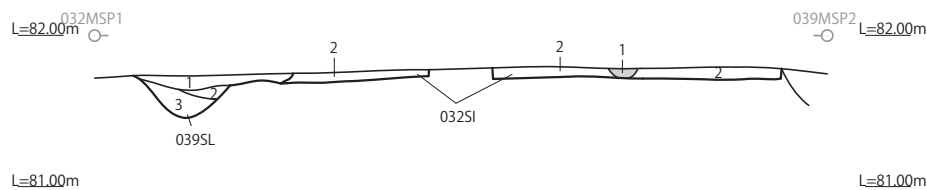
039SL

- 2.5Y3/2 黒褐色 シルト 硬質 粘性ややあり
- 5Y3/1 オリーブ黒色 粘土質シルト やや軟質 粘性強い
- 10Y2/1 黒色 粘土質シルト やや軟質 粘性強い
にぶい黄橙色灰質シルト挟む

032SI

- 2.5Y6/4 にぶい黄褐色砂 硬質 粘性弱い 下シルト質細砂 上粗砂 自然層ブロックの混?
- 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト やや軟質 粘性ややあり 所々砂～粗砂ブロック含む

A区039SL・032SI

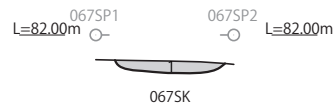


L=81.00m

L=81.00m

図 2-12 A 区 032SI 遺構平面図 (1:50)

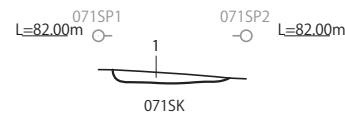
A区067SK



L=81.00m L=81.00m

1. 5Y5/4 オリーブ色 シルト質砂粘性弱い
黒褐色土斑状に含む

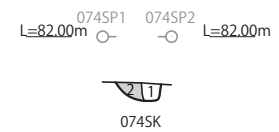
A区071SK



L=81.00m L=81.00m

1. 5Y4/2 灰オリーブ色 砂質シルト
やや硬質 粘性ややあり

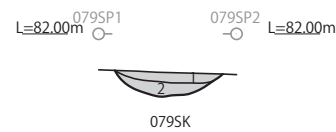
A区074SK



L=81.00m L=81.00m

1. 5Y4/3 暗オリーブ色 細砂質シルト
粘性ややあり
2. 5Y5/3 灰オリーブ色 シルト質砂
硬質 粘性弱い

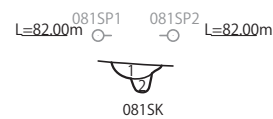
A区079SK



L=81.00m L=81.00m

1. 5Y5/4 オリーブ色 シルト質砂 硬質
粘性ややあり 黒褐色土斑状に含む
2. 5Y5/4 オリーブ色 砂 やや軟質 粘性弱い
黒褐色土少し含む 大部分砂から成る

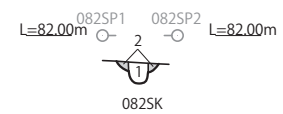
A区081SK



L=81.00m L=81.00m

1. 5Y4/2 灰オリーブ色 砂質シルト
硬質 粘性弱い
2. 5Y3/2 オリーブ黒色 細砂質シルト
軟質 粘性あり

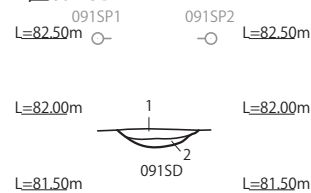
A区082SK



L=81.00m L=81.00m

1. 5Y3/2 オリーブ黒色 細砂質シルト
やや軟質 粘性ややあり
2. 5Y4/2 灰オリーブ色 シルト質砂
硬質 粘性弱い

A区091SD



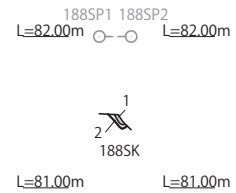
1. 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 粘性あり
サビ質土まばらに含む
2. 7.5Y4/2 灰オリーブ色 砂質シルト 軟質
粘性ややあり

A区143SK



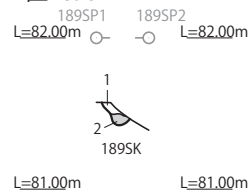
1. 7.5Y4/3 暗オリーブ色 シルト やや硬質
粘性あり
2. 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト 粘性ややあり
灰黒色粘質土斑状に含む

A区188SK



1. 7.5Y3/2 オリーブ黒色 シルト質細砂
軟質 粘性やや弱い サビ色砂強い斑状
に含む
2. 7.5GY4/1 暗緑灰色 シルト軟質 粘性
ややあり

A区189SK



1. 5Y3/2 オリーブ黒色 細砂質シルト
やや軟質 粘性あり
2. 7.5Y3/2 オリーブ黒色 シルト質砂
軟質 粘性ややあり

図 2-13 A 区 032Si 土層断面図 (1:50)

X=118956

X=118957

X=118958

X=118959

X=118960

X=118961

X=118962

X=118

目次

終了

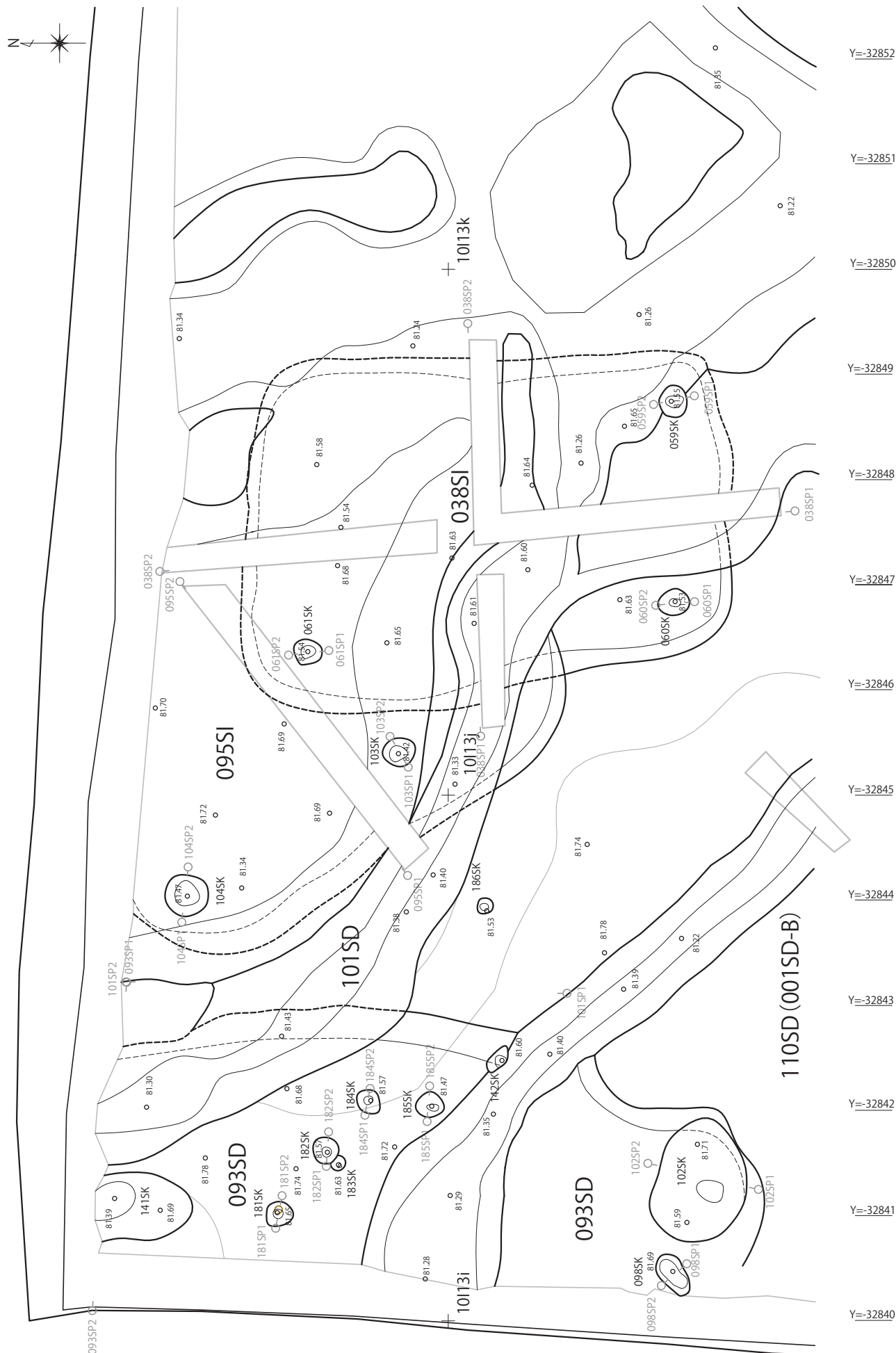
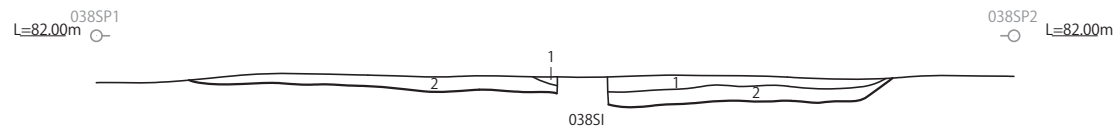


図 2-14 A 区 038・095SI・093・101・110SD 遺構平面図 (1:50)

A区038SI



L=81.00m

L=81.00m



L=81.00m

L=81.00m

1. 7.5Y4/2 灰オリーブ色 細砂質シルト 軟質 粘性あり
2. 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色 粘土質シルト やや軟質 粘性強い サビ質土まばらに含む

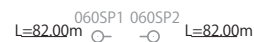
A区059SK



L=81.00m

L=81.00m

A区060SK



L=81.00m

L=81.00m

A区061SK

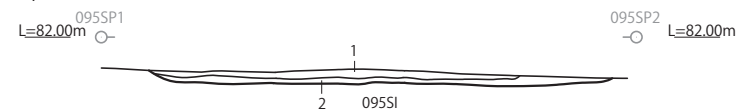


L=81.00m

L=81.00m

1. 5Y4/2 灰オリーブ色 シルト 軟質 粘性やや強い
1. 5Y4/2 灰オリーブ色 シルト 軟質 粘性やや強い
2. 7.5Y5/3 灰オリーブ色 シルト質砂 軟質 粘性ややあり
1. 10GY4/1 暗緑灰色 細砂質シルト 軟質 粘性やや強い

A区095SI



L=81.00m

L=81.00m

1. 5GY4/1 暗オリーブ灰色 粘土質シルト やや硬質 粘性やや強い 砂塊少し含む
2. 10GY4/1 暗緑灰色 シルト質粘土 硬質 粘性強い サビ質土まばらに含む

A区103SK



L=81.00m

L=81.00m

1. 2.5Y3/1 黒褐色 粘土質シルト 粘性強い サビ質土少し含む 淡黄灰細砂斑状に少し含む

A区104SK



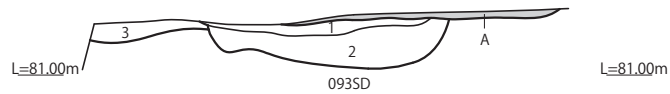
L=81.00m

L=81.00m

1. 7.5GY3/1 暗緑灰色 粘土質シルト やや硬質 粘性強い サビ質土少し含む

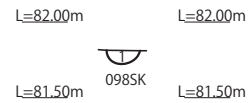
図 2-15 A 区 038・095SI 土層断面図 (1:50)

A区093SD

093SP1
L=82.00m093SP2
L=82.00m

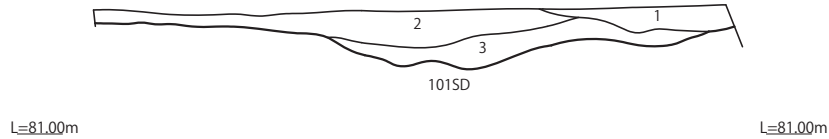
- | | | | | | |
|------------|---------|--------|------|--------|-------------|
| 1. 5Y3/2 | オリーブ黒色 | シルト | やや軟質 | 粘性ややあり | サビ質土斑状に含む |
| 2. 5GY4/1 | 暗オリーブ灰色 | 粘土質シルト | 軟質 | 粘性強い | サビ質土斑状に含む |
| 3. 5Y3/1 | オリーブ黒色 | シルト | やや軟質 | 粘性やや強い | |
| 4. 2.5Y5/1 | 黄灰色 | 粘土質シルト | やや軟質 | 粘性強い | サビ色粘質土斑状に含む |
| A. 7.5Y5/2 | 灰オリーブ色 | 細礫混砂 | やや軟質 | 粘性やや強い | |

A区098SD

098SP1 098SP2
L=82.50m L=82.50m

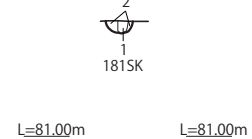
- | | | | | | |
|----------|--------|-------|----|--------|------------|
| 1. 5Y3/2 | オリーブ黒色 | 砂質シルト | 軟質 | 粘性やや強い | サビ質土まばらに含む |
|----------|--------|-------|----|--------|------------|

A区101SD

101SP1
L=82.00m101SP2
L=82.00m

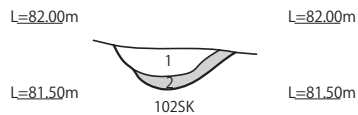
- | | | | | |
|------------|--------|--------|--------|--------------|
| 1. 5Y3/1 | オリーブ黒色 | シルト | やや軟質 | 粘性やや強い |
| 1. 7.5Y4/3 | 暗オリーブ色 | 粘土質シルト | | |
| 2. 10Y4/2 | 灰オリーブ色 | 粘土質シルト | 粘性やや強い | |
| 3. 5Y5/3 | 灰オリーブ色 | 細砂質シルト | 軟質 | 粘性強い 所々細礫層含む |

A区181SK

181SP1 181SP2
L=82.00m L=82.00m

- | | | | | |
|------------|--------|--------|------|------|
| 1. 7.5Y6/2 | 灰オリーブ色 | 細砂質シルト | | |
| | | 軟質 | 粘性弱い | |
| 2. 5Y4/2 | 灰オリーブ色 | シルト | やや硬質 | 粘性あり |

A区102SK

102SP1
L=82.50m102SP2
L=82.50m

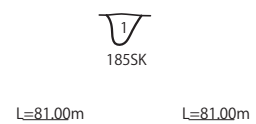
- | | | | | |
|-----------|--------|----------|------|------|
| 1. 10Y3/2 | オリーブ黒色 | 細砂質シルト | やや軟質 | |
| | | サビ質土少し含む | | |
| 2. 5Y4/2 | 灰オリーブ色 | シルト質砂 | やや軟質 | 粘性弱い |

A区182SK

182SP1 182SP2
L=82.00m L=82.00m

- | | | | | |
|----------|--------|-----|------|--------|
| 1. 5Y3/2 | オリーブ黒色 | シルト | やや硬質 | 粘性やや強い |
|----------|--------|-----|------|--------|

A区185SK

185SP1 185SP2
L=82.00m L=82.00m

- | | | | | |
|-----------|--------|--------|-------------|--|
| 1. 10Y3/2 | オリーブ黒色 | シルト | やや軟質 | |
| | | 粘性ややあり | サビ質土強い斑状に含む | |

図 2-16 A 区 093・101・110SD 土層断面図 (1:50)

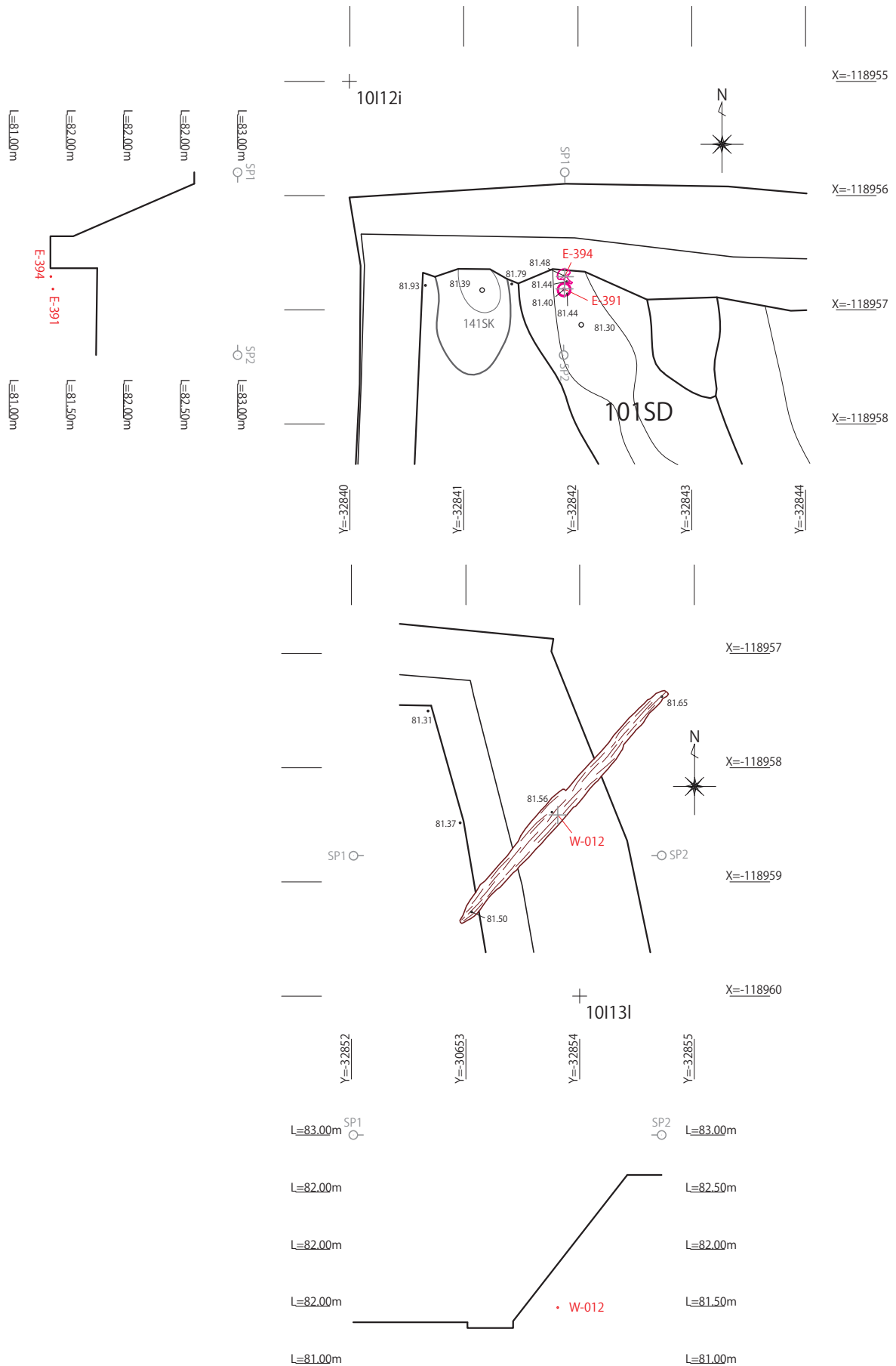


図 2-17 A 区 101SD・046NR 遺物出土状態図 (1:50)

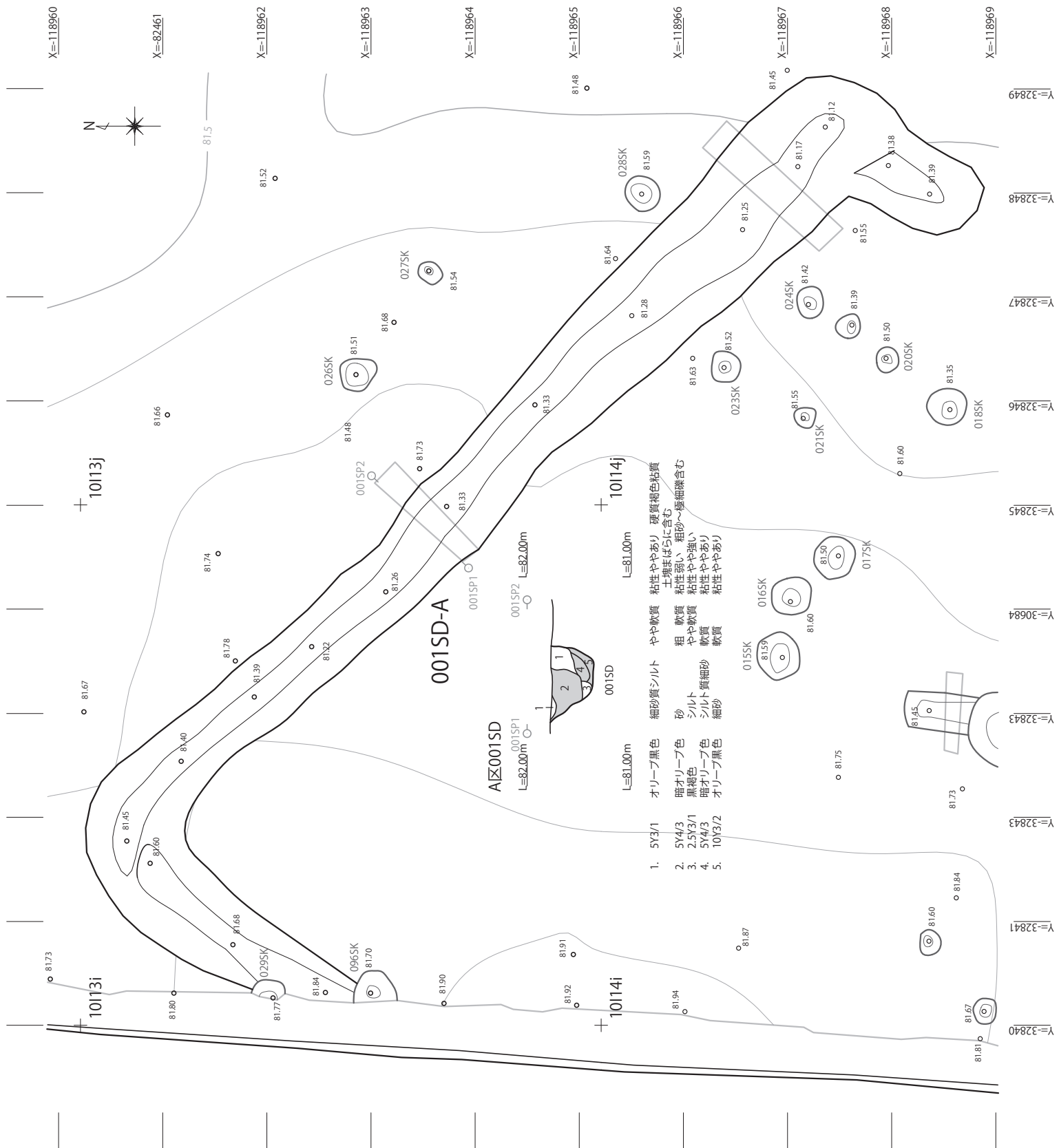
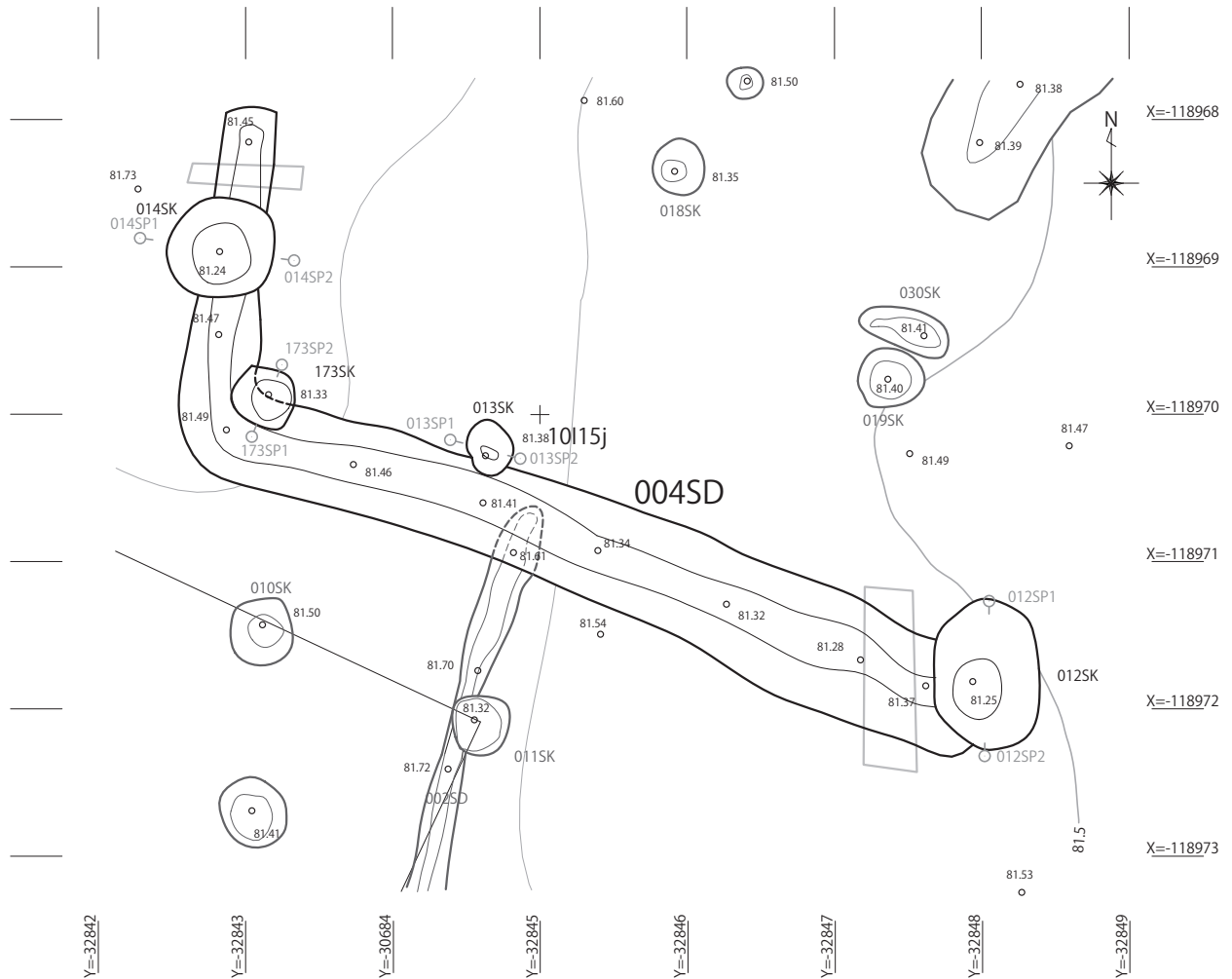
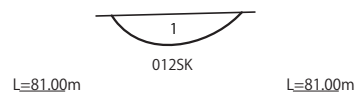


図 2-18 A 区 001SD-A 遺構平面図・土層断面図 (1:50)



A区012SK

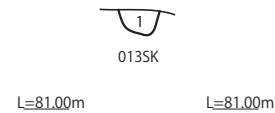
L=82.00m 012SP1
L=82.00m 012SP2



1. 7.5Y3/1 オリーブ黒色 粘土質シルト やや硬質
粘性やや強い 下半にサビ質土を弱い斑状に含む

A区013SK

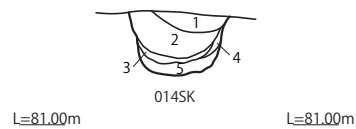
L=82.00m 013SP1
L=82.00m 013SP2



1. 10YR3/3 暗褐色 シルト 硬質 粘性あり

A区014SK

L=82.00m 014SP1
L=82.00m 014SP2



1. 7.5Y4/2 灰オリーブ色 シルト やや硬質 粘性あり
前後の硬質サビ質土まばらに含む 雲母やや多く含む
2. 7.5Y2/2 オリーブ黒色 シルト やや軟質 粘性やや
強い サビ質土斑状に含む
3. 5Y3/2 オリーブ黒色 細砂質シルト 軟質 粘性ややあり
4. 7.5Y3/2 オリーブ黒色 細砂質シルト 軟質 粘性ややあり

A区173SK

L=82.00m 173SP1
L=82.00m 173SP2



1. 5Y4/2 灰オリーブ色 シルト 軟質 粘性やや強い

図 2-19 A 区 004SD ほか遺構平面図・土層断面図 (1:50)

A区131SK

131SP1 L=82.00m 131SP2 L=82.00m



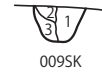
L=81.00m

L=81.00m

1. 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト やや軟質 粘性ありシルト

A区009SK

009SP1 L=82.00m 009SP2 L=82.00m



L=81.00m

L=81.00m

1. 2.5GY2/1 黒色 シルト やや軟質 粘性ややあり 暗褐色サビ質土少し含む
 2. 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 硬質 軟性やや強い サビ質土まばらに含む
 3. 10Y2/1 黒色 シルト やや硬質 粘性あり

A区010SK

010SP1 L=82.00m 010SP2 L=82.00m



L=81.00m

L=81.00m

1. 7.5Y2/2 オリーブ黒色 シルト質細砂 やや軟質 粘性ややあり サビ質土まばらに含む
 2. 5Y2/2 オリーブ黒色 細砂質シルト やや硬質 暗黄灰色シルト塊と暗青灰色細砂の混土
 3. 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 硬質 粘性やや強い

A区011SK

011SP1 L=82.00m 011SP2 L=82.00m



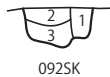
L=81.00m

L=81.00m

1. 5Y3/2 シルト質細砂 シルト やや軟質 粘性ややあり 空陳貫入
 2. 5Y2/2 細砂質シルト シルト 硬質 粘性あり

A区092SK

092SP1 L=82.00m 092SP2 L=82.00m



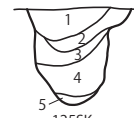
L=81.00m

L=81.00m

1. 5Y4/2 灰オリーブ色 細砂質シルト 軟質 粘性ややあり
 2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルト 硬質 粘性やや強い
 3. 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 硬質明褐色サビ質土・細砂塊強い斑状に含む
 やや硬質 粘性あり

A区125SK

125SP1 L=82.00m 125SP2 L=82.00m



L=81.00m

L=81.00m

1. 5Y2/2 オリーブ黒色 シルト 硬質 粘性ややあり 上半に極細礫流状に含む
 2. 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト サビ質土弱い斑状に含む
 3. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト やや軟質 粘性やや弱い
 4. 2.5Y3/2 黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強い 暗橙褐色硬質粘土質土多く含む
 5. 10Y4/2 オリーブ灰色 細砂質シルト 粘性ややあり

A区005SK

005SP1 L=82.00m 005SP2 L=82.00m



L=81.00m

L=81.00m

1. 7.5Y3/1 オリーブ黒色 シルト 硬質 粘性やや強いサビ質土斑状に含む
 2. 5GY3/1 暗オリーブ灰色 シルト やや硬質 粘性ややあり サビ質土まばらに含む
 3. 7.5Y3/1 オリーブ黒色 細砂質シルト 硬質 粘性ややあり サビ質土斑状に少し含む
 4. 7.5Y3/2 オリーブ黒色 細砂質シルト やや硬質 粘性ややあり

A区122SK

122SP1 L=82.00m 122SP2 L=82.00m



L=81.00m

L=81.00m

1. 5Y4/2 灰オリーブ色 粘土質シルト 軟質 粘性強い サビ質土斑状に含む
 2. 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘土質シルト 硬質 粘性強い サビ質土・淡灰黄色砂塊強い斑状に含む

A区109SK

109SP1 L=82.00m 109SP2 L=82.00m



L=81.00m

L=81.00m

1. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト 軟質 粘性やや強い

図 2-21 A 区 100SB 柱穴土層断面図 (1:50)

3. B 区

表 2-1 で示したように、B 区は 3 面の遺構面で遺構検出作業をおこなった。しかし、B 区の西壁・南壁の土層断面図をみてもわかるように、本来第 1 面として検出した標高約 82m は、最も新しい時期の柱穴が掘り込まれた遺構面よりも 1.5m 近く低い。これは前述のように古代の遺物が大量に

含まれる整地層を二次堆積の単なる遺物包含層と誤認したこと。そして古代の柱穴群を、当初は現代の攪乱と誤って認識したことによっている。

特に西壁北寄りのセクションをみる限り、この調査区の上に建っていた住宅の基礎を取り除いた標高 83.5m 付近から、柱掘り方が 0.9m を超えるような柱穴がいくつも掘り込まれていることがわかる。しかも、これらの柱穴の多くは底面が標



図 2-22 B 区第 3 面遺構平面図 (1:200)

高 82m までは到達していないことから、我々が第 1 面として遺構検出をおこなった面では、既に多くの柱穴を失っていた可能性がきわめて高い。これは、調査担当者として重大な失態であることをここに明記して、今後の反省材料としたい。

しかも、西壁および南壁の土層断面をみる限り、古代（3 期）の掘立柱建物の柱穴が掘削された整地面は 1 面だけではなく、おおまかにみても 3 面、

細かくみれば 5 面におよぶことがわかる。第 3 章で示した B 区包含層（整地層）の遺物が 7 世紀後半～11 世紀と非常に広い時期幅があり、かつ A 区の 3-1 ～ 3-4 期に対応するように、それなりのまとまった遺物群であることは、3 ～ 5 回におよぶ度重なる整地によって B 区の遺構面が形成されていることを意味しているのである。

ただし、南壁セクションでの調査区南東隅で



図 2-23 B 区第 2 面遺構平面図 (1:200)

は整地層が30cm程度ときわめて薄くなっていること、また後述する図2-48の総柱建物650SBの柱穴のうち最も東壁寄りで検出した636SKでは標高82.2mで近世の水田耕作土が認められることから、必ずしも整地層は水平ではなく、西側により分厚く堆積していることから、第3面は同じ調査区内でも最高所と最低所で約1.5mもの比高差があったことがわかる。

そのような比高差を無視して最低所に合わせて遺構検出面を1面のみにしてしまったこと、そしてB区第1面の遺構のほとんどが掘立柱建物であったために、遺構の時期決定をきわめて困難にしまった。後述するように、大型の総柱建物650SBのみは柱抜き取り穴から8世紀後半の短頸壺が出土したことにより、かろうじて廃絶時期をおさえることができたが、それ以外の掘立柱建

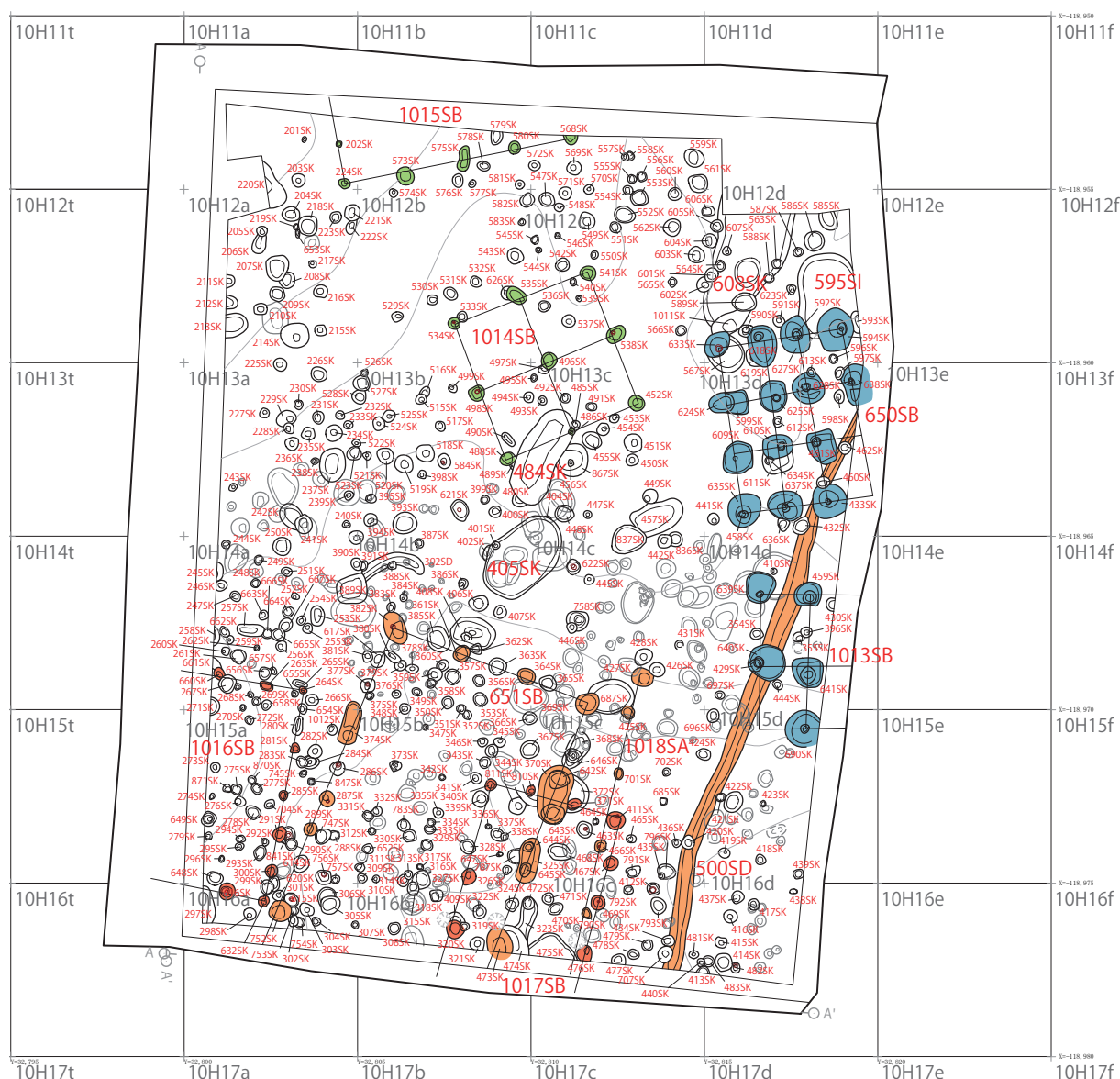


图 2-24 B 区第 1 面遺構平面図 (1:200)

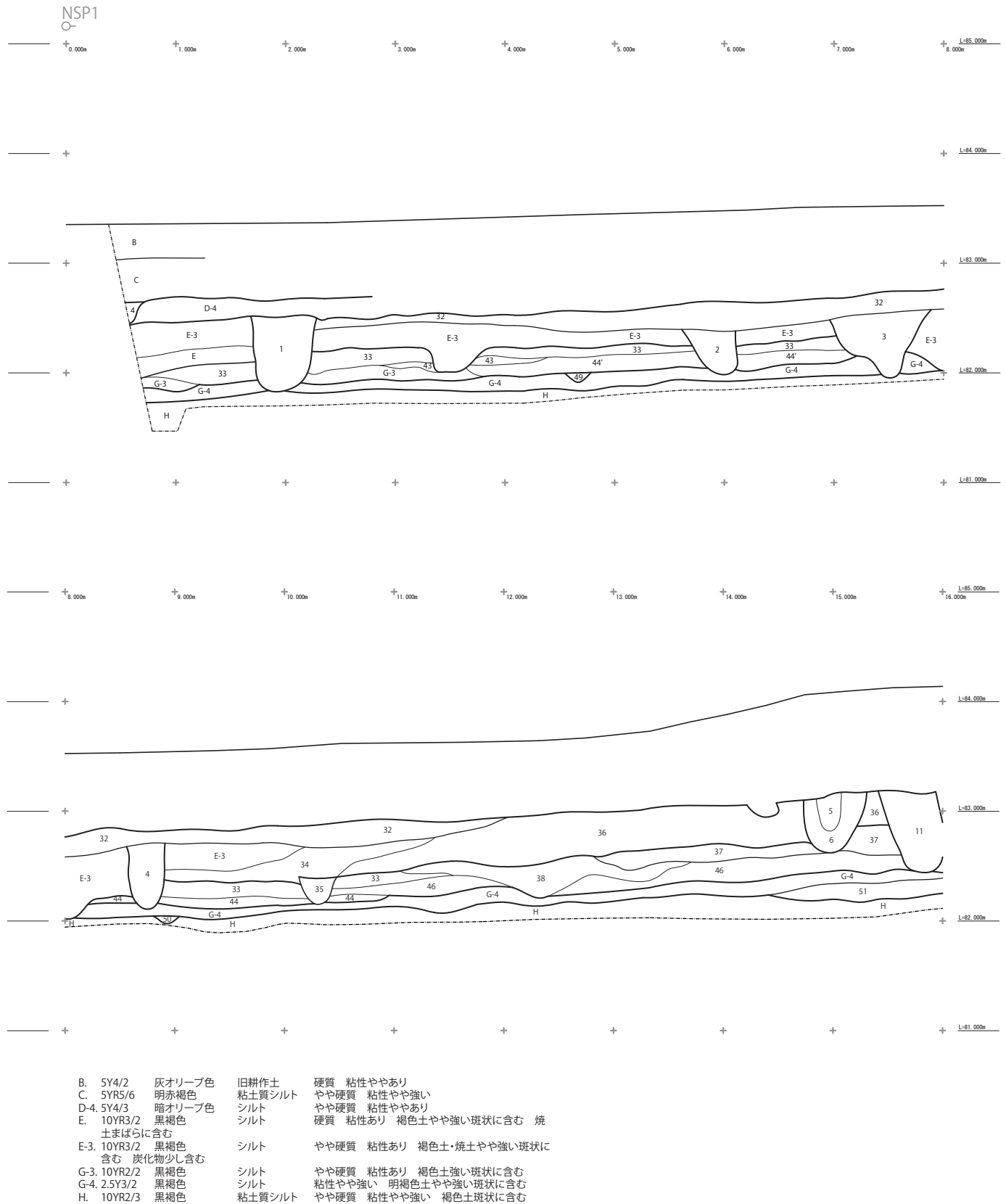


図 2-25 B 区西壁土層断面図 -1 (1:50)

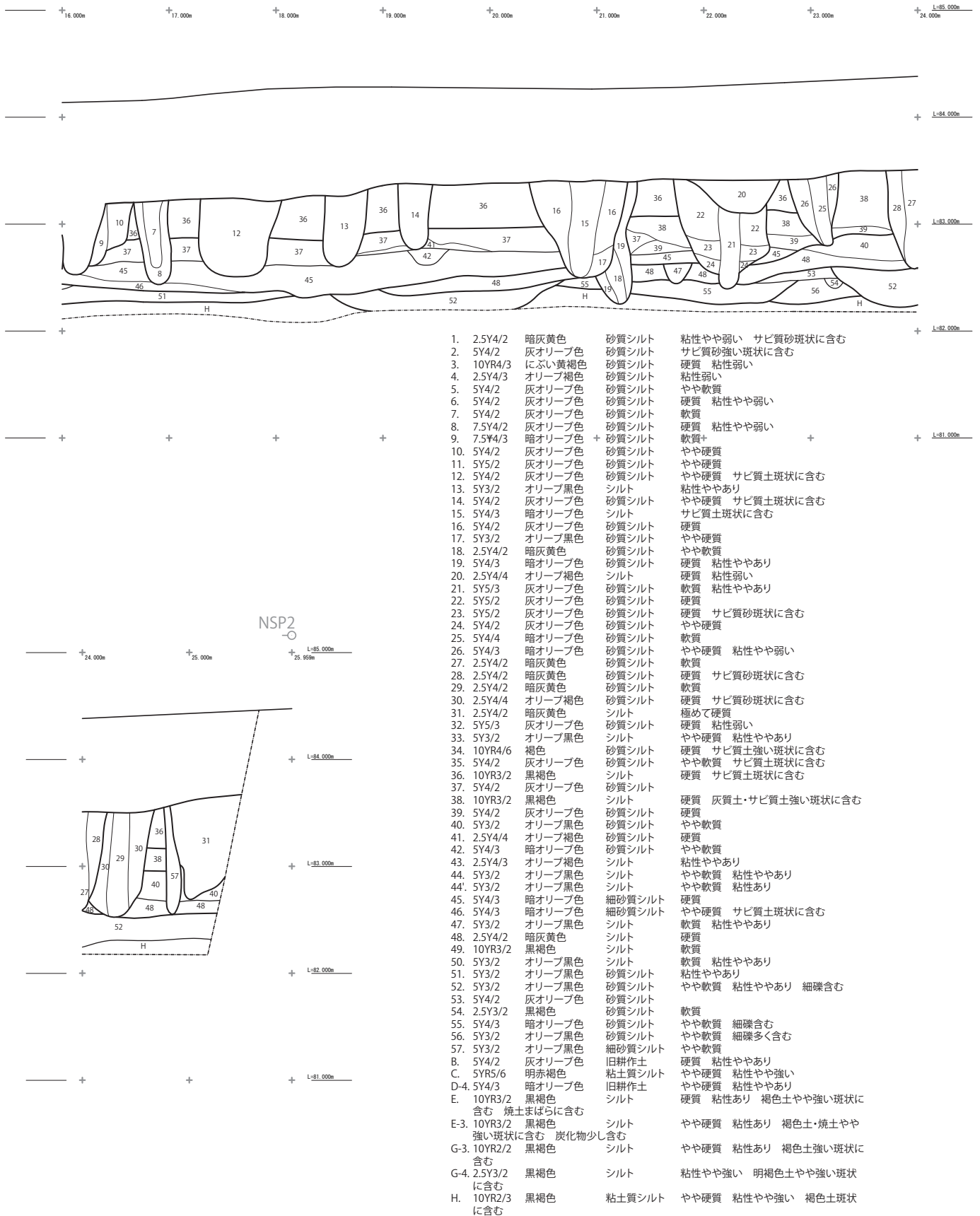


図 2-26 B 区西壁土層断面図 -2 (1:50)

B区南壁土層断面図-1 1:50

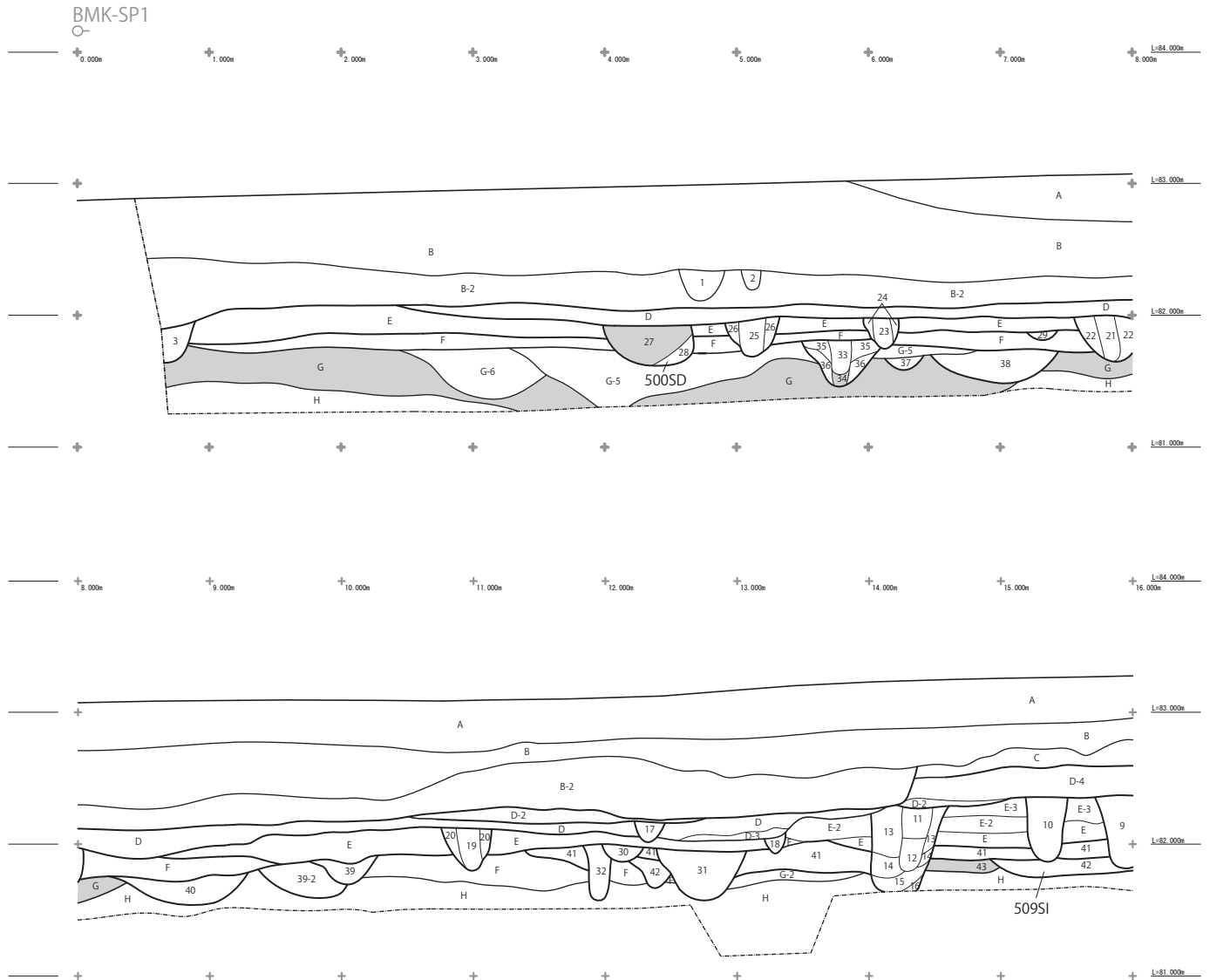


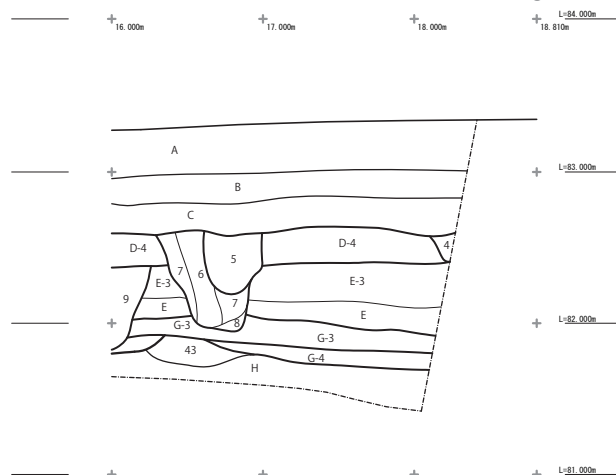
図 2-27 B 区南壁土層断面図 -1 (1:50)

物については柱穴内から時期を限定しうる遺物が出土していないために、柱穴の重複で遺構の前後関係を決める以外に手はない。しかし、図 2-28 にみるように、実際に建物として纏めることができた柱穴同士にはほとんど重複関係がない。整地層ごとに遺構検出をおこなっていれば決め得たかもしれない掘立柱建物の時期決定を、建物の軸線と周囲の遺構との関連からしか推定せざるを得な

くしてしまったのは痛恨の極みである。

本来であれば 3 面以上あった古代の遺構検出面を第 1 面として、実際の調査では 3 面の遺構検出面を確認した。このうち最下層の第 3 面は縄文時代中期～後期である（1 期）。調査区南半部において、竪穴建物の可能性がある直径 3.5 ～ 7m の平面円形の落ち込みを 12 基と土坑多数を確認した。

BMK-SP2-0



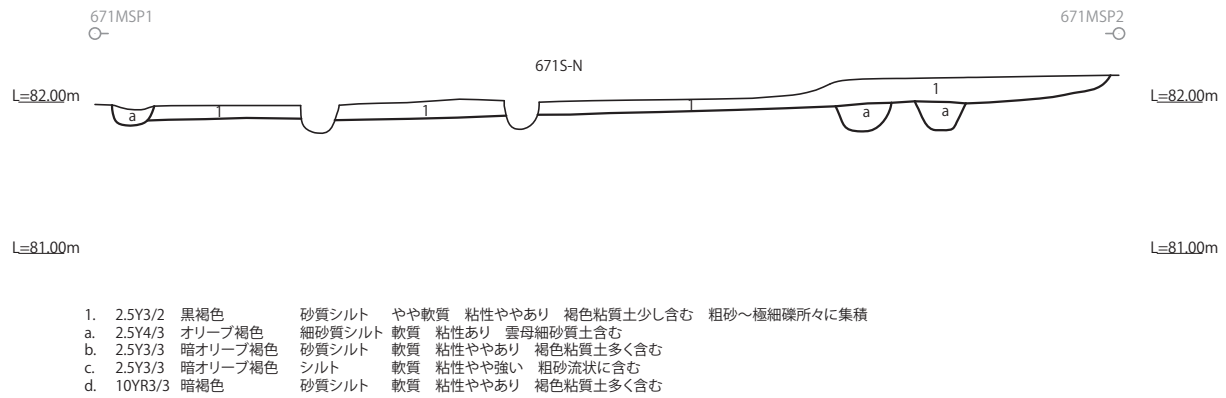
1.	2.5Y4/4	オリブ褐色	シルト	軟質	粘性ややあり	
2.	2.5Y4/4	オリブ褐色	シルト	軟質	粘性ややあり	赤褐色土斑状を含む
3.	2.5Y4/3	オリブ褐色	シルト	軟質	粘性強い	
4.	5YR5/6	明赤褐色	シルト	軟質	粘性あり	炭化物まばらに含む
5.	10YR2/2	黒褐色	シルト	硬質	粘性あり	
6.	7.5YR4/3	褐色	シルト	やや軟質	粘性やや強い	
7.	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	硬質	粘性やや強い	
8.	10YR2/2	黒褐色	シルト	極めて硬質	粘性あり	焼土まばらに含む
9.	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	やや硬質	粘性あり	褐色土強い斑状に含む
10.	5Y3/2	オリブ黒色	シルト	粘性ややあり	褐色土斑状に含む	
11.	10YR2/3	黒褐色	シルト	やや軟質	粘性あり	褐色土・焼土・炭化物斑状に含む
12.	10YR3/4	暗褐色	シルト	やや軟質	粘性あり	褐色土・焼土斑状に含む
13.	10YR3/4	暗褐色	シルト	硬質	粘性あり	褐色土強い斑状に含む 焼土・炭化物まばらに含む
14.	7.5YR4/3	褐色	シルト	硬質	粘性やや強い	褐色土強い斑状に含む 焼土少し含む
15.	7.5YR3/4	暗褐色	シルト	やや硬質	粘性やや強い	褐色土強い斑状に含む 焼土流状に含む
16.	7.5YR3/4	暗褐色	シルト	硬質	粘性やや強い	褐色土斑状に含む 焼土流状に含む
17.	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや硬質	粘性ややあり	
18.	10YR3/3	黒褐色	シルト	粘性ややあり	焼土斑状に含む	
19.	2.5Y3/1	黒褐色	シルト	軟質	粘性ややあり	淡黄色細砂斑状に含む
20.	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや硬質	粘性あり	褐色土斑状に含む
21.	2.5Y3/1	黒褐色	シルト	軟質	粘性ややあり	褐色土斑状に含む
22.	10YR2/3	黒褐色	シルト	硬質	粘性あり	褐色土斑状に含む
23.	5Y3/2	オリブ黒色	シルト	軟質	粘性ややあり	褐色土少し含む
24.	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	やや硬質	粘性ややあり	褐色土斑状に含む
25.	5Y3/2	オリブ黒色	シルト	軟質	粘性ややあり	褐色土少し含む
26.	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	やや硬質	粘性ややあり	褐色土斑状に含む
27.	2.5Y5/4	黄褐色	砂	軟質	粘性なし	極細礫少し含む
28.	7.5YR4/3	褐色	シルト	やや硬質	粘性やや強い	褐色土強い斑状に含む
29.	10YR2/3	黒褐色	シルト	やや硬質	粘性あり	褐色土斑状に含む
30.	10YR2/2	黒褐色	シルト	軟質	粘性ややあり	褐色土斑状に含む 炭化物まばらに含む
31.	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや軟質	粘性やや強い	褐色土やや強い斑状に含む
32.	2.5Y3/3	暗オリブ褐色	シルト	軟質	粘性あり	褐色土やや強い斑状に含む
33.	10YR2/2	黒褐色	シルト	軟質	粘性やや強い	褐色土強い斑状に含む
34.	10YR4/4	褐色	砂	軟質	粘性弱い	
35.	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや硬質	粘性ややあり	
36.	2.5Y3/3	暗オリブ褐色	シルト	硬質	粘性強い	褐色土強い斑状に含む
37.	10YR3/2	黒褐色	シルト	軟質	粘性あり	褐色土やや強い斑状に含む
38.	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	やや軟質	粘性あり	褐色土強い斑状に含む
39.	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	軟質	粘性ややあり	
39-2.	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	軟質	粘性ややあり	
40.	10YR2/2	黒褐色	シルト	やや硬質	粘性やや強い	褐色土強い斑状に含む
41.	2.5YR3/2	暗赤褐色	シルト	やや硬質	粘性あり	
42.	5Y3/2	オリブ黒色	シルト	軟質	粘性あり	褐色土やや強い斑状に含む
42-2.	2.5Y3/2	黒褐色	細砂質シルト	軟質	粘性ややあり	
43.	2.5Y4/3	オリブ褐色	砂	軟質	粘性弱い	粗砂少し含む
A.	10YR6/8	明黄褐色	盛土	硬質	粘性弱い	
B.	5Y4/2	灰オリブ色	旧耕作土	硬質	粘性ややあり	
B-2.	5Y4/3	暗オリブ色	旧耕作土	やや硬質	粘性ややあり	
C.	5YR5/6	明赤褐色	粘土質シルト	やや硬質	粘性やや強い	
D.	5Y2/2	オリブ黒色	シルト	硬質	粘性やや強い	焼土まばらに含む 炭化物少し含む
D-2.	10GY3/1	暗緑灰色	細砂質シルト	硬質	粘性ややあり	焼土まばらに含む
D-3.	7.5YR5/6	明褐色	砂質シルト	硬質	粘性弱い	焼土少し含む
D-4.	5Y4/3	暗オリブ色	シルト	やや硬質	粘性ややあり	
E.	10YR3/2	黒褐色	シルト	硬質	粘性あり	褐色土やや強い斑状に含む 焼土まばらに含む
E-2.	10YR3/2	黒褐色	シルト	硬質	粘性やや強い	褐色土・焼土強い斑状に含む 炭化物少し含む
E-3.	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや硬質	粘性あり	褐色土・焼土やや強い斑状に含む 炭化物少し含む
F.	2.5Y3/1	黒褐色	シルト	軟質	粘性あり	褐色土やや強い斑状に含む 焼土まばらに含む
G.	2.5Y3/3	暗オリブ褐色	砂	軟質	粘性弱い	
G-2.	2.5Y3/3	暗オリブ褐色	シルト	やや軟質	粘性やや強い	褐色土強い斑状に含む
G-3.	10YR2/2	黒褐色	シルト	やや硬質	粘性あり	褐色土強い斑状に含む
G-4.	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	粘性やや強い	明褐色土やや強い斑状に含む	
H.	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	やや硬質	粘性やや強い	褐色土斑状に含む

图 2-28 B 区南壁土层断面图 -2 (1:50)

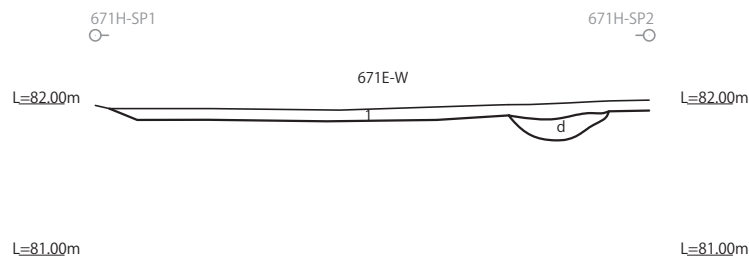


図 2-29 B 区 600・671・672SI 遺構平面図 (1:50)

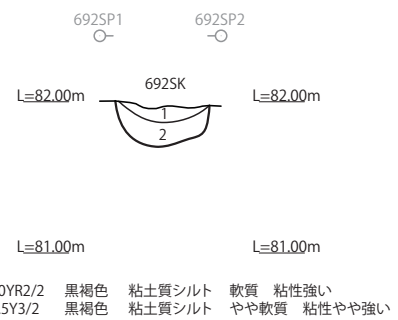
B区671SI南北セクション



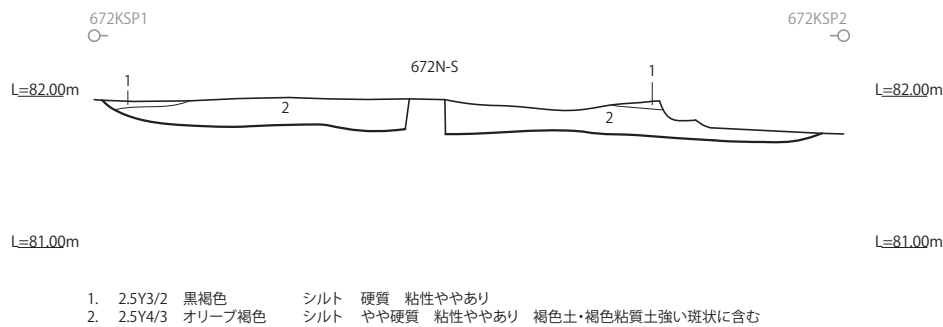
B区671SI東西セクション



B区692SK



B区672SI南北セクション



B区672SI東西セクション

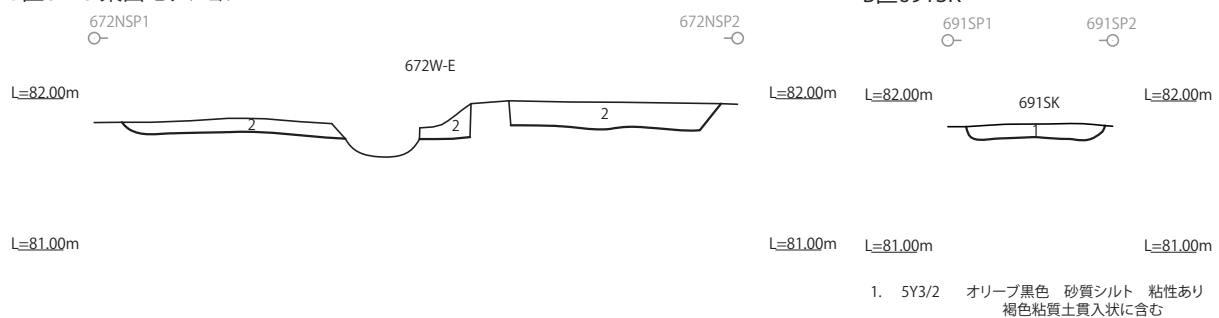


図 2-30 B 区 671・672SI 土層断面図 (1:50)

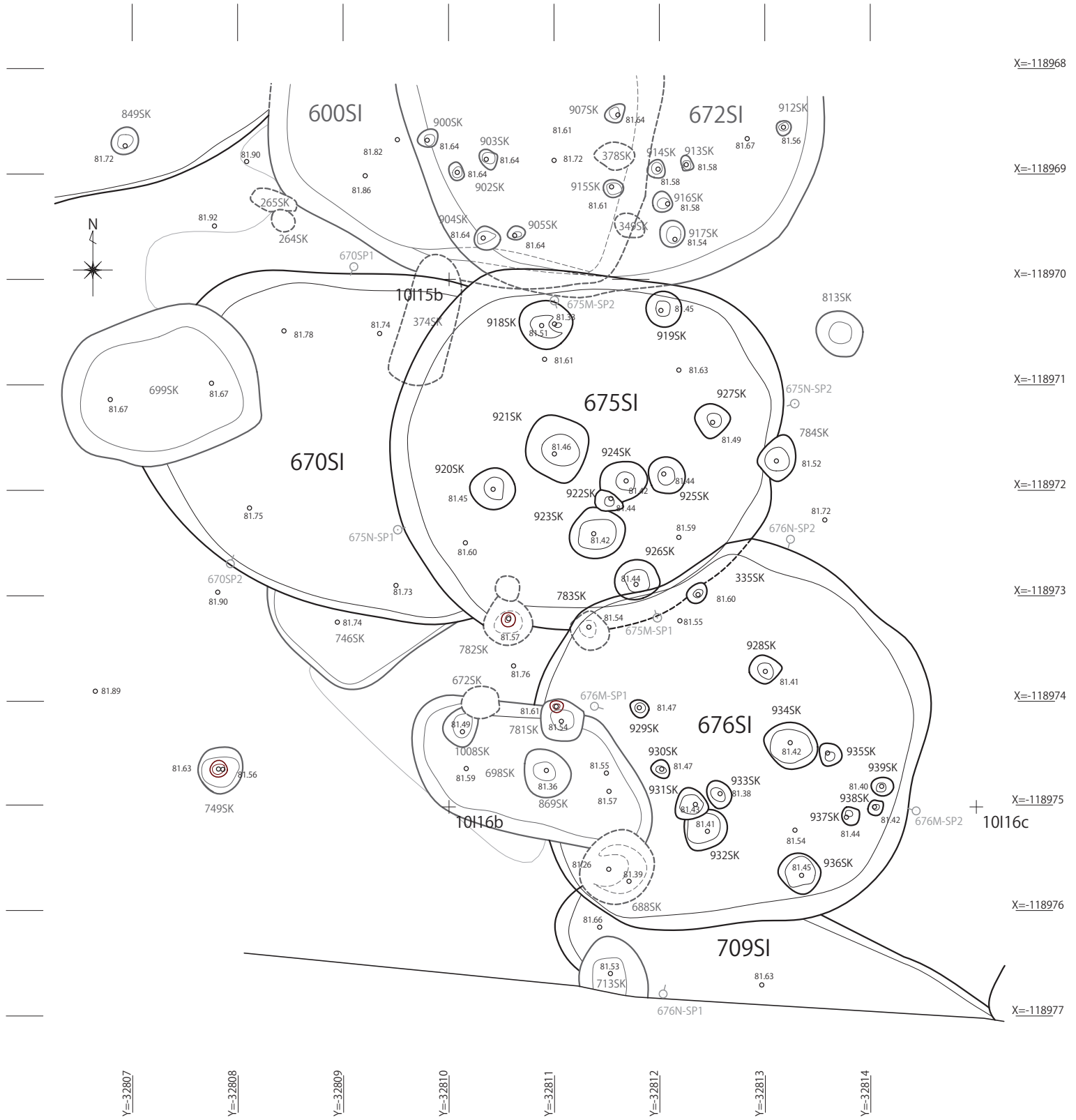


図 2-31 B 区 670・675・676SI 遺構平面図 (1:50)

B区670SI

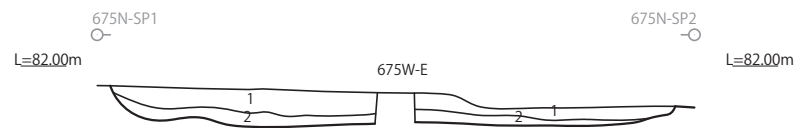


L=81.00m

L=81.00m

1. 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト やや硬質 粘性ややあり 褐色土貫入状に少し含む

B区675SI東西セクション

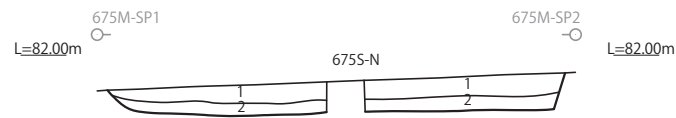


L=81.00m

L=81.00m

1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト やや硬質 粘性あり サビ質土・黄灰色粘質土やや強い斑状に含む
 2. 5Y3/2 オリーブ黒色 粘土質シルト やや硬質 粘性あり サビ質土・黄灰色粘質土強い斑状に含む

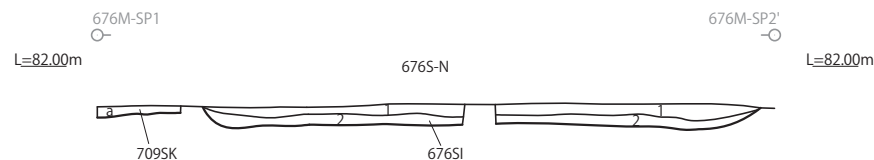
B区675SI南北セクション



L=81.00m

L=81.00m

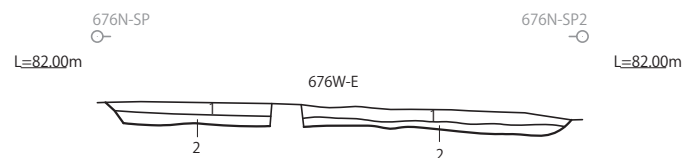
B区676SI南北セクション



L=81.00m

L=81.00m

B区676SI東西セクション



L=81.00m

L=81.00m

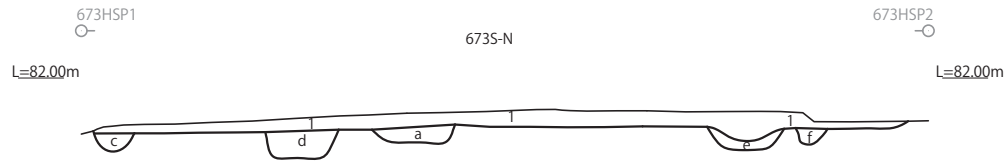
1. 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト やや硬質 粘性ややあり 長石流状に含む
 2. 7.5Y4/2 灰オリーブ色 粘土質シルト やや軟質 粘性やや強い
 a. 5Y4/2 灰オリーブ色 シルト 粘性ややあり

図 2-32 B 区 670・675・676SI 土層断面図 (1:50)



図 2-33 B 区 673・678SI ほか遺構平面図 (1:50)

B区673SI南北セクション

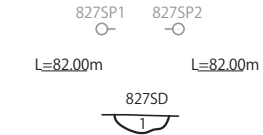


L=81.00m

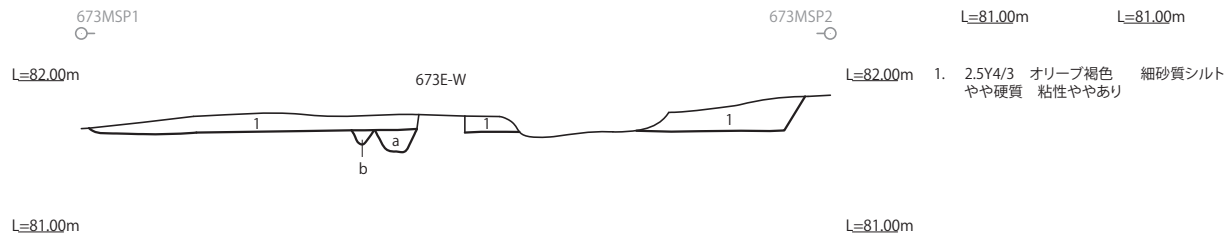
- | | | | | | | |
|----|---------|--------|--------|------|--------|---------------------|
| 1. | 5Y3/2 | オリーブ黒色 | シルト | やや軟質 | 粘性あり | 所々長石流状に含む |
| a. | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色 | 細砂質シルト | | | |
| | | やや軟質 | 粘性ややあり | | | サビ質土斑状に含む |
| b. | 5Y4/3 | 暗オリーブ色 | 細砂質シルト | | | |
| | | やや軟質 | 粘性ややあり | | | |
| c. | 2.5Y4/3 | オリーブ褐色 | シルト | やや硬質 | 粘性ややあり | サビ質土斑状に含む |
| d. | 5Y5/3 | 灰オリーブ色 | シルト | 軟質 | 粘性あり | 灰色粘質土・サビ質土質土強い斑状に含む |
| e. | 5Y4/2 | 灰オリーブ色 | シルト | 硬質 | 粘性ややあり | |
| f. | 5Y5/3 | 灰オリーブ色 | シルト | やや硬質 | 粘性ややあり | サビ質土斑状に含む |

L=81.00m

B区827SD



B区673SI東西セクション



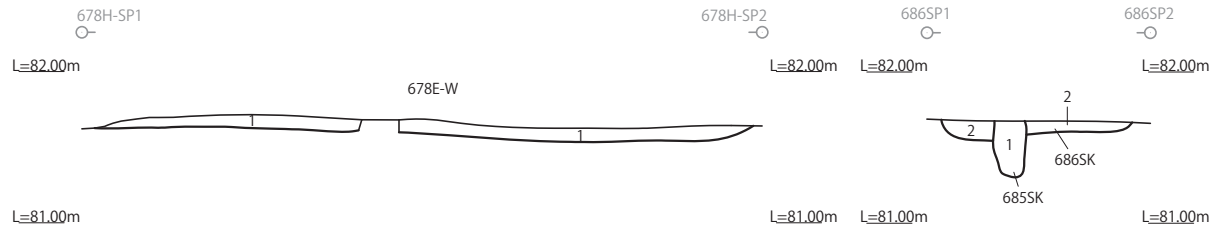
L=81.00m

L=81.00m

L=81.00m

- | | | | |
|----|---------|--------|--------|
| 1. | 2.5Y4/3 | オリーブ褐色 | 細砂質シルト |
| | | やや硬質 | 粘性ややあり |

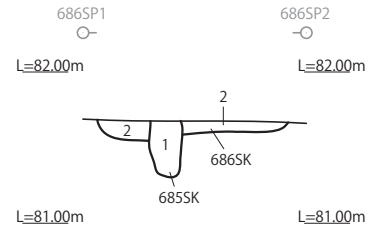
B区678SI東西セクション



L=81.00m

L=81.00m

B区685・686SK

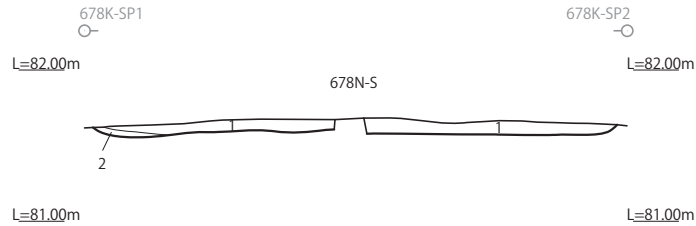


L=81.00m

- | | | | | | | | |
|----|---------|--------|--------|------|--------|-----------|--------------|
| 1. | 2.5Y4/3 | オリーブ褐色 | シルト | やや硬質 | 粘性ややあり | サビ質土斑状に含む | 雲母細砂所々まばらに含む |
| 2. | 2.5Y4/6 | オリーブ褐色 | 粘土質シルト | やや硬質 | 粘性強い | サビ質土斑状に含む | |

- | | | | | |
|----|---------|--------|-------------|------|
| 1. | 5Y4/3 | 暗オリーブ色 | 砂質シルト | 硬質 |
| | | 粘性あり | 赤褐色砂強い斑状に含む | |
| 2. | 2.5Y4/3 | オリーブ褐色 | シルト | やや硬質 |
| | | 粘性やや強い | | |

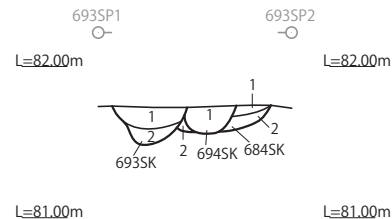
B区678SI南北セクション



L=81.00m

L=81.00m

B区693・694・684SK



L=81.00m

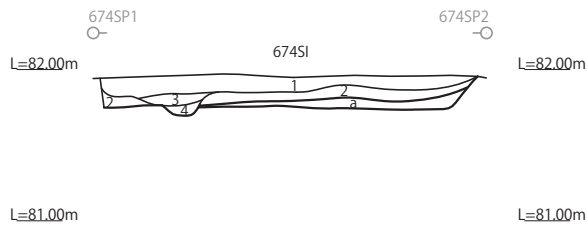
L=81.00m

- | | |
|-------|-----------------------------------|
| 693SK | |
| 1. | 2.5Y3/2 黒褐色 シルト 硬質 粘性あり |
| | 明褐色土外側に弱い層状に含む 炭化物わずかに含む |
| 2. | 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト やや硬質 粘性やや強い |
| 694SK | |
| 1. | 5Y3/2 オリーブ黒色 粘土質シルト 軟質 粘性やや強い |
| 684SK | |
| 1. | 5Y4/2 灰オリーブ色 シルト やや軟質 粘性やや強い |
| 2. | 7.5Y4/2 灰オリーブ色 細砂質シルト やや硬質 粘性ややあり |

図 2-34 B 区 673・678SI ほか土層断面図 (1:50)

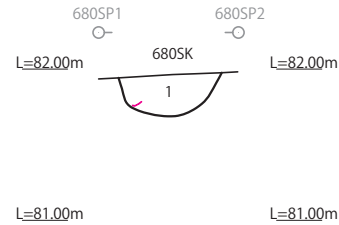


B区674SI



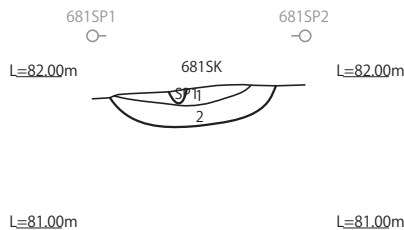
- a. 5Y4/3 オリーブ褐色 シルト 硬質 粘性ややあり 褐色土少し含む 長石流状に含む
 1. 2.5Y4/3 黄褐色 粘土質シルト 硬質 粘性あり
 2. 2.5Y5/3 灰オリーブ色 粘土質シルト やや硬質 粘性あり
 4. 10Y4/2 オリーブ灰色 粘土質シルト 硬質 粘性あり
 3. 5Y4/2 暗オリーブ色 粘土質シルト 硬質 粘性あり

B区680SK



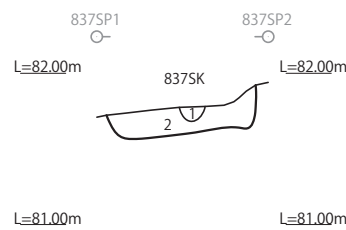
1. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト やや硬質 粘性ややあり
 黄褐色土斑状に含む

B区681SK



1. 5Y2/2 オリーブ黒色 シルト やや硬質 粘性あり
 褐色粘質土少し含む
 2. 5Y3/2 オリーブ黒色 粘土質シルト やや硬質 粘性強い
 SP1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂質シルト 軟質 粘性ややあり

B区837SK



1. 5PB3/1 暗青灰色 粘土質シルト やや軟質 粘性やや強い
 外郭に層厚のサビ質層成層
 2. 2.5Y3/2 黒褐色 粘土質シルト やや硬質 粘性やや強い
 サビ色粘質土まばらに含む

図 2-35 B 区 674SI ほか遺構平面図・土層断面図 (1:50)

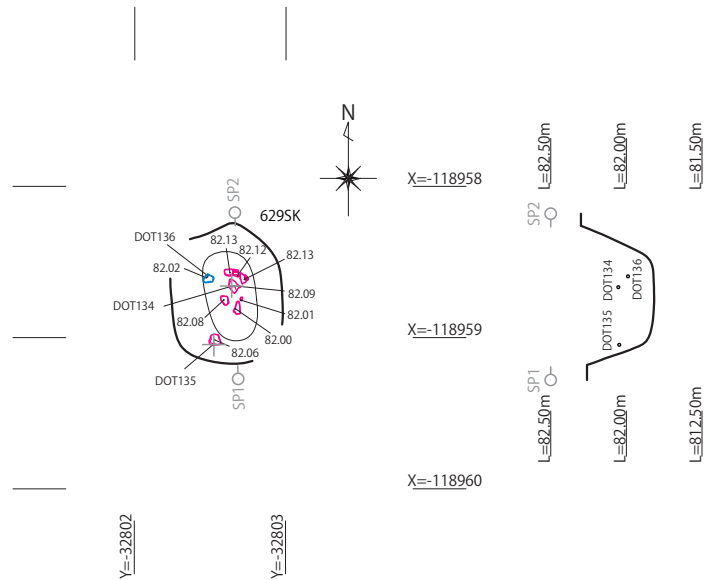


図 2-36 B 区 679SK 遺物出土状態図 (1:50)

2 期は第 2 面の遺構群である。1 期同様、調査区南半部で竪穴建物の可能性を有する平面長方形の落ち込みを 13 基確認した。遺構にともなう明確な遺物がないために時期は明らかではないが、A 区の遺構にともなわない遺物などからみて、弥生時代中期後葉頃ではないかと推定している。

3 期に関しては前述のごとく第 1 面が相当し、おおむね 7 世紀後半～11 世紀である。

1 期 1 期の遺構群は前述のように平面円形ないしは楕円形の竪穴状遺構 12 基と多数の土坑である。

竪穴状遺構で最大のものは 671SI で直径約 7m を測る。

次いで 673SI が大きく、長軸 6.4m で短軸が 4.8m。

以下、678SI が長軸 5.1m で短軸が 3.5m。672SI が長軸 4.8m で短軸が約 4m。600・675・676SI がほぼ直径 3.5m である。

このほか、679SK などから当該期の遺物が出土している。

2 期 2 期の遺構は 3 期と同様、調査区南半部でのみ確認している。

平面が長方形の竪穴状遺構群 13 基と若干の土坑群である。前述のごとく 3 期の遺構検出面が本来の遺構面よりも低すぎたために、古代とほぼ同じ面で遺構検出をおこなっている。

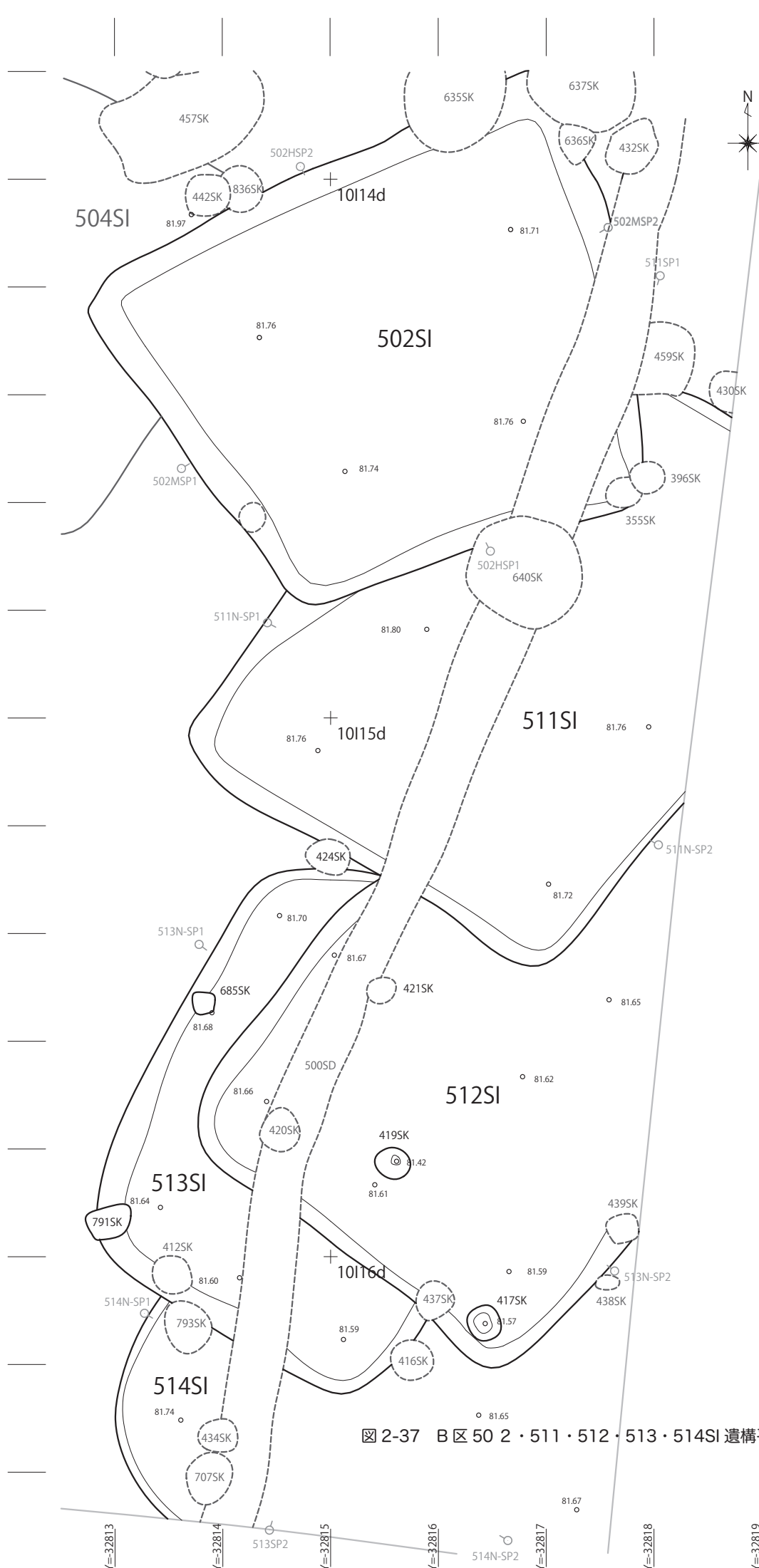
竪穴状遺構で最も規模が大きいのは 506SI で、長辺 7.5m で短辺が 5m 以上。

次いで 504・509SI で長辺が 6m 強。他はいずれも長辺が約 5m。

いずれも周溝・支柱穴・炉跡がないために、竪穴建物とは断定できないうえ、明確にともなう遺物もない。

3 期 3 期の遺構は掘立柱建物の柱穴とおぼしき土坑を調査区全域で確認している。しかしこれとでも、遺物包含層と誤認して整地層を主として西側で 1m 以上も掘り下げた状態で検出したものであることから、本来であればこの数倍の柱穴が存在していたと思われる。

このうち、調査段階で 1 棟の建物と纏まることを認識していたのは 650・651・1013SB である。



X=-118964

X=-118965

X=-118966

X=-118967

X=-118968

X=-118969

X=-118970

X=-118971

X=-118972

X=-118973

X=-118974

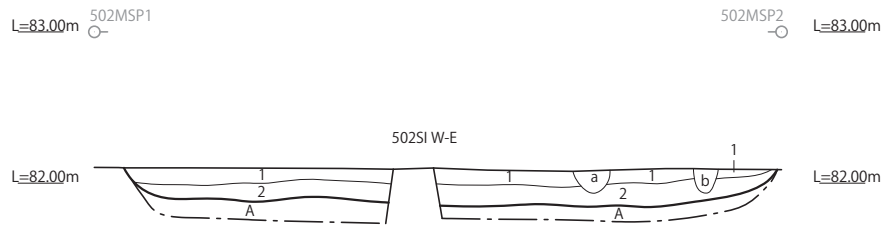
X=-118975

X=-118976

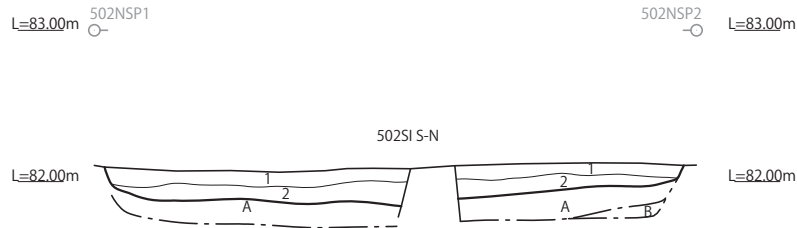
X=-118977

図 2-37 B区 50 2・511・512・513・514SI 遺構平面図 (1:50)

B区502SI東西セクション



B区502SI南北セクション



- | | | | | | |
|--------------------|--------|--------|------------------|-----------|-----------|
| 1. 10YR3/2 黒褐色 | シルト | やや硬質 | 粘性ややあり | 全体に長石やや多い | 炭化物わずかに含む |
| 2. 2.5Y3/2 黒褐色 | シルト | 粘性あり | 黄褐色細砂質土含む | | |
| a. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 | シルト | やや硬質 | 粘性ややあり | 褐色土斑状に含む | |
| b. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 | 細砂質シルト | 粘性ややあり | 黄褐色シルト質細砂強い斑状に含む | | |
| A. 5Y3/2 オリーブ黒色 | シルト | やや硬質 | 粘性ややあり | | |
| B. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 | 細砂質シルト | 硬質 | 粘性ややあり | | |

B区511・512・513・514SI

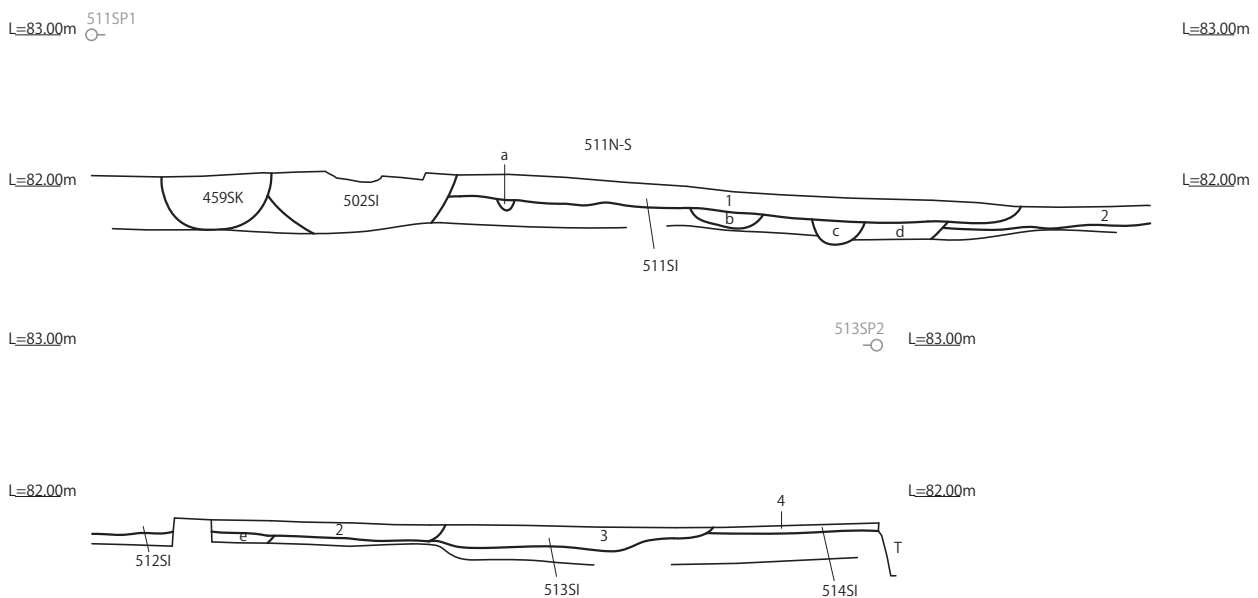
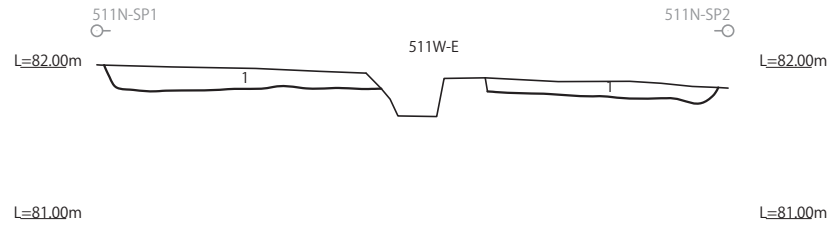
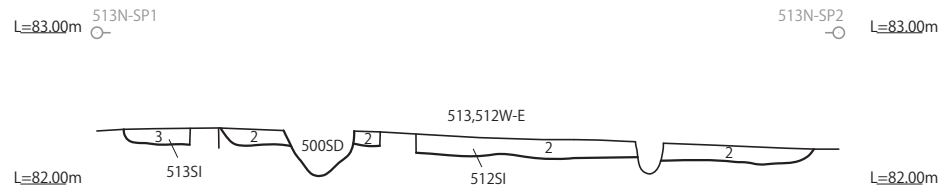


図 2-38 B 区 502・511・512・513・514SI 土層断面図 -1 (1:50)

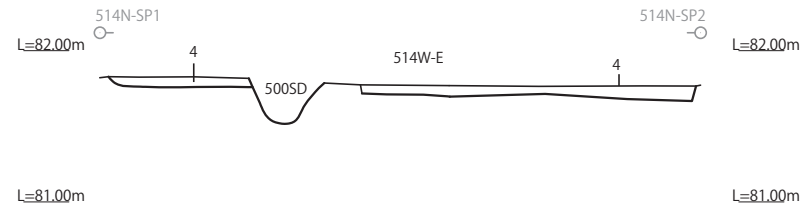
B区511SI東西セクション



B区512・513SI東西セクション



B区514SI東西セクション



- | | | | | | | |
|----|---------|---------|--------|--------|-----------|----------------|
| 1. | 5Y3/2 | オリーブ黒色 | シルト | やや硬質 | 粘性ややあり | 全体に粗砂やや多い |
| 2. | 2.5Y3/3 | 暗オリーブ褐色 | シルト | やや硬質 | 粘性ややあり | 全体に粗砂やや少なく所々集積 |
| 3. | 5Y2/2 | オリーブ黒色 | シルト | やや軟質 | 粘性ややあり | 全体に中砂やや多く含む |
| 4. | 5Y3/2 | オリーブ黒色 | シルト | 粘性ややあり | 暗褐色土斑状に含む | 全体に中砂含む |
| a. | 5Y4/2 | 灰オリーブ色 | 細砂質シルト | | | |
| | | 軟質 | 粘性ややあり | | | |
| b. | 5Y2/2 | オリーブ黒色 | シルト | やや硬質 | 粘性あり | |
| c. | 5Y2/2 | オリーブ黒色 | シルト | やや硬質 | 粘性ややあり | 褐色土斑状に含む |
| d. | 2.5Y3/2 | 黒褐色 | シルト | やや硬質 | 粘性ややあり | 褐色土斑状に含む |
| e. | 2.5Y3/2 | 黒褐色 | シルト | 硬質 | 粘性ややあり | |

図 2-39 B 区 511・512・513・514SI 土層断面図 -2 (1:50)

ただし 650SB と 1013SB は、5 ないしは 6×3 間の南北に長い 1 棟の掘立柱建物と認識していた。しかし調査期間中に受けた有識者のご教示や、柱間・柱筋の方位が北から 3 間分とそれ以南で異なることから、結果的には 650SB は 3×3 間の総柱建物、そして 2×2 間以上の総柱建物 1013SB に分離する方が整合性が高いとの結論に達した。

650SB は桁行方向の南北が 4.8m (16 尺) で、軸線は北で約 8°西に振れる。柱の芯々間は 1.6m で約 5 尺。梁行 (東西) 方向は北の側柱で 3.6m (12 尺)、南の側柱で推定 3.8m (12.7 尺) と、南に向かってわずかに広がる。北側柱列での柱

芯々間は 4 尺である。検出できた 14 基の柱穴はいずれも掘り方の一辺が 1m 前後の隅丸方形を呈する。このうち 599・609SK 以外は柱痕跡を遺しており、その径は 20～30cm 程度。北西の隅柱 (633SK) などは再掘削による柱掘り方であり、部分的に根継ぎなどの補修を受けていた可能性がある。

この 650SB の南側柱列の西から 3 番目の柱穴 (433SK) は掘り方底面に柱痕跡を遺すものの、埋土は均質で柱そのものは抜き取られていた。そして、柱を抜き取った後に埋めた土の中から完形の須恵器短頸壺が出土した。これは本遺跡

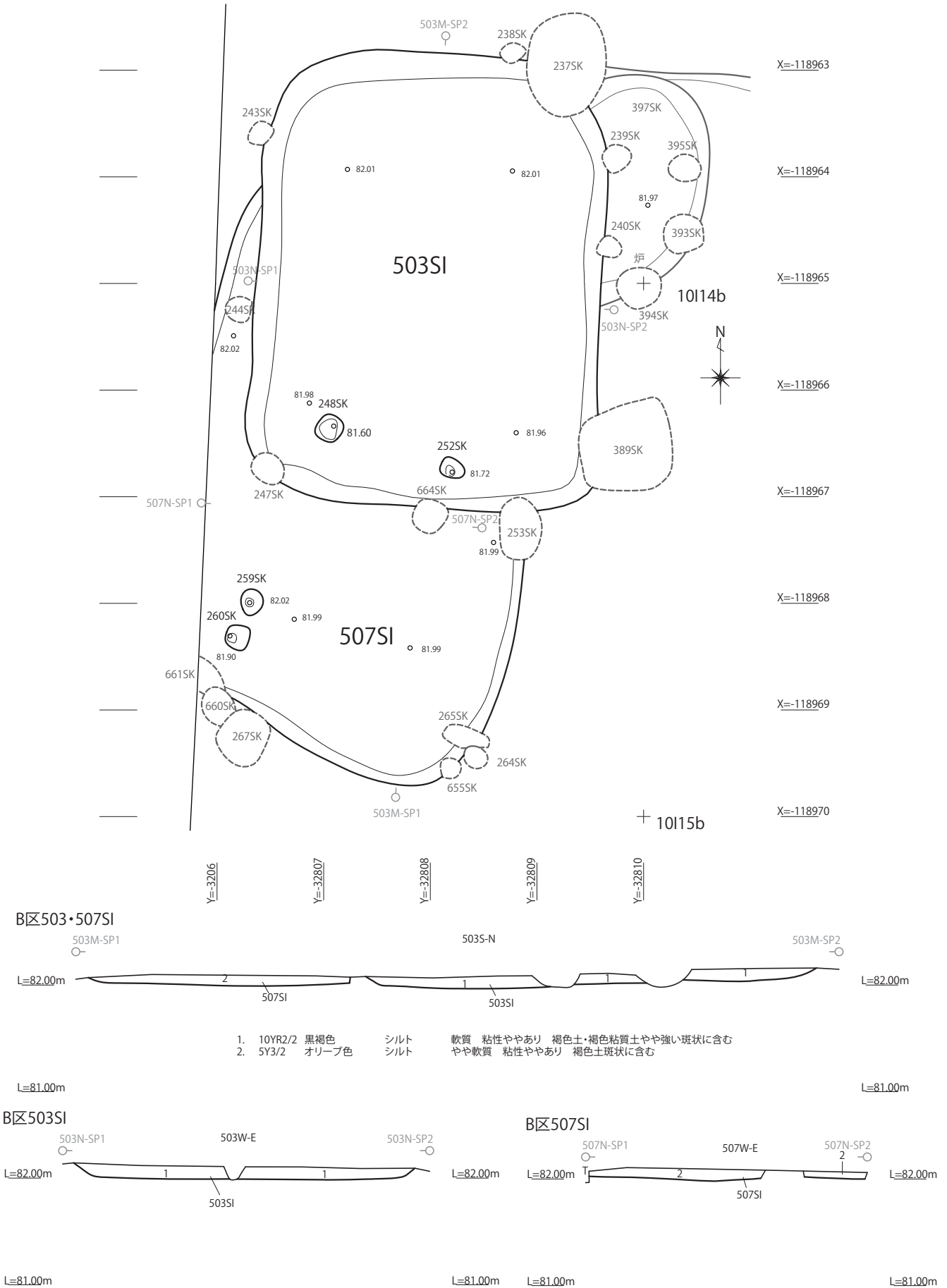


図 2-40 B 区 503・507SI 遺構平面図・土層断面図 (1:50)

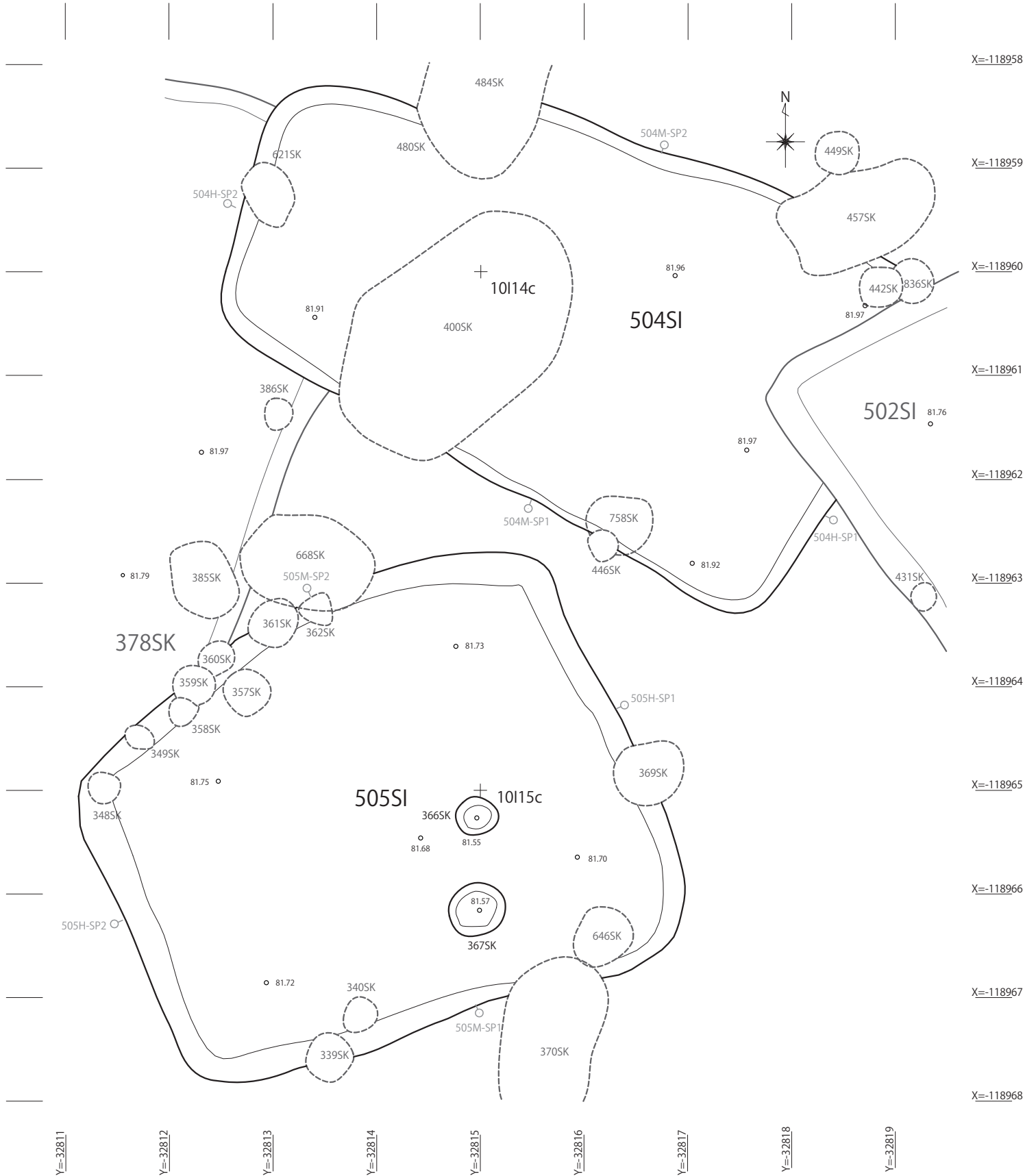
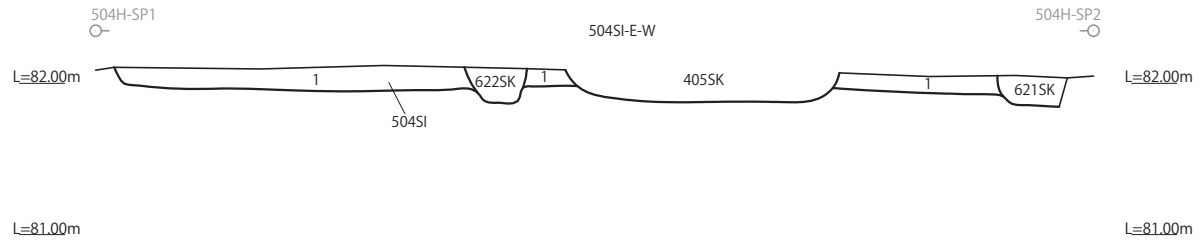


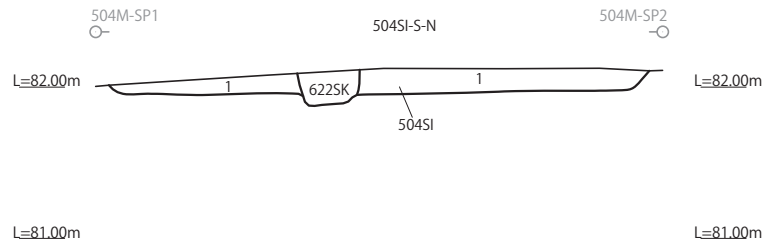
図 2-41 B 区 504・505SI 遺構平面図 (1:50)

B区504SI東西セクション

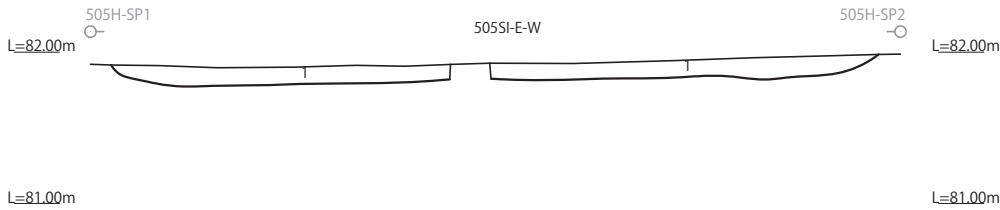


1. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト やや硬質 粘性あり 褐色土・褐色粘質土やや強い斑状に含む

B区504SI南北セクション



B区505SI東西セクション



1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルト やや硬質 粘性ややあり 褐色土所々やや強い斑状に含む 長石流状に含む

B区505SI南北セクション

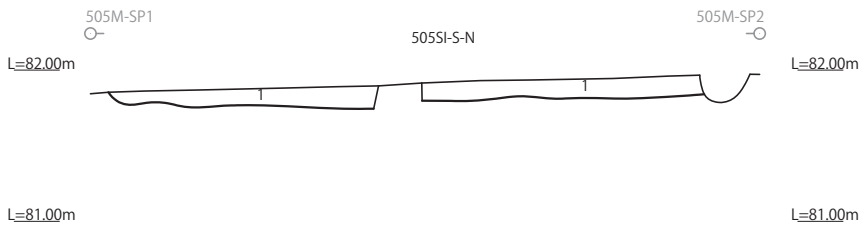
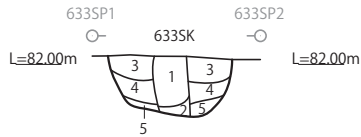


図 2-42 B 区 504・505SI 土層断面図 (1:50)

B区633SK

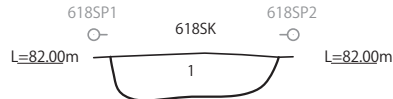


L=81.00m

L=81.00m

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト やや軟質 粘性やや強い
褐色土斑状に含む
- 5Y4/2 灰オリーブ色 細砂質シルト 軟質 粘性やや強い
淡灰黄色細砂斑状に含む
- 5Y4/2 灰オリーブ色 細砂質シルト 硬質 粘性ややあり
炭化物・褐色土まばらに含む 長石流状に含む
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルト やや硬質 粘性ややあり
褐色土斑状に含む 炭化物まばらに含む
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色 細砂質シルト 粘性ややあり
淡灰黄色細砂斑状に含む

B区618SK

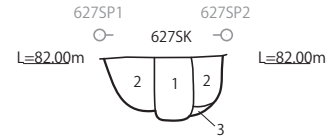


L=81.00m

L=81.00m

- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルト やや硬質 粘性あり
褐色土やや強い斑状に含む

B区627SK

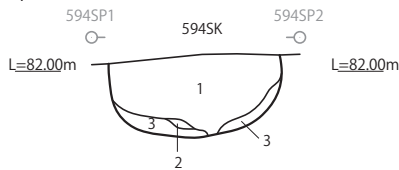


L=81.00m

L=81.00m

- 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト やや硬質 粘性ややあり
褐色土・灰黄褐色土斑状に含む 焼土わずかに含む
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト質細砂 軟質 粘性ややあり

B区594SK

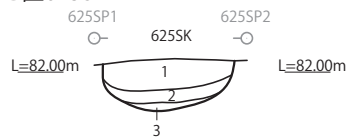


L=81.00m

L=81.00m

- 5Y4/3 暗オリーブ色 細砂質シルト やや硬質 粘性弱い
褐色土やや強い斑状に含む 炭化物含む
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色 細砂質シルト やや軟質 粘性弱い
サビ色砂斑状に含む
- 5Y3/2 オリーブ黒色 細砂質シルト 硬質 粘性弱い
サビ色砂少し含む

B区625SK

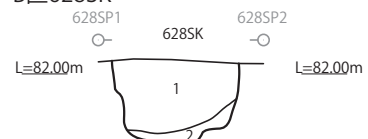


L=81.00m

L=81.00m

- 5Y4/2 灰オリーブ色 シルト 硬質 粘性ややあり
褐色土斑状に含む 炭化物少し含む
- 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 硬質 粘性あり
褐色土斑状に含む
- 7.5Y3/2 オリーブ黒色 シルト やや軟質 粘性やや強い
褐色土斑状に含む 下層サビ層

B区628SK

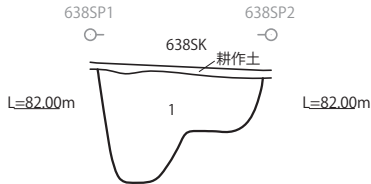


L=81.00m

L=81.00m

- 2.5Y4/3 暗灰黄色 細砂質シルト やや硬質 粘性ややあり
淡灰黄色細砂塊強い斑状に含む
- 7.5Y3/2 オリーブ黒色 細砂質シルト 硬質 粘性ややあり
淡灰黄色細砂塊・褐色土やや強い斑状に含む

B区638SK

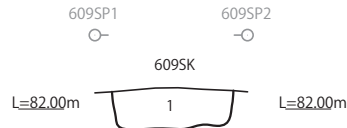


L=81.00m

L=81.00m

- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルト やや硬質 粘性あり
褐色土やや強い斑状に含む 淡黄灰色砂少し含む

B区609SK

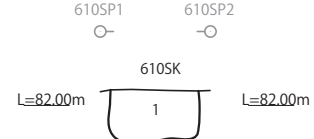


L=81.00m

L=81.00m

- 2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト 硬質 粘性あり
黄褐色土斑状に含む 長石まばらに含む

B区610SK

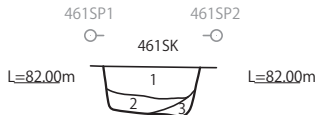


L=81.00m

L=81.00m

- 2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト 硬質 粘性あり
黄褐色土斑状に含む 長石まばらに含む

B区461SK



L=81.00m

L=81.00m

- 5Y4/3 暗オリーブ色 シルト 硬質 粘性ややあり
褐色土強い斑状に含む 焼土・炭化物わずかに含む
- 2.5Y3/2 黒褐色 シルト やや軟質 粘性あり
褐色粘質土少し含む
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルト やや軟質 粘性やや強い
褐色粘質土やや強い斑状に含む

B区635SK

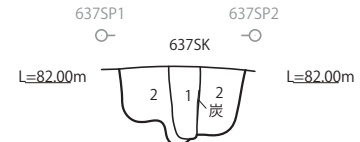


L=81.00m

L=81.00m

- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルト 軟質 粘性強い
褐色粘質土強い斑状に含む 下層明赤色サビ強い
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂質シルト 硬質 粘性弱い
淡灰黄色細砂斑状に含む 長石強い流状に含む
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルト やや硬質 粘性やや強い
褐色粘質土強い斑状に含む
- 2.5Y3/2 黒褐色 シルト やや硬質 粘性やや強い
褐色粘質土やや強い斑状に含む

B区637SK



L=81.00m

L=81.00m

- 2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト やや軟質 粘性あり
褐色土強い斑状に含む 炭化物含む
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルト 硬質 粘性やや強い
褐色土斑状に含む 炭化物少し含む

図 2-44 B 区 650SB 柱穴土層断面図 (1:50)

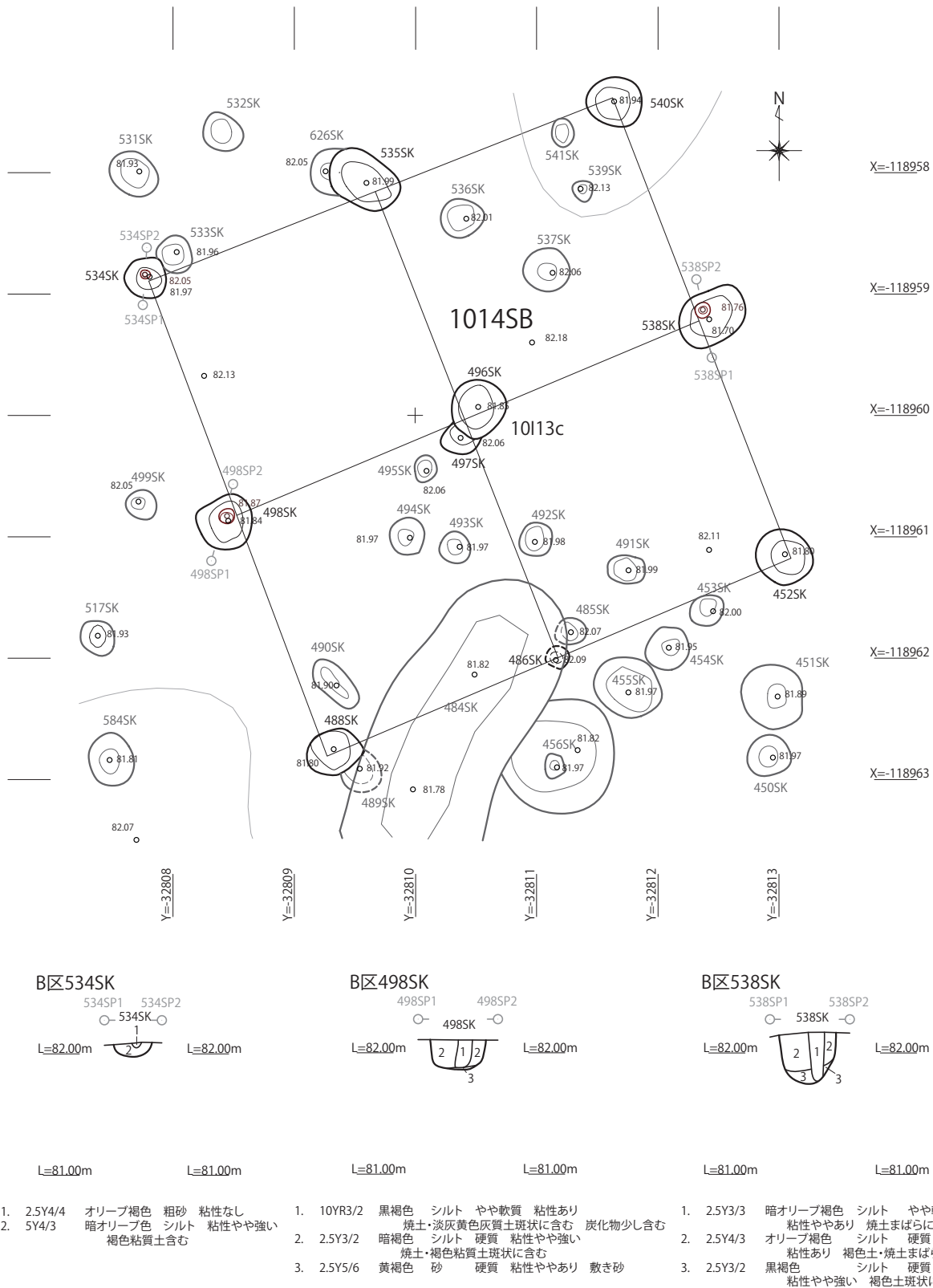


図 2-46 B 区 1014SB 遺構平面図・柱穴土層断面図 (1:50)

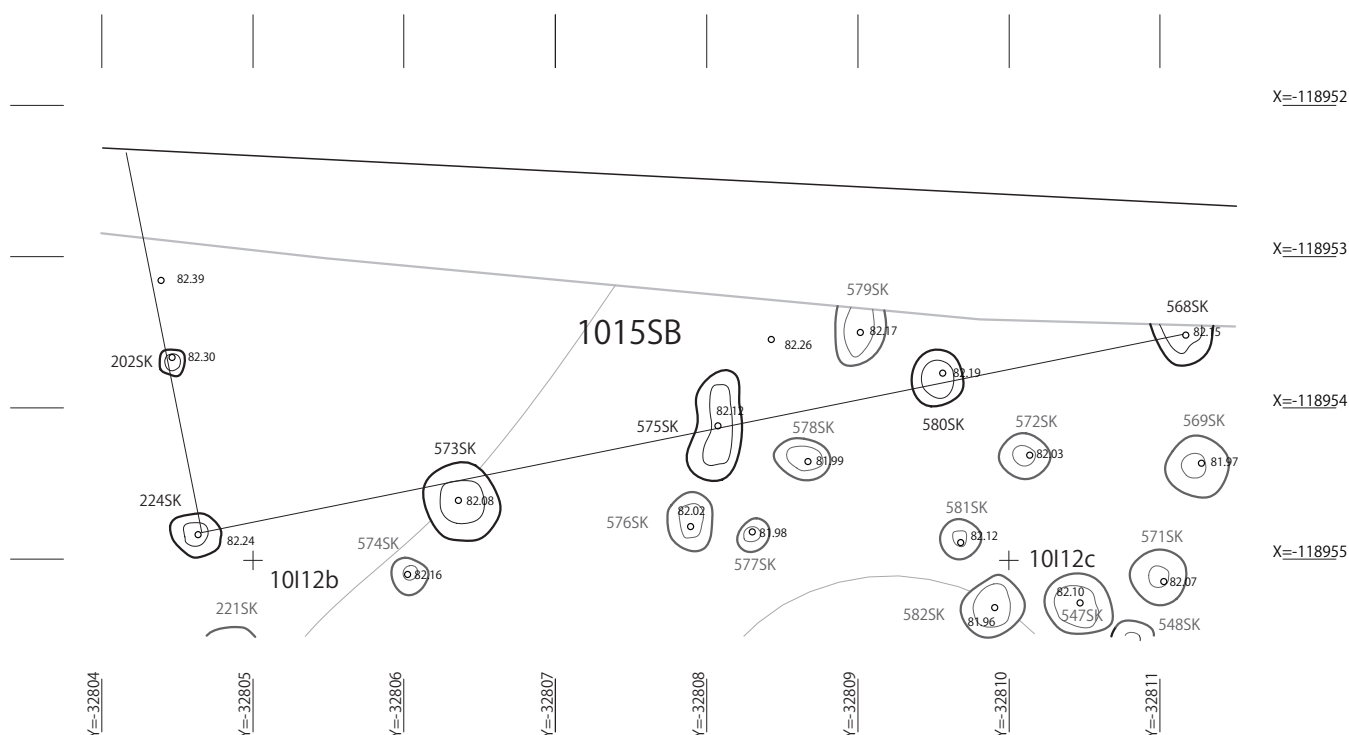


图 2-47 B 区 1015SB 遺構平面图 (1:50)

でも数少ない猿投窯産で、城ヶ谷和広氏より鳴海 32 号窯式期に属するとのご教示を得たことから、650SB そのものは岩崎 25 号窯式期（8 世紀前半頃）に機能していたと考えて差し支えなからう。

同じく柱掘り方の一辺が約1mの大型総柱建物1013SBは、650SBより約2m南に西側の柱筋を揃えて南に並び建つ。建物の軸線は650SBと異なり、ほぼ真北である。検出面が650SBよりも低いことから全体に遺存状況が悪く、南西隅柱は確認できなかった。もう一間分南に伸びる可能性も考えられるが、現状においてその痕跡はない。また、南北で3.9m（13尺）で639SKと640SKでの柱間寸法は1.9m（約6尺）。東西の柱間寸法は1.5m（5尺）で、650SBとは異なる。639・690SKにて確認できた柱の径は約20cm。

この 650・1013SB はいずれも一辺が約 1m の巨大な隅丸方形の柱掘り方をもつという点で、後述する他の掘立柱建物とは大きく異なっている。さらに総柱建物であることを鑑みれば、きわめて

公的な性格を帯びた倉庫群の一部と考えるのが自然であろう。

なお、この2棟の大型倉庫はいずれも南北溝500SDを切っている。500SDは時期を決め得る遺物はないが、A区の110SD(101SD-B)につながる可能性が高いとみている。

651SBはB区南半部の中央に位置する南北棟建物で、南端は調査区外に伸びる。桁行は5間(9m)以上で梁行は3間(6m)。ただし桁行方向の側柱列には1つの掘り方に2箇所の柱を建てるという大壁(壁建ち)建物に近い工法をとる。

柱掘り方の平面形は円形ないし楕円形でサイズは不統一。柱の径は 10cm 程度。時期を決める手だては皆無だが、A 区の 100SB に建物の軸線が近いことと、100SB の南端と 651SB の北端の柱筋がほぼ並ぶことから、ここでは 100SB と同じく 3-4 期の最終末と想定しておく。

他は全て調査終了後に遺構図上から復元した掘立柱建物である。

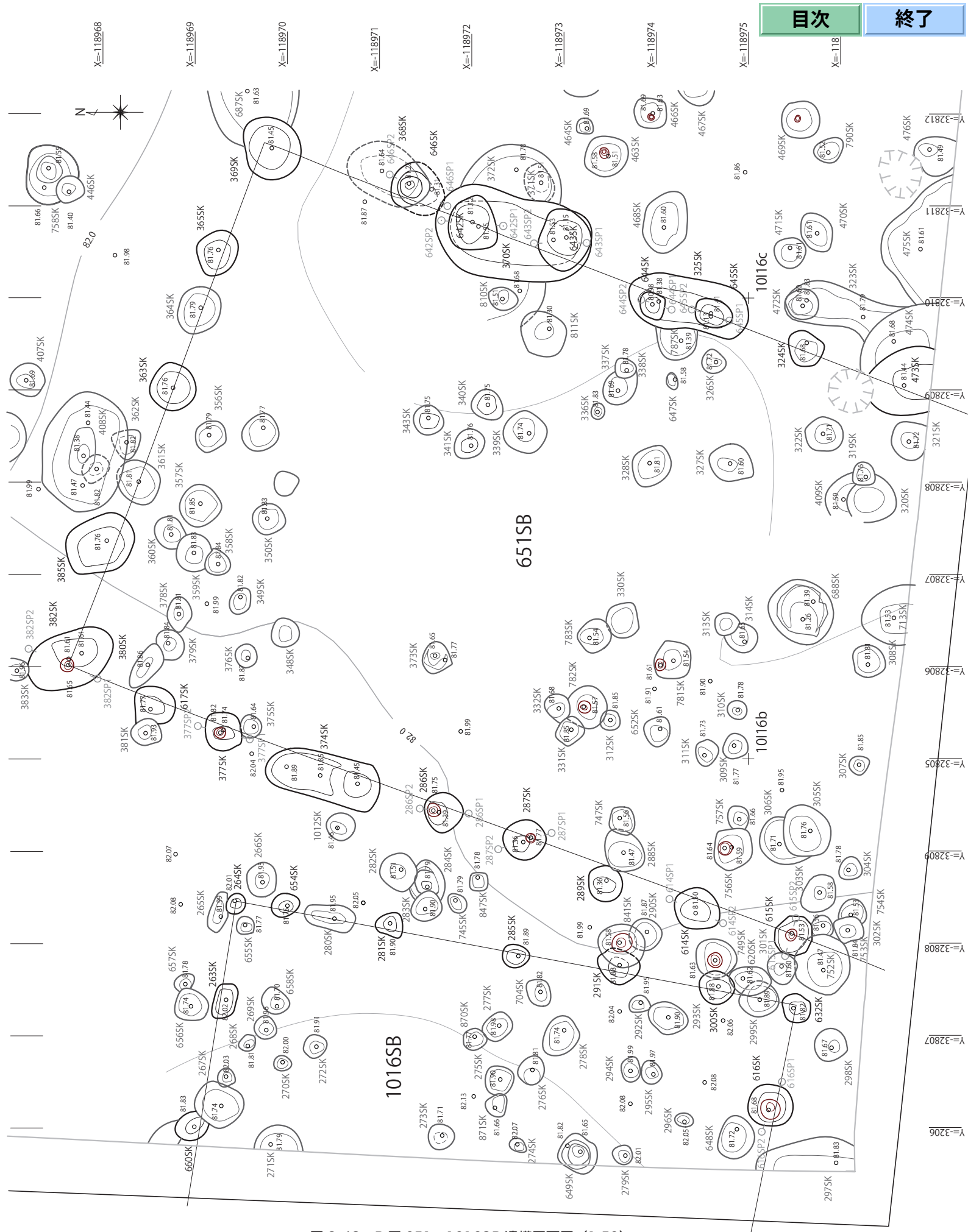
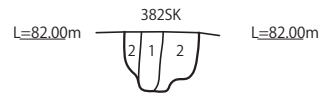


図 2-48 B 区 651・1016SB 遺構平面図 (1:50)

B区382SK

L=83.00m ^{382SP1} ○- ^{382SP2} ○- L=83.00m



1. 7.5YR3/4 暗褐色 シルト やや硬質 粘性やや強い
褐色粘質土多く含む 炭化物・焼土まばらに含む
2. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト 硬質 粘性やや強い
褐色粘質土斑状に含む

B区377SK

L=83.00m ^{377SP1} ○- ^{377SP2} ○- L=83.00m



1. 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性やや強い
褐色土やや強い斑状に含む 焼土・炭化物少し含む
2. 2.5Y3/2 黒褐色 細砂質シルト 硬質 粘性やや強い
褐色粘質土斑状に含む 焼土まばらに含む

B区286SK

L=83.00m ^{286SP1} ○- ^{286SP2} ○- L=83.00m

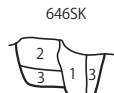


1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルト やや軟質
褐色粘質土・焼土流状に含む
2. 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト やや硬質
粘性やや強い 褐色土少し含む

B区646SK

L=83.00m ^{646SP1} ○- ^{646SP2} ○- L=83.00m

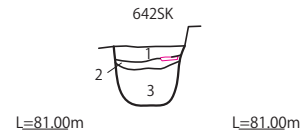
L=82.00m L=82.00m



1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルト やや軟質 粘性やや強い
炭化物まばらに含む 褐色土斑状に含む
2. 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 硬質 粘性やや強い
褐色土斑状に含む
2. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト 硬質 粘性やや強い
褐色土・雲母混黄褐色細砂塊斑状に含む

B区642SK

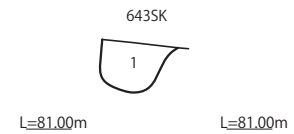
L=82.00m ^{642SP1} ○- ^{642SP2} ○- L=82.00m



1. 2.5Y3/1 黒褐色 シルト 硬質 粘性やや強い
炭化物・褐色土少し含む
2. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト やや硬質 粘性強い
褐色土斑状に含む
3. 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト やや硬質
粘性あり 褐色土少し含む

B区643SK

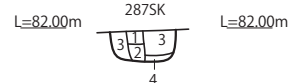
L=82.00m ^{643SP1} ○- ^{643SP2} ○- L=82.00m



1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘土質シルト やや軟質
粘性強い 褐色土強い斑状に含む
焼土・炭化物少し含む

B区287SK

L=83.00m ^{287SP1} ○- ^{287SP2} ○- L=83.00m



1. 5YR4/6 赤褐色 シルト やや軟質 粘性やや強い
焼土少し含む
2. 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト やや硬質
粘性やや強い 褐色土・焼土流状に含む
2. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト 硬質 粘性やや強い
明褐色土斑状に含む
2. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト 硬質 粘性あり
明褐色土少し含む

B区614SK

L=83.00m ^{614SP1} ○- ^{614SP2} ○- L=83.00m



1. 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 硬質 粘性やや強い
褐色土斑状に含む

B区615SK

L=83.00m ^{615SP1} ○- ^{615SP2} ○- L=83.00m



1. 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト やや軟質
粘性あり 褐色土やや強い斑状に含む
2. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト 硬質 粘性あり
褐色土強い斑状に含む

B区644SK

L=82.00m ^{644SP1} ○- ^{644SP2} ○- L=82.00m



1. 2.5Y3/1 黒褐色 シルト やや硬質 粘性あり
褐色土やや強い斑状に含む

B区645SK

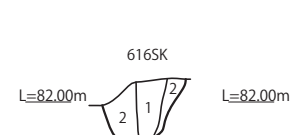
L=82.00m ^{645SP1} ○- ^{645SP2} ○- L=82.00m



1. 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 軟質 粘性強い
焼土まばらに含む
2. 10YR2/2 黒褐色 シルト 軟質 粘性強い
褐色土斑状に含む

B区616SK

L=83.00m ^{616SP1} ○- ^{616SP2} ○- L=83.00m



1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 細砂質シルト 粘性やや弱い
焼土・炭化物流状に含む
2. 5Y4/3 暗オリーブ色 シルト 硬質 粘性やや強い
褐色土斑状に含む

図 2-49 B 区 651・1016SB 柱穴土層断面図 (1:50)

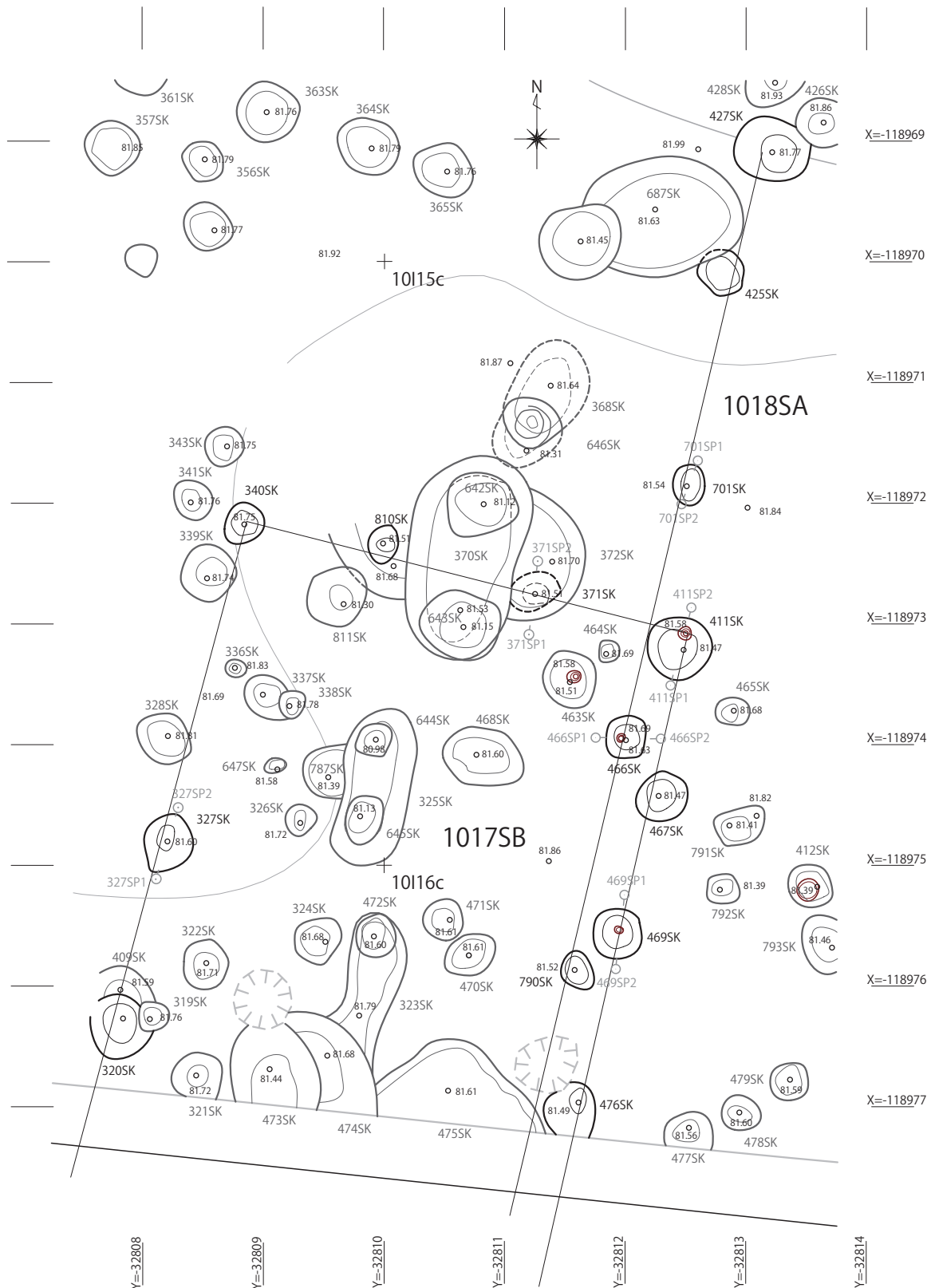


図 2-50 B 区 1017SB・1018SA 遺構平面図 (1:50)

1014SB は調査区中央やや北よりに位置する2×2間(4.2×4.1m)の総柱建物。建物の軸線は北で21°西に振れる。柱掘り方は直径30～50cmの円形ないし楕円形で、柱の径は15cm程度。

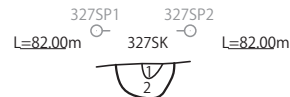
この1014SBと似た軸線の建物が調査区北端の1015SB。4間(7m)以上×2間(2m)以上で、柱掘り方は直径20～50cmと不揃い。この2棟に関しては時期の決め手に欠けるが、西に軸線が振れるという点でA区の036SIに近い時期(3-1期最終末)の可能性がある。

1016SB は調査区南西隅の南北棟建物。5×3間(6.2×2.7m)以上で柱間は不揃い。柱掘り方は直径20～50cmの円形でばらつく。軸線は北で11°東に振れる。

1017SB は調査区中央南端の南北棟建物で、軸線は1016SBに近く北で15°東に振れる。柱間は不揃いな3間以上×3間(4.8m以上×3.8m)。柱掘り方は直径30～55cmの円形で、柱の径は約10cm。

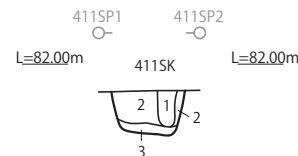
1018SA もほぼ同じ軸線の柵列で、6間(8.3m)以上。柱掘り方は直径30～60cmの円形で、柱

B区327SK



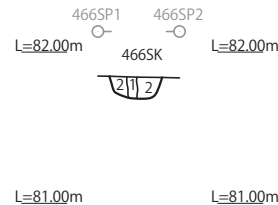
1. 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性ややあり
灰質焼土多く含む
2. 10YR3/3 暗褐色 シルト 硬質 粘性あり
焼土強い斑状に含む 炭化物わずかに含む

B区411SK



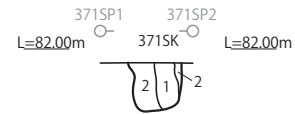
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 軟質 粘性あり
焼土多く含む
2. 10YR3/2 黒褐色 シルト やや硬質 粘性あり
褐色土斑状に含む
3. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト 硬質 粘性やや強い
褐色土少し含む

B区466SK



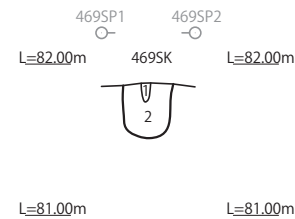
1. 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 軟質 粘性ややあり
褐色土少し含む
2. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト 硬質 粘性ややあり
褐色土斑状に含む 焼土わずかに含む

B区371SK



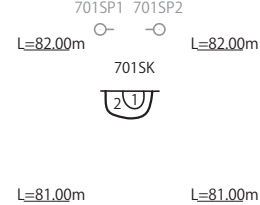
1. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト 軟質 粘性あり 焼土・黄灰色細砂質土斑状に含む 炭化物まばらに含む
2. 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト やや硬質 粘性ややあり

B区469SK



1. 5YR5/8 明赤褐色 焼土 やや軟質 粘性ややあり
炭化物まばらに含む 褐色粘質土互層状に含む
2. 10YR3/3 暗褐色 シルト やや硬質 粘性やや強い
焼土流状に含む 褐色粘質土斑状に含む

B区701SK



1. 5Y4/2 灰オリーブ色 砂質シルト 軟質 粘性ややあり
明褐色粘質土斑状に含む
2. 5Y3/2 オリーブ黒色 砂質シルト 硬質 粘性あり
褐色粘質土斑状に含む

図 2-51 B 区 1017SB・1018SA 柱穴土層断面図 (1:50)

の径は7cm程度。

この1016・1017SB・1018SAはおおむね500SDと軸線が合うことから、3-2期に想定しておく。

第3章 遺物

1. 土器・土製品

(1) 1期の土器・土製品

今回の石岸遺跡からは、1500点ほどの縄文土器が出土した。その中で、図化を行ったものは土器345点・土製品1点である。土器345点の中でも、接合できなかった同一個体を別個で図化したものもあるため、最小個体数はより少なくなると思われる。

図版では、出土調査区や掘削順および遺構出土ごとに提示した。1～125は08B区で検出2段階の包含層掘削および縄文時代に帰属する遺構内から出土した資料、126～334は検出1段階までの包含層掘削および古代以降に帰属する遺構内から出土した資料、335～345は08A区から出土した資料である。しかし、この報告文では、紙面の都合上、分類した項目順に報告する。

縄文土器は、おおむね後期中葉の八王子式を主体として、中期後半から後期末まで確認できた。これらは、時期・器種・種別、および部位などから、第1群から10群に分けることができる。

()内の番号は、遺物番号を示す。

第1群 (109・113～115・119・216・223・257)

縄文時代中期に属するものを一括した。109は内湾する形状の口縁部片で、半截竹管による施文・区画のなかに縄文(LRか?)が施され、外面端部には区画に沿って楔状の刺突が加わっている。中期前葉の北裏CI式に当たるものと思われる。113～115・223も半截竹管による弧状沈線区画の中に縄文LRが施されているもので、119は半截竹管文のなかに楔状の刺突が加わるものである。これらも北裏CI式に相当するか。216は屈折する口縁部に2条の棒状工具による連続刺突

文を挟み、2段に爪形の刺突列文が施されている。中期中葉の北屋敷式に相当するものと考えられる。

257はキャリパー形の器形を呈するもので、外面に粘土紐の貼付が認められる。

第2群

後期中葉の堀之内2式に相当するものである。A～d類にさらに分類できる。

第2群a類 (4・27・128・135・138・177・290・320) 屈折した口縁端部に沈線や縄文が施される一群をまとめた。4・27・128は縄文LRに2条の短沈線が施されている。138は胴部への屈曲部に沈線内に縄文LRが施され、さらに連続する短沈線が入れられたものである。

第2群b類 (150・274・282・309・330・342) 8の字の貼付文が施されているものである。282・274・382は器形の屈折部分に貼り付けが認められるもの、150は口縁部内面側に貼り付けが認められるものである。貼付の上に縄文LRが施されているものが多い。

第2群c類 (321・322) 沈線区画内に縄文LRが施されているものである。同一個体と考えられる。

第3群

後期中葉八王子式に属する深鉢形土器で、さらにa～f群に細分される。

第3群a類 屈折縁深鉢(百瀬2013)口縁部で、さらに7類に細別できる。

第3群 a-1 類 (2・8・34・36・44・51・67・68・103・133・134・173・176・179・218・258・259・308・312・327) 波状を呈する器形で、3本沈線内に縄文が充填されているものである。179のみRL、ほかはすべてLRである。

第3群 a-2 類 (45・50・116・117・292・323) 波状を呈する器形で、2本沈線区画内に縄文が充填されているものである。117はRLであるが、ほかはLRが圧倒的に多い。

第3群 a-3 類 (35・52・84・129・174・175・178・181・217・224 ～ 226・287・302・314・317・329) 平縁を呈する器形である。文様は3本沈線内に縄文LRが充填されているものが多い。

第3群 a-4 類 (79・229・279) 装飾のある波頂部で、8の字意匠が明瞭に認められるもの。8の上部のみ貼付を行うことによって、立体的効果を出したものと思われる。縄文LRが施される。

第3群 a-5 類 (126・127・319) 8の字の立体的装飾がなくなり、上下二段の刺突とそれを囲むような連続弧線が施されているもの。弧線は3条で、2条の横沈線で波頂部をつなぐ。縄文LRが施される。

第3群 a-6 類 (15) 口縁端部上面に連続刺突列が施されるものである。外面に1条の沈線が巡る。鉢あるいは壺・注口土器かもしれない。

第3群 a-7 類 (180・182) その他の文様などを集めた。180は波頂部表の上端に沿って連続刺突と沈線が施され、体部側には2条沈線間に縄文LRが充填されている。波頂部内面や上面にも連続刺突や縄文が施される。182は波頂部に沿って2条沈線と連続刺突、縦方向に3本沈線内に縄文LRが施されている。

第3群 b 類 (85・130 ～ 132・219・275・307・315・326) 平縁直立深鉢(百瀬2013)口縁部である。85・275は2本沈線間に縄文LRが充填されているものであり、その他は3本沈線内に縄文が施されているものである。

第3群 c 類 (38・100・153・227・246・278・316) 口縁部から頸部には文様がなく、胴部に施文のある外反縁無文鉢(百瀬2013)口縁部である。

第3群 d 類 (264) 器面表裏は幅狭いミガキ様の調整痕を残す無文深鉢で、口縁端部上端に縄文LRが施されているものである。

第3群 e 類 特殊な深鉢形土器で異系統土器などを含む

第3群 e-1 類 (74・75) 緩やかな波状を呈する器形で、口縁端部内面に棒状工具による連続刺突が施され、胴部には多重する沈線内に斜方向の短沈線が施されている。中の沈線は相反し連下する弧状の位置で途切れている。

第3群 e-2 類 (169) 3単位と考えられる突起部を有する平縁直立深鉢である。端部上面にはへら状工具による連続する刻みが施され、口縁直下には同一工具による斜方向の短沈線を充填する横沈線が認められる。胴部には、3条の弧線が横に展開し、間には櫛状の細密な条線が施される。口縁部に内面には1条の隆帯が横走する。

第3群 e-3 類 (14・149) 内側に屈折する波状を呈する器形で、器面表のみならず裏にも多条の沈線が施されているものである。

第3群 e-4 類 (202・203・283) 平縁直立深鉢の突起部である。202は加曽利B1式に相当するものと考えられる。

第3群 e-5 類 (66・243) その他の突起状のものを集めた。

第3群 f 類 有文深鉢土器胴部片を集めた。部位と施文により、4 類に分類できる。

第3群 f-1 類 (28・29・31・53・64・76・83・86・91・92・101・102・105・120・122・141・145・171・172・183・185・188・189・231・276・294・296・301・304・337・338) 外に直立する部分で、3本沈線内に縄文が施されているものである。143は渦巻き状の文様をなし、古相を示すものか。

第3群 f-2 類 (10・11・37・55・73・146・230・277・289・298・303・324) 外に直立する部分で、2本沈線内に縄文が充填されているものである。縄文はLRが多い。

第3群 f-3 類 (5・7・12・30・46・48・49・54・77・81・97・107・136・139・140・147・208・232・236・262・263・270・331) 内湾および湾曲する部分で、3本沈線内に縄文が施されているものである。5は鋭角に屈折した区画帯を持つもので、古層を示すものか。

第3群 f-4 類 (13・65・69・82・123・186・245) 内湾および湾曲する部分で、沈線のみが施されているものである。沈線は3本一単位が多い。245は上下二段にの字状の沈線が付くもので、鉢形になるかもしれない。

第4群

後期中葉の西北出式以降の深鉢である。以下のa～d 類に細分できる。

第4群 a 類 (228) 円柱状の装飾が付く波状口縁部で、上端および外面に沈線と縄文Iが施される。

第4群 b 類 (335) 屈曲部分の口縁部片で、貼付粘土の両脇に沈線区画が施され、縄文が充填されている。

第4群 c 類 (137) 口縁屈曲部に横1条に沈線が施されているものである。

第4群 d 類 (56・57・237) 細い貼付隆帯が施されるものである。

第5群

後期後葉の凹線文土器である。以下のa・b 類に細分できる。

第5群 a 類 (148・256・299) 凹線内面にナデ調整が施され、凹線が浅く幅広になっているものである。元住吉山II式に比定されるものである。

第5群 b 類 (58・59・328) 凹線は工具による線引きのままとなっているもので、宮滝式に比定されるものである。

第6群 (24～26)

後期末の伊川津式に属するもので、08B区629SKで良好な状態で出土した。24は深鉢口縁部から胴部上半片で、ほぼ直立する器形で、口縁端部上面は面が形成される。器面表には縦方向、裏には横方向に巻貝条痕が施されている。器面表には口縁に沿って3条、胴部上半に2条のいわゆる櫛状の沈線が施されている。25は直立する器形の深鉢口縁部、26も深鉢口縁部で、器面表裏に巻貝条痕が認められる。27はくの字屈曲する深鉢口縁部片で、表側端部に縄文LRののち、2条の短沈線が施されている。

第7群

無文の深鉢形土器である。器形などによってa～d 類に分類できる。いずれも、器面にはミガキ様の幅狭い調整痕が残されており、器面調整の様相としては、第3群のそれと同様である。

第7類 a 類 (184・261・265) 口縁部が内側に屈曲するもの。

第7類 b 類 (1・47・78・89・95・99・156・168・170・190 ～ 197・220・221・239 ～ 242・266 ～ 268・291・300・313・325・339・340・341) 口縁部が直線的に開くもの。

第7群 c 類 (95・99・239・241・266・291) 口縁部が外反するもの。一部は第3群 c 類のものかもしれない。

第7群 d 類 (16 ～ 18) 胴部片である。

第8群

鉢および浅鉢形土器である。以下の a ～ g 類に分類できる。

第8類 a 類 (72・260) 口縁部が屈折する鉢である。

第8類 b 類 (310・318・336) 3本沈線に縄文が施されるもので、第3群 a 類と同類の文様が施されるもの。

第8類 c 類 (9・110・152・281) 2本沈線内に縄文が充填されるもので、第3群 b 類と同類の文様が施されるもの。

第8類 d 類 (39・154・155・293) 器面は丁寧にミガキがかけられており、上端部には連続押圧が、内面には隆帯および連続刺突列が施されているものである。加曽利 B1 式の精製浅鉢に相当する。

第8類 e 類 (87・118・201・244・247・297) d 類同様に内面に沈線などの文様が施されているものである。87は横沈線に鍵の手に上下に展開する文様が付く。これらも加曽利 B1 式の精製浅鉢に相当するか。

第8類 f 類 (20・60・111・151・187) 沈線などが器面外面に施されるものである。

第8類 g 類 (21・40・98・157・158・198 ～ 200・238) 無文のものを一括する。238は口縁端部内面に横方向の沈線が巡る。

第9群

壺形および注口土器である。部位などによって、以下の a ～ c に分類した。

第9群 a-1 類 (90・106・124・205・207・248 ～ 250・269・273・280・284 ～ 286・288・343) 口縁部および胴部片である。

第9群 a-2 類 (19・112・159・160・204) 口縁・頸部につく耳状の装飾部を一括した。

第9群 b 類 (32・41・62・63・96・125・161 ～ 163・206・222・251 ～ 253) 注口部を一括する。注口部の法量にはさまざまな段階が認められ、32・125のような小型のものから、62・162・163のような大型のものまでである。

第10群 (3・22・23・33・42・43・61・70・71・80・88・93・94・104・108・164 ～ 167・209 ～ 215・254・255・271・272・295・305・306・311・332 ～ 334・344・345) 底部の中で、圧痕が認められるものをほぼすべて図化した。圧痕の種類は、木葉痕と編組製品圧痕とに、大きく二分される。

木 葉 痕 (23・33・209・210・215・311・345)

編組製品圧痕 これは、編組技術の様相によって、さらに分類が可能である。

四つ目あるいはゴザ目 (3・42・43・61・71・108・164・165・211・255・295・305) 42

が3本越え・3本くぐり・1本送りである以外は、2本越え・2本くぐり・1本送りが圧倒的に多い。

網代 (88・93・104・212・271・272・306・332) 88・212・271・272・306は2本越え・2本くぐり・1本送り、93・332は3本越え・3本くぐり・1本送りである。

詳細不明 (22・70・94・166・167・231・214・254・333・334・344) 詳細不明としたものは、圧痕の状態が不鮮明なために編組技術を追うことができないことを示す。80は横に対して縦が斜めに絡む、縄目編みのようにも見えるが、断言はできない。

今回報告する土器群は、後期中葉八王子式を中心とする土器群であり、第10群で報告した資料の大多数は八王子式の資料と考えて差し支えない。

土偶 (346)

346は、分銅形で板状を呈する八王子タイプの土偶である。現存で、長さ5.4cm・幅3.8cm・厚さ1.2cmを測る。左側より右側の厚さがやや厚い。表面は、中央に盲孔のある短沈線が施されるほかに、両端の縁から中央に向かって斜方向に2本一単位の沈線が施される。裏面には、上下両端の弧線のほかに、器形に沿って2条一単位の沈線がある。また、裏面側下端中央および上端左上には、同一工具による2条一単位の短沈線が施されている。(川添和暁)

(2) 3期の土器・土製品

3期の土器は遺構にともなうものが比較的少なく、大半がB区の厚さ0.3～0.6mにおよぶ整地層からの出土である。

前章でも記述したように、調査時点においてB区の整地層を単なる遺物包含層と誤認して掘削した後、第1面の遺構検出をおこなったために、壁面セクションで観察できる少なくとも3時期

には分かれるはずの整地層の遺物を、層位ごとに取り上げることができなかったことをまず明記しておく。

A区 001SD (347～353) 347は須恵器杯Hの蓋で、348はその身。時期は東山50号窯式期併行。349は須恵器の甕口縁部。350～353は土師質の甌・鍋・竈などの把手。

A区 002SD (354) 灰釉陶器碗の底部。折戸53号窯式期～東山72号窯式期併行か。

A区 003SD (355～372) 355は須恵器杯B蓋で高蔵寺2号窯式期併行。356・357は須恵器杯H身。358～360は須恵器高杯の脚部。356～359は東山50号窯式期～岩崎17号窯式期併行に属する。361はハソウで7世紀前半～中葉。362は須恵器甕口縁部。363は須恵器の横瓶。364～371は土師質の把手。372は弥生時代中期の三河型台付甕の脚部。

A区 030SK (373・374) 373・374は土師質の把手。

A区 032SI (375) 375は土師器の椀か。

A区 036SI (376)

376は須恵器杯H身で東山50号窯式期新段階～岩崎17号窯式期併行。

A区 046NR (377～382) 377は須恵器杯H蓋で、378・379はその身。時期は東山50号窯式期併行。380は土師質の把手。381は土師質の甌。382は紡錘車で6世紀後半以降のものと考えられる。

A区 086SD (383～385) 383は須恵器杯H身。384は箱杯で折戸10号窯式期併行だが、遺構変遷からみて混入の可能性が高い。385は弥生時代中期の台付甕脚部。

A 区 093SD (386～389) 386 は須恵器杯 H 蓋で、388 はその身。岩崎 17 号窯式期併行に属する。387 は須恵器杯 B 蓋で高蔵寺 2 号窯式期～鳴海 32 号窯式期併行。389 は土師質の把手。

A 区 095SI (390) 390 は須恵器杯 B 蓋で鳴海 32 号窯式期～折戸 10 号窯式期併行。

A 区 101SD (391～398) 391・392 は 須恵器杯 H 身で岩崎 17 号窯式期併行。393 は須恵器短頸壺。394 はハソウで 391 と同一地点からの出土。東山 50 号窯式期新段階～岩崎 17 号窯式期併行か。395 は土師器の小壺。396・398 は土師質の把手。397 は土師器の壺底部で高台がつく。

A 区 110SD (399・400) 399・400 とともに 7～8 世紀前半の土師器長胴甕。

B 区 205SK (401)

401 は須恵器杯 B 蓋で鳴海 32 号窯式期～折戸 10 号窯式期併行。

B 区 245SK (402) 402 は製塩土器の口縁部。

B 区 250SK (403) 403 も同じく製塩土器の口縁部。

B 区 278SK (404・405) 404 は須恵器杯 H 蓋で東山 50 号窯式期～岩崎 17 号窯式期併行か。405 は須恵器杯 B 蓋で 8 世紀代。

B 区 320SK (406) 406 は土師質で手捏ねのミニチュア土器。

B 区 337SK (407) 407 は土師質の把手。

B 区 368SK (408) 408 は須恵器杯 H 蓋で、東山 50 号窯式期～岩崎 17 号窯式期併行か。

B 区 432SK (409) 409 は大口径の須恵器壺の蓋で、時期的には下がっても高蔵寺 2 号窯式期まで。

B 区 433SK (410) 410 は須恵器短頸壺で、鳴海 32 号窯式期～折戸 10 号窯式期古段階併行。総柱の大型掘立柱建物 650SB の柱抜き取り穴から完形で出土していることから、この建物の廃絶時期の決め手となる資料。

B 区 457SK (411) 411 は須恵器杯 H 身で岩崎 17 号窯式期併行。

B 区 500SD (412) 412 は古墳時代中期の土師器高杯。

B 区 596SK (413・414) 413 は遠江型の土師器長胴甕か。414 は 406 と同じく土師質のミニチュア土器。

B 区 616SK (415) 415 も土師質のミニチュア土器。

B 区 671SI (416) 416 は須恵器杯 H 蓋で 7 世紀後半代のもの。

B 区 包含層（整地層）(417～508) 417～420 は須恵器杯 H 蓋で、433 はその身。421～431 は須恵器杯 B 蓋。438・439・442～451 は須恵器杯 B 身。434・435・437・440・441 は須恵器杯 A。436・452～454 は須恵器碗 A。457 は須恵器盤。432・458～460 は須恵器高杯。461・462 は須恵器壺。463 は須恵器の把手。時期的には東山 50 号窯式期～岩崎 17 号窯式期併行（417～420・433）、高蔵寺 2 号窯式期併行（424・434・435）、鳴海 32 号窯式期～折戸 10 号窯式期併行（429・436・437・442・452～456）のおおむね 3 時期に分かれる。

464～480 は灰釉陶器碗。481 は灰釉陶器の長頸瓶。482・484 は灰釉陶器の瓶類。483 は灰

釉陶器平瓶。485・486 は灰釉陶器短頸壺。487～489 は灰釉陶器の甕口縁部。灰釉陶器は黒笹14号窯式期(464～466)、黒笹90号窯式期(467～472)、折戸53号窯式期(478・479)、東山72号窯式期(475)がある。

490～496 は土師器の甕。497・498 は土師器の椀。499～501 は土師器の高杯で、古墳時代前期～中期。502・503 は土師器の甑。504 は土師器で器種不明。505 は製塩土器の脚部。506・507 は土製の支脚。508 はフィゴの羽口。

B 区 サブトレンチ (509～524) 509 は須恵器杯 H 蓋。510 は須恵器壺底部。511～514 は須恵器杯 B 身。515 は灰釉陶器椀。516 は灰釉陶器瓶類。517 は灰釉陶器短頸壺蓋。518 は灰釉陶器で器種不明。519 は土師器高杯脚部。520～523 は土師器甕。524 は土錘。

A 区 南壁トレンチ (525) 525 は土師器内耳鍋。

A 区 検出 I (526～528) 526・527 は山茶碗。529 は土師器の椀。

A 区 表土はぎ (529・530) 529 は須恵器の瓶類。530 は天目茶碗。

表採 (531～540) 531 は須恵器の高杯脚部。532 は須恵器瓶類。533～536 は灰釉陶器椀。537・538 は土師器甕。539 はフィゴの羽口。540 は土錘。(樋上 昇)

2. 石器・石製品

今回の調査で、縄文時代に属するものは1027点、古代以降に属するものが26点、合計1053点が出土した。この中で、図化提示するのは、146点である。

図面の配列は調査区別であるが、報告の記載は各器種別に行う。

(1) 縄文時代に属する遺物

打製石鏃 (124) 1点のみの出土である。平基有茎鏃で、鏃身部平面形状は五角形状、断面形状もやや扁平な五角形状を呈する。中央に稜線を通らない面(裏面)側は、素材剥片の剥離面を残しているものの、表面に比べて周囲には押圧調整が多く施されている。凝灰岩製である。

部分磨製石鏃 (1・62) 2点出土した。1は、凹基無茎鏃で、厚さ1.5mmと極めて薄い。剥片作出の後に研磨調整、さらに側辺部および基部に押圧剥離が施されたようであるが、最終的には鏃身部に研磨が施されたようである。出土遺構である08B区699SKは後期中葉に属する。安山岩製である。62は、無茎鏃であるが、基部形状が円基様である。全面の剥離調整後に鏃身部および一側辺と基部の一部に研磨調整が施されており、これまで知られている部分磨製石鏃とは異質である。厚さは2.9mmと1に比べて厚手である。これも安山岩製である。

石錐 (2・40) 2点出土した。2は打面転位をしながら連続して作出された剥片が用いられており、剥片端部を押圧剥離で尖らせたものである。40は横長剥片の側辺一端を尖らせたものである。使用石材はともに安山岩である。

石匙 (3・125) 2点出土した。3は横長剥片を用いた横長の形状である。表面側を中心に剥離調整が施されているもので、摘部上端には礫表皮を残す。安山岩製である。125は横長剥片を用いた縦長様の形状である。これも摘部上端に礫面を残す。こちらは凝灰岩製である。

スクレイパーおよび使用痕のある剥片 (4～8・36・41～43・63～67・111・126・127) 25点確認し、17点を図化した。剥片の中で、刃部と考えられる部分に剥離調整や使用痕と考えられる不連続な剥離のあるものを抽出したものが、6・8・36・41・42・63～66のように、対向す

る2辺に同様の不連続な剥離があり、一部は楔形石器あるいは二次加工のある剥片になるかもしれない。使用石材は、下呂石1点(4)・熔結凝灰岩1点(127)のほかは、23点すべて安山岩である。

楔形石器(14・46・70～72) 18点を確認し、5点を図化した。対向する2辺に階段状剥離が認められるものである。石材はすべて安山岩である。

打製石斧(19～26・37・51～54・82～90・118～120・132～134) 一部製作途上と考えられるものも含めて67点を確認し、28点を図化した。平面形状が窺えられる中では短冊形が大多数を占め、23・52のように撥形も若干認められる。法量は長さ10cmを超えるものが18点あり、最長は16.5cmを測る(20)。刃部側には使用によるツブレ・線状痕あるいは摩滅があり、柄の着装痕として身部中央にも摩滅が認められるものもある。52は被熱による色調変化が認められるか。使用石材は、安山岩35点(20～23・25・26・37・51・52・54・84・85・87・89・90・119・120・134)・緑色片岩15点(53・86・118・132・133)・結晶片岩10点(24・82・88)・玄武岩2点(19)・ホルンフェルス2点・凝灰岩1点(172)・塩基性岩1点・片麻岩1点である。

刃器(27・55・56・91～95・115・121・122・135) 石製ナイフの中でも、スクレイパー・使用痕のある剥片に対して大型のものを抽出し、15点を確認した。横長剥片の縁辺(91・122)や縦長様剥片の側辺(27・92・95・115・135)に不連続な剥離が認められる。93は一側辺に階段状剥離が認められ、二次加工のある剥片かもしれない。使用石材は結晶片岩2点(94)・花こう岩1点(56)のほかはすべて安山岩である。

礫器(29・98) 4点のうち2点を図化した。29は全面に礫面を残し縁辺のみに刃部および使

用痕が認められるもの、98は全面に剥離が施されており、石核かもしれない。石材は安山岩3点(29・98)・凝灰質砂岩1点である。

大型剥片石器(28・96・97) 14点出土したうち3点を図化した。いずれも、現状では細長の形状を呈しないものの、製作の様相から打製石斧に類似するものである。使用石材は、結晶片岩4点・緑色片岩3点・安山岩7点(28・96・97)である。

剥片石核類(9～13・15～18・30・44・45・47～50・57・58・68・69・73～81・99・100・112～114・117・128～131)

剥片720点、石核32点、二次加工のある剥片81点の計833点を確認した。石材の内訳は、安山岩746点(9・10・12・13・16・44・45・50・57・58・68・69・75～80・99・100・112～114・128)、

黒曜石8点(17・18・48・49・74・130・131)、熔結凝灰岩2点(47)・下呂石1点(11)、チャート1点(15)、泥岩1点(129)である。

剥片についてみると、安山岩741点で計4884.1g、黒曜石3点で計6.6g、熔結凝灰岩1点で2.0g、下呂石1点で3.8g、チャート1点で3.8g、泥岩1点で9.3gを数えた。石核では安山岩23点で計2070.6g、黒曜石5点で計29.0g、熔結凝灰岩1点で12.4gであった。

安山岩についてのみ、剥片の法量を長さ・幅の散布図で示す(図3-1)。5.5×4cm以下で法量の集中が認められ、この法量に対応する器種が製作の中心であったことが想定される。この法量に対応する剥片石器としては、石鏃・石錐・石匙・スクレイパーなどが対応すると考えられるが、製品の出土は極めて少ない。一方、より大型の剥片に対応する器種としては打製石斧などがあり、これに関しては剥片と製品との有機的関係は自明である。

磨製石斧(123) 1点のみの出土で、欠失した

一部のみである。側面に面をとらない、非定角式である。塩基性岩製である。

打欠石錘（136） 1点のみの出土である。扁平礫について対向する長軸端の二辺に打ち欠きが認められる。安山岩製である。

有溝石錘（31・38・101・102） 4点出土した。いずれも長軸側を巡るような溝が施されているものである。31と102は長楕円形の円盤状、38は直方体状、101は円柱状に加工・研磨が施されている。101は石棒類との関連が強いと考えられるものである。石材は101が緑色片岩以外はすべて凝灰岩である。

磨石・敲石類（32～34・59・60・103～108）

24点確認し、11点を図化した。磨痕は礫の平面中央に残されている場合が多い一方、敲打痕は平面中央に残されている場合と、礫側面に残されている場合とがある。今回の出土資料では、著しい凹みがある凹石は確認できなかった。使用石材は、花こう岩12点（33・34・103・104・106・108）・凝灰岩4点（107）・塩基性岩3点（32・59）・片麻岩2点・玄武岩1点（60）・アブライト1点（105）・砂質凝灰岩1点である。

石皿・台石類（35・109） 10点確認して、2点を図化した。35は長さ28cmほどを測る石材もので、中央に使用痕と考えられる敲打痕が確認できる。109一部のみの残存である。使用後に敲打などによって切断されたものと考えられる。石材は、凝灰質砂岩4点・凝灰岩2点（35）・玄武岩1点（109）・花こう岩3点である。

石棒・石剣類（61・116・137） 4点確認し、3点を図化した。61・137は、剥片状になった部分である。116は基部側が残存しているものである。石材は、緑色片岩（61・137）・116は塩基性岩（116）・結晶片岩1点である。

大型石棒関連資料（110） 3点確認し、1点を図化した。図化を行わなかった2点は08B区441SK出土で、細片化したものである。110は輪切り状に切断された胴部片と考えられるもので、敲打の後に研磨調整が施されている。表面の一部には被熱による色調変化が起こっている。石材はいずれも凝灰岩である。

（2）古代以降の遺物

古代以降の石器には砥石と硯？がある。

砥石（138～146） 23点出土し、8点図化した。太い直方体などの形状を呈したものが多く認められ、全面に磨痕や鉄器による細く鋭い溝状の痕跡が認められる。145は小型で扁平、一端に穿孔が認められるもので、手持砥石と考えられる。石材は、凝灰質砂岩12点（140・141・142）・凝灰岩5点（143・144・145）・片麻岩3点（139）・砂質凝灰岩1点・塩基性岩1点（138）・花こう岩1点である。

（3）石器の出土傾向について

本資料の大多数は、縄文時代後期中葉の八王子式に属する一群と考えられる。

縄文時代の石器の分布傾向を図3-3～3-7に示した。各器種について特に分布が集中する場所は、10H14a・b・c・dである。

このようにB区における縄文時代後期中葉の遺物包含層形成には著しいものがある。本調査区の包含層堆積状況は地質学的な所見とも併せることで、縄文時代における遺跡形成を考える好例になるといえよう。（川添和暁）

3. 木製品

木製品はA区の003SD・038SI・046NR・086SD・093SD・101SDから出土しており、おおむね3-1～2期（7世紀後半～8世紀初頭）に属している。

A区 001SD（001～015） 001は火鑢白で樹種はヒノキの柾目材。002は素木弓でカヤの芯

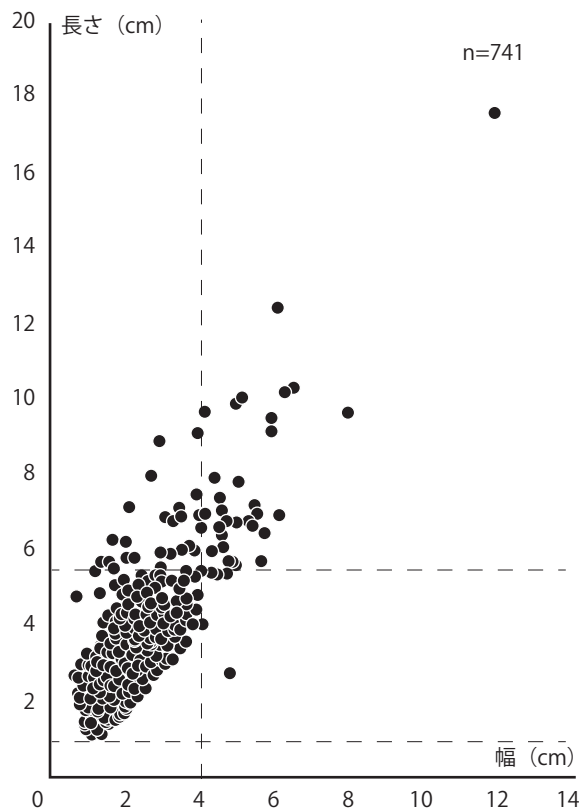


図 3-1 安山岩剥片 法量散布図

持ち材を用いる。当該期の弓は全国的にも例が少なくきわめて貴重。003～005 は丸棒で樹種はいずれもヒノキ。006～008 は端部に炭化した痕跡が遺るいわゆる付け木で樹種は全てヒノキ。009・010 は角棒で、009 がヒノキ、010 はサワラを用いる。011 はヒノキの薄板。012 は矢板でモミ属の板目材を用いる。013～015 は杭で、いずれも残存長が1mを超える長いもの。樹種は013 がモミ属で、014・015 はヒノキ。

A 区 038SI (016) 016 はヒノキの板目材による分厚い板。

A 区 046NR(017～019) 017 はヒノキの板。018・019 は同じくヒノキの付け木。

A 区 086SD (020～022) 020 は穿孔板でヒノキの柾目材を用いる。021 はヒノキの板で一部が炭化する。022 はサワラの角棒。

A 区 093SD (023) 023 は厚みのあるヒノキの板目材で、一方の端部がすばまることからクサビの可能性はある。

A 区 101SD (024) 024 はヒノキの角棒で、端部が炭化していることから、付け木の可能性が高い。

A 区 出土遺構不明 (025) 025 はヒノキの柾目板で、短辺側の上下両隅に穿孔を施す。平面形はやや台形を呈するが、四方転びにはならない。いわゆる箱の側板。(樋上 昇)

4. 金属製品

2 点の鉄釘がある。M1 は先端部を欠損しているが、残存長さ 3.4cm の小型の釘で、横断面形は方形状である。M2 は頭部と先端部を欠損しているが、横断面形が方形状であるので、鉄釘とした。残存している長径 3.6cm である。

(蔭山誠一)

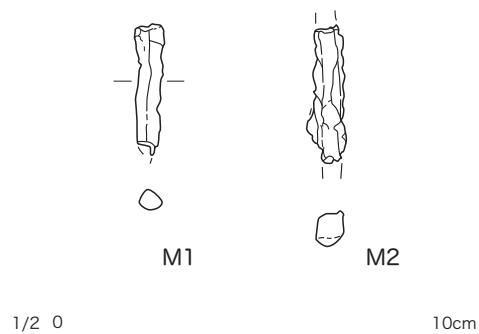


図 3-2 金属製品実測図 (1:2)

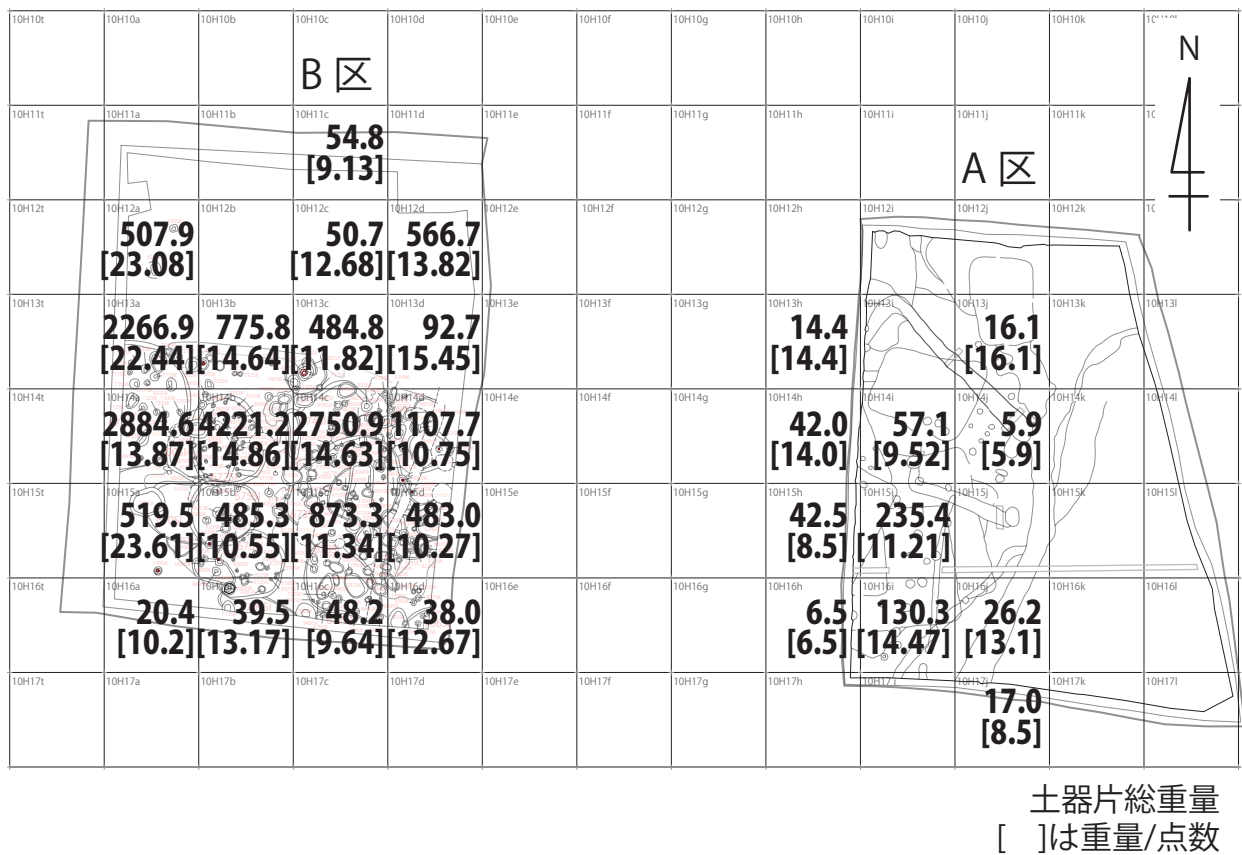
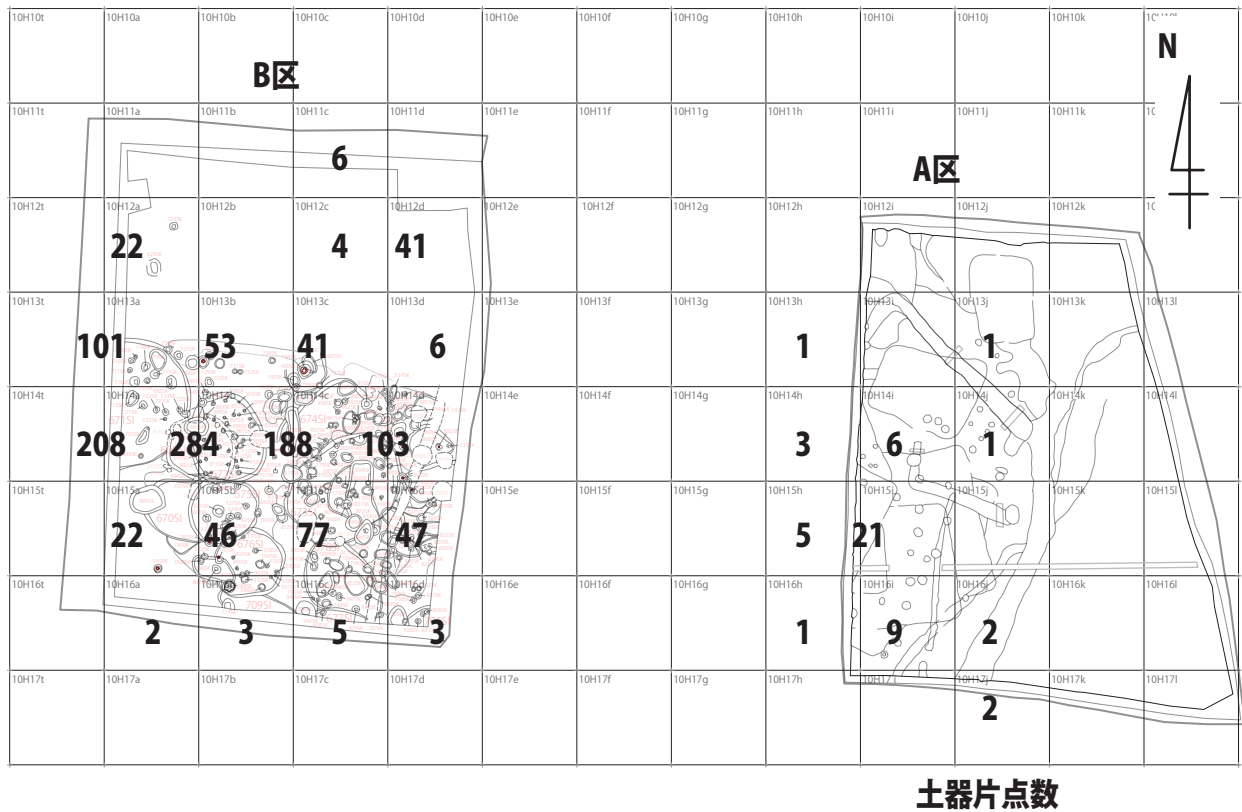
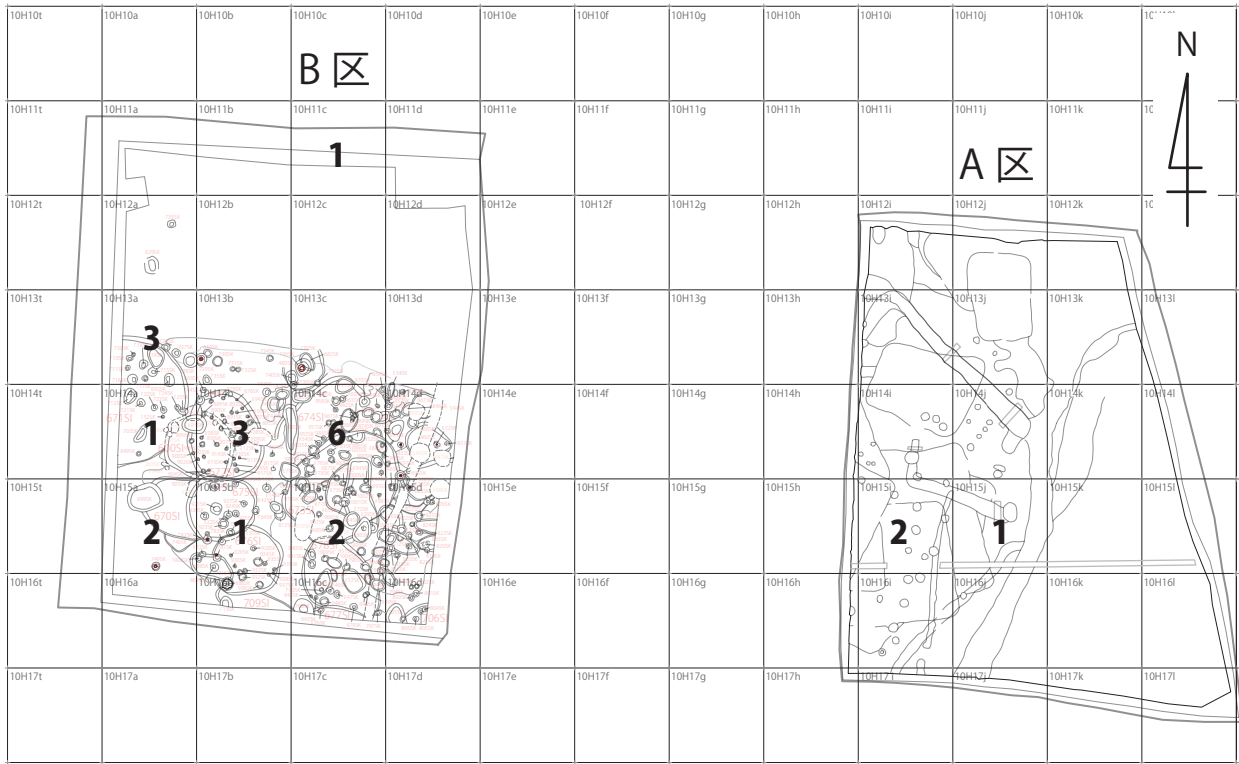
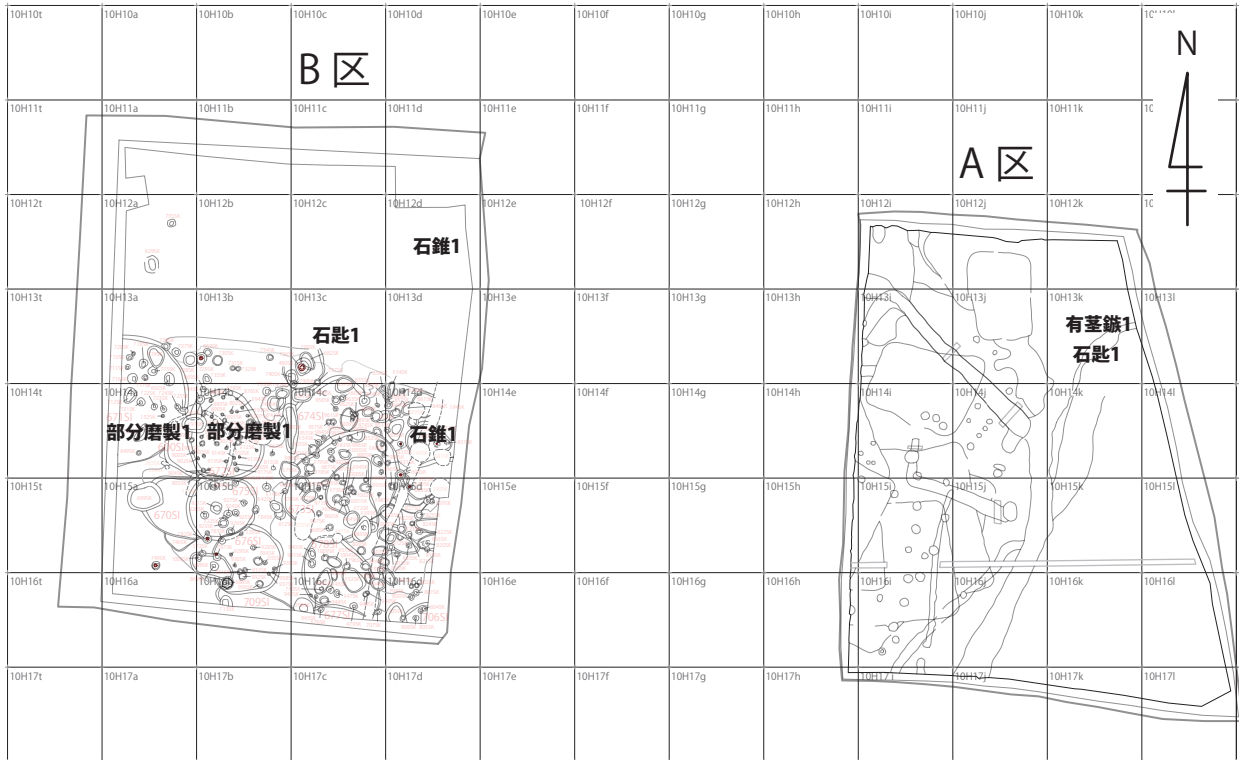


圖 3-3 1 期遺物出土分布圖 -1 (1:400)

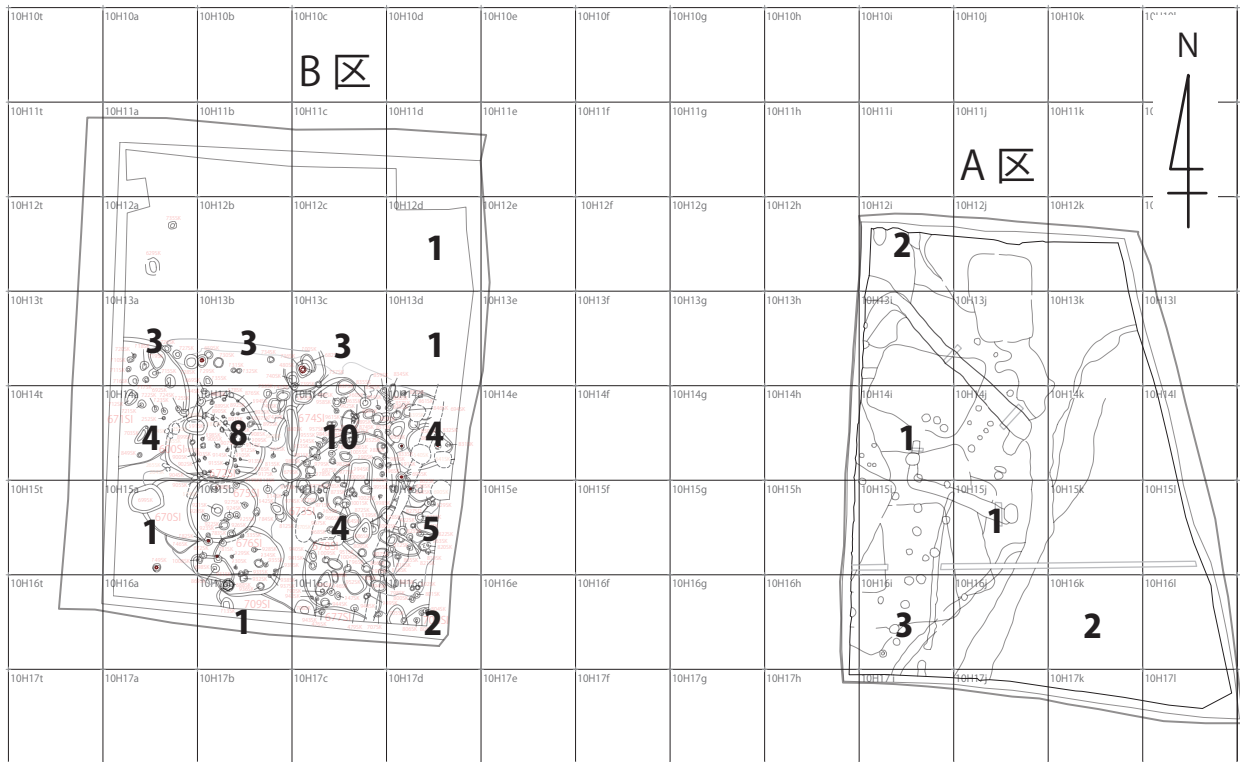


注口土器注口部

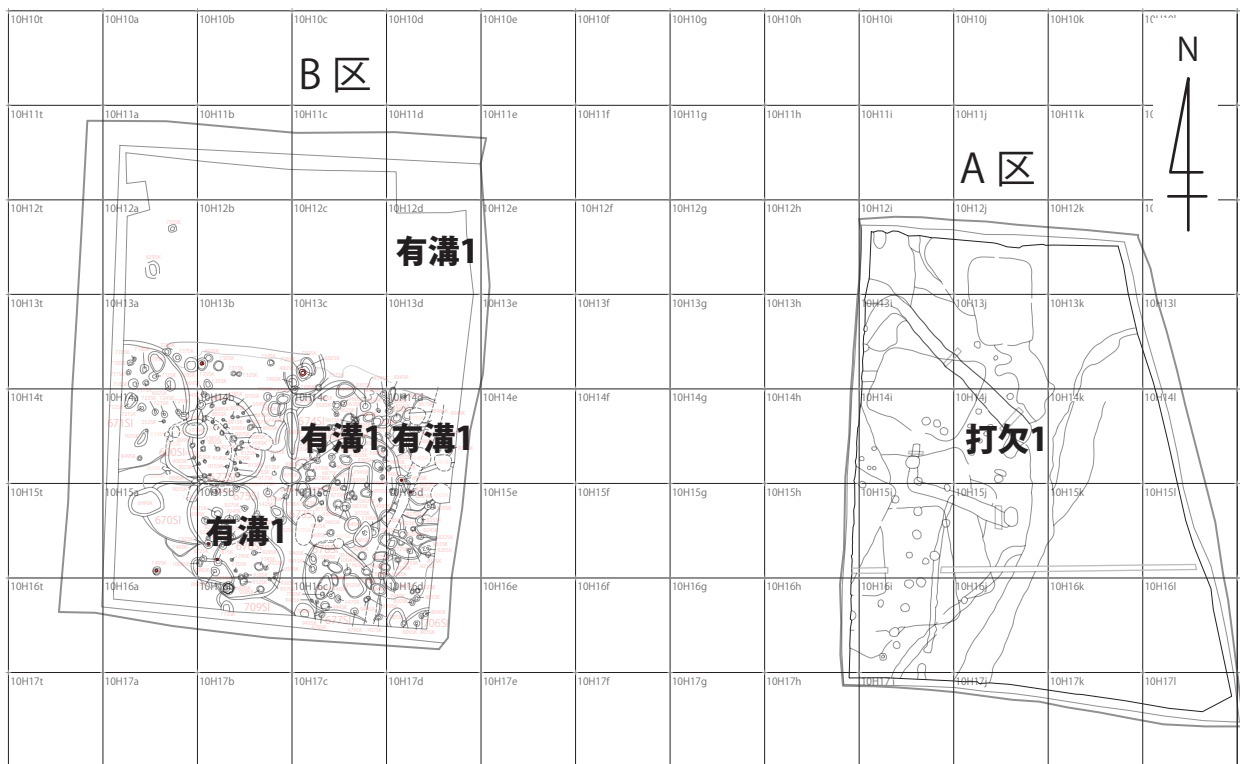


石鏃

図 3-4 1 期遺物出土分布図 -2 (1:400)

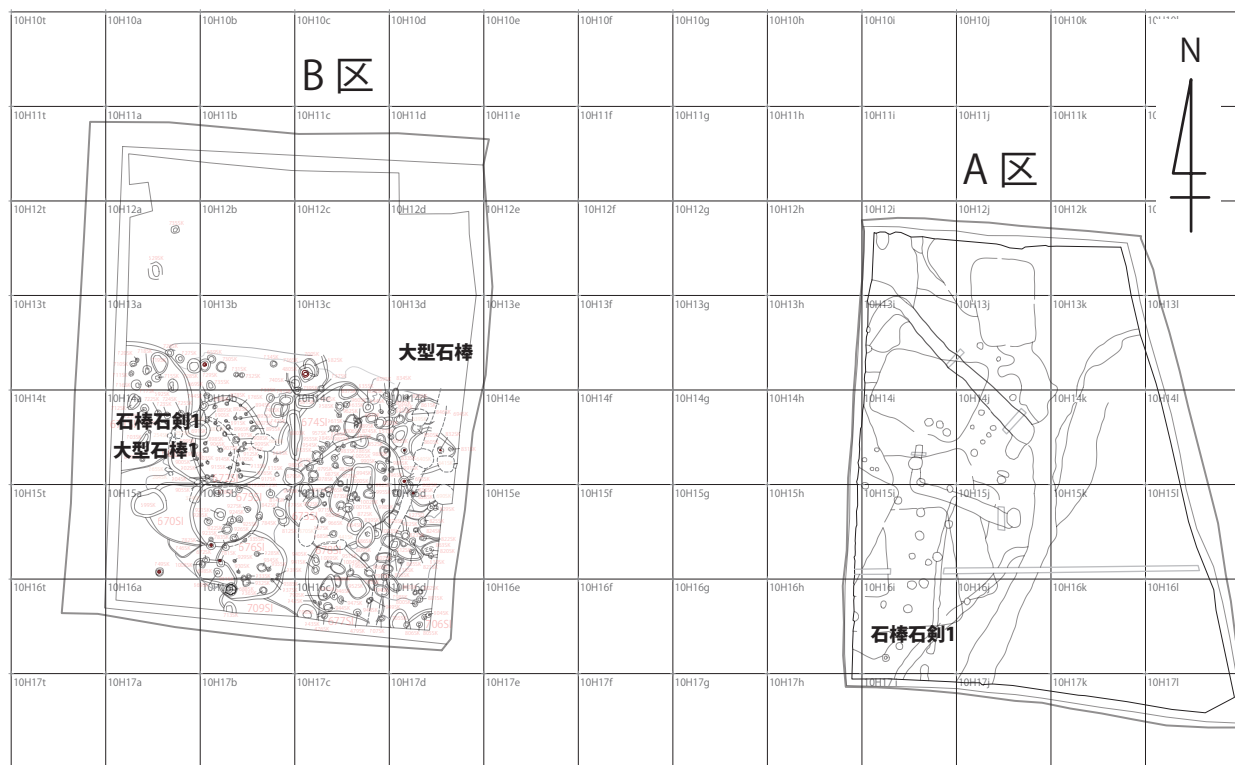


打製石斧

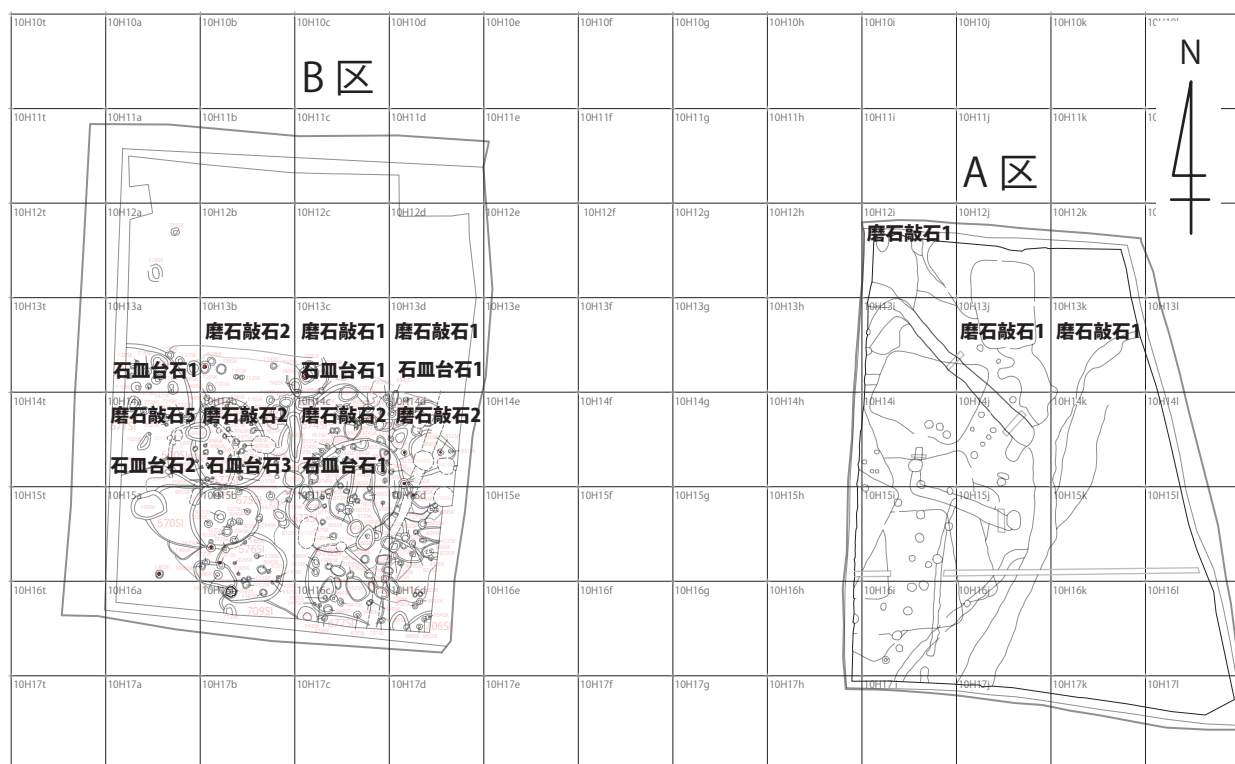


石錘

図 3-5 1 期遺物出土分布図 -3 (1:400)

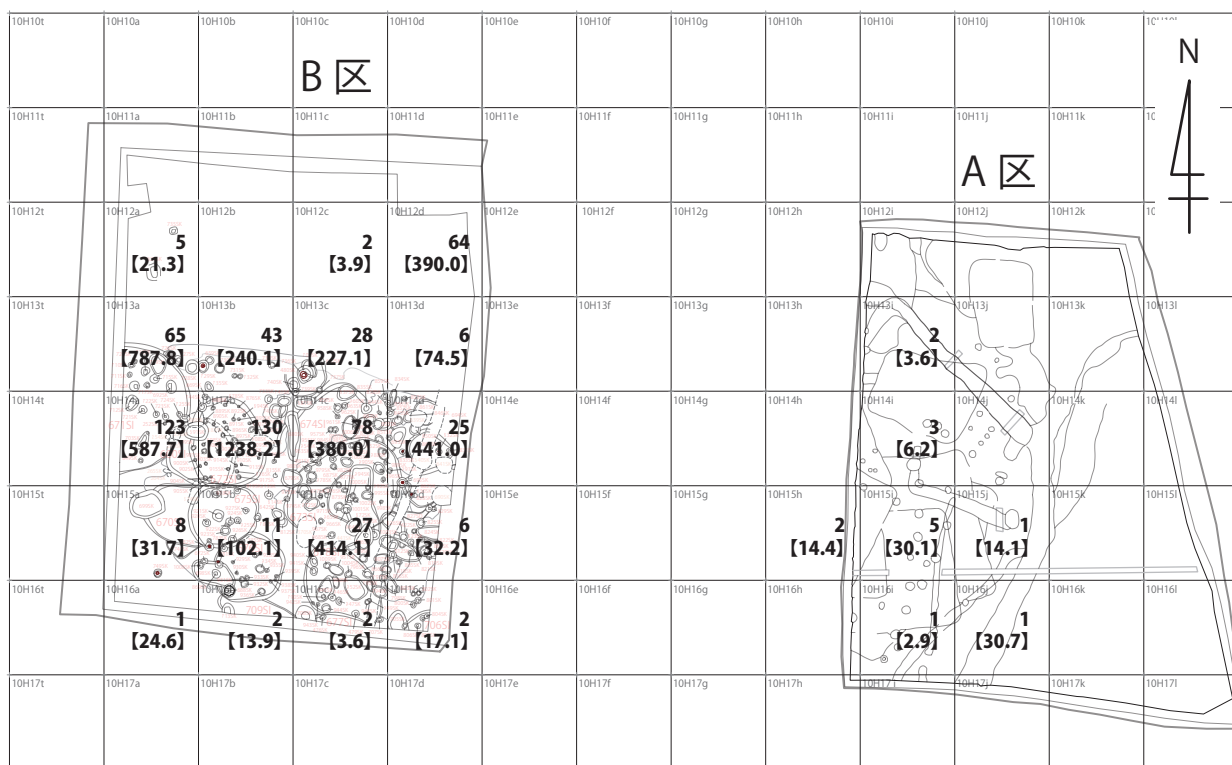


石棒石剣類

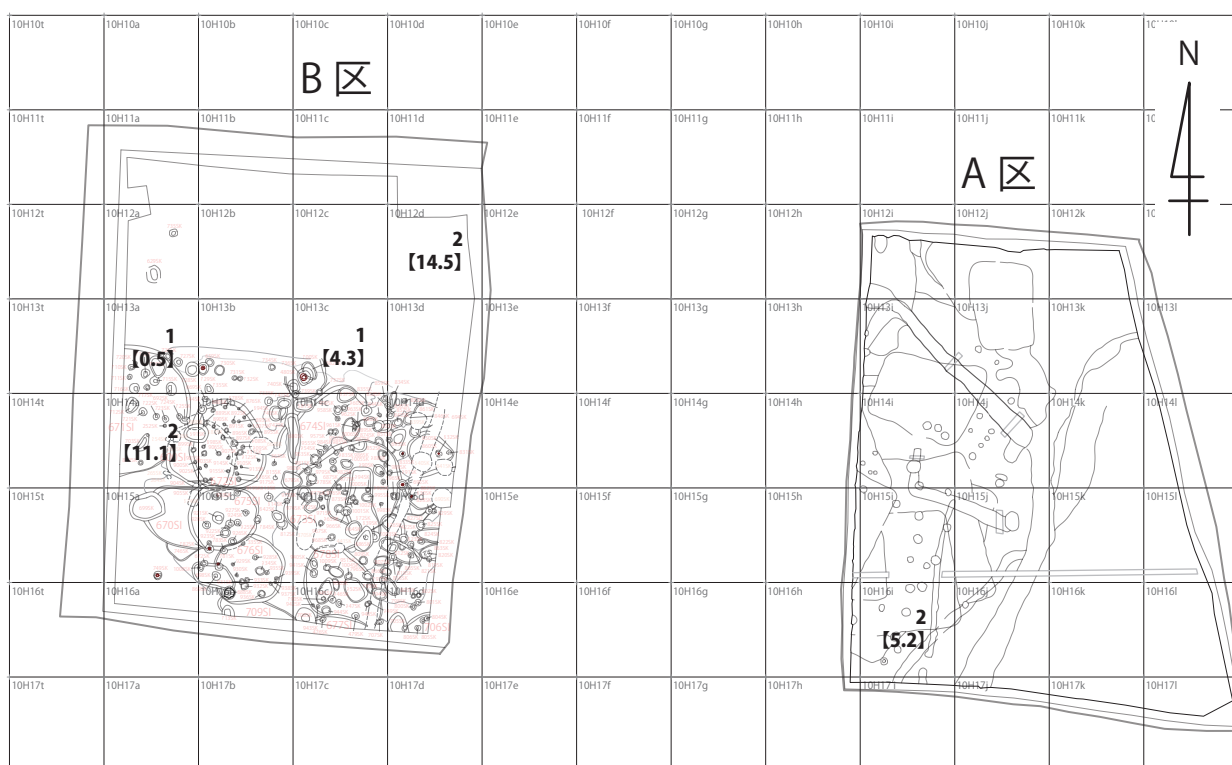


磨石敲石類
石皿台石類

図 3-6 1 期遺物出土分布図 -4 (1:400)



剥片石核(安山岩)
上段:点数、下段【 】総重量



剥片石核(黒曜石)
上段:点数、下段【 】総重量

図 3-7 1 期遺物出土分布図 -5 (1:400)

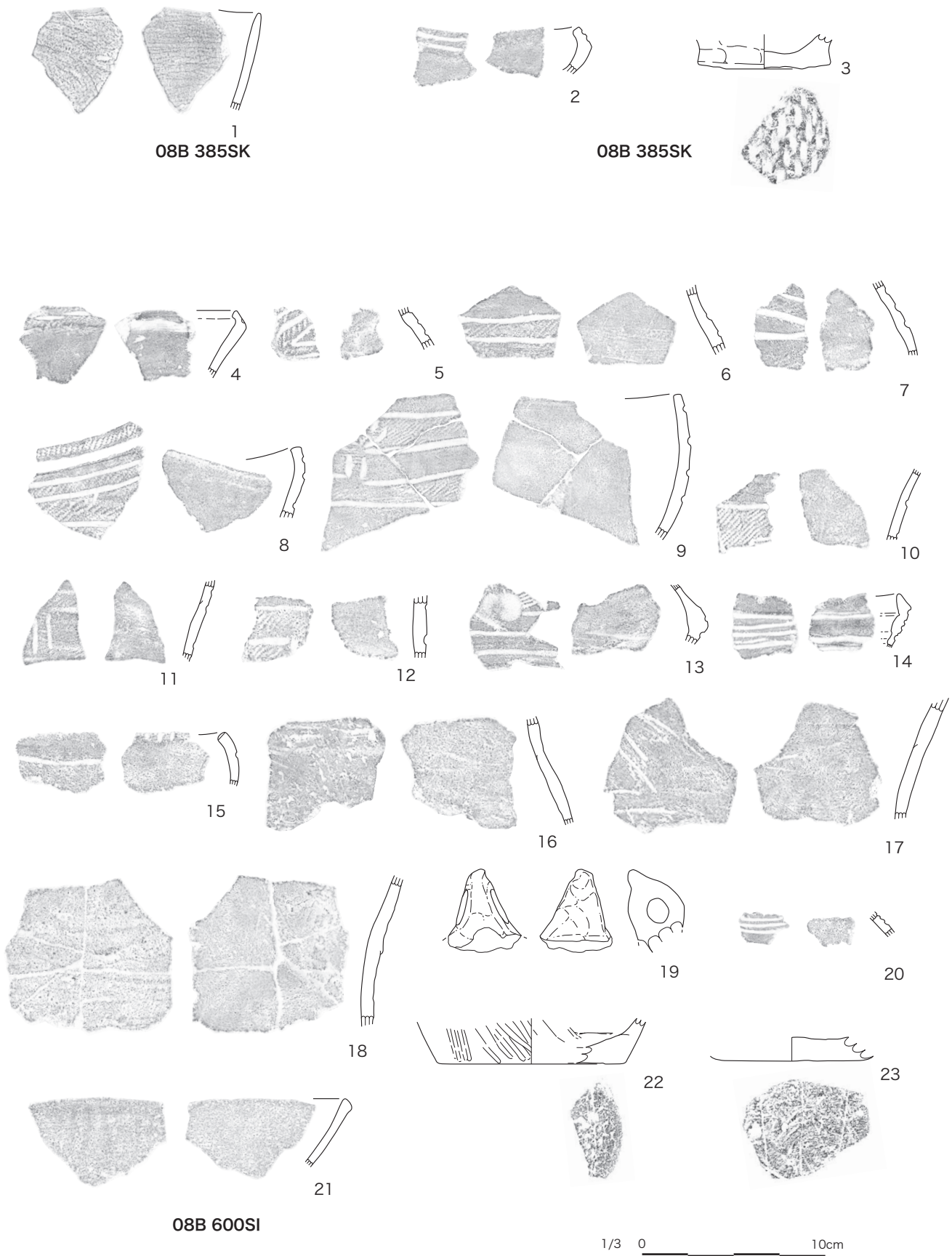


図 3-8 1 期 出土土器・土製品実測図-1 (1:3)

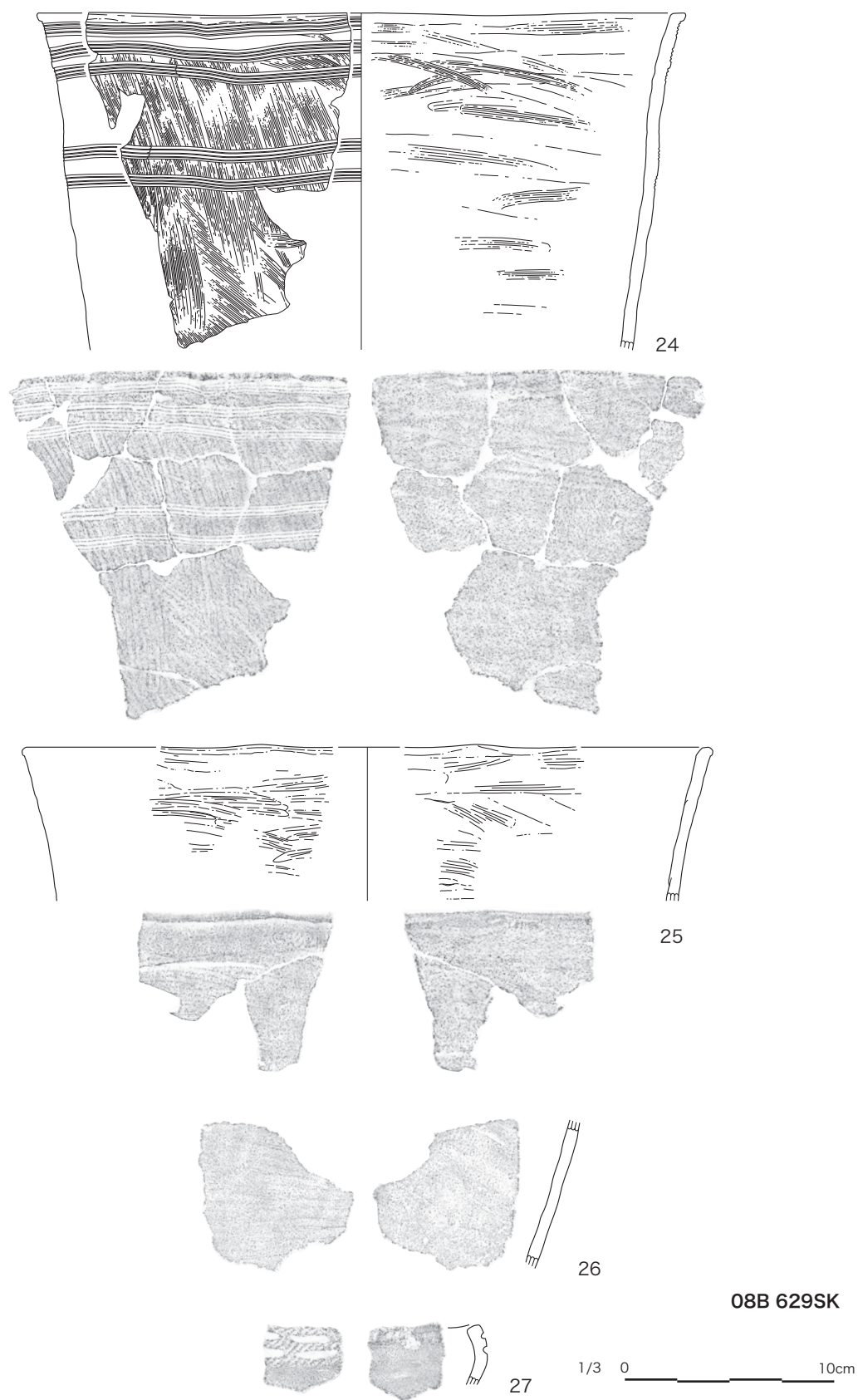


図 3-9 1 期 出土土器・土製品実測図 -2 (1:3)

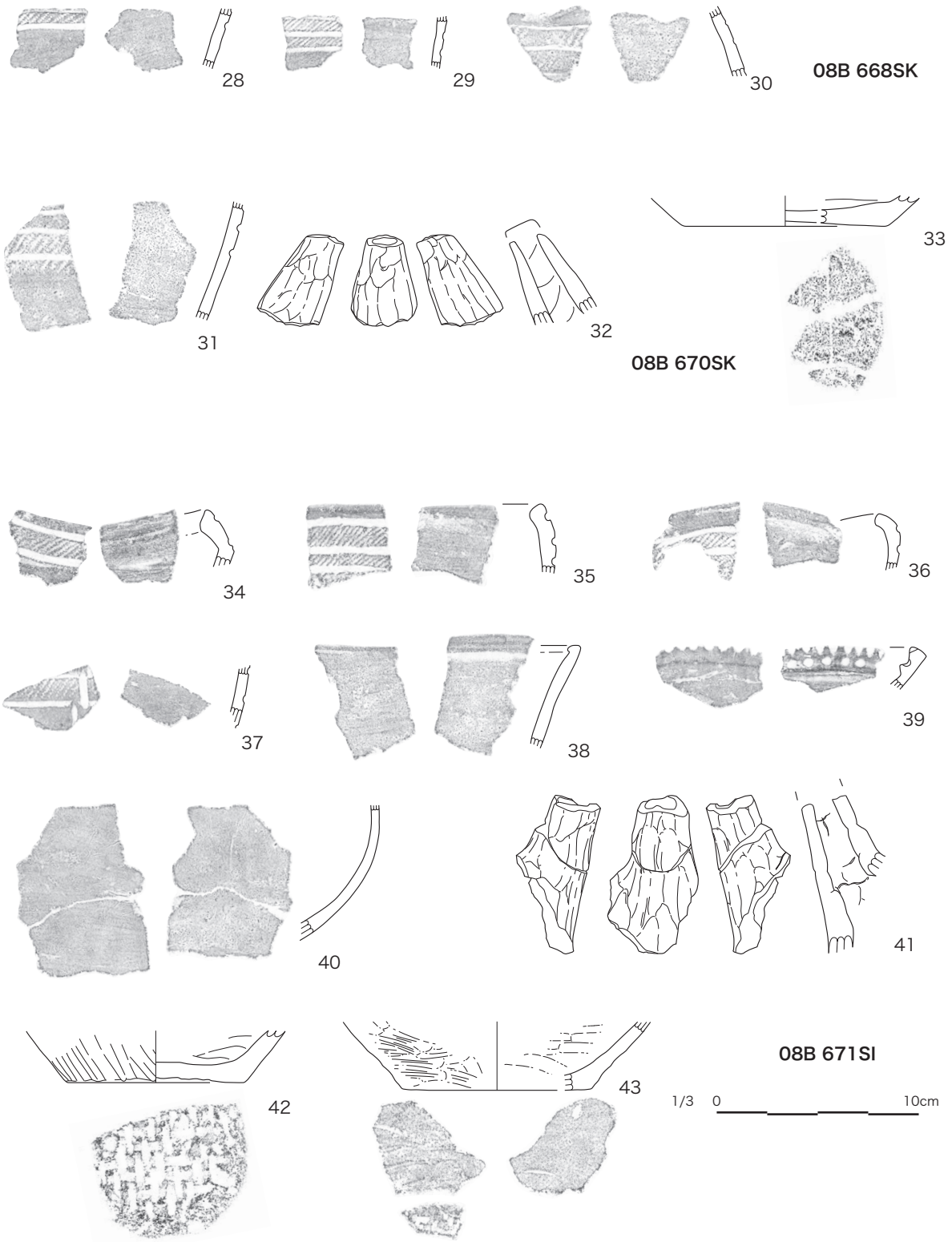


図 3-10 1 期 出土土器・土製品実測図 -3 (1:3)

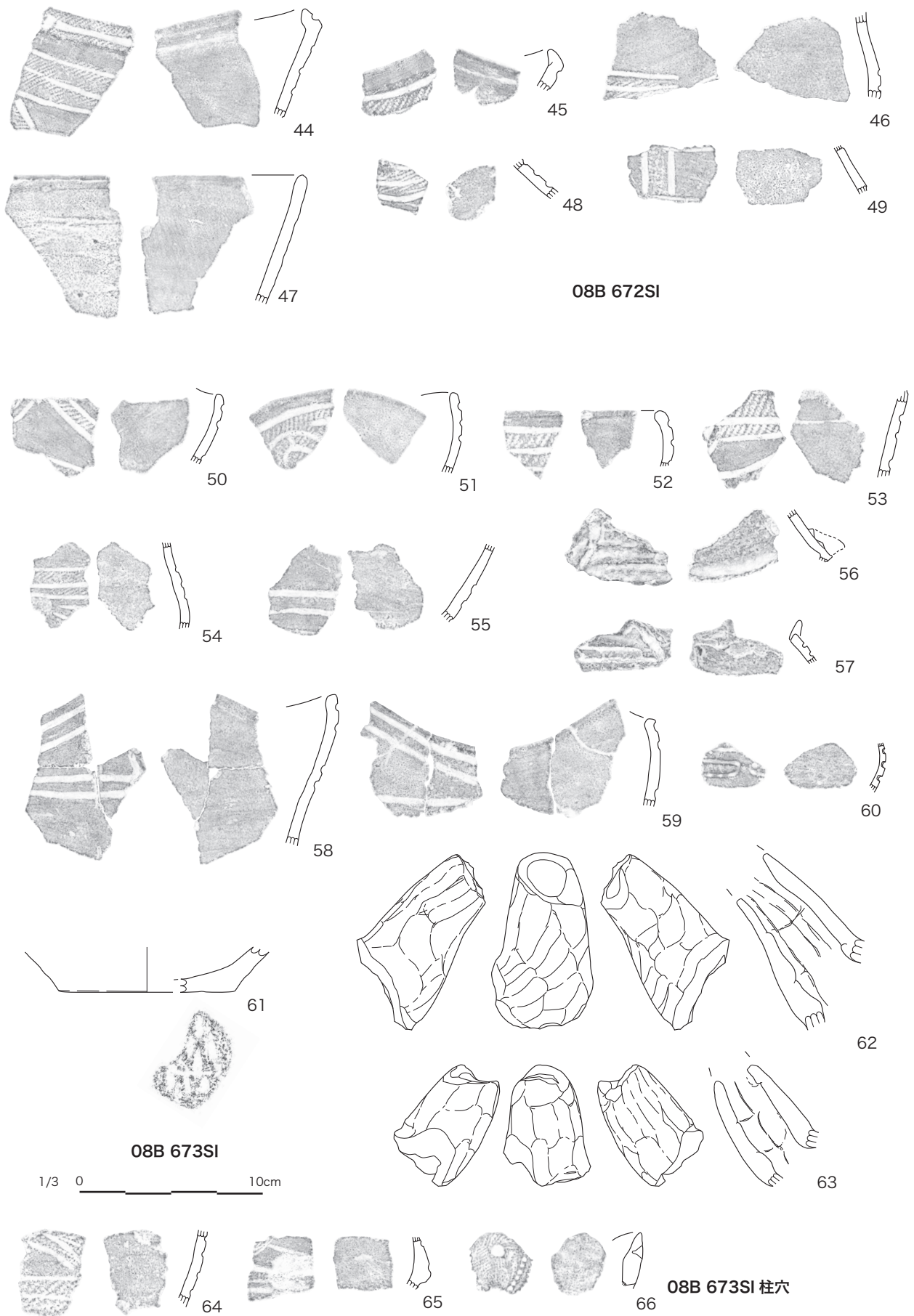


図 3-11 1 期 出土土器・土製品実測図-4 (1:3)

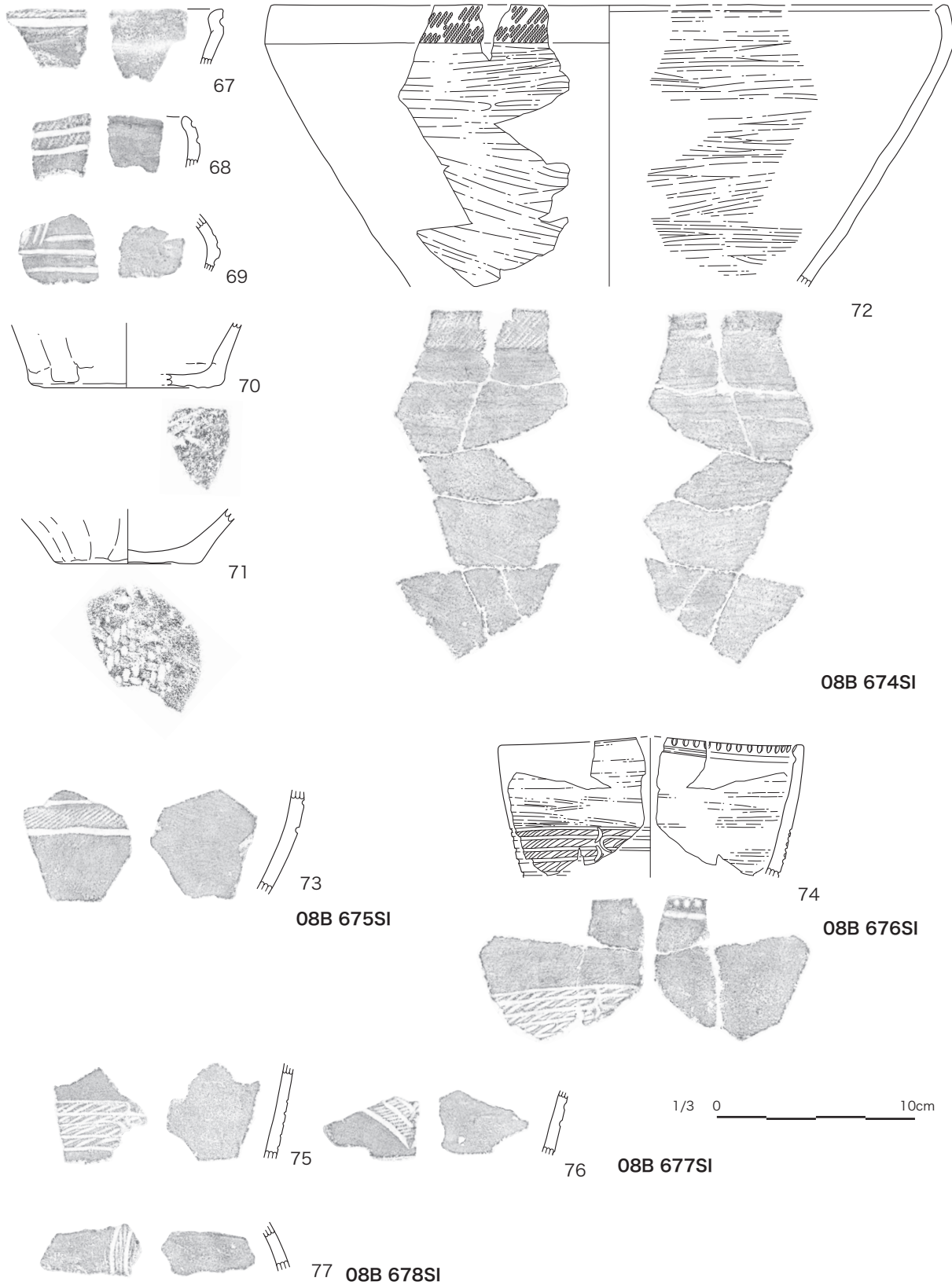


図 3-12 1 期 出土土器・土製品実測図 -5 (1:3)

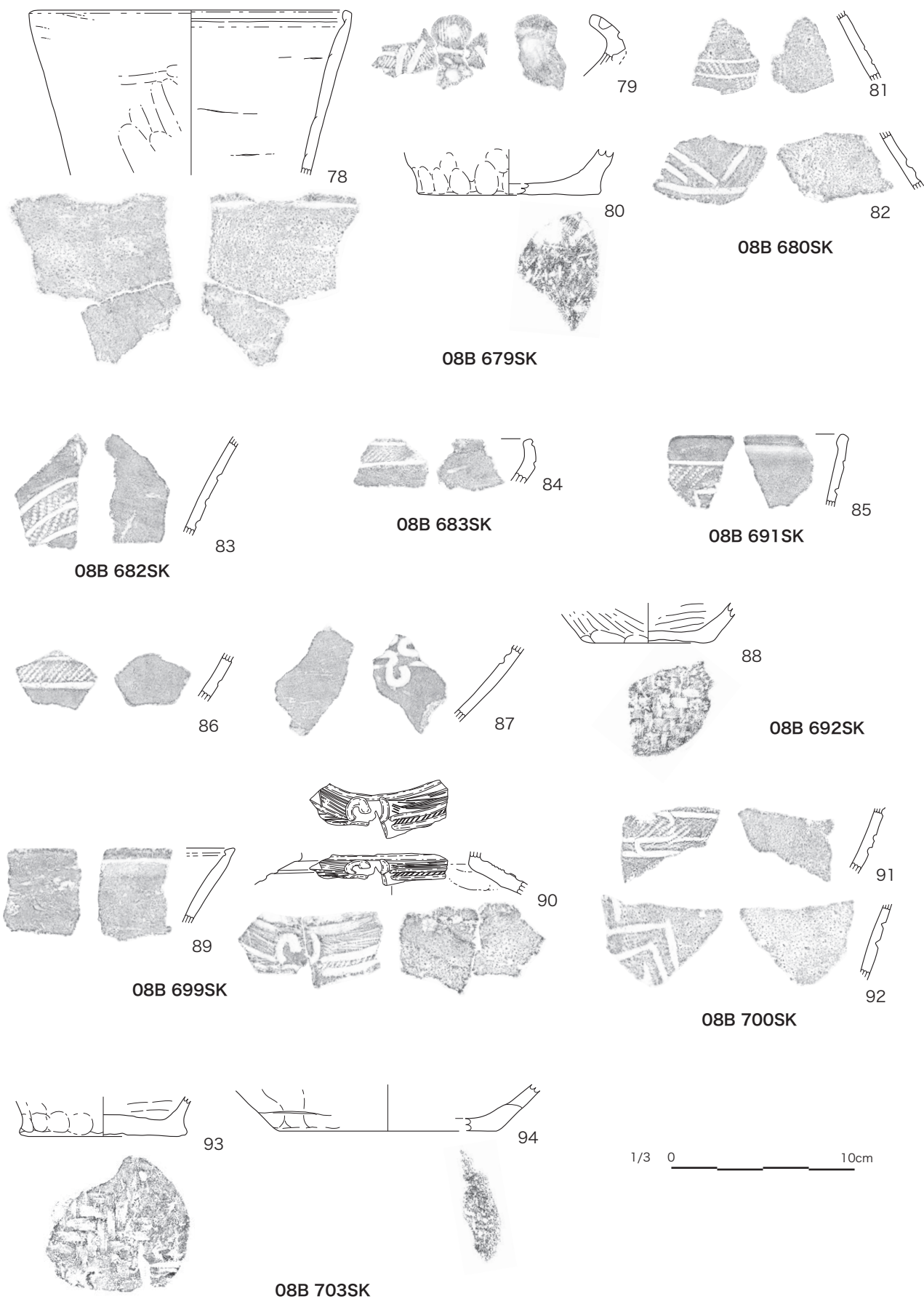


図3-13 1期出土土器・土製品実測図-6 (1:3)

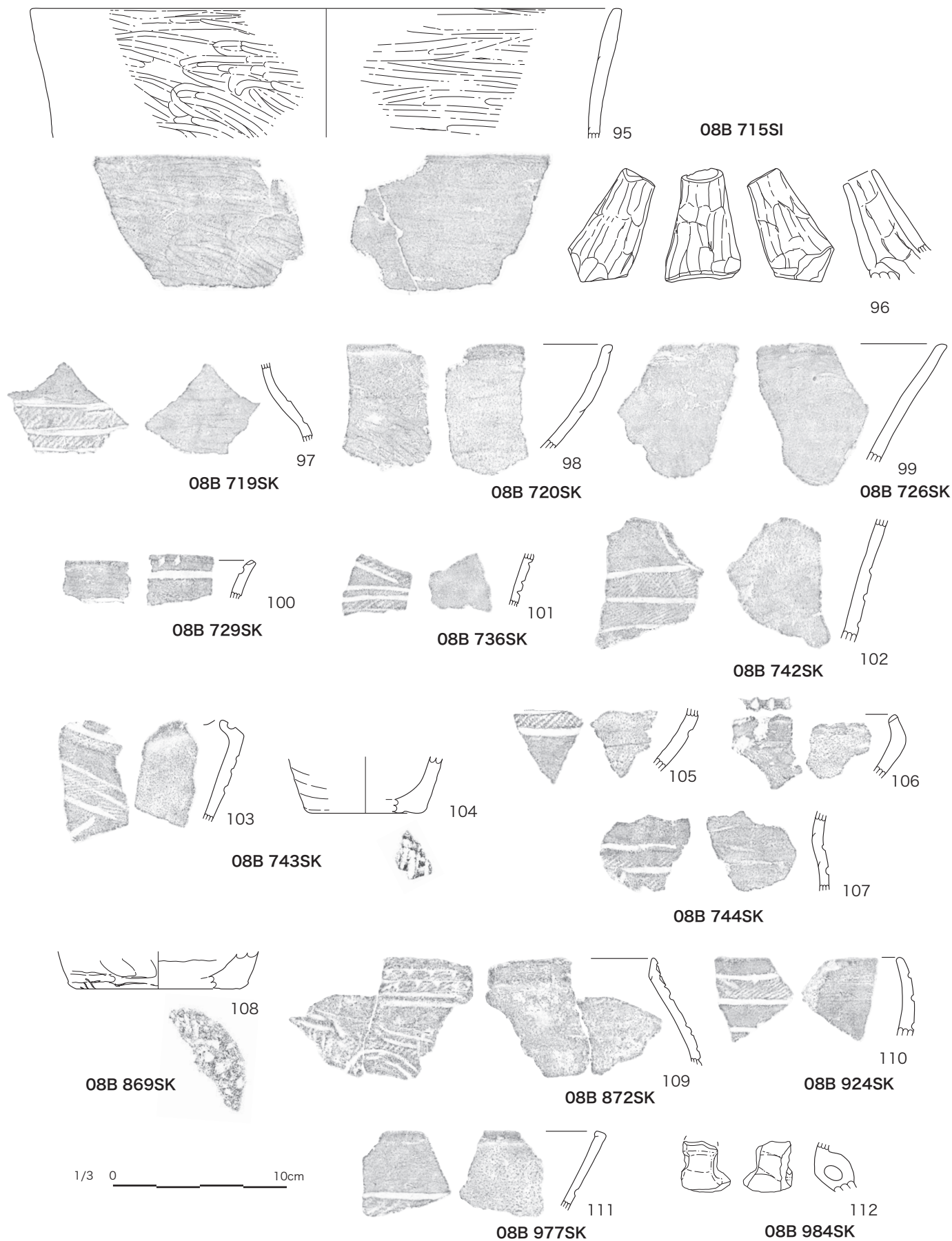


図 3-14 1 期 出土土器・土製品実測図 -7 (1:3)

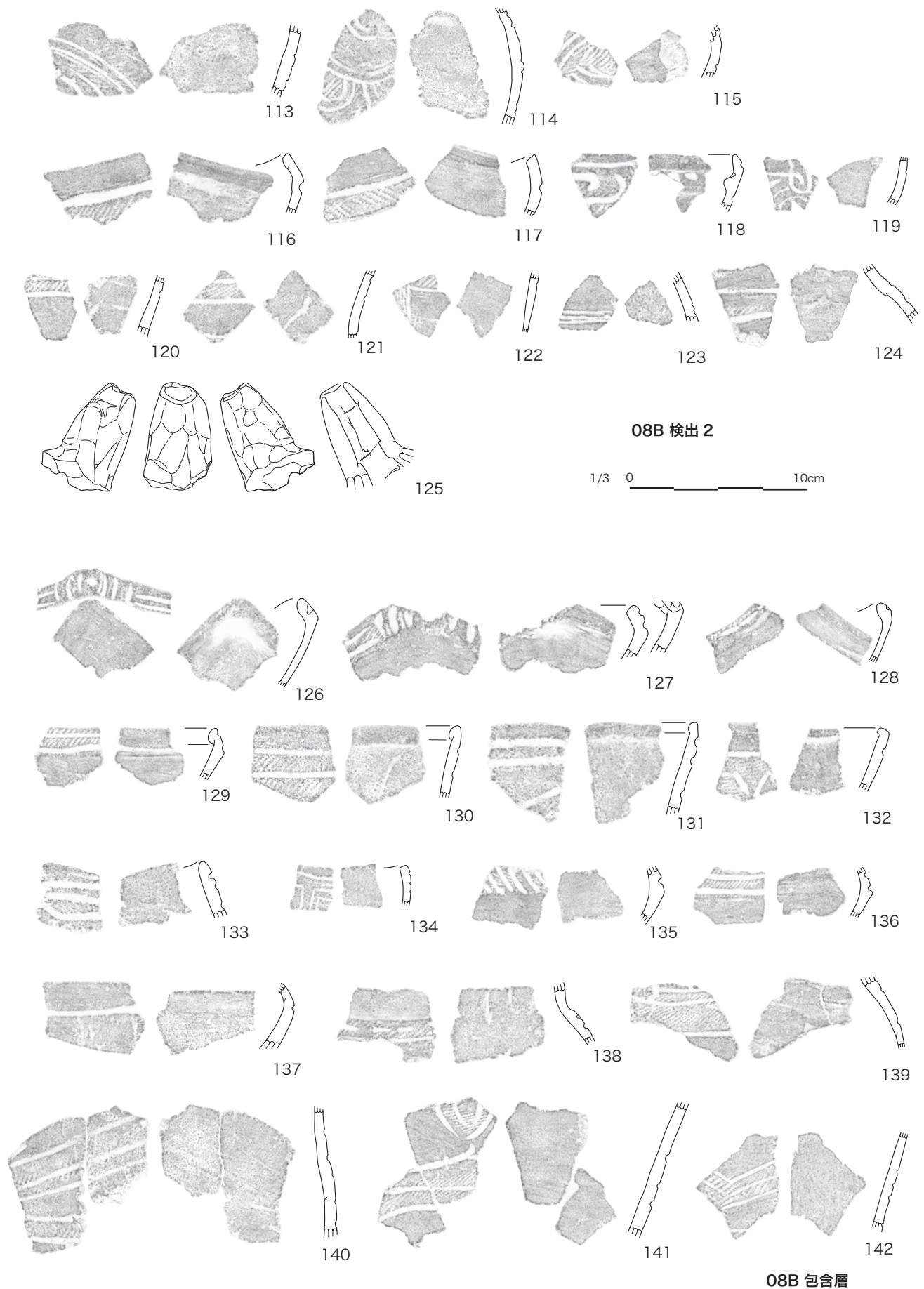


図3-15 1期 出土土器・土製品実測図-8 (1:3)

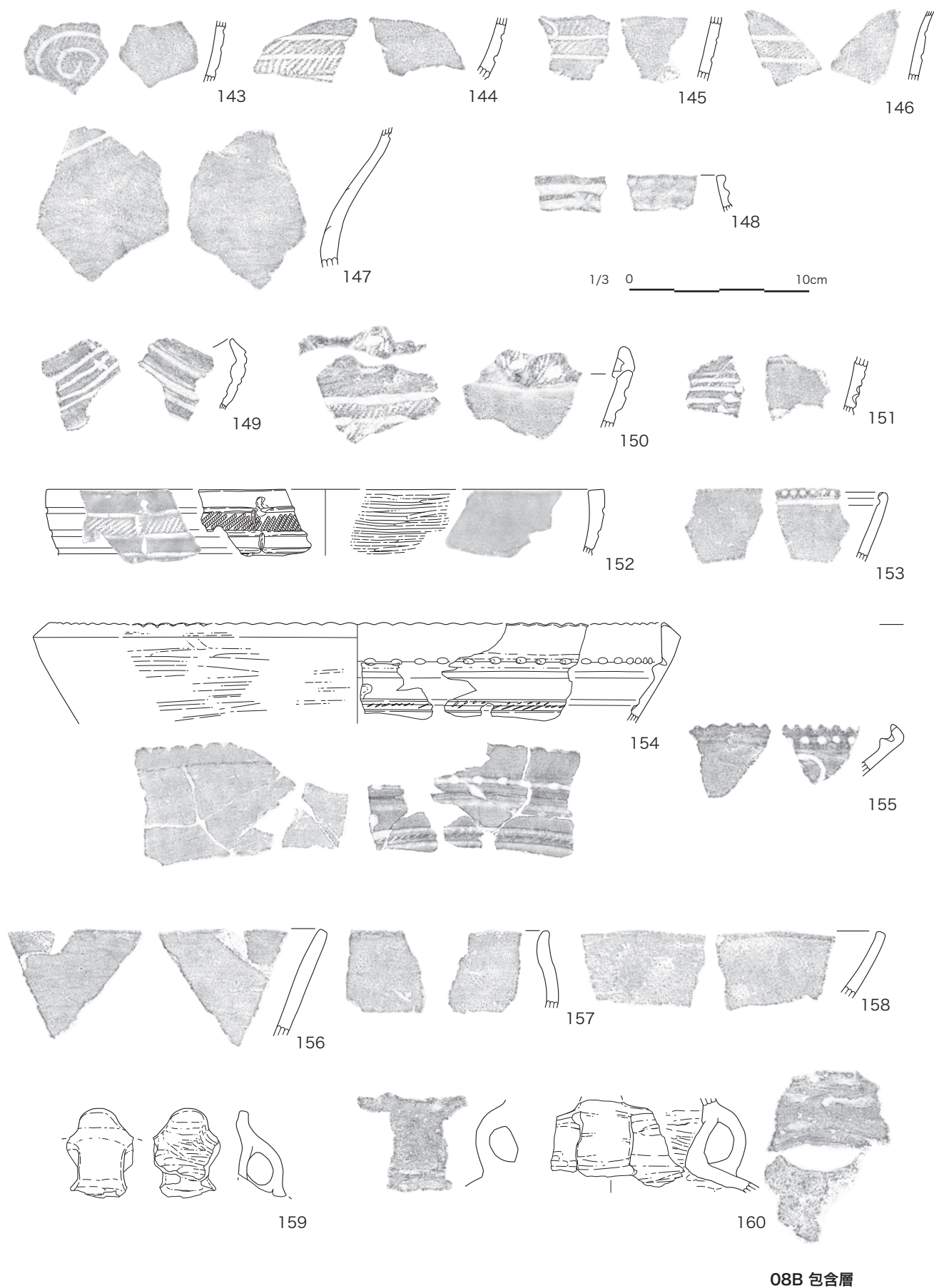


図 3-16 1 期 出土土器・土製品実測図-9 (1:3)

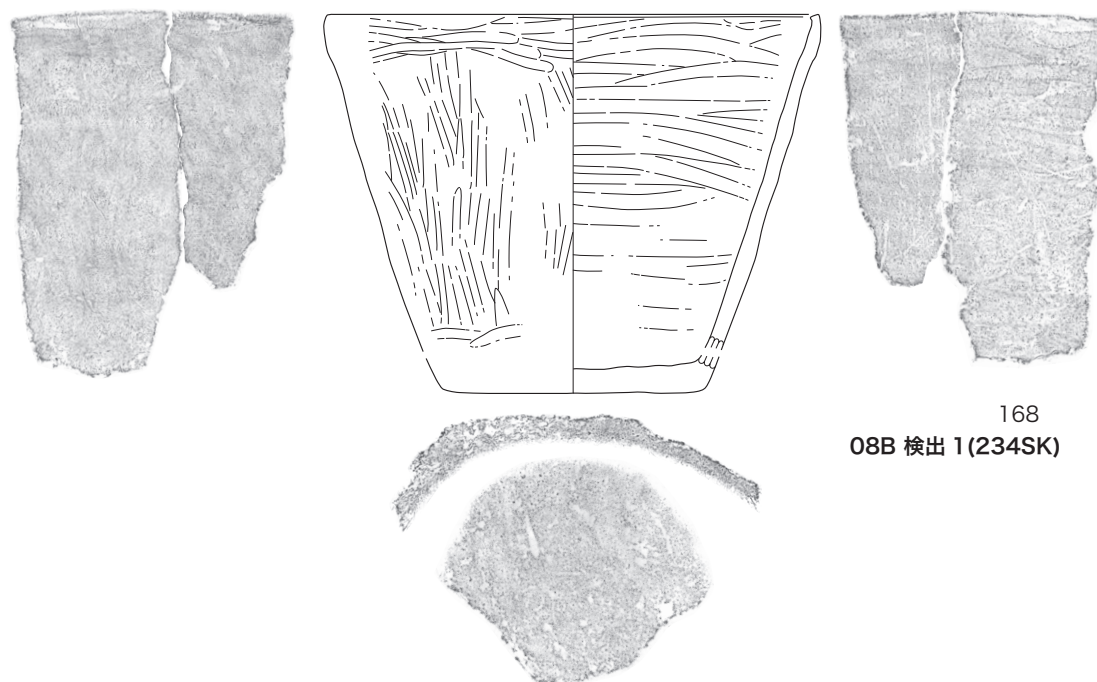
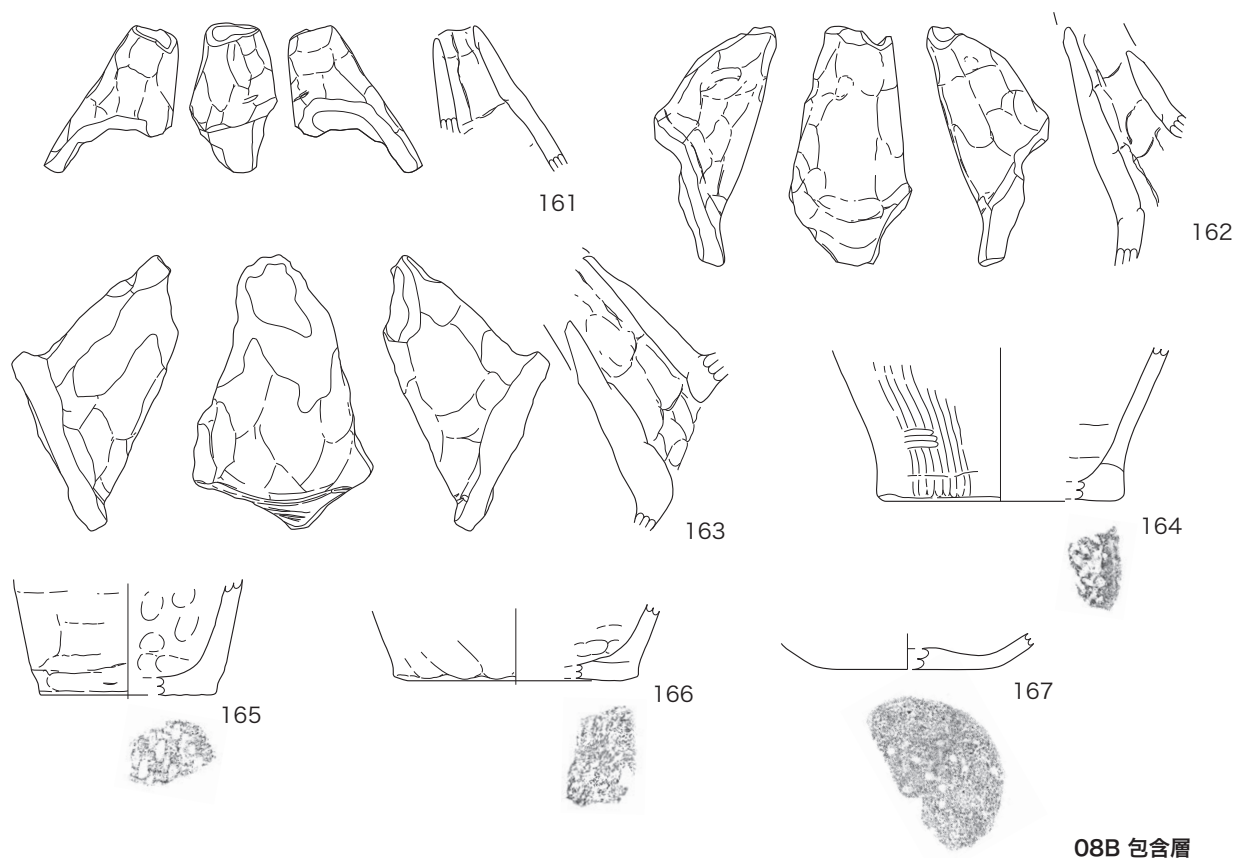
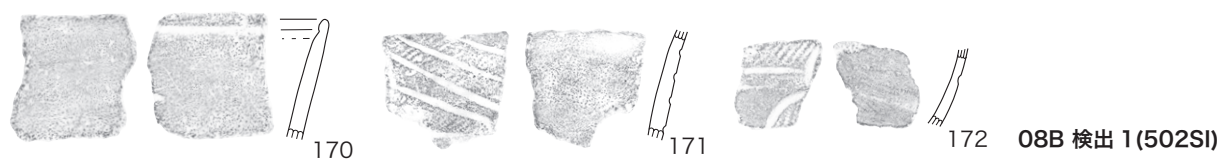
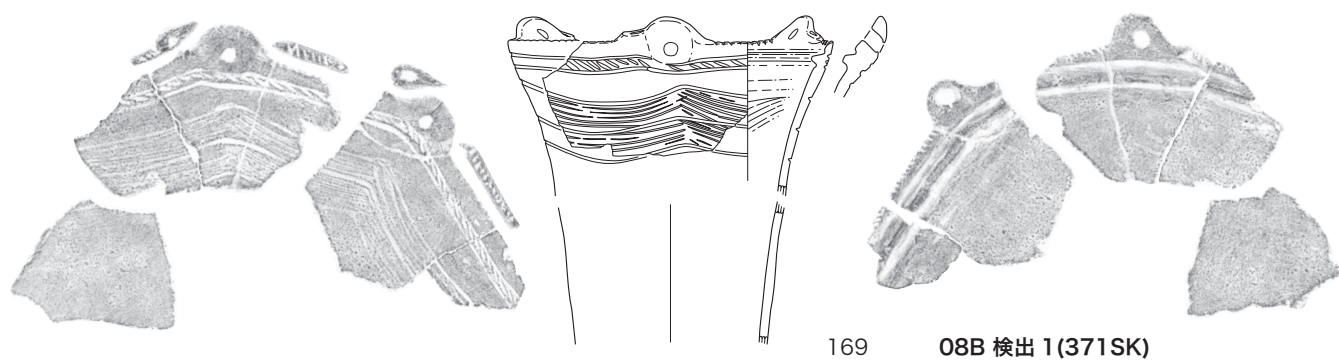


図 3-17 1期 出土土器・土製品実測図 -10 (1:3)



1/3 0 10cm

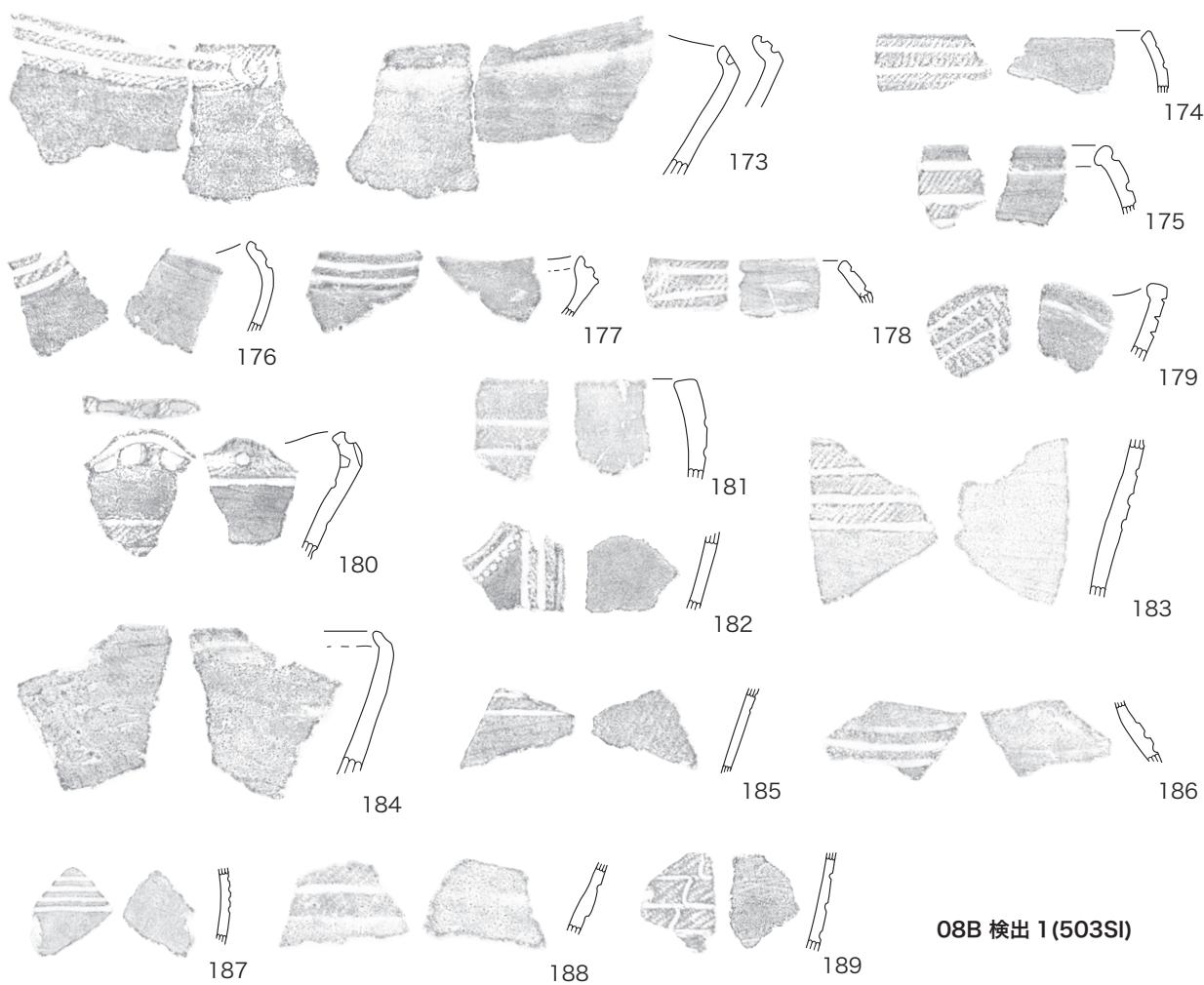


図 3-18 1 期 出土土器・土製品実測図 -11 (1:3)

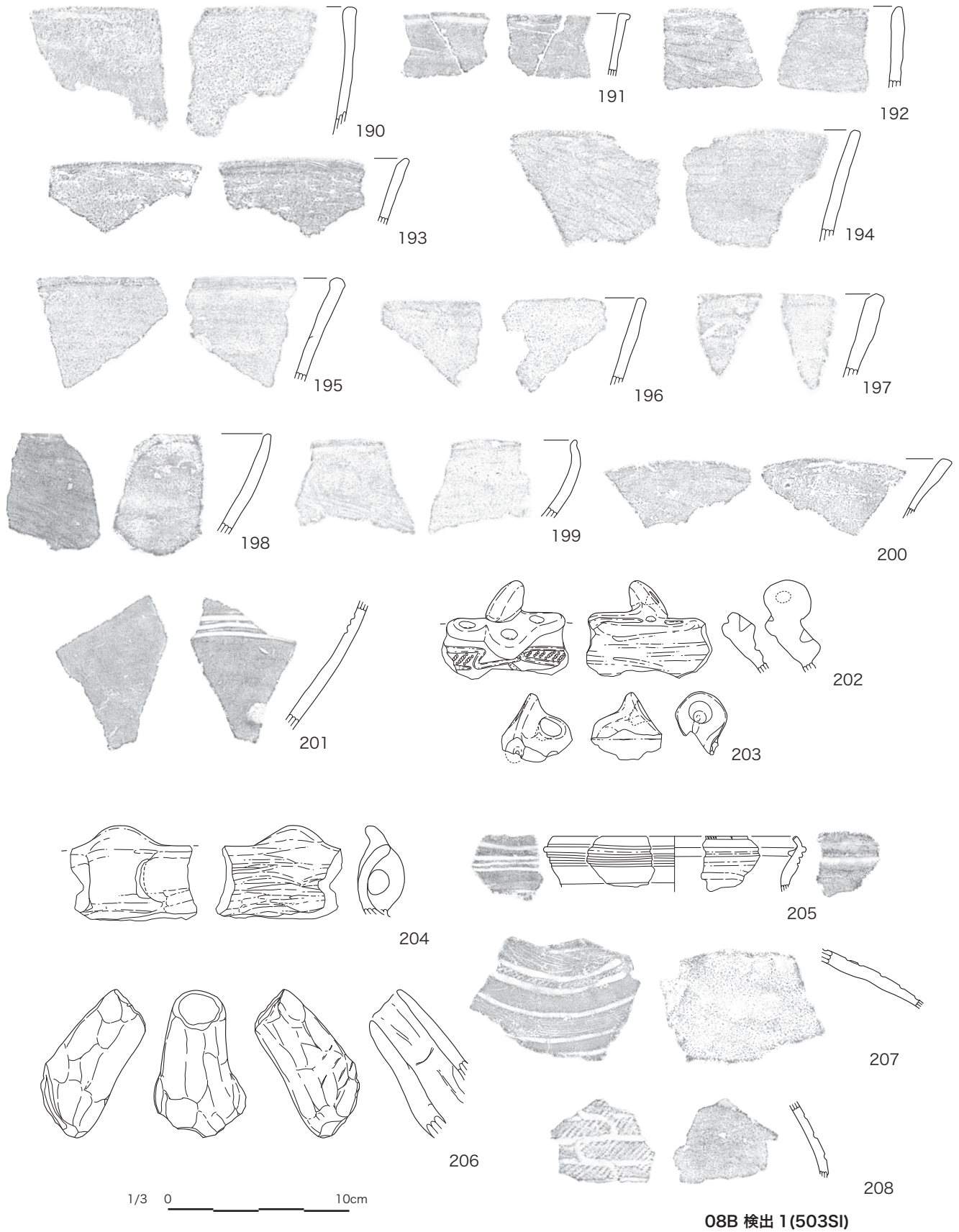


図 3-19 1 期 出土土器・土製品実測図 -12 (1:3)

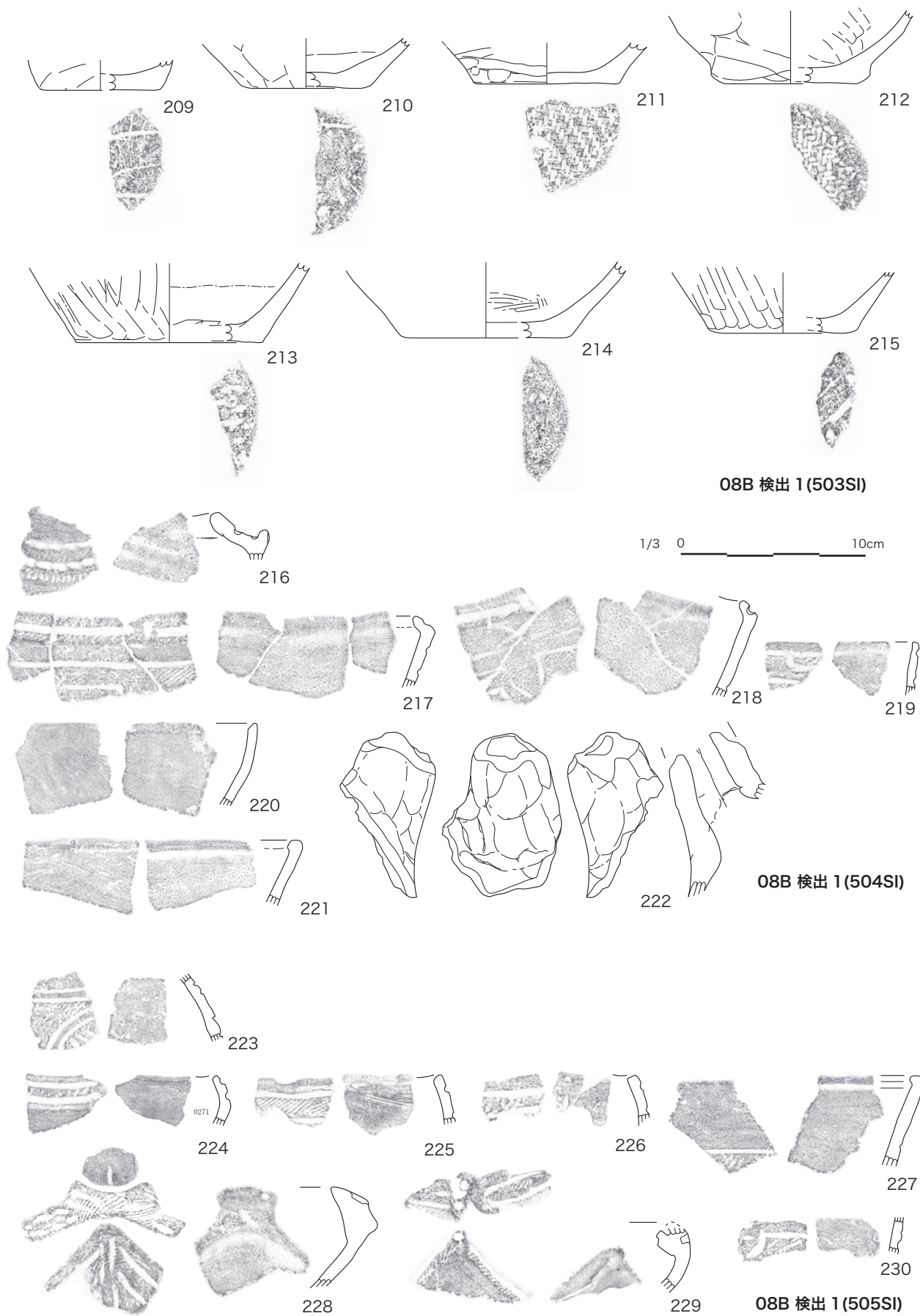


図 3-20 1 期 出土土器・土製品実測図 -13 (1:3)

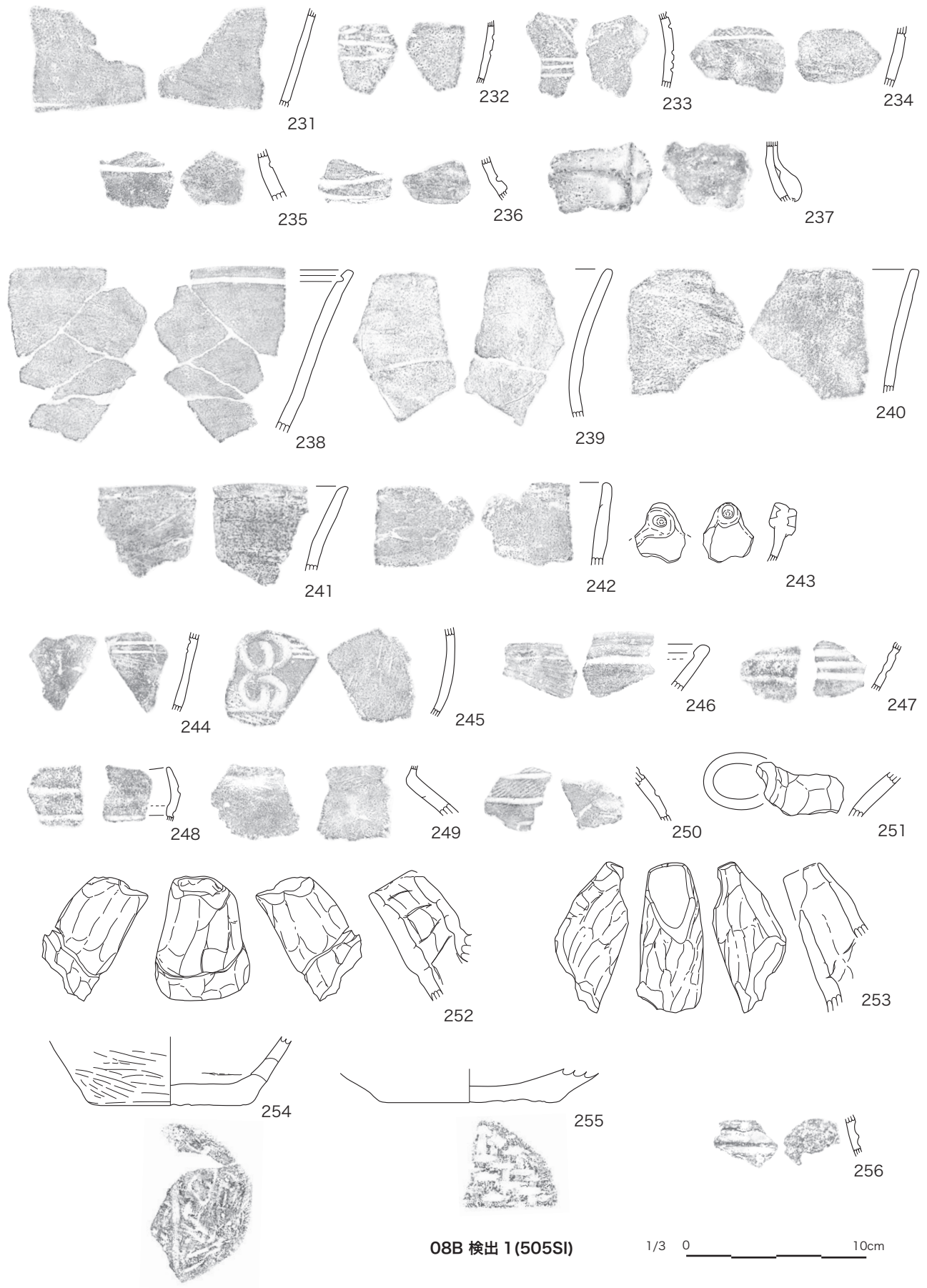


図 3-21 1 期 出土土器・土製品実測図 -14 (1:3)

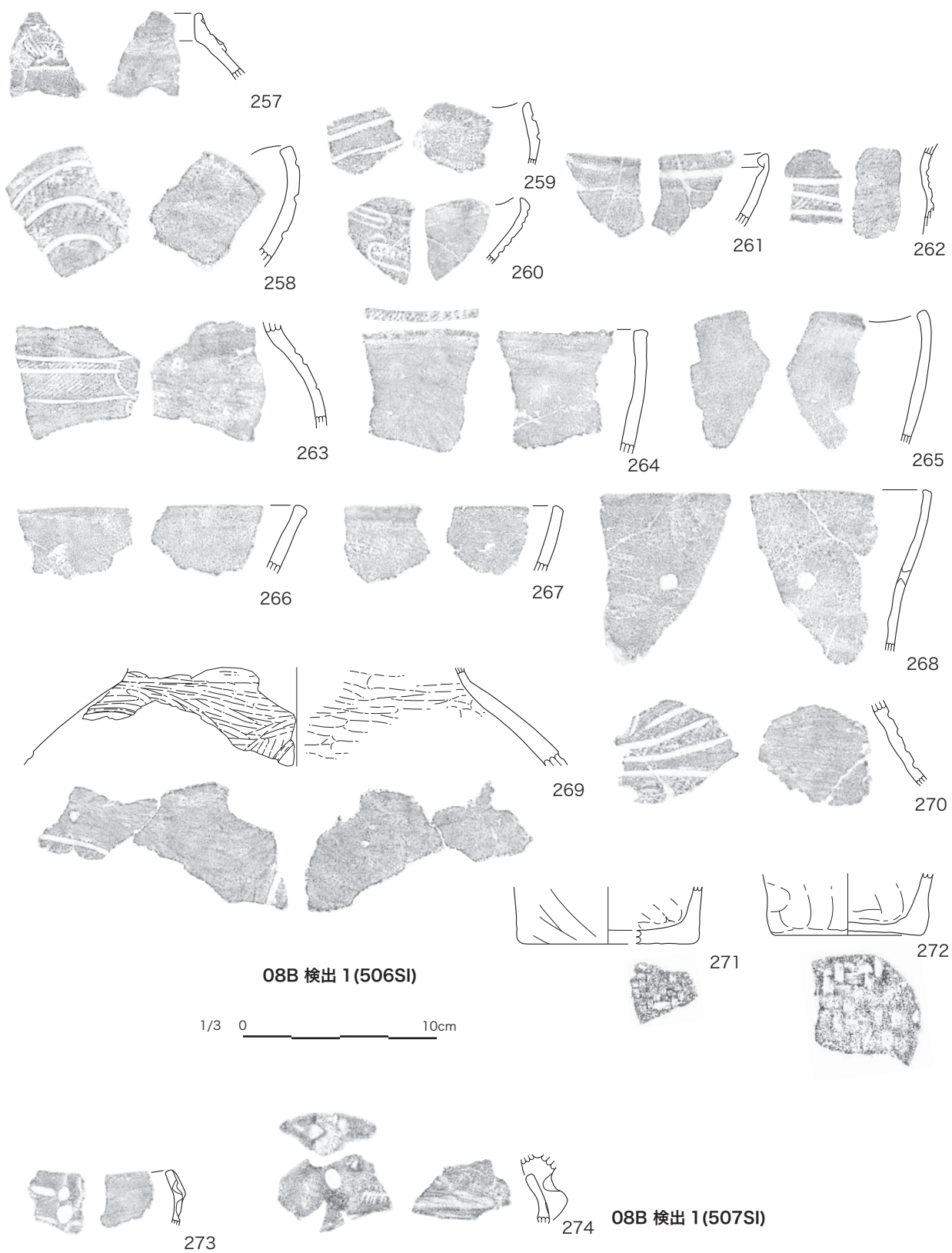


図 3-22 1 期 出土土器・土製品実測図 -15 (1:3)

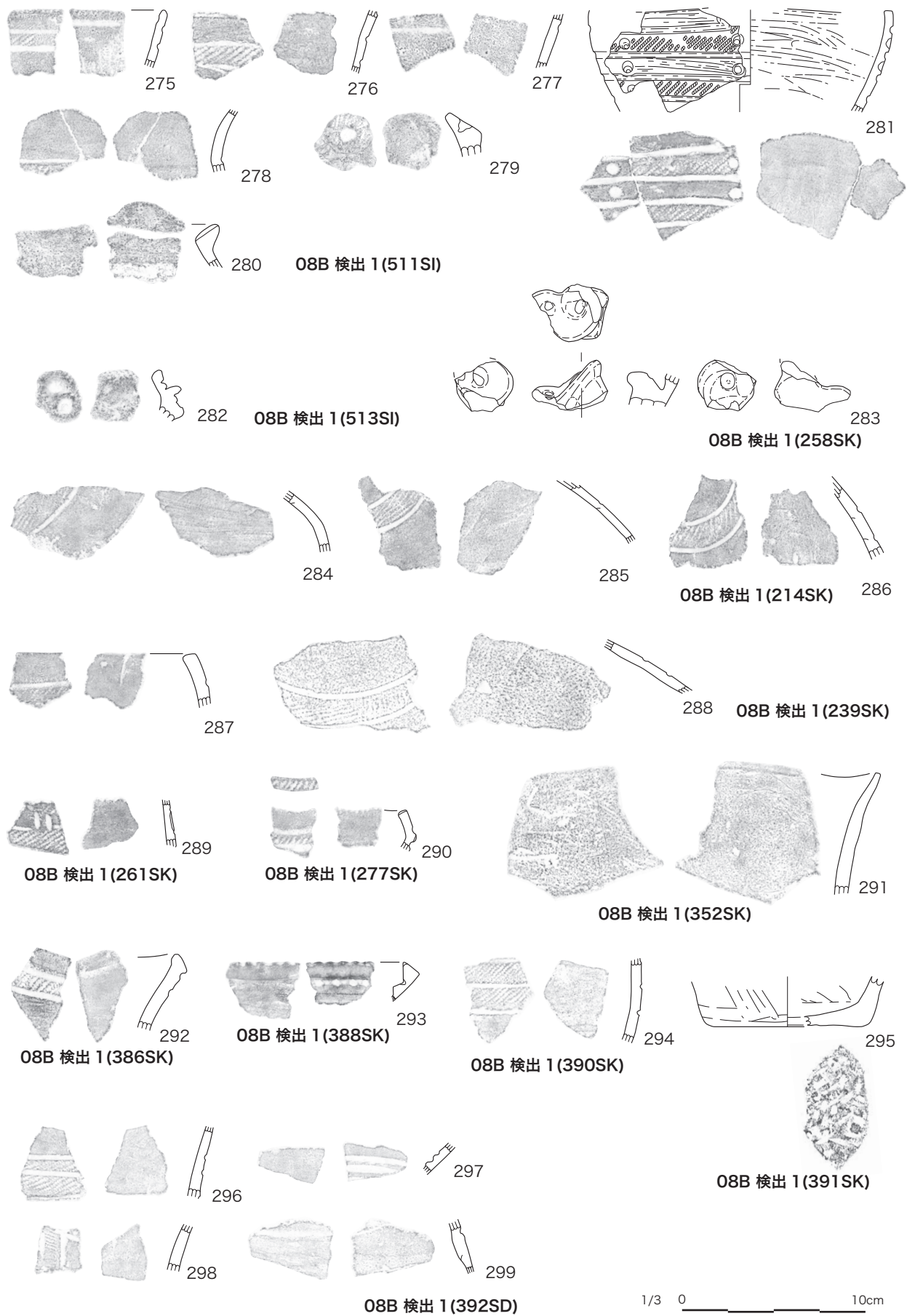


図 3-23 1 期 出土土器・土製品実測図 -16 (1:3)

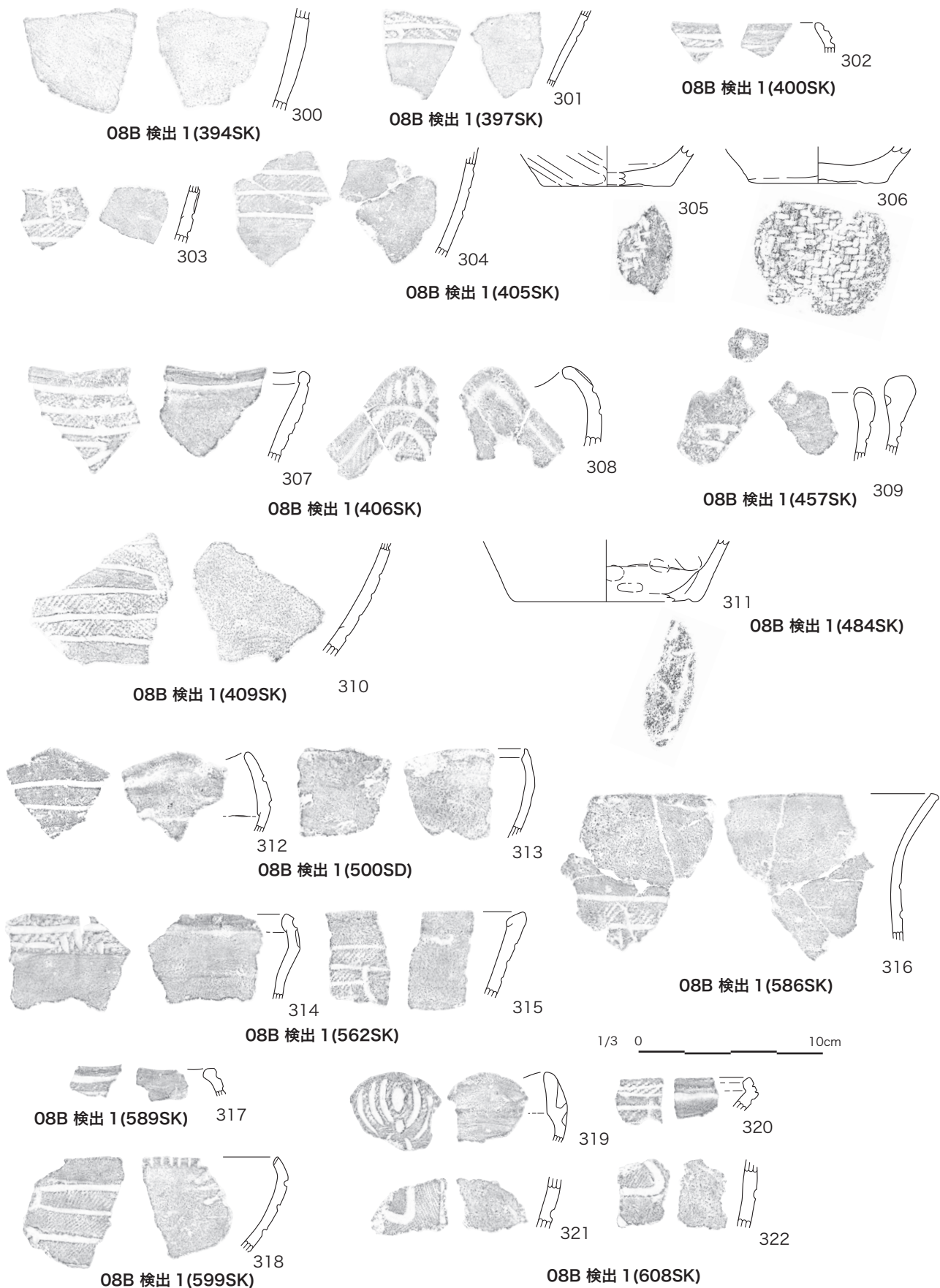


図 3-24 1 期 出土土器・土製品実測図 -17 (1:3)

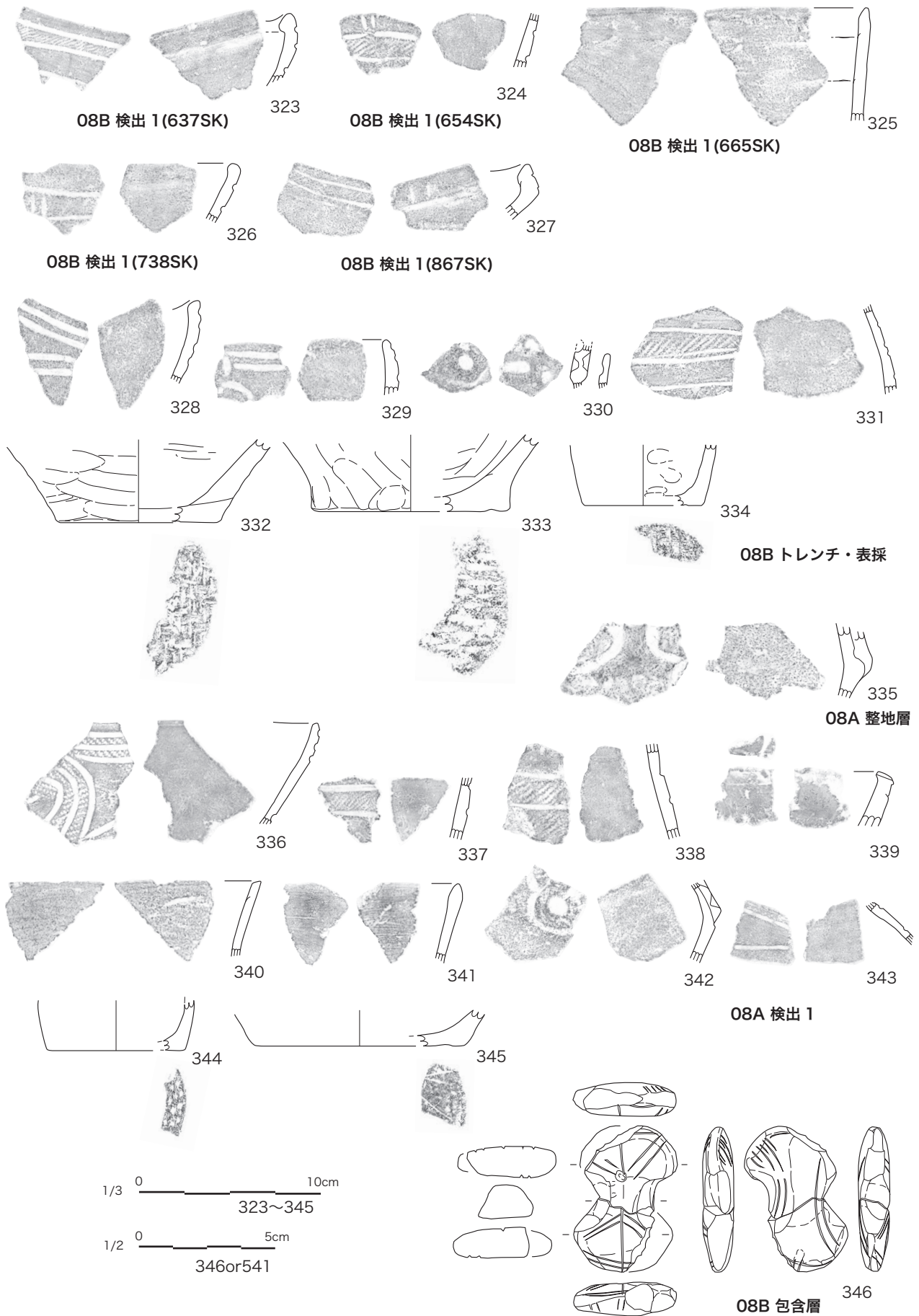
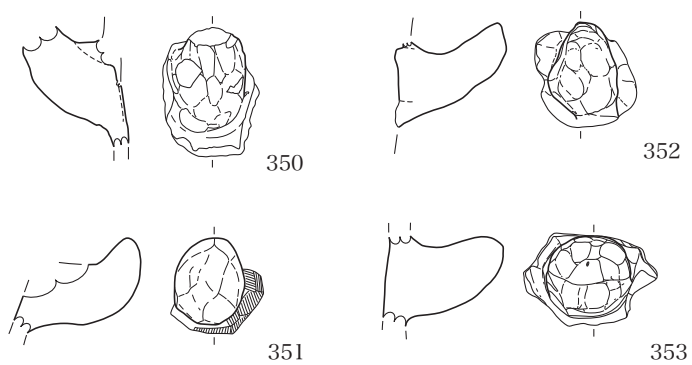
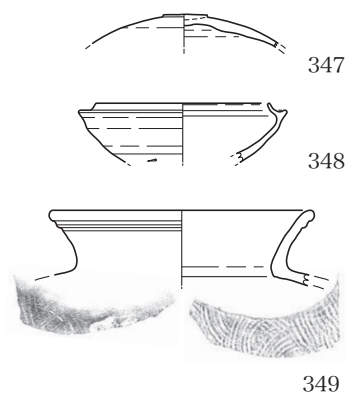
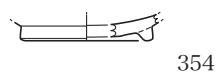


図 3-25 1 期 出土土器・土製品実測図-18 (1:2/1:3)

A 区 -001SD (110SD)



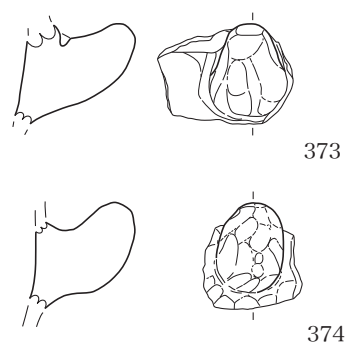
A 区 -002SD



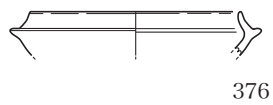
A 区 -032SI



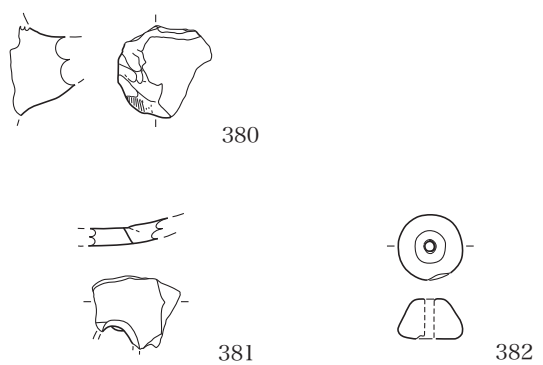
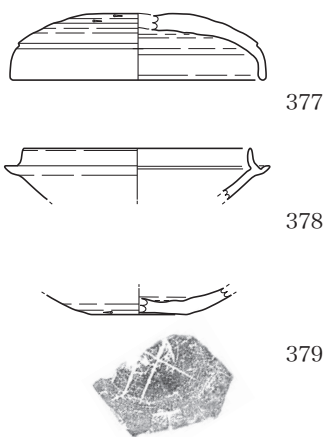
A 区 -030SK



A 区 -036SI



A 区 -046NR



1/4 0 20cm

図 3-26 3 期 出土土器・土製品実測図 -1 (1:4)

A区-003SD

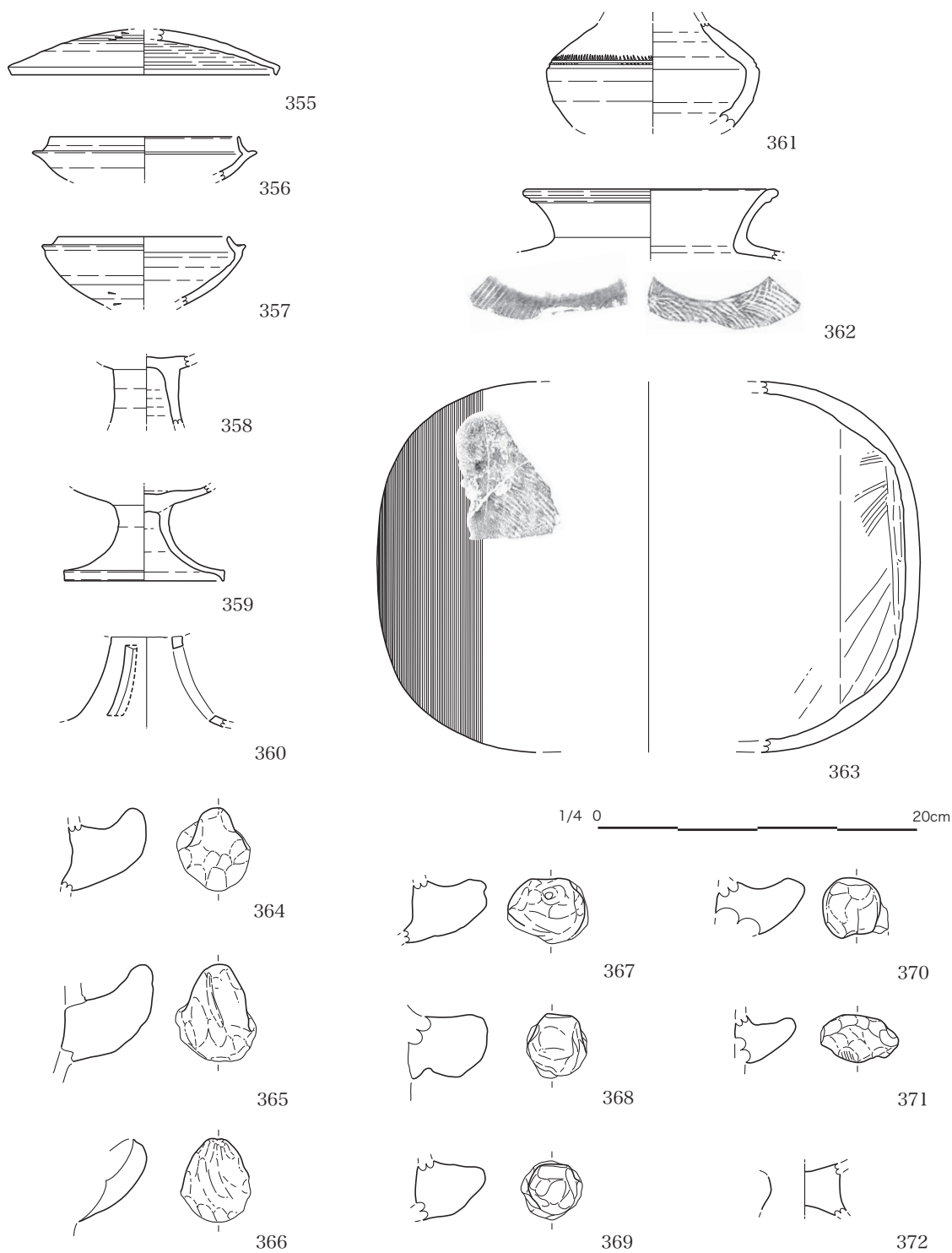
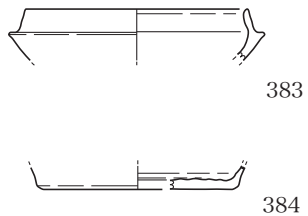


図 3-27 3期 出土土器・土製品実測図-2 (1:4)

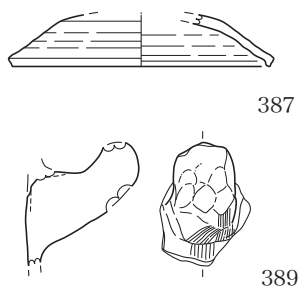
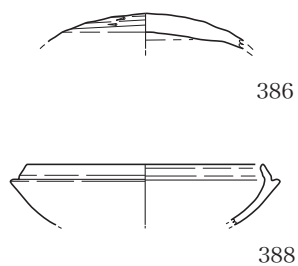
A 区 -086SD



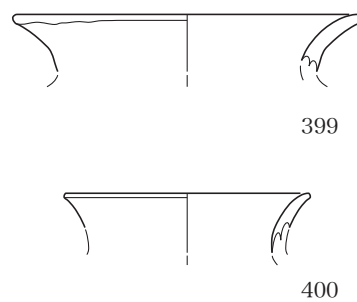
A 区 -095SI



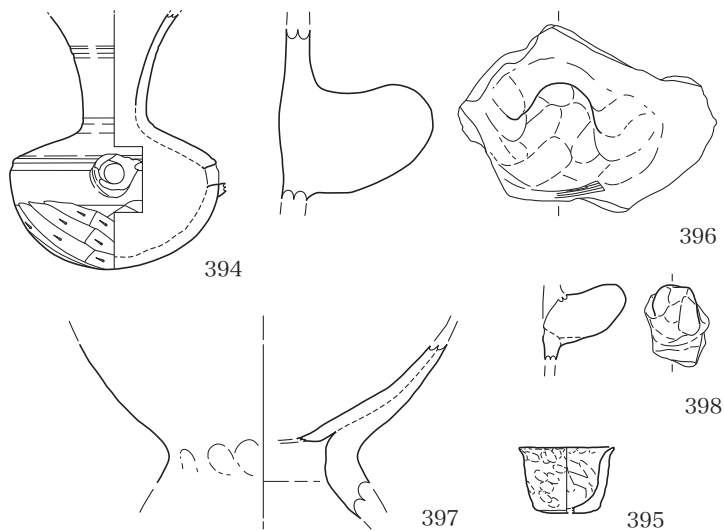
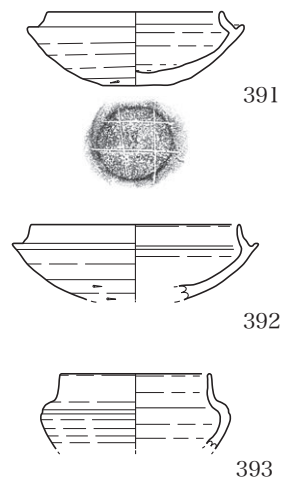
A 区 -093SD



A 区 -110SD



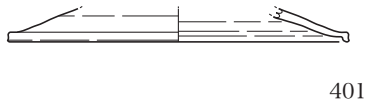
A 区 -101SD



1/4 0 20cm

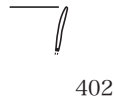
図 3-28 3 期 出土土器・土製品実測図 -3 (1:4)

B 区 -205SK



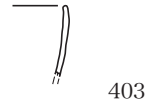
401

B 区 -245SK



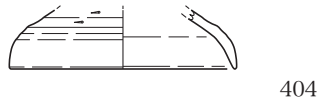
402

B 区 -250SK



403

B 区 -278SK

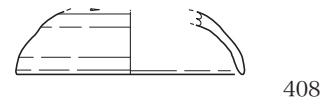


404



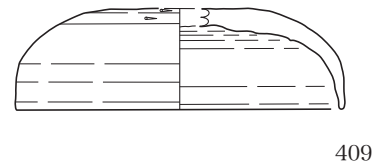
405

B 区 -368SK



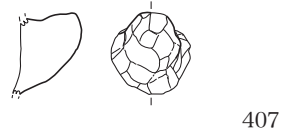
408

B 区 -432SK



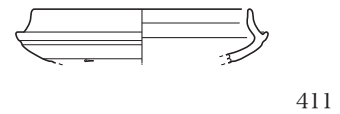
409

B 区 -337SK



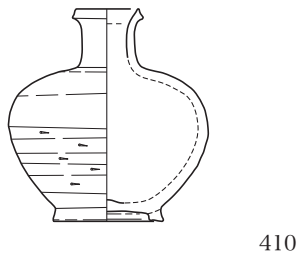
407

B 区 -457SK



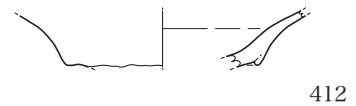
411

B 区 -433SK (650SB 柱穴)



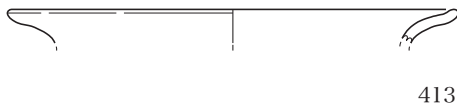
410

B 区 -500SD



412

B 区 -596SK

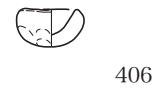


413

B 区 -320SK

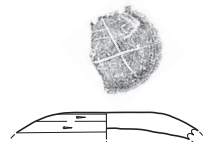


414



406

B 区 -671SI



416

B 区 -616SK



415

1/4 0 20cm

図 3-29 3 期 出土土器・土製品実測図 -4 (1:4)

B 区包含層（整地層）

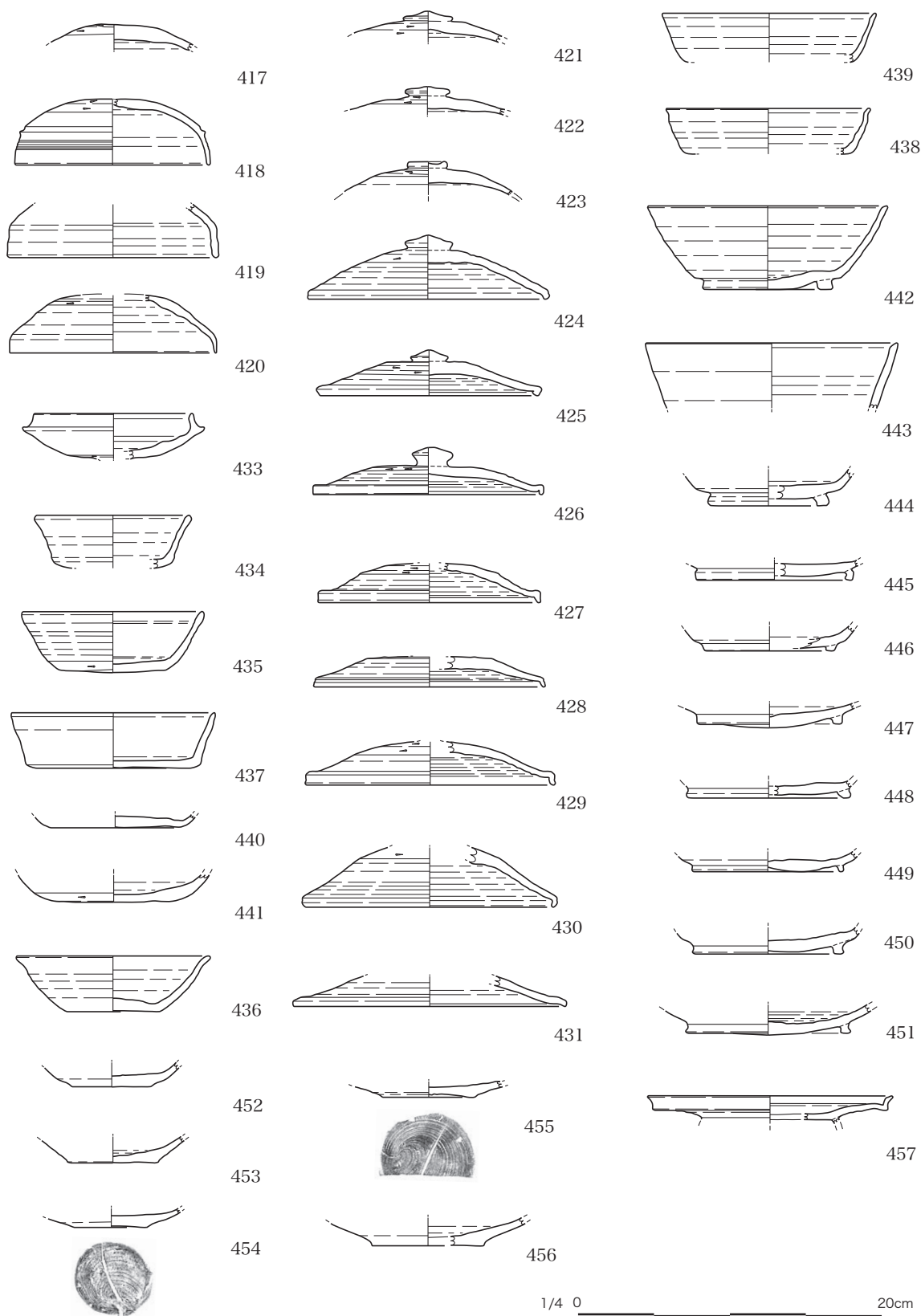


図 3-30 3 期 出土土器・土製品実測図-5 (1:4)

B区包含層（整地層）

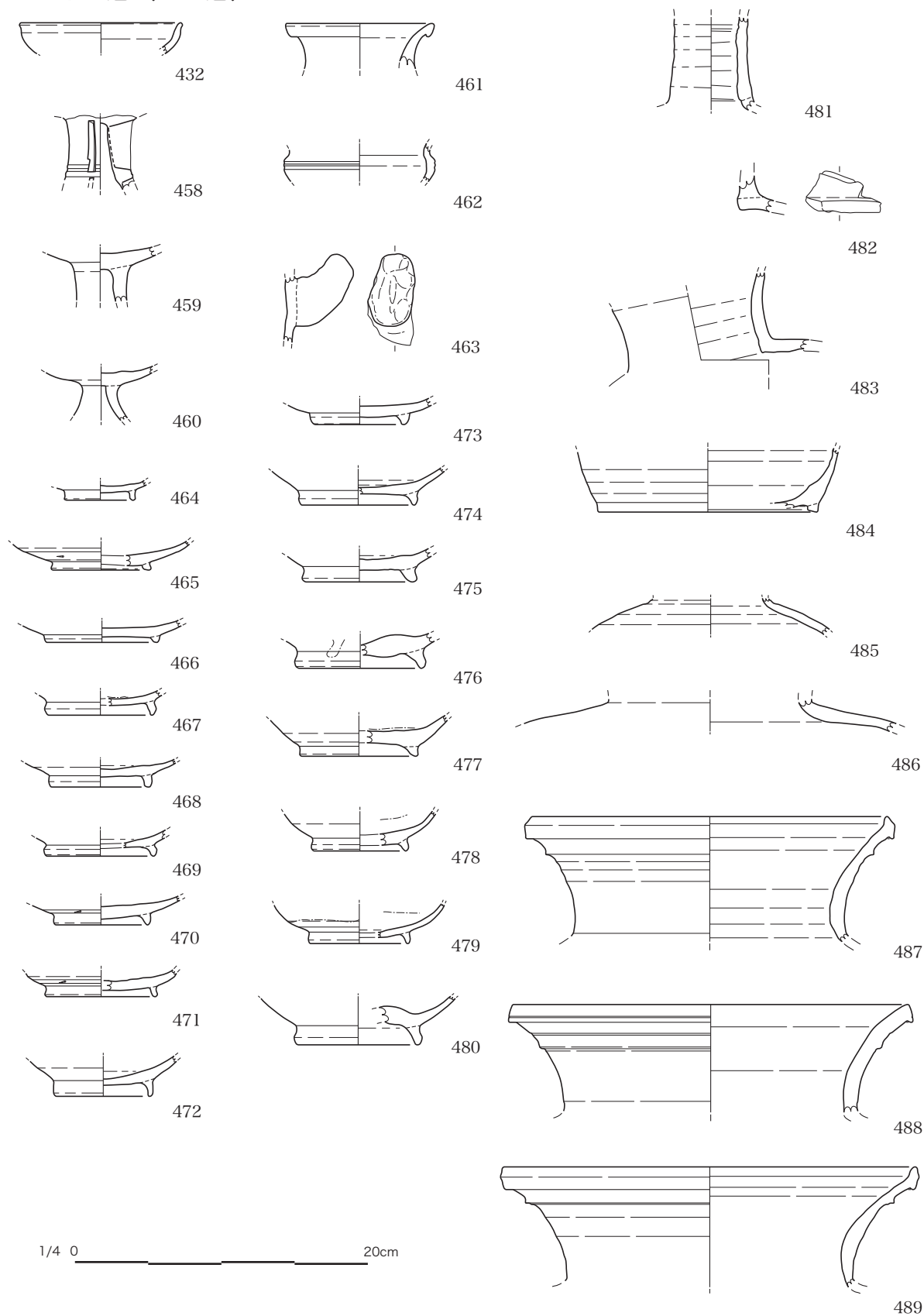


図3-31 3期出土土器・土製品実測図-6 (1:4)

B 区包含層（整地層）

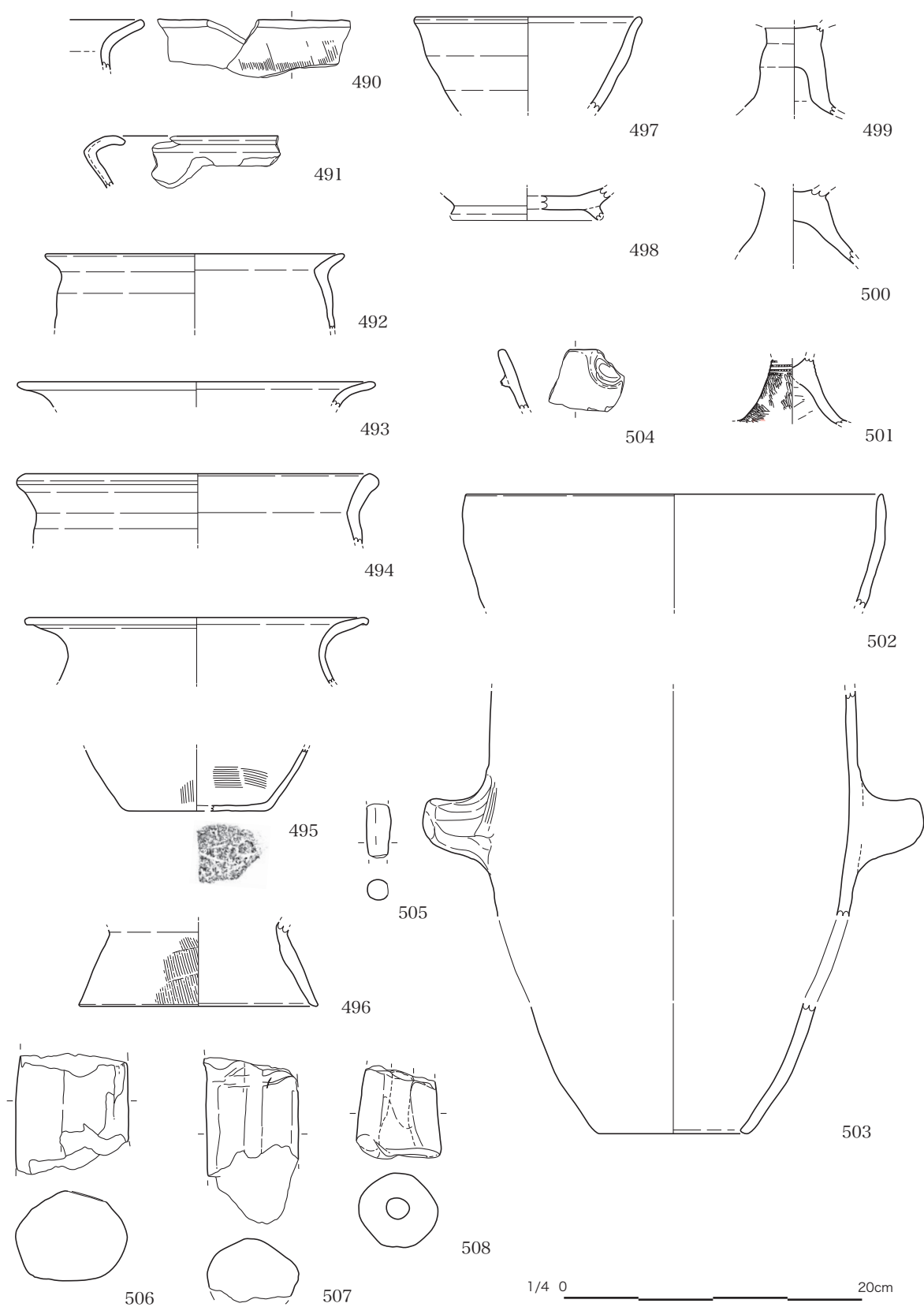
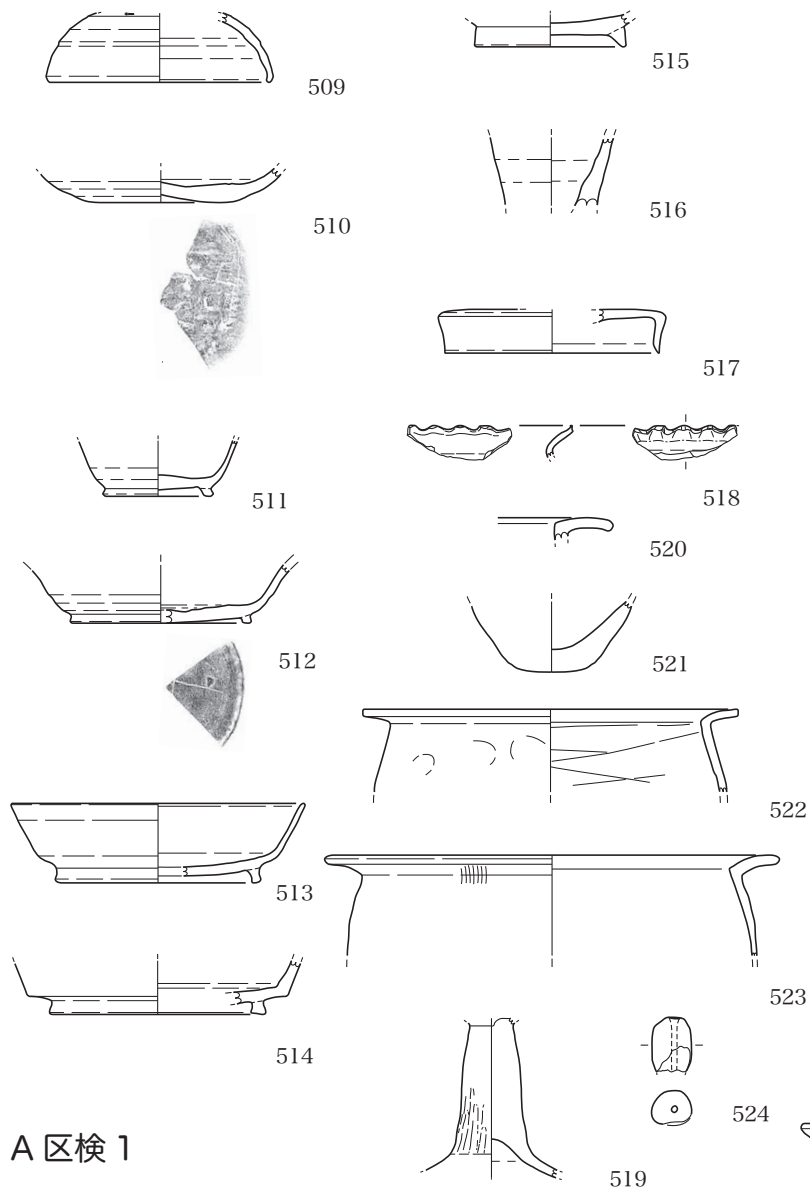
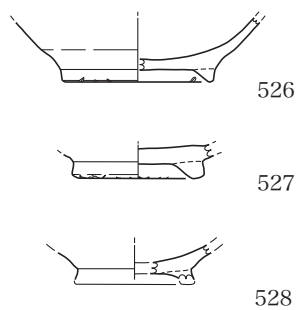


図 3-32 3 期 出土土器・土製品実測図 -7 (1:4)

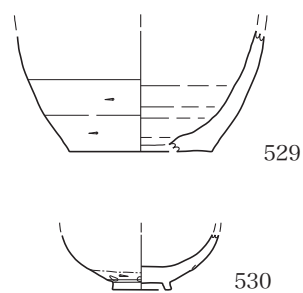
B 区サブトレンチ



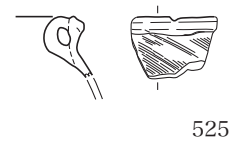
A 区検 1



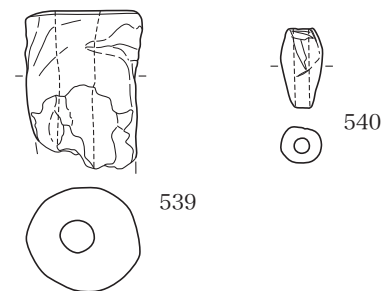
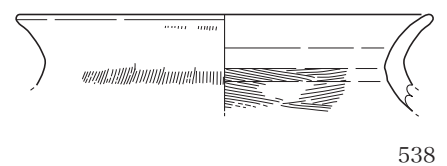
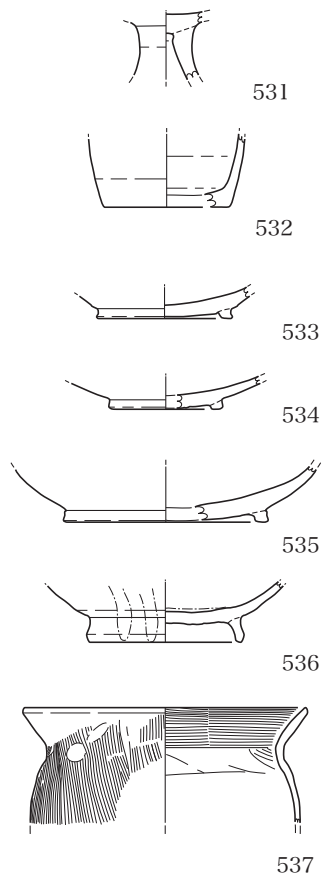
A 区表土はぎ



A 区南壁トレンチ



表採



1/4 0 20cm

図 3-33 3 期 出土土器・土製品実測図-8 (1:4)

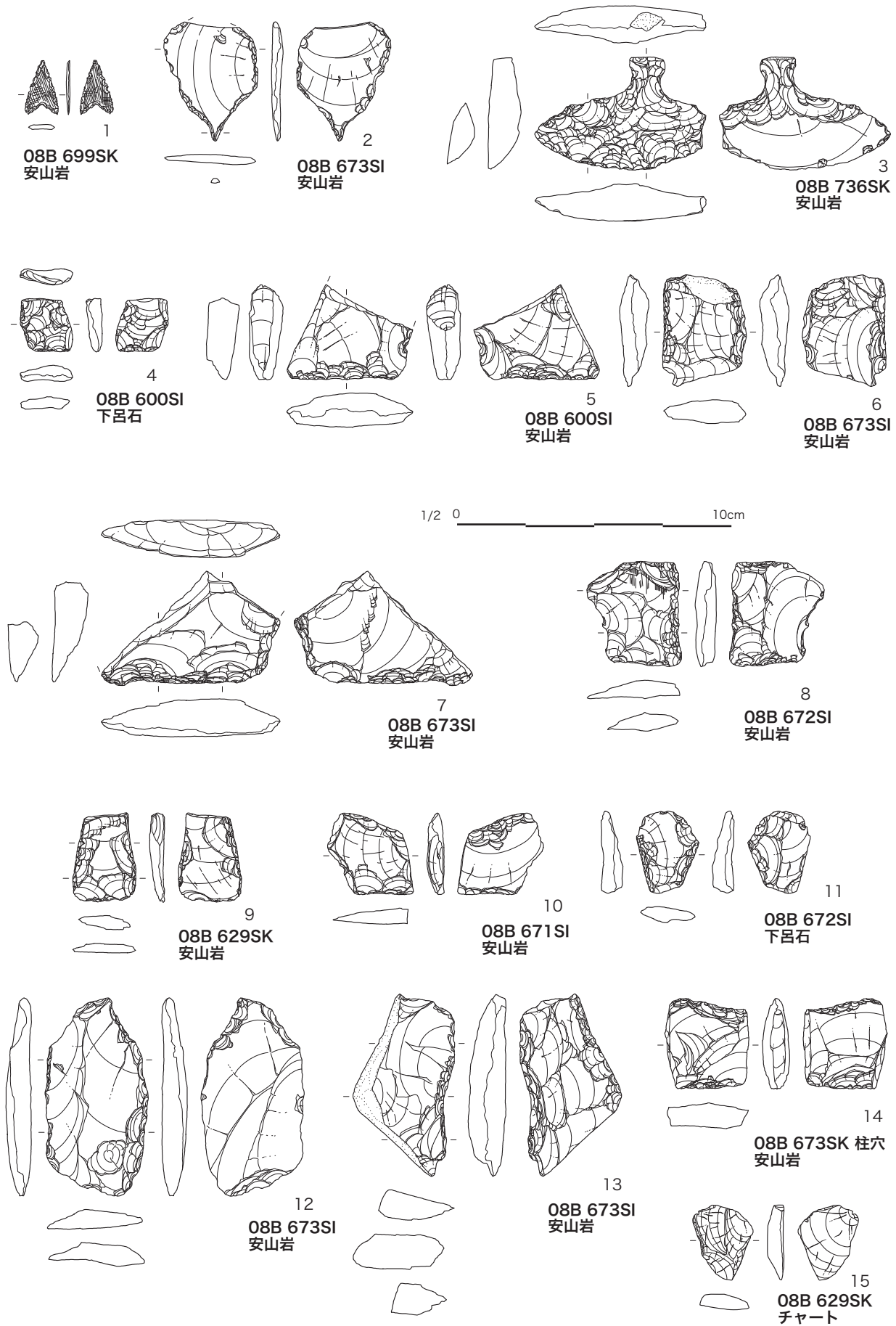


図 3-34 1 期 出土石器・石製品実測図-1 (1:2)

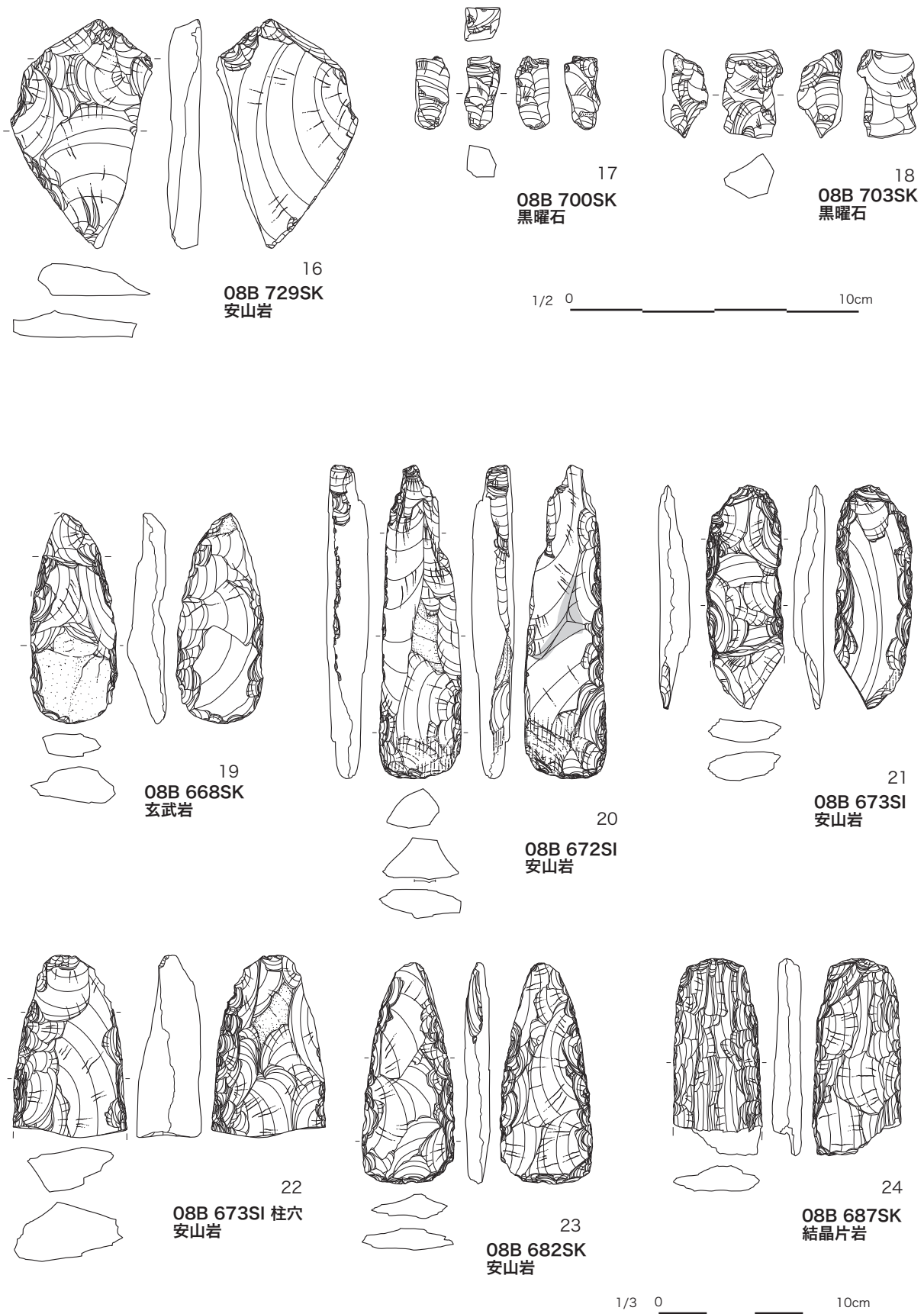


図 3-35 1 期 出土石器・石製品実測図 -2 (1:2/1:3)

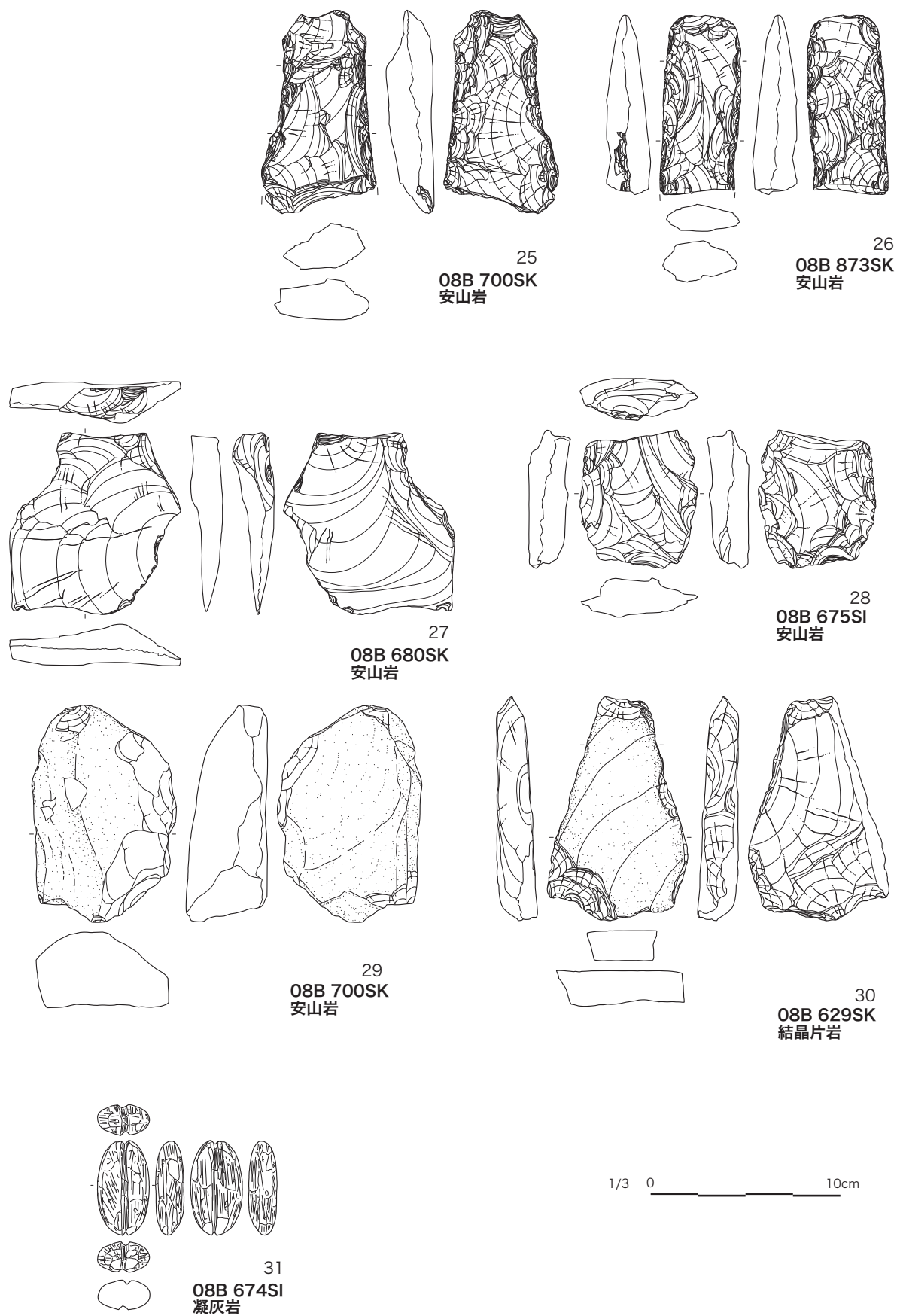


図 3-36 1 期 出土石器・石製品実測図 -3 (1:3)

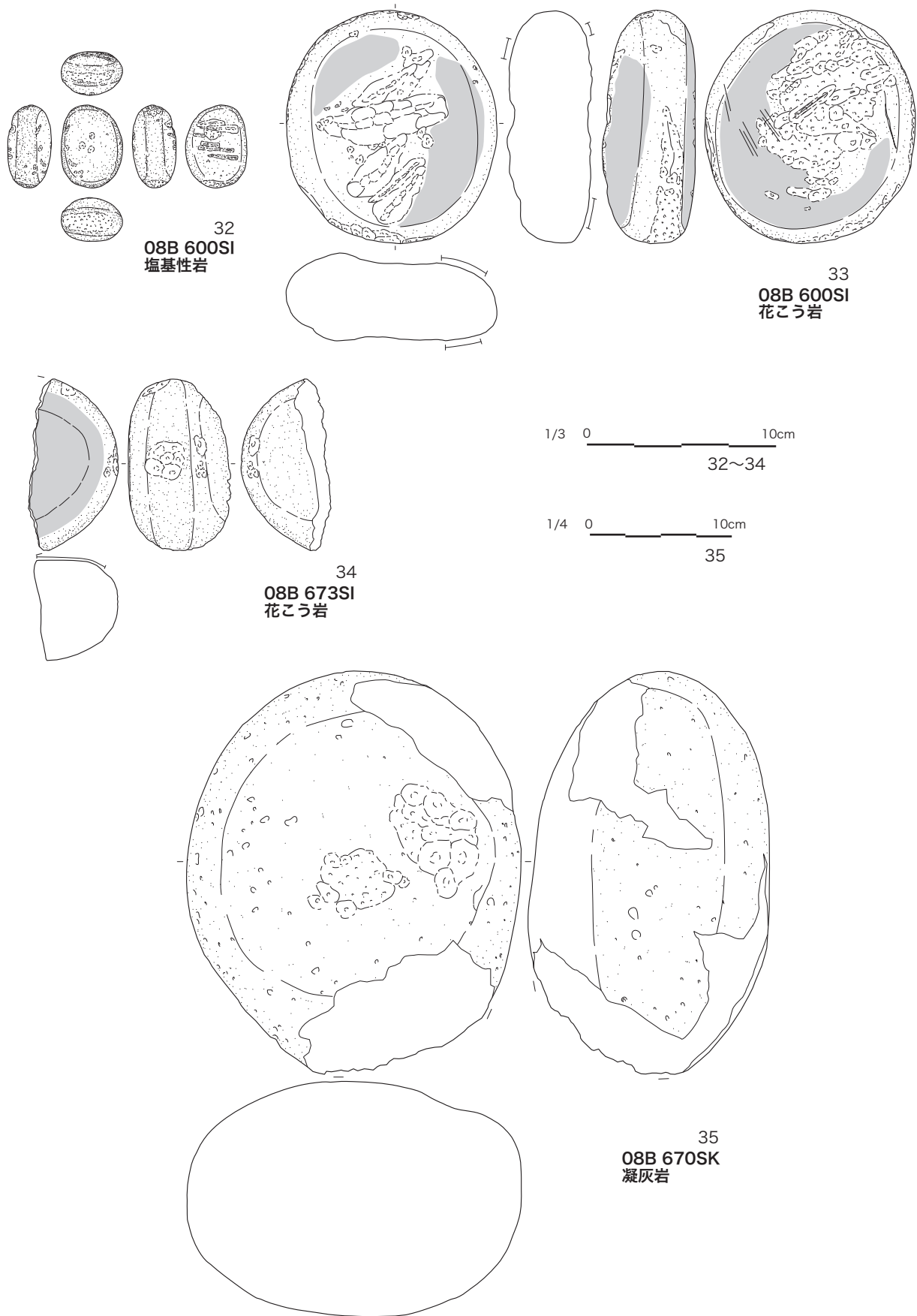


図 3-37 1 期 出土石器・石製品実測図 -4 (1:3/1:4)

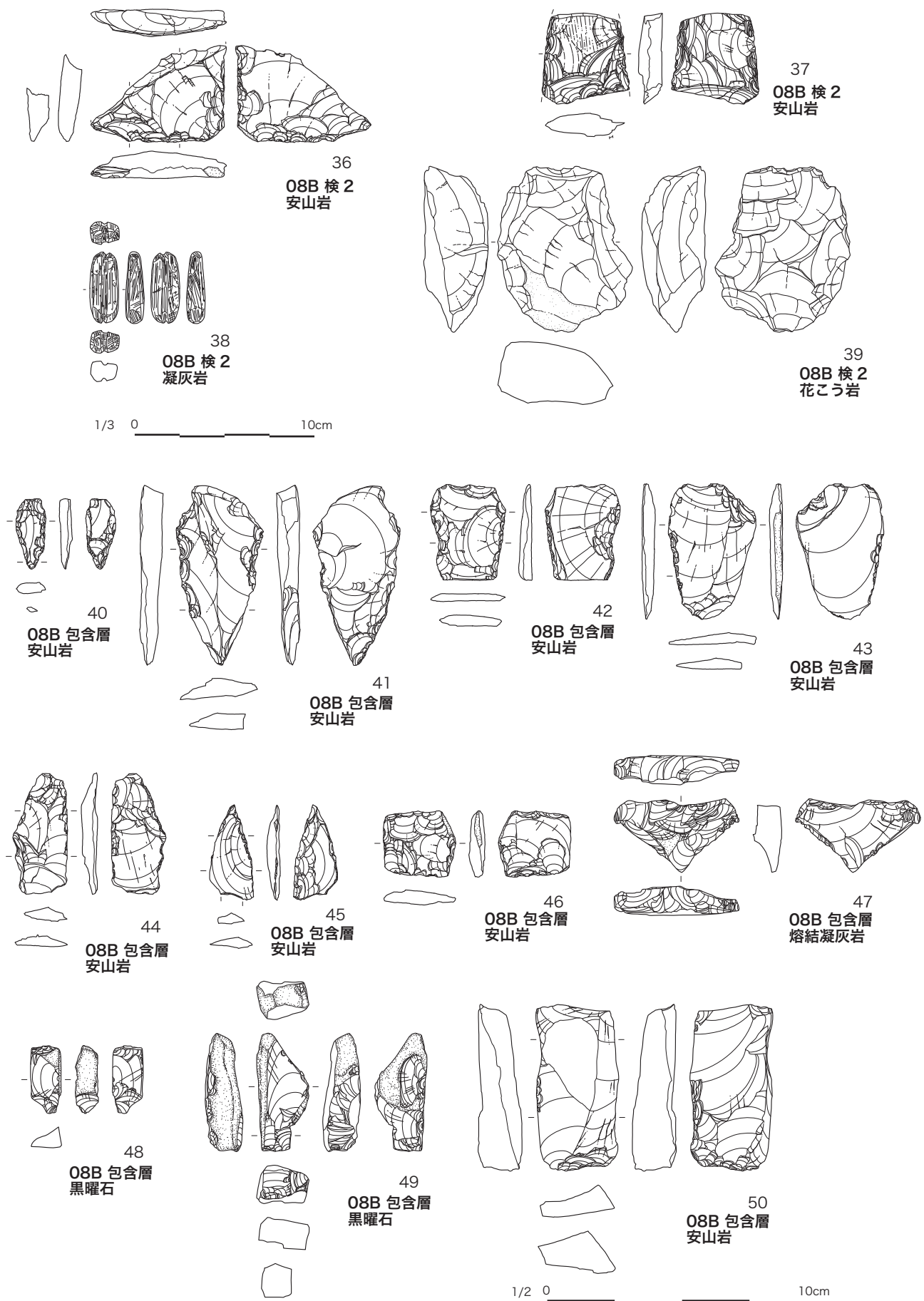


図 3-38 1 期 出土石器・石製品実測図 -5 (1:2/1:3)

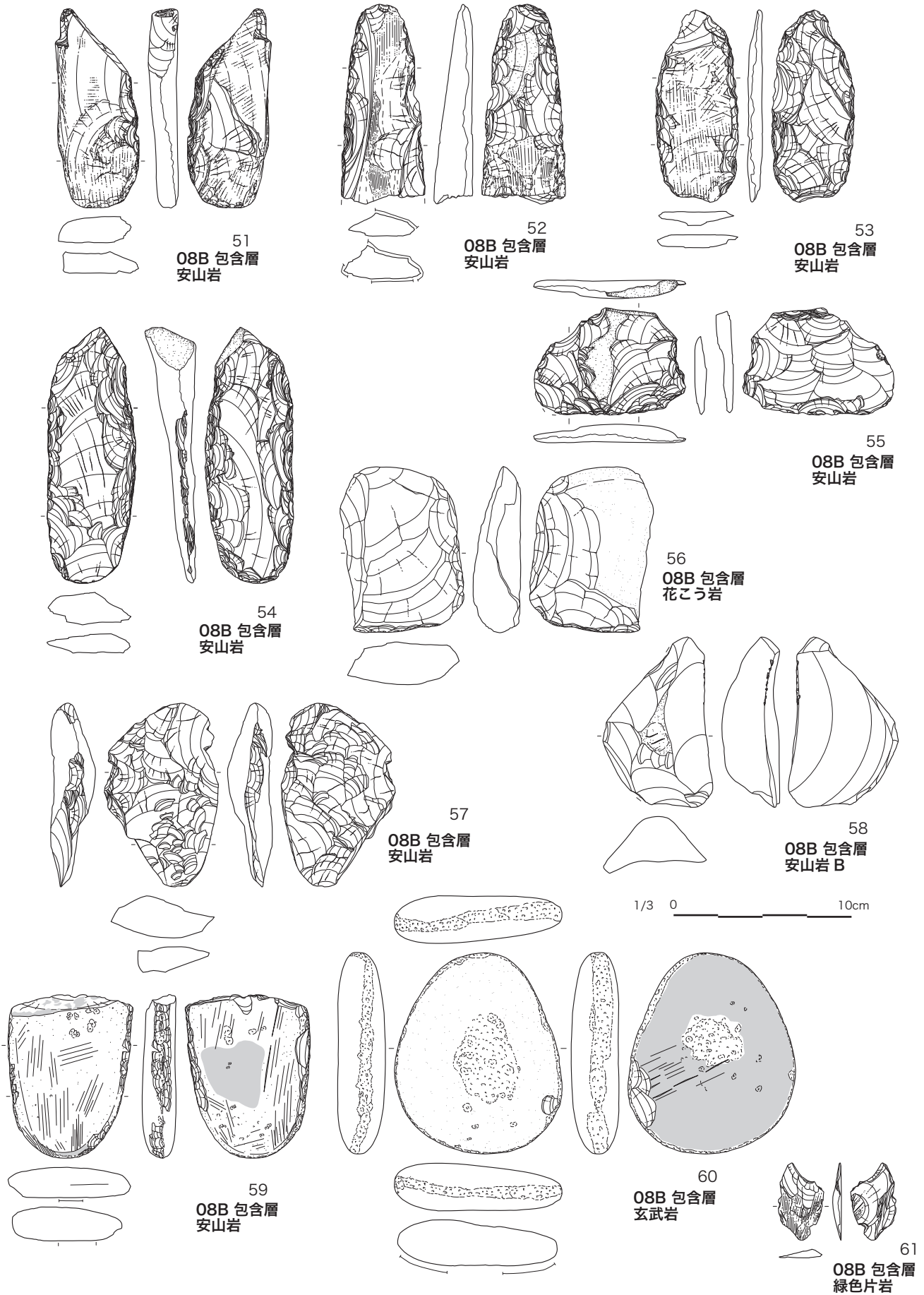


図 3-39 1 期 出土石器・石製品実測図 -6 (1:3)

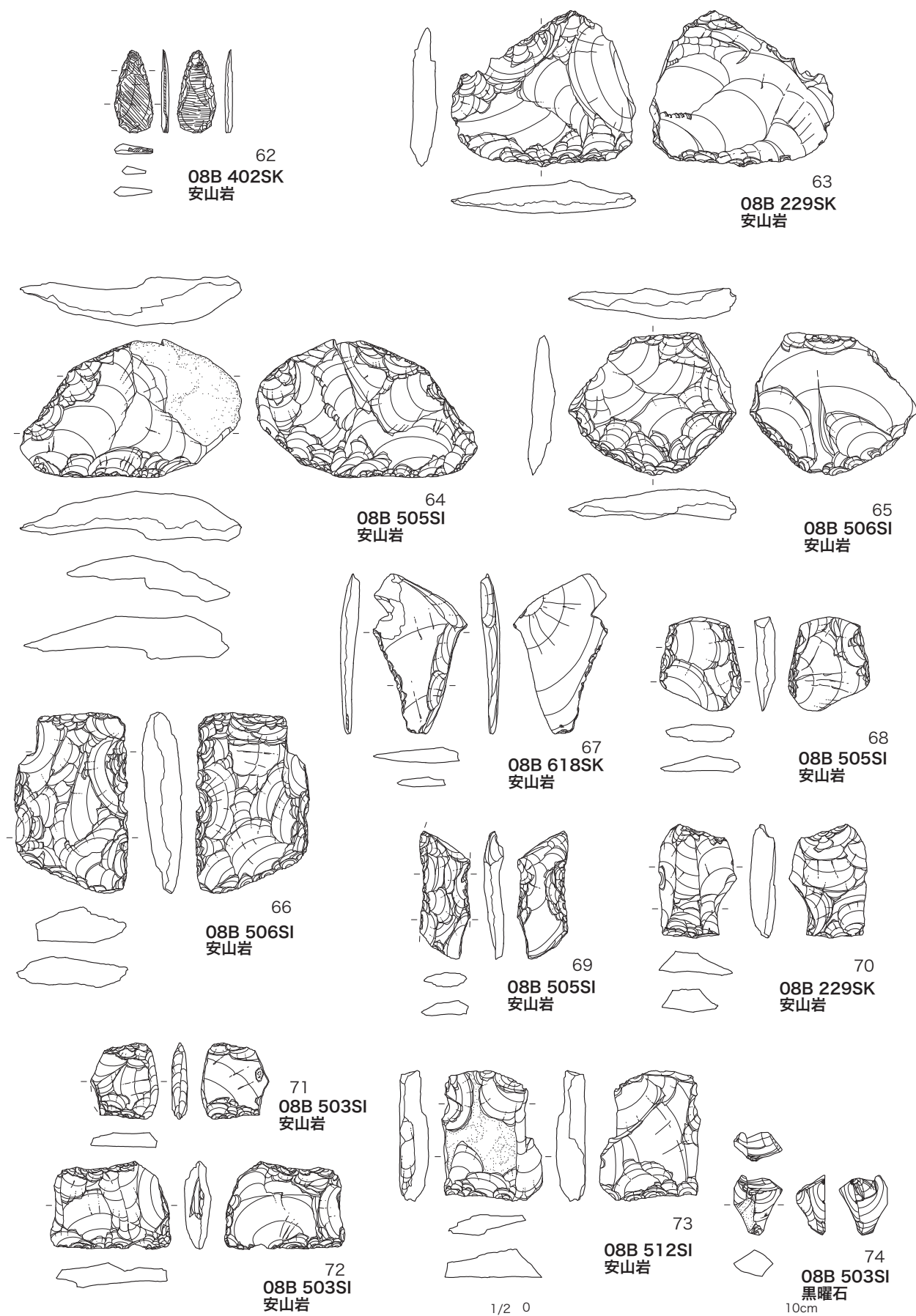


図 3-40 1 期 出土石器・石製品実測図-7 (1:2)

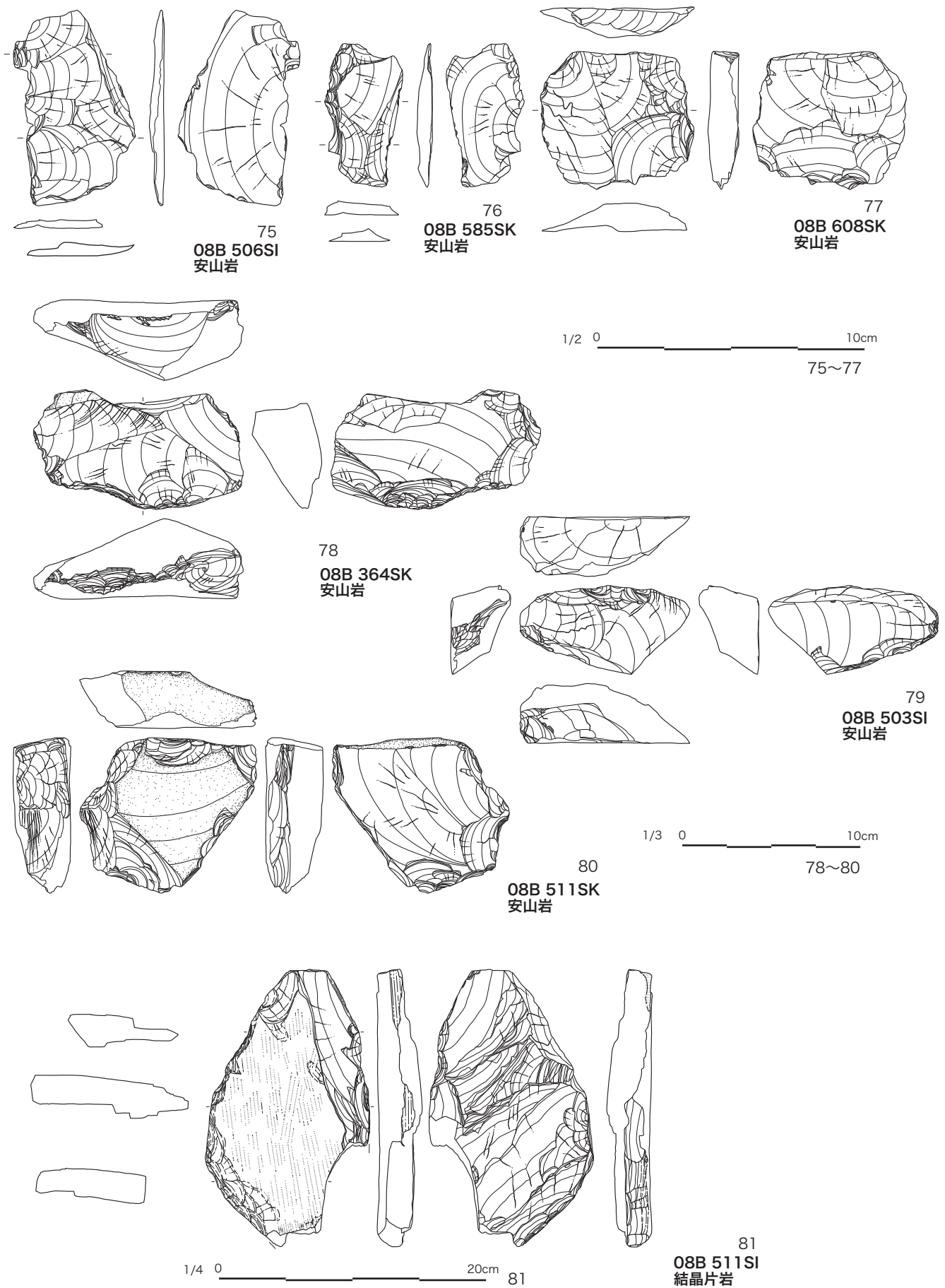


図 3-41 1 期 出土石器・石製品実測図 -8 (1:2/1:3/1:4)

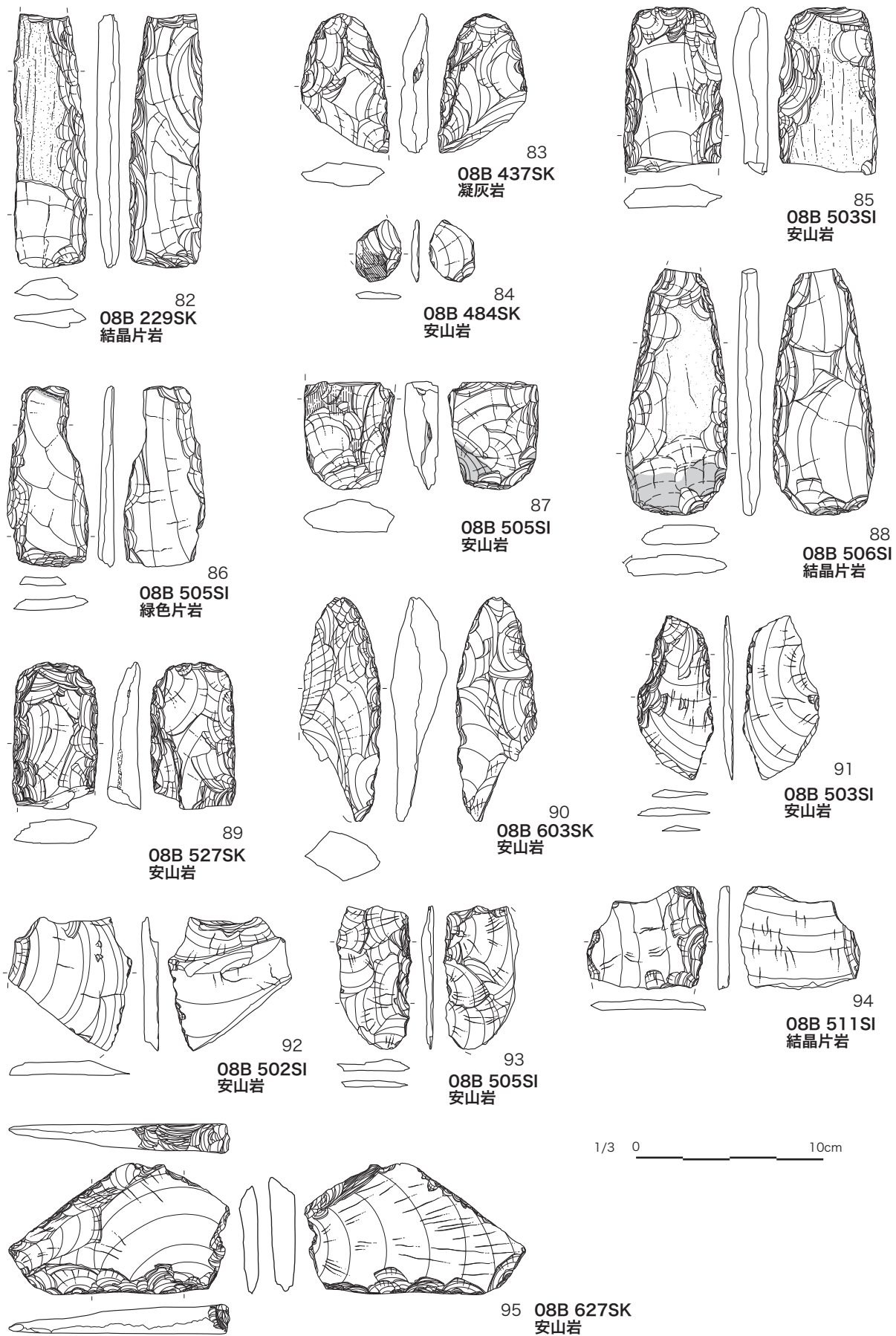


図 3-42 1期 出土石器・石製品実測図-9 (1:3)

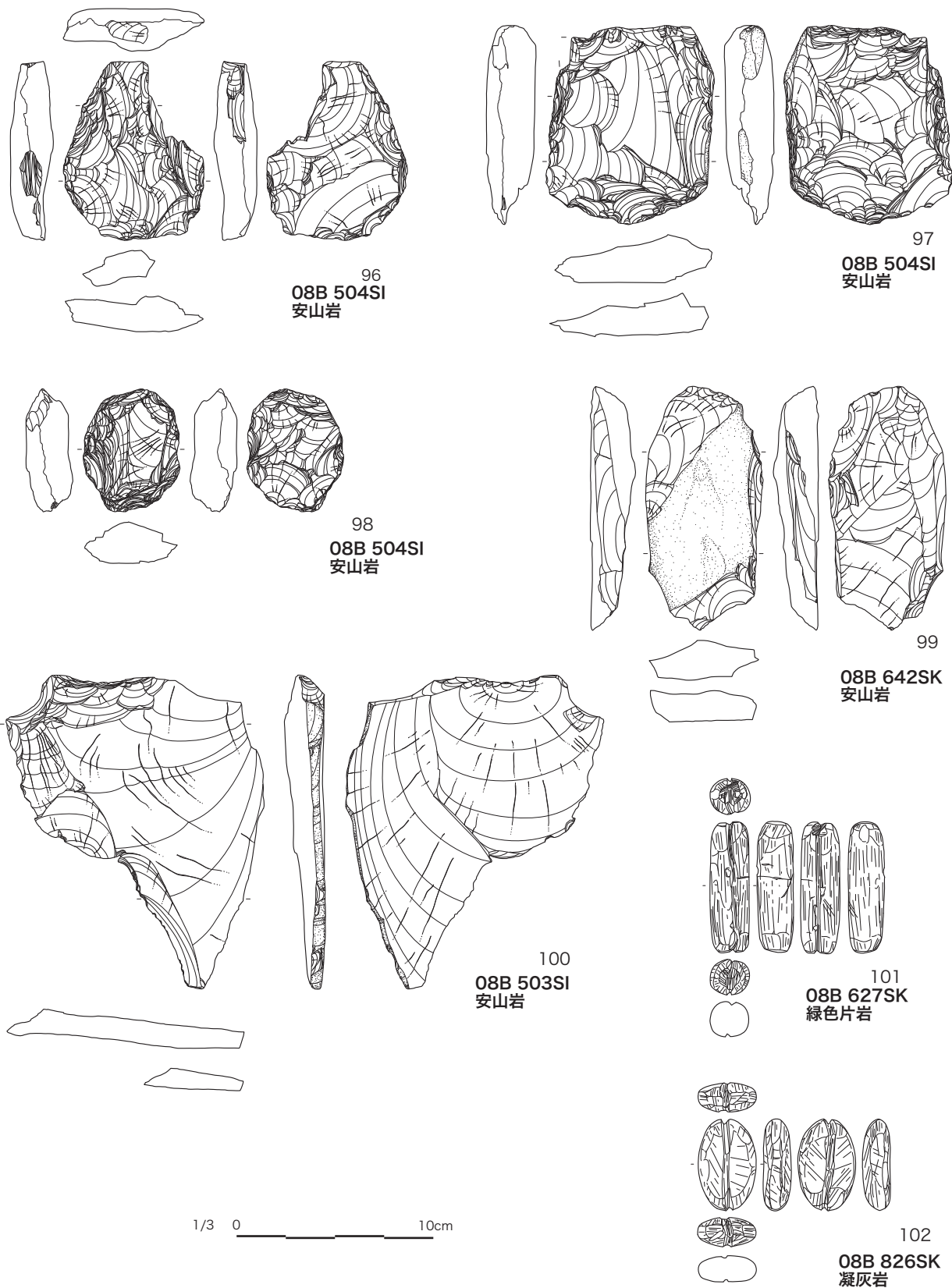


図 3-43 1 期 出土石器・石製品実測図-10 (1:3)

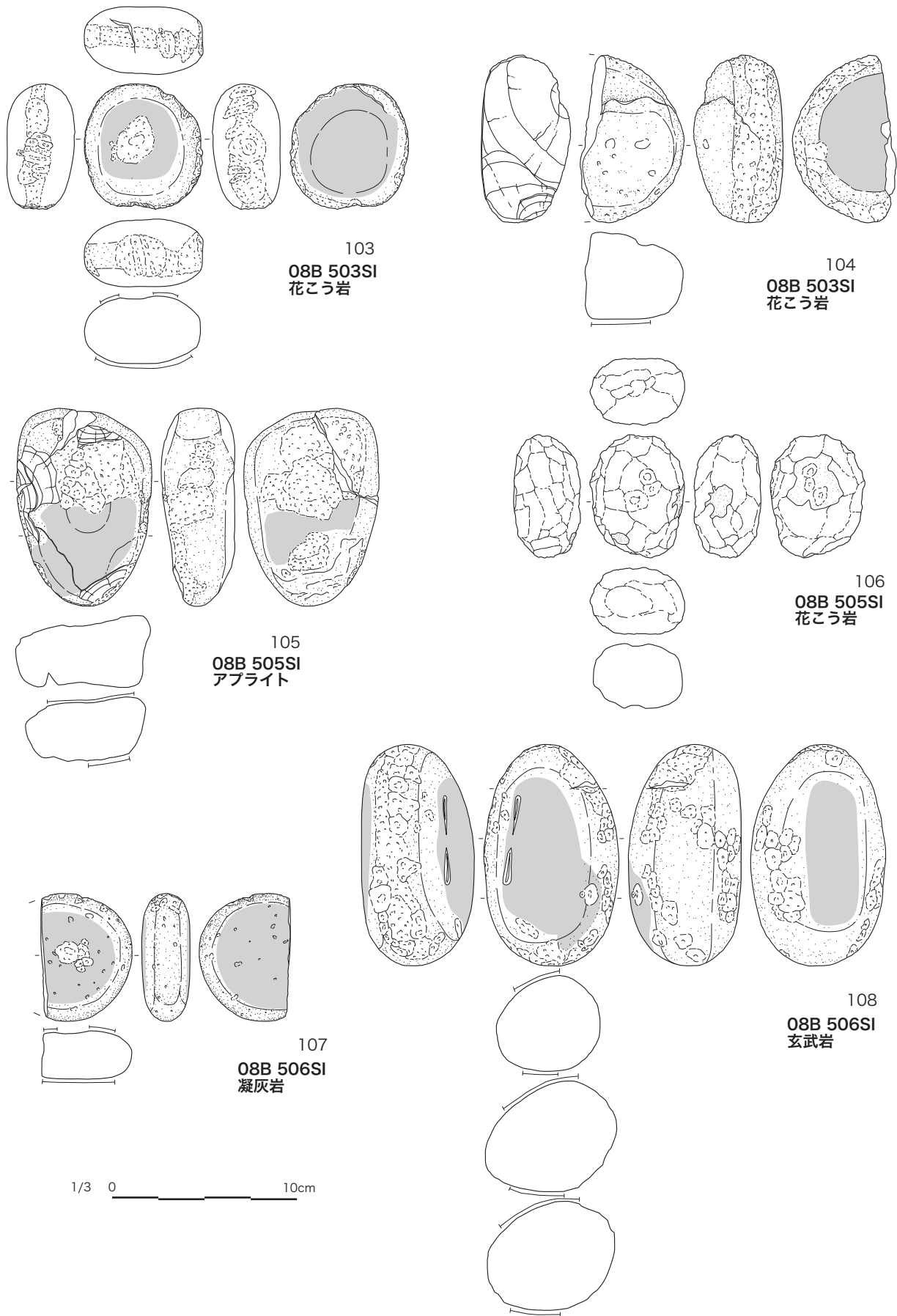


図 3-44 1 期 出土石器・石製品実測図 -11 (1:3)

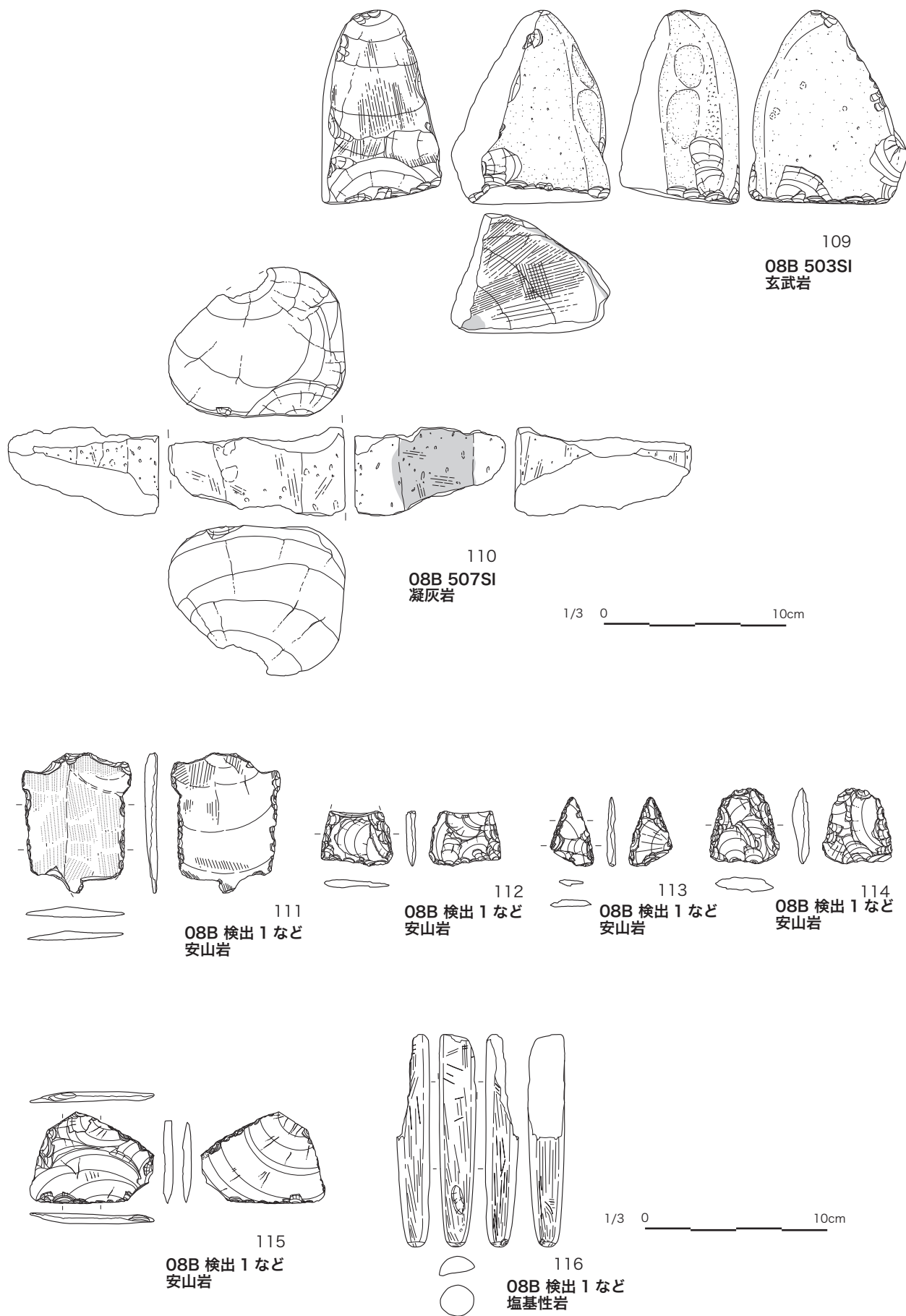


図 3-45 1 期 出土石器・石製品実測図-12 (1:3)

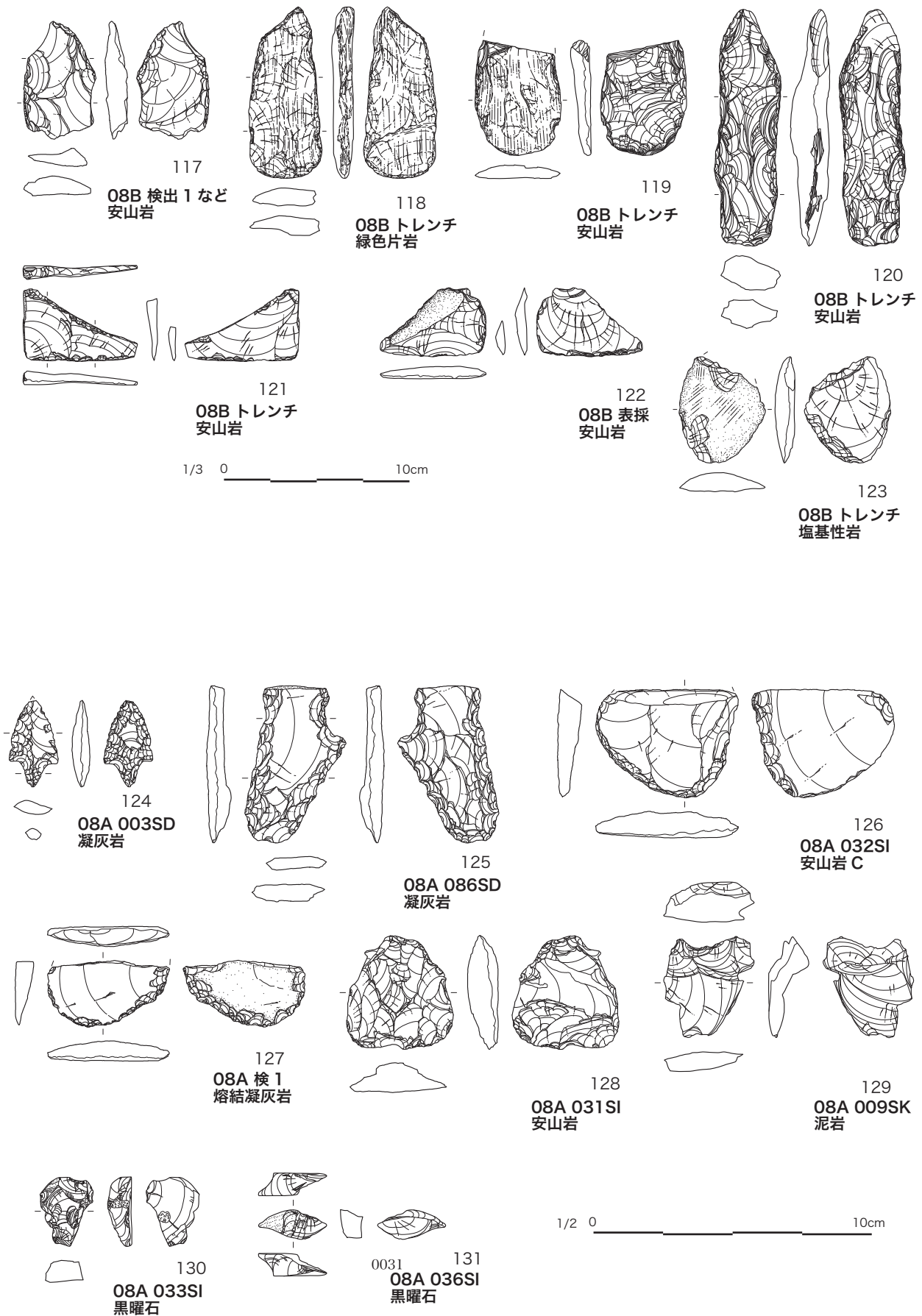


図 3-46 1 期 出土石器・石製品実測図 -13 (1:2/1:3)

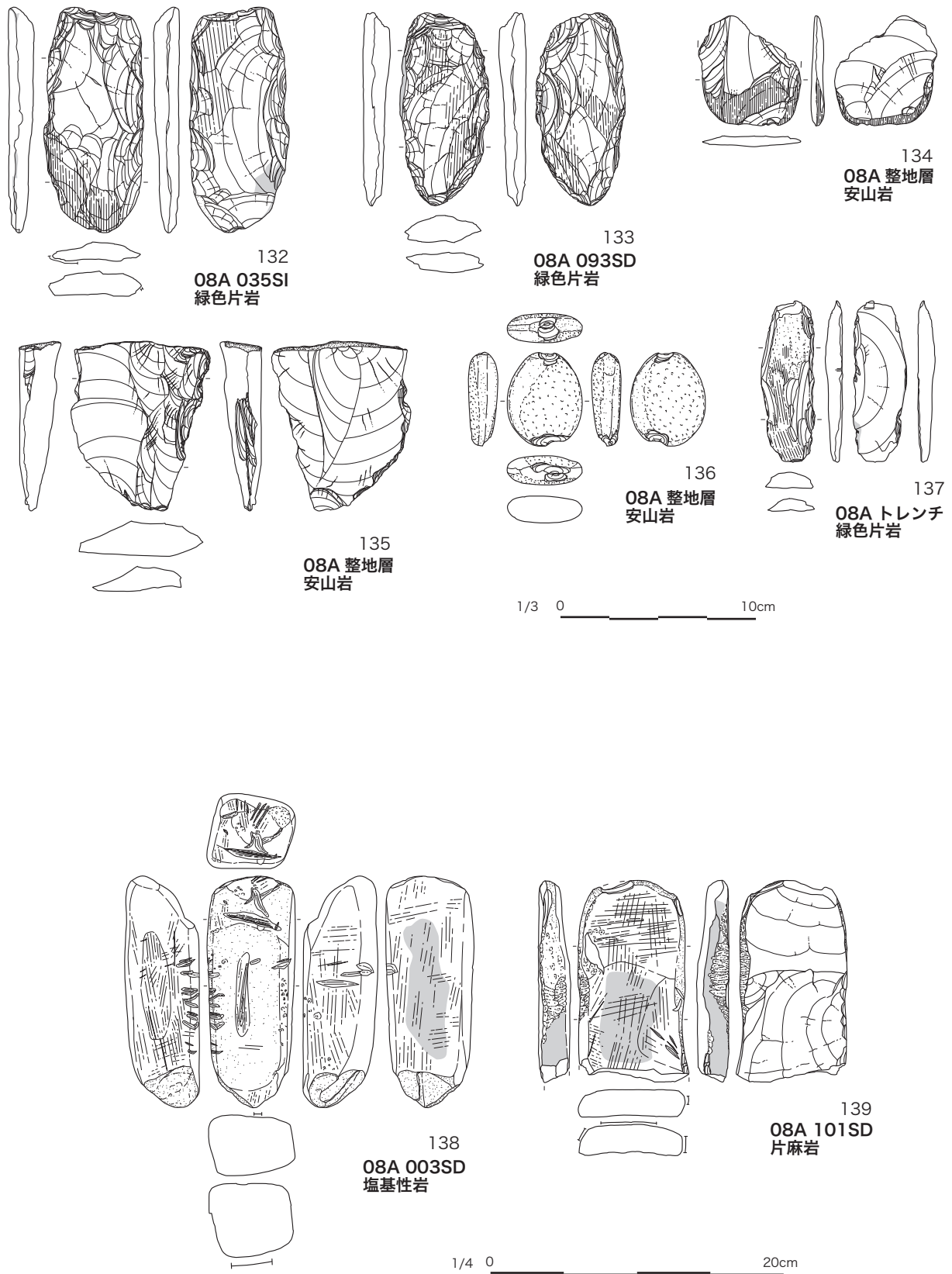


図3-47 1期出土石器・石製品実測図-14 (1:3/1:4)

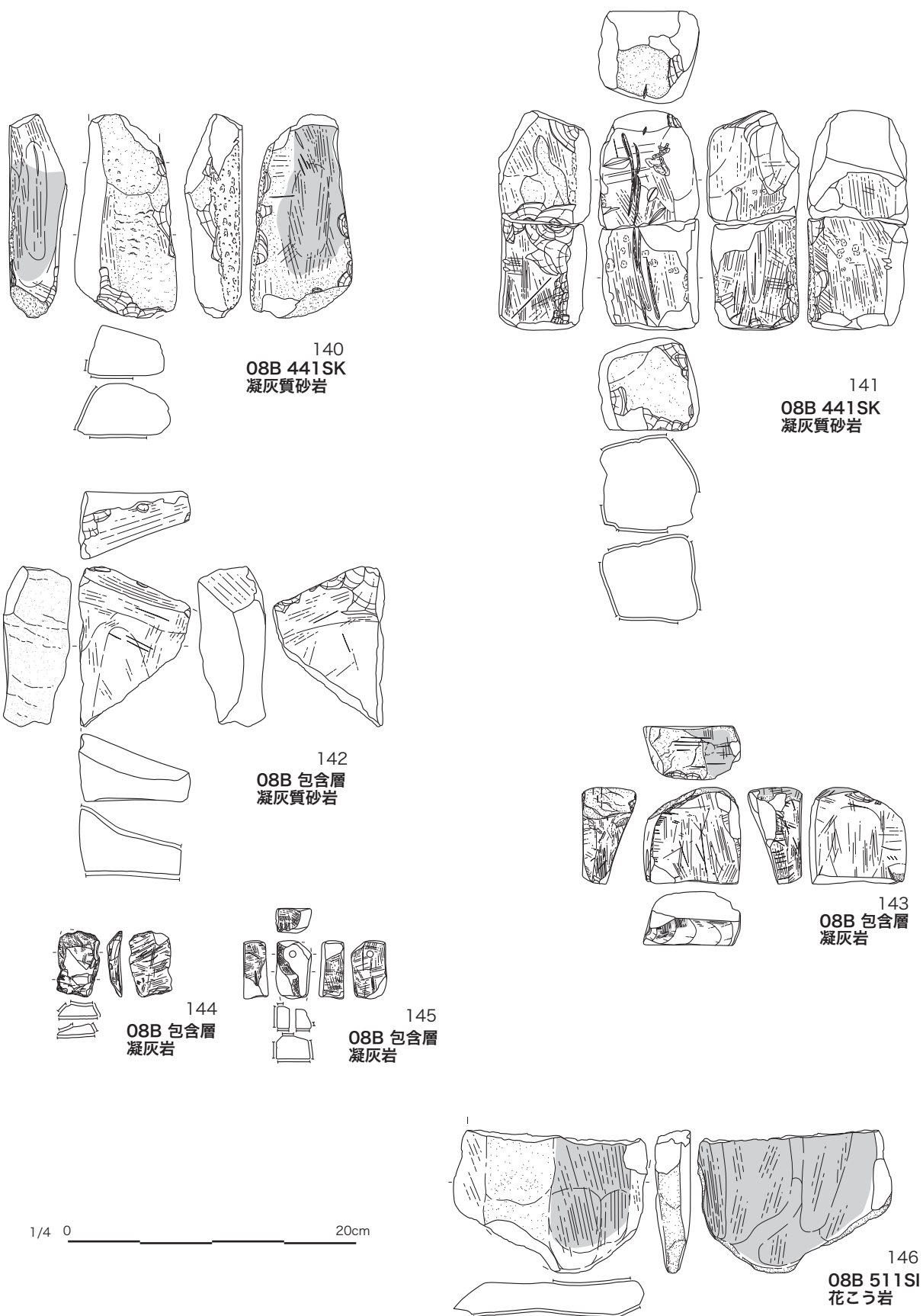


図 3-48 1 期 出土石器・石製品実測図 -15 (1:4)

A区-003SD-1

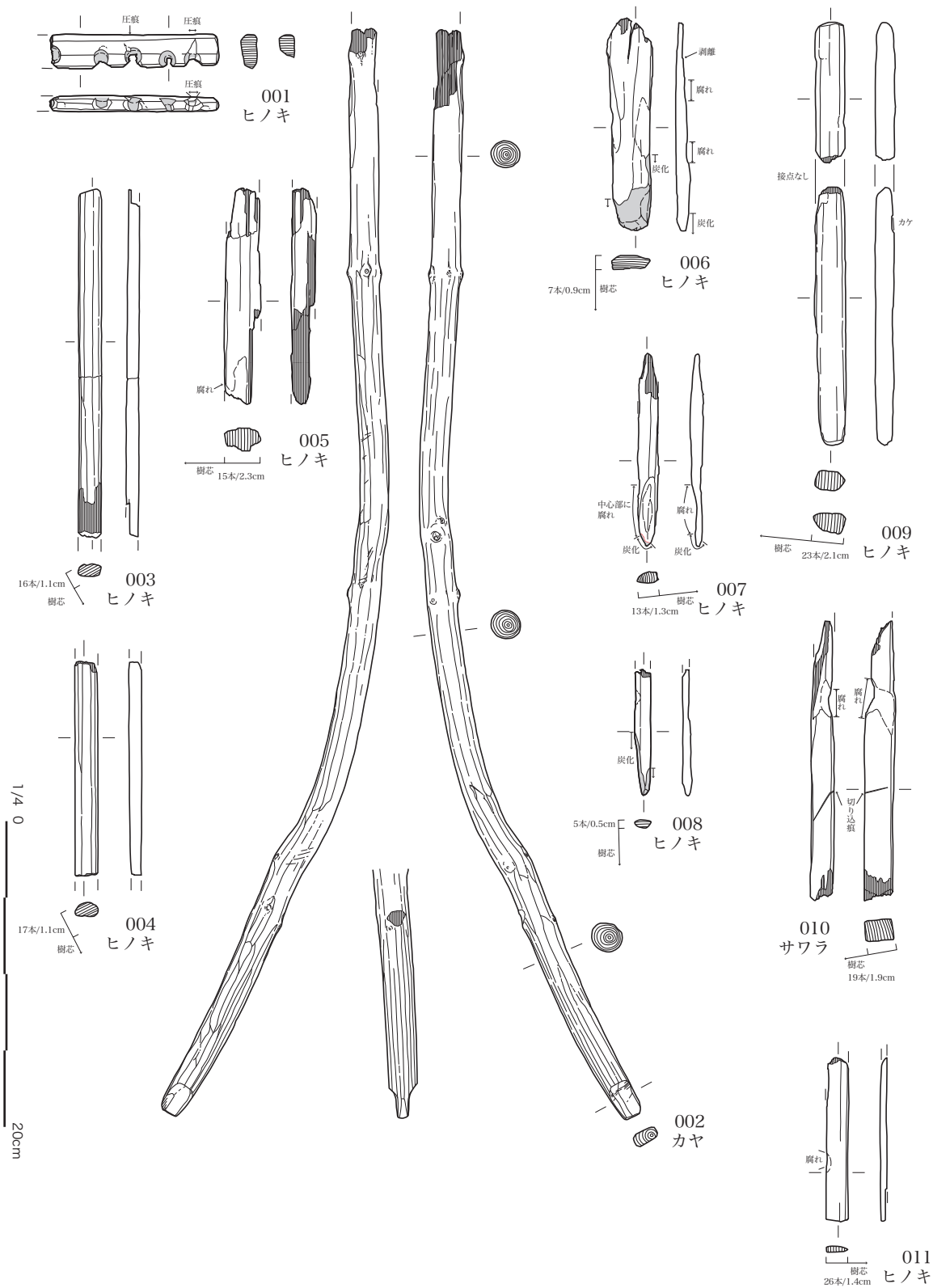
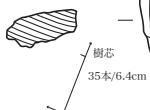
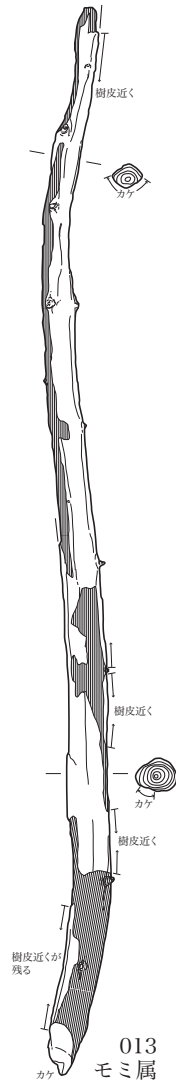


図 3-49 003SD 出土木製品実測図-1 (1:4)

A区-003SD-2

114
石岸遺跡

中央に腐れあり

012
モミ属013
モミ属

1/8 0 40cm

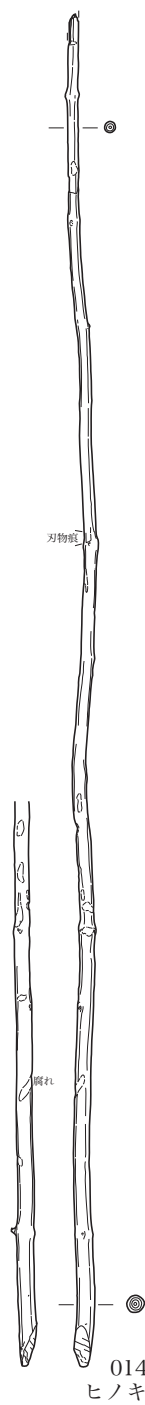
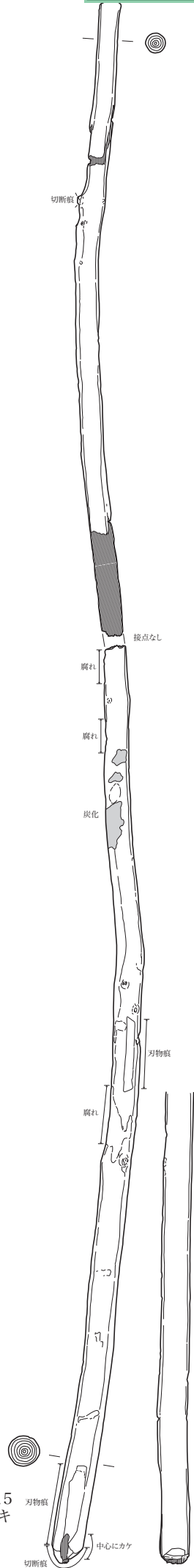
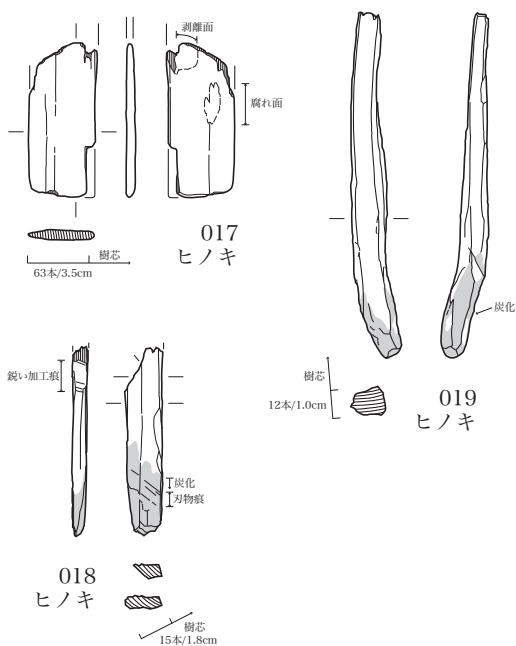
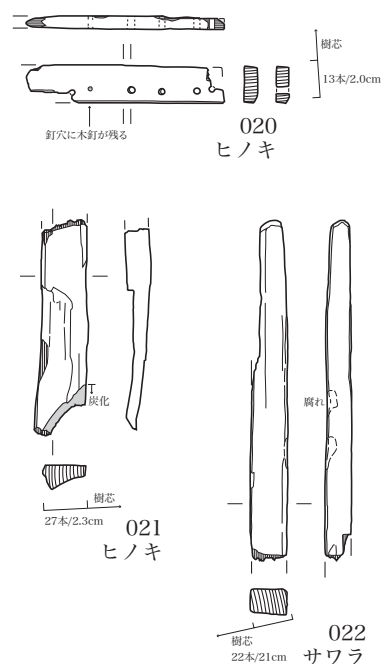
014
ヒノキ015
ヒノキ

図 3-50 003SD 出土木製品実測図 -2 (1:8)

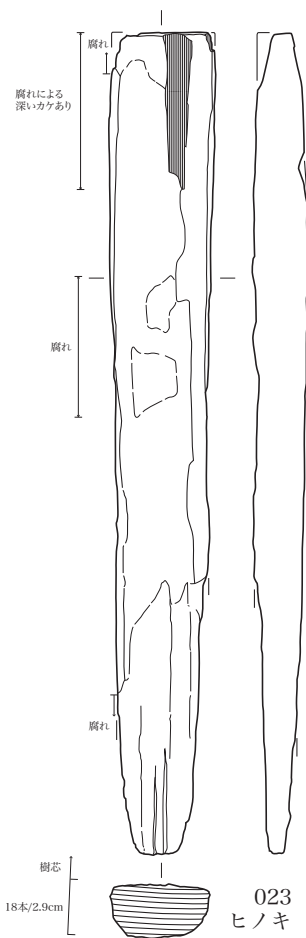
A 区 -046NR



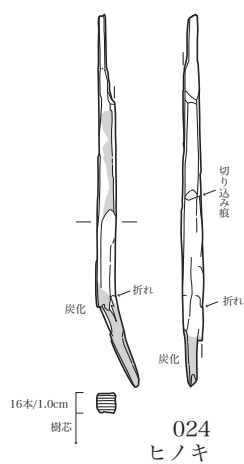
A 区 -086SD



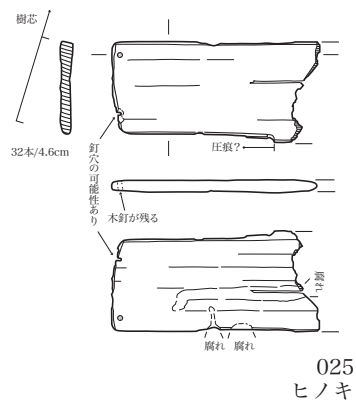
A 区 -093SD



A 区 -101SD



A 区 - 出土遺構不明



A 区 -038SI

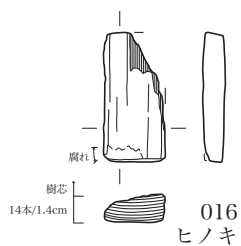


図 3-51 その他の出土木製品実測図 (1:4)

第4章 自然科学分析

1. 新城市中央部、石岸遺跡の地下層序と堆積年代

鬼頭 剛

はじめに

新城市中央部に位置する石岸遺跡にて地下層序を観察する機会を得た。その層序解析、放射性炭素年代測定の結果を報告する。

試料および分析方法

地下層序解析のため、調査区において地表面や遺構検出面からバックホーにより掘削し層序断面を露出させ、層序断面図の作成と試料採取を行った。層序断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。層序断面からは放射性炭素年代測定用試料を採取した。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析 (AMS) 法により測定を行なった。加速器質量分析法は $125\mu\text{m}$ の篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨 (グラファイト) に調整後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。 ^{14}C 年代値の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。 ^{14}C 年代の暦年代への較正には OxCal4.1 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、 2σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して産出された放射性炭素年代誤差に相当する 95.4% 信頼限界の暦年代範囲であり、カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る

確率を意味する。測定は株式会社パレオ・ラボ (Code No.; PLD) に依頼した。

分析結果

深掘層序

A 区では調査区の南側において東西方向に 2 地点 (地点 1・地点 2)、B 区では調査区の北側で 1 地点 (地点 3) の計 3 地点でバックホーによる深掘を実施した (図 4-1)。各地点の層序の特徴を以下に述べる。

A 区南側の東寄りで深掘を行なった地点 1 では深度約 4m の層序断面を得た (図 4-2)。下位層より、標高 78.55 ~ 79.65m は灰白色を呈する極粗粒砂層である。細礫を含み、全体に淘汰は良好である。基質にシルトや粘土などの細粒な碎屑物を含まない。本層の最下部 (標高 78.56m) にて採取した木材片 (試料 1) と草本植物片 (試料 2) を放射性炭素年代測定用の試料とした。標高 79.65 ~ 79.85m は灰黒色を呈する粘土層からなる。塊状で、堆積構造はみられない。本層の下部 (標高 79.67m) で放射性炭素年代測定用の炭化物 (試料 3) を採取した。標高 79.85 ~ 80.19m は灰白色を呈する極粗粒砂層である。基質にシルトや粘土などの細粒な碎屑物を含まず、淘汰は良好である。標高 80.19 ~ 80.35m は灰黒色を呈する粘土層である。塊状で、堆積構造はみられない。本層の下部 (標高 80.21m) で放射性炭素年代測定用の炭化物 (試料 4) を採取した。標高 80.35 ~ 80.53m は灰白色を呈する極粗粒砂層である。基質にシルトや粘土などの細粒な碎屑物を含まない。

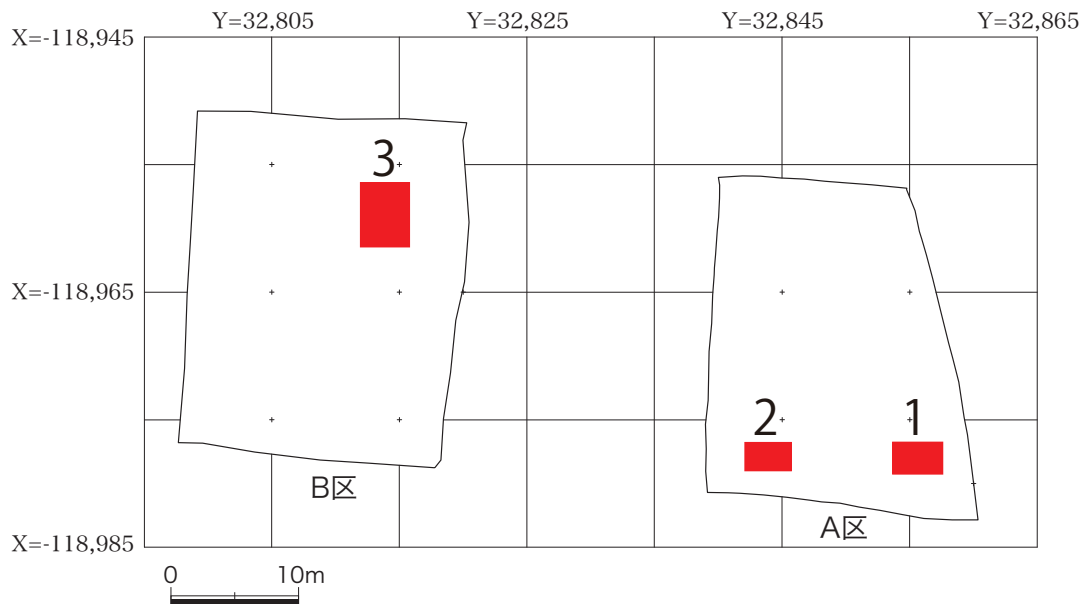


図 4-1 石岸遺跡における深掘地点
地点1

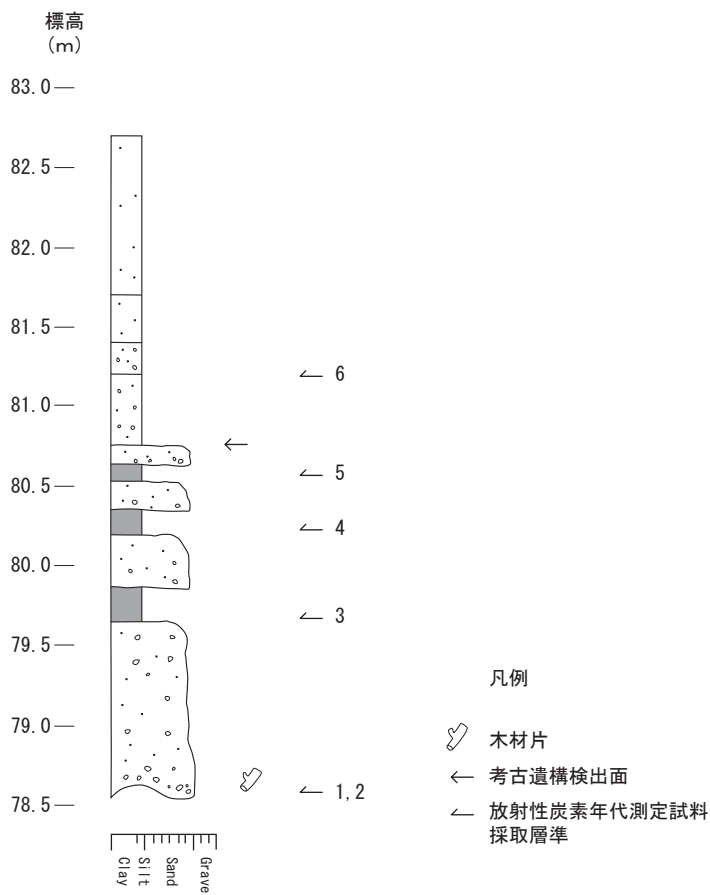


図 4-2 石岸遺跡 A 区（地点 1）における深掘層序断面

い。標高 80.53～80.63m は灰黒色を呈する粘土層である。塊状で、堆積構造はみられない。本層の下部（標高 80.55m）で放射性炭素年代測定用の試料（試料 5）を採取した。標高 80.63～80.75m は灰白色の極粗粒砂層である。基質にシルトや粘土などの細粒な碎屑物を含まない。本層と本層の上位層との境界付近が考古学的な遺構検出面である。標高 80.75～81.20m は暗灰色を呈する粘土層からなる。地層には細礫～極粗粒砂が混じる。本層の最上部（標高 81.18m）で放射性炭素年代測定用の試料（試料 6）を採取した。標高 81.20～81.40m は黄褐色を呈する粘土層からなる。極粗粒砂が混じる。標高 81.40～81.70m は灰色の粘土層である。本層も粗粒砂が混じる。標高 81.70～82.70m は灰色の粘土層である。粗粒砂が混じる。本層の頂部（標高 82.70m）

地点2

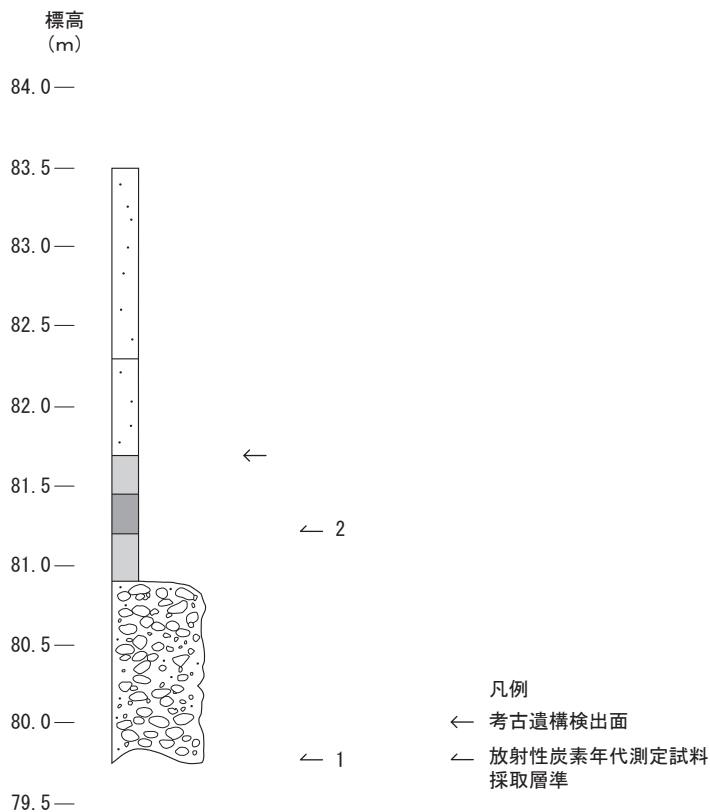


図 4-3 石岸遺跡 A 区（地点 2）における深掘層序断面

は地表であり、現在の水田面となっている。

A 区南側の西寄りで深掘を行なった地点 2 では深度約 3.8m の層序断面を得た（図 4-3）。下位層より、標高 79.75～80.90m は中礫層である。角礫～亜角礫を主とした礫支持礫層である。淘汰は比較的良好。基質は極粗粒砂からなる。本層の最下部（標高 79.77m）で放射性炭素年代測定用の試料（試料 1）を採取した。標高 80.90～81.20m は褐色を呈する粘土層である。塊状で、堆積構造はみられない。標高 81.20～81.45m は黒褐色を呈する粘土層である。塊状・均質で、堆積構造はみられない。本層の下部（標高 81.21m）で放射性炭素年代測定用の試料（試料 2）を採取した。標高 81.45～81.70m は褐色を呈する粘土層である。塊状・均質で、堆積構造はみられない。本層と本層を覆う粘土層との境界付

近が考古遺構の検出面である。標高 81.70～82.30m は灰褐色の粘土層である。極粗粒砂が混じる。標高 82.30～83.50m は灰褐色の粘土層である。極粗粒砂が混じる。本層の頂部（標高 83.50m）が地表である。

B 区の北側で深掘を行なった地点 3 では深度約 5.5m の層序断面を得た（図 4-4）。下位層より、標高 79.40～79.90m は青灰色を呈する極粗粒砂層である。淘汰は良好。標高 79.90～80.00m は黒褐色の粘土層からなる。塊状・均質で、堆積構造はみられない。ブロック状に断片化した木材片が混じる。本層の下部（標高 79.91m）で放射性炭素年代測定用の試料（試料 1・試料 2）を採取した。標高 80.00～80.55m は青灰色を呈する極粗粒砂層である。中礫が混じり、淘汰は良好。標高 80.55～80.60m は黒褐色を呈する粘土層である。ブロック状に断片化した木材片が混じる。本層の下部（標高 80.56m）で放射性

炭素年代測定用の試料（試料 3）を採取した。標高 80.60～80.90m は青灰色を呈する極粗粒砂層である。標高 80.90～81.16m は明灰白色を呈する細礫層である。角礫～亜角礫を主とした礫支持礫層である。淘汰は良好。基質は極粗粒砂からなり、雲母片の濃集がみられる。標高 81.16～81.60m は褐色の中礫層である。粘土ブロックが混じる。標高 81.60～82.00m は黒褐色を呈する粘土層である。中礫が混じる。本層の下部（標高 81.62m）より放射性炭素年代測定用の試料（試料 4）を採取した。土器片を分散して含み、本層と本層を覆う粘土層との境界付近（標高 82.00m）が縄文時代後期の遺構検出面である。標高 82.00～82.42m は暗灰色を呈する粘土層である。細礫が混じり、土器片が分散して含まれる。標高 82.42～83.02m は明褐色の粘土層で

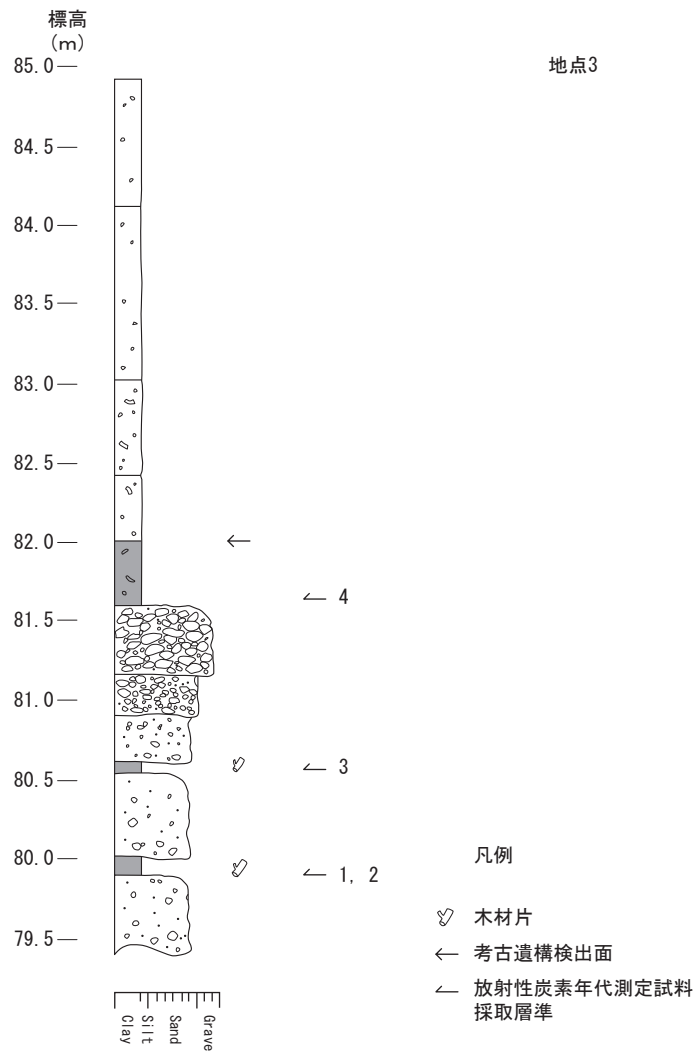


図 4-4 石岸遺跡 B 区（地点 3）における深掘層序断面

ある。細礫を含む。標高 83.02 ～ 84.12m は赤褐色の粘土層である。細礫が混じる。標高 84.12 ～ 84.92m は赤褐色の粘土層である。細礫～中礫が混じる。本層の頂部（標高 84.92m）は地表である。

放射性炭素年代測定

石岸遺跡では A 区の地点 1 で 6 試料、A 区の地点 2 で 2 試料、B 区の地点 3 で 4 試料の計 12 試料について放射性炭素年代測定を行ない、すべての試料で放射性炭素年代値が得られた（表 4-1 ～表 4-3）。古い年代値では、A 区の地点 2 にお

いて標高 79.75 ～ 80.90m の中礫層最下部（標高 79.77m）より採取した土壌が 7329 - 7247 cal yrs BP (5380 - 5298 BC) (PLD-26651) を、標高 81.20 ～ 81.45m にみられる黒褐色粘土層の下部（標高 81.21m）から採取した土壌が 8448 - 8380 cal yrs BP (6499 - 6431 BC) (PLD-26650) と 8400 年前～ 7200 年前代の値が得られた。なお、地点 2 では得られた数値年代と地層の累重関係との間で年代値の逆転現象が生じている。新しい年代値では A 区の地点 1 で認められ、標高 80.75 ～ 81.20m の暗灰色粘土層の最上部（標高 81.18m）から採取した生材が 230 - 170 cal yrs BP (1720 - 1780 AD) (PLD-13936) の値であった。深掘地点全体では、調査地点の西にある B 区の地点 3 では標高 80m ～ 82m までの層準で 5400 年前～ 4800 年前代の数値年代を示すのに比べて、調査地点の東寄りにある A 区の地点 1 では標高 78.5m ～ 81m までの層準で 5000 年前～ 2400 年前代と、東側の地点ほど新しい数値年代を示している。

考察

石岸遺跡調査地点における地下層序と堆積年代

石岸遺跡の地理的な位置を概説すると、調査地点は豊橋平野の最奥部（北東端）にあたる。新城市役所からは約 4km 北東にある。調査地点の北方には、山頂高度が約 500 ～ 600m の三河山地（あるいは三河高原）の一部で西から徳定雁峰（標高 655m）、片山雁峰（標高 608m）、須長雁峰（標高 688m）を山頂にもつ山地が連なっている。これらのうち連吾川は須長雁峰を山頂とし、集まった雨水は南へと流れ、北西から南東へ新城市森長を通り調査地のある須長に至る河川と、北

表 4-1 石岸遺跡 A 区（地点 1）における放射性炭素年代測定結果

地点	試料 No.	調査区 (区)	標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ PDB (‰)	2 σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	2 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No. (method)
1	1	A	78.56	極粗粒砂層	木片	4416 ± 22	-27.17 ± 0.14	3100 - 2927 BC (93.0 %)	5049 - 4876 (93.0 %)	PLD - 13941 (AMS)
								3263 - 3251 BC (2.4 %)	5212 - 5200 (2.4 %)	
1	2	A	78.56	極粗粒砂層	草本植物片	4049 ± 21	-27.28 ± 0.20	2631 - 2488 BC (93.7 %)	4580 - 4437 (93.7 %)	PLD - 13940 (AMS)
								2831 - 2821 BC (1.7 %)	4780 - 4770 (1.7 %)	
1	3	A	79.67	灰黒色粘土層	炭化物	3581 ± 21	-25.46 ± 0.19	1980 - 1884 BC (89.6 %)	3929 - 3833 (89.6 %)	PLD - 13937 (AMS)
								2015 - 1997 BC (5.8 %)	3964 - 3946 (5.8 %)	
1	4	A	80.21	灰黒色粘土層	炭化物	3581 ± 21	-27.89 ± 0.16	1980 - 1884 BC (89.6 %)	3929 - 3833 (89.6 %)	PLD - 13938 (AMS)
								2015 - 1997 BC (5.8 %)	3964 - 3946 (5.8 %)	
1	5	A	80.55	灰黒色粘土層	土壌	2489 ± 19	-22.3 ± 0.16	696 - 540 BC (74.2 %)	2645 - 2489 (74.2 %)	PLD - 13939 (AMS)
								769 - 702 BC (21.2 %)	2718 - 2651 (21.2 %)	
1	6	A	81.18	暗灰色極粗粒砂 ～細礫混じり粘土層	生材 (枝、最外年輪)	145 ± 17	-25.35 ± 0.15	1720 - 1780 AD (33.2 %)	230 - 170 (33.2 %)	PLD - 13936 (AMS)
								1915 - 1945 AD (19.0 %)	35 - 6 (19.0 %)	
								1832 - 1880 AD (16.2 %)	119 - 70 (16.2 %)	
								1668 - 1700 AD (15.5 %)	282 - 251 (15.5 %)	
								1796 - 1819 AD (11.5 %)	154 - 132 (11.5 %)	

表 4-2 石岸遺跡 A 区（地点 2）における放射性炭素年代測定結果

地点	試料 No.	調査区 (区)	標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ PDB (‰)	2 σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	2 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No. (method)
2	1	A	79.77	礫層	土壌	6355 ± 23	-26.29 ± 0.15	5380 - 5298 BC (91.6%)	7329 - 7247 (91.6%)	PLD - 26651 (AMS)
								5464 - 5446 BC (2.3%)	7413 - 7395 (2.3%)	
								5420 - 5410 BC (0.9%)	7369 - 7359 (0.9%)	
								5242 - 5235 BC (0.6%)	7191 - 7184 (0.6%)	
2	2	A	81.21	黒褐色粘土層	土壌	7619 ± 26	-25.49 ± 0.17	6499 - 6431 BC (95.4%)	8448 - 8380 (95.4%)	PLD - 26650 (AMS)

表 4-3 石岸遺跡 B 区（地点 3）における放射性炭素年代測定結果

地点	試料 No.	調査区 (区)	標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ PDB (‰)	2 σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	2 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No. (method)
3	1	B	79.91	黒褐色粘土層	草本植物遺体	4667 ± 21	-29.94 ± 0.22	3477 - 3395 BC (61.3%)	5426 - 5344 (61.3%)	PLD - 26654 (AMS)
								3517 - 3482 BC (23.1%)	5466 - 5431 (23.1%)	
								3386 - 3370 BC (11.0%)	5335 - 5319 (11.0%)	
3	2	B	79.91	黒褐色粘土層	草本植物遺体	4713 ± 22	-28.60 ± 0.14	3459 - 3376 BC (49.4%)	5408 - 5325 (49.4%)	PLD - 26655 (AMS)
								3630 - 3581 BC (25.0%)	5579 - 5530 (25.0%)	
								3533 - 3497 BC (21.0%)	5482 - 5446 (21.0%)	
3	3	B	80.56	黒褐色粘土層	土壌	6815 ± 25	-27.50 ± 0.17	5738 - 5657 BC (95.4%)	7687 - 7606 (95.4%)	PLD - 26653 (AMS)
3	4	B	81.62	黒褐色中礫混じり粘土層	土壌	4397 ± 22	-25.03 ± 0.22	3091 - 1924 BC (95.4%)	5040 - 4873 (95.4%)	PLD - 26652 (AMS)

東から南西へ須長集落を通る河川とが調査地点のちょうど西側で合流する。石岸遺跡の調査地点はこの合流地点から 115m 東にある。連吾川は調査地点からさらに南約 2.5km で豊川と合流する。調査地点と連吾川との間には標高 80 ～ 85m で南北約 380m、東西約 110m の、南北方向に細長い凸地形がある。さらに、調査地点の東には標高 80 ～ 110m で南北方向に長い残丘状の尾根地形が連なっており、調査地点は先の凸地形とこの尾根地形との間に挟まれた谷状の凹地形の中にあ

る。凹地形の最大幅（東西幅）は約 140m である。調査地点の現在の地表標高と連吾川の周りにひろがる水田面との標高差はおおよそ 3 ～ 5m である。

石岸遺跡にて深掘を実施した。それらの地下層序を観察すると、各地点で実施した深掘層序の層相は下位層でみられる礫や砂を主体とする粗粒な層相と、それらの層相を覆う粘土を主とする細粒なものに大きく分けられた。下位層でみられる礫層は中礫～小礫からなり、砂層は極粗粒砂を主体とした。これは、調査地点にはかつて活

動的な河川流路が存在していたことを示し、礫層および砂層は黒褐色～灰黒色の粘土層を挟むため、活動的な流路は湿地を伴っていたと思われる。また、粗粒な地層の堆積年代について放射性炭素年代測定からは、調査地点西側の B 区の地点 3 において、もっとも下位でみられる標高 79.40～79.90m の極粗粒砂層を覆う黒褐色粘土層の下部（標高 79.91m）から採取した草本植物遺体について、試料 1 では 5426 - 5344 cal yrs BP (3477 - 3395 BC) (PLD-26654)、試料 2 では 5408 - 5325 cal yrs BP (3459 - 3376 BC) (PLD-26655) と、ともに 5400 年前～5300 年前代の値であった。その頃には活動的な流路が卓越する環境であったことがわかる。また、同じ地点 3 において砂層や礫層を覆う標高 81.60～82.00m の黒褐色粘土層の下部（標高 81.62m）より採取した土壌が 5040 - 4873 cal yrs BP (3091 - 1924 BC) (PLD-26652) であった。このことから、5000 年前～4800 年前代には地点 3 では水理学的な低エネルギー環境へと移り変わったことがわかる。この黒褐色粘土層の頂部（標高 82.00m）が縄文時代後期の遺構検出面であることから、水理環境の変化に伴ってヒトの生業活動が行なわれるようになったことがわかる。この黒褐色粘土層をさらに覆う標高 82.00～82.42m の粘土層と、標高 82.42～83.02m の粘土層からも土器片が地層中に分散するため、5000 年前～4800 年前以降も連綿とヒトが生活を続けていた様子がうかがえる。

いっぽう、調査地点東側の地点 1 (A 区) でも標高 78.55～79.65m の極粗粒砂層の最下部（標高 78.56m）より採取した木材片（試料 1）が 5049 - 4876 cal yrs BP (3100 - 2927 BC) (PLD-13941)、草本植物片（試料 2）が 4580 - 4437 cal yrs BP (2631 - 2488 BC) (PLD-13940) と、5000 年前～4400 年前代に調査地点の西側（地点 3）と同様に活動的な河川流路であったことがわかる。この極粗粒砂層を覆って粘土層と極粗粒砂層とが互層するようになる。標高 79.5～80.5m にみられる互層の堆積年代について、

下位層より、標高 79.65～79.85m の粘土層下部（標高 79.67m）で 3929 - 3833 cal yrs BP (1980 - 1884 BC) (PLD-13937)、標高 80.19～80.35m の粘土層下部（標高 80.21m）で 3929 - 3833 cal yrs BP (1980 - 1884 BC) (PLD-13938)、標高 80.53～80.63m の粘土層下部（標高 80.55m）で 2645 - 2489 cal yrs BP (696 - 540 BC) (PLD-13939) と 3900 年前～2400 年前代を示した。このことから、西側（地点 3）が 5000 年前～4800 年前代に水理学的な低エネルギー環境へと移り変わったのに対して、東側（地点 1）では 5000 年前～2400 年前代に渡り活動的な河川流路が流下するような高エネルギー環境であったことがわかる。考古学的には A 区の東端に南北方向の河道跡が検出されており、その河道の東縁辺では 7 世紀前半～9 世紀前半に大きな土地改変が行なわれているという所見（樋上，2009）から、少なくともそれ以前には河川跡であったことも調和的である。

謝辞

本論を作成するにあたり、放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループの伊藤 茂氏・安昭炫氏・佐藤正教氏・廣田正史氏・山形秀樹氏・小林紘一氏・Zaur Lomatatidze 氏・Ineza Jorjoliani 氏・小林克也氏にお世話になった。分析試料の整理・保管と原図の作成では整理補助員の前田弘子氏・鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

文献

樋上 昇，2009，石岸遺跡，平成 20 年度愛知県埋蔵文化財センター「年報」，53-56。

2. 石岸遺跡出土木材の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

1. はじめに

雁峰山の南麓で、連吾川左岸の東側緩斜面に位置する石岸遺跡では、溝跡などから出土した木製品や加工木、自然木の樹種同定を行なった。

2. 試料と方法

試料は、住居跡である 038SI から 3 点、溝跡である 001SD から 1 点、003SD から 73 点、086SD から 16 点、093SD から 1 点、101SD から 4 点、自然流路である 046NR から 5 点、出土遺構不明の試料が 3 点の、計 106 点である。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

生材の樹種同定では、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柃目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラルで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾

燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

同定の結果、針葉樹であるカヤとモミ属、マツ属複維管束亜属、ヒノキ、サワラの 5 分類群と、広葉樹であるクリとスダジイ、コナラ属アカガシ亜属（以下アカガシ亜属と呼ぶ）、コナラ属コナラ節（以下コナラ節と呼ぶ）、エノキ属、クスノキ科、サカキ、カマツカ、カエデ属の 9 分類群の、計 14 分類群が産出した。ヒノキが 60 点で最も多く、カエデ属が 9 点、モミ属が 8 点、コナラ節が 6 点、マツ属複維管束亜属が 4 点、サワラとクリ、アカガシ亜属、クスノキ科、カマツカが各 3 点、カヤとスダジイ、エノキ属、サカキが各 1 点の計 106 点である。同定結果を表 1 に、一覧を表 4-4 に示す。

表 4-4 石岸遺跡出土木材の樹種同定結果

樹種/器種	火切りうす	弓	板	角棒	丸棒	杭	加工木	加工木？	自然木	合計
カヤ		1								1
モミ属						1	7			8
マツ属複維管束亜属			2				2			4
ヒノキ	1		23	7	1	1	22	2	3	60
サワラ				2			1			3
クリ							2		1	3
スダジイ							1			1
コナラ属アカガシ亜属							1		2	3
コナラ属コナラ節							6			6
エノキ属							1			1
クスノキ科							1		2	3
サカキ									1	1
カマツカ							3			3
カエデ属							3		6	9
合計	1	1	25	9	1	2	50	2	15	106

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

(1) カヤ *Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc.
イチイ科 図 4-5 1a-1c(No.2)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、1～5細胞高となる。分野壁孔は小型のヒノキ型で、1分野に2～4個みられる。また仮道管の内壁には、2本1対のらせん肥厚がみられる。

カヤは暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は比較的重硬で弾力性に富み、切削等の加工は容易で、水湿によく耐える。

(2) モミ属 *Abies* マツ科 図 4-5
2a-2c(No.29)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は同性で、1～12細胞高となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に2～4個みられる。また放射組織の末端壁は、数珠状に肥厚する。

モミ属には高標高域に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミ、低標高域に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きくて、保存性に優れる。

(3) マツ属 複維管束亜属 *Pinus* subgen.
Diploxylon マツ科 図 4-5 3a-3c(No.10)

仮道管と放射仮道管、放射組織、垂直および水平樹脂道で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は、単列のものと、水平樹脂道を含む多列のものがみられる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側に向かって鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育する。アカマツもクロマツも、材質は重硬で、切削等の加工は容易である。

(4) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et

Zucc.) Endl. ヒノキ科 図 4-5 4a-4c(No.22)、
5a-5c(No.36)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、1～8細胞高となる。分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、1分野に2個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

(5) サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図 4-5・6
6a-6c(No.30)、7a-7c(No.35)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部はやや厚く、早材から晩材部への移行はやや急である。分野壁孔は単列で、1～11細胞高となる。分野壁孔はやや壁孔が開いて斜めに傾いたヒノキ型で、1分野に2個みられる。

サワラは岩手県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は軽軟で加工しやすく、水湿によく耐える。

(6) クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科 図 4-6 8a-8c(No.83)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は単列で同性となる。

クリは北海道の石狩、日高以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

(7) スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba ブナ科 図 4-6 9a-9c(No.85)

年輪のはじめに中型の道管が断続的に数列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列となる。

スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木

の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難でない。

(8) コナラ属 アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図 4-6 10a-10c(No.81)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定が出来ない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬、強靱で耐水性があり、切削加工は困難である。

(9) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図 4-6・7 11a-11c(No.80)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では急に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重く強靱で、切削加工はやや難しい。

(10) エノキ属 *Celtis* ニレ科 図 4-7 12a-12c(No.79)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では径を減じた道管が多数複合して斜線～接線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1～2列が方形となる異性で、1～4列となる。また放射組織は、不完全な鞘細胞を有する。

エノキ属にはエノキやシダレエノキなどがあり、代表的なエノキは本州から九州にかけての温帯から暖帯に分布する落葉高木の広葉樹である。材はやや硬いが、まとまって生育しないため、現在では薪炭材などに利用される程度である。

(11) クスノキ科 *Lauraceae* 図 4-7 13a-13c(No.88)

やや小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや疎らに散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端1列が直立する異性で、幅1～3列となる。

クスノキ科にはニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属などがあり、暖帯を中心に分布する、主に常緑性の高木または低木である。

(12) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図 4-7 14a-14c(No.100)

小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。道管は20～40段程度の階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、幅1～2列となる。

サカキは日本海側で新潟県、太平洋側で関東以西の本州、四国、九州などの温帯から亜熱帯に分布する常緑高木である。材は強靱、堅硬で、切削加工は困難である。

(13) カマツカ *Pourthiaea villosa* (Thunb.) Decne. var. *villosa* バラ科 図 4-7 15a-15c(No.52)

小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1～4列となる。

カマツカは温帯から暖帯の山地に分布する落葉低木の広葉樹である。材は重硬、強靱で、切削加工は困難である。農具、工具などの柄に多く用いられる。

(14) カエデ属 *Acer* カエデ科 図 4-7 16a-16c(No.90)

小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや疎らに散在する散孔材である。木部繊維の壁の厚さの違いで、木口面に雲紋状の文様がみられる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅1～6列となる。

カエデ属にはイタヤカエデやウリハダカエデなどがあり、代表的なイタヤカエデは各地に普通に

みられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工はやや困難である。

4. 考察

木製品では、弓を除くすべての器種でヒノキが最も多くみられた。火切りうすと丸棒、加工木？ではヒノキのみがみられ、板材ではヒノキの他にマツ属複雑管束亜属、角棒ではサワラ、杭ではモミ属がみられた。針葉樹は木理通直で真っ直ぐに生育し、加工性が良いという材質を持っているが、その中でもヒノキは耐朽性が高い（伊東ほか，2011）。そのため、多くの木製品で用いられた可能性がある。杭でみられたモミ属は、保存性が良いという材質を持つ（伊東ほか，2011）。杭材は地中に打ち込んで使用するため、耐朽性が高いヒノキと保存性が高いモミ属が利用されたと考えられる。

弓には、カヤが用いられていた。カヤは弾力性と加工性が良く、耐朽性にも優れる良材であるため（伊東ほか，2011）、弓に選択されたと考えられる。

石岸遺跡も含まれる三河地方では、7～8世紀頃の木製品にはヒノキ科の木材が多く利用されていることが報告されている（樋上，2012）。弓の用材では、各時期を通して三河地方ではイヌガヤの用材が多く、次いでマキ属が多くみられるが（樋

上，2012）、当遺跡の弓はカヤであった。7～8世紀頃の弓は、田原市の山崎遺跡でマキ属の弓1点がみられるが（伊東・山田編，2012）、他に事例は確認できず、弓におけるカヤの利用傾向は不明であった。

加工木でもヒノキが最も多かったが、ヒノキ以外の針葉樹および広葉樹も多くみられた。また自然木ではカエデ属が最も多く、ヒノキとクリ、アカガシ亜属、クスノキ科、サカキがみられた。自然木は遺跡周辺に生育していた樹木である可能性が高く、ヒノキなどの針葉樹と、アカガシ亜属、クスノキ科、サカキなどの常緑広葉樹林、クリとカエデ属などの落葉広葉樹林の混交林が広がっていた可能性がある。なお加工木の樹種構成をみると、自然木でもみられた広葉樹が多く確認できることから、加工木は遺跡周辺の樹木を伐採利用していたと考えられる。

引用文献

- 樋上 昇（2012）東海・中部－三重県・岐阜県・愛知県・静岡県－，木の考古学－出土木製品用材データベース－，193-209.
- 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，青海社.
- 伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学－出土木製品用材データベース－，449p，青海社.

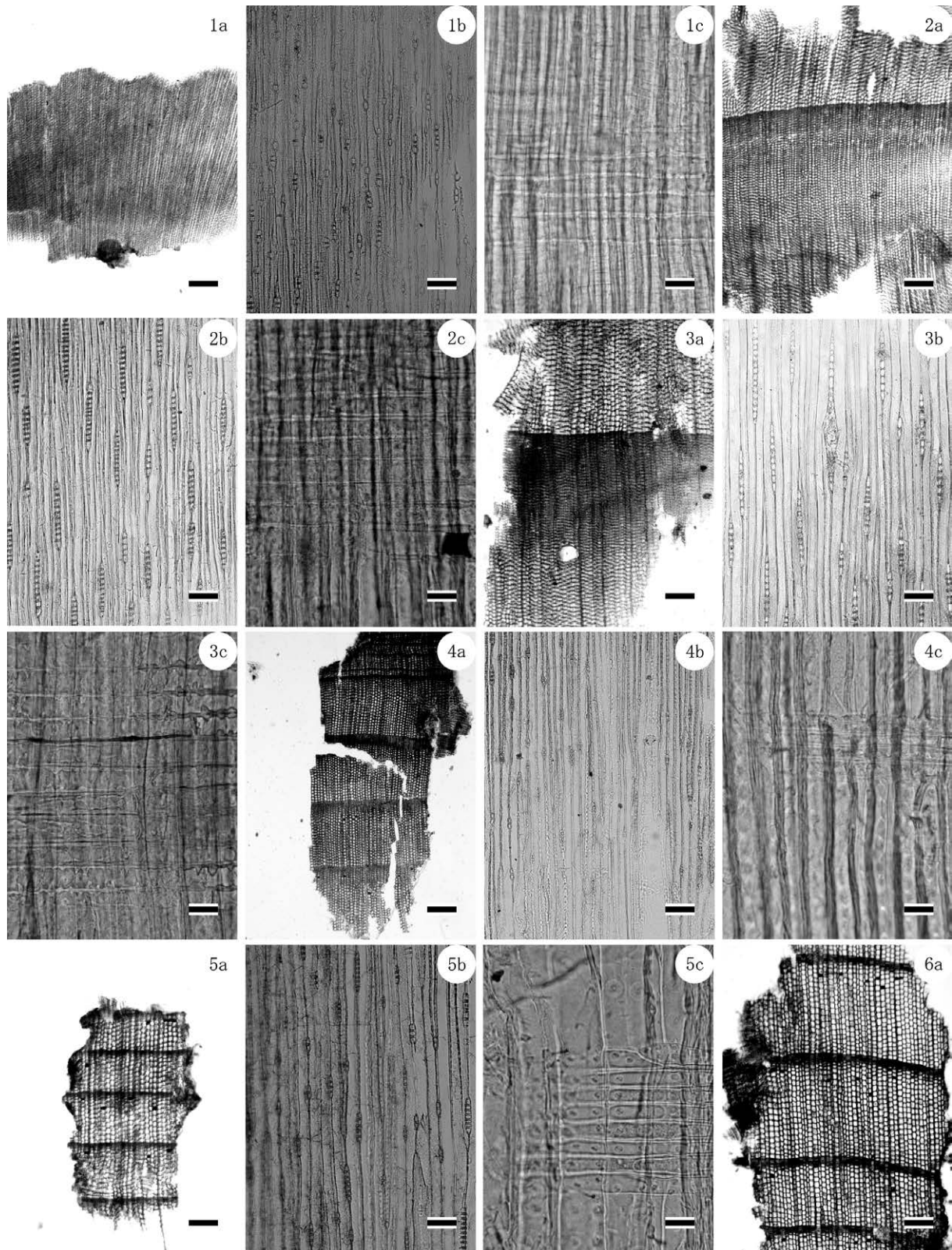


図 4-5 石岸遺跡出土木材の光学顕微鏡写真 -1

1a-1c. カヤ (No.2)、2a-2c. モミ属 (No.29)、3a-3c. マツ属複雑管束亜属 (No.10)、4a-4c. ヒノキ (No.22)、
5a-5c. ヒノキ (No.36)、6a. サワラ (No.30) a: 横断面 (スケール = 250 μm)、b: 接線断面 (スケール = 100 μm)、c:
放射断面 (スケール = 25 μm)

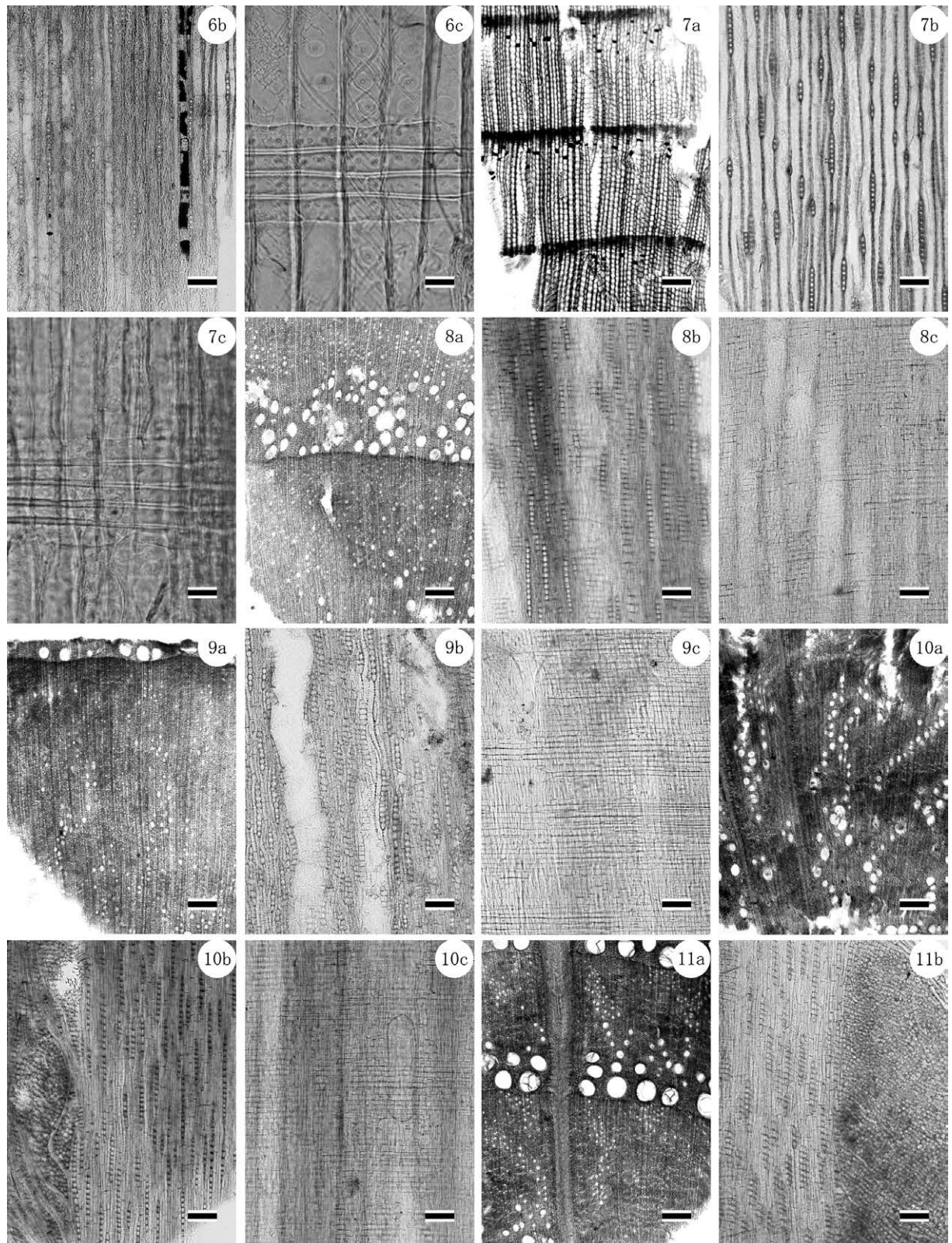


図 4-6 石岸遺跡出土木材の光学顕微鏡写真 -2

6b-6c. サワラ (No.30)、7a-7c. サワラ (No.35)、8a-8c. クリ (No.83)、9a-9c. スダジイ (No.85)、10a-10c. コナラ属アカガシ亜属 (No.81)、11a-11b. コナラ属コナラ節 (No.80) a: 横断面 (スケール=250 μm)、b: 接線断面 (スケール=100 μm)、c: 放射断面 (スケール=6-7:25 μm ・8-10:100 μm) 10|12j)

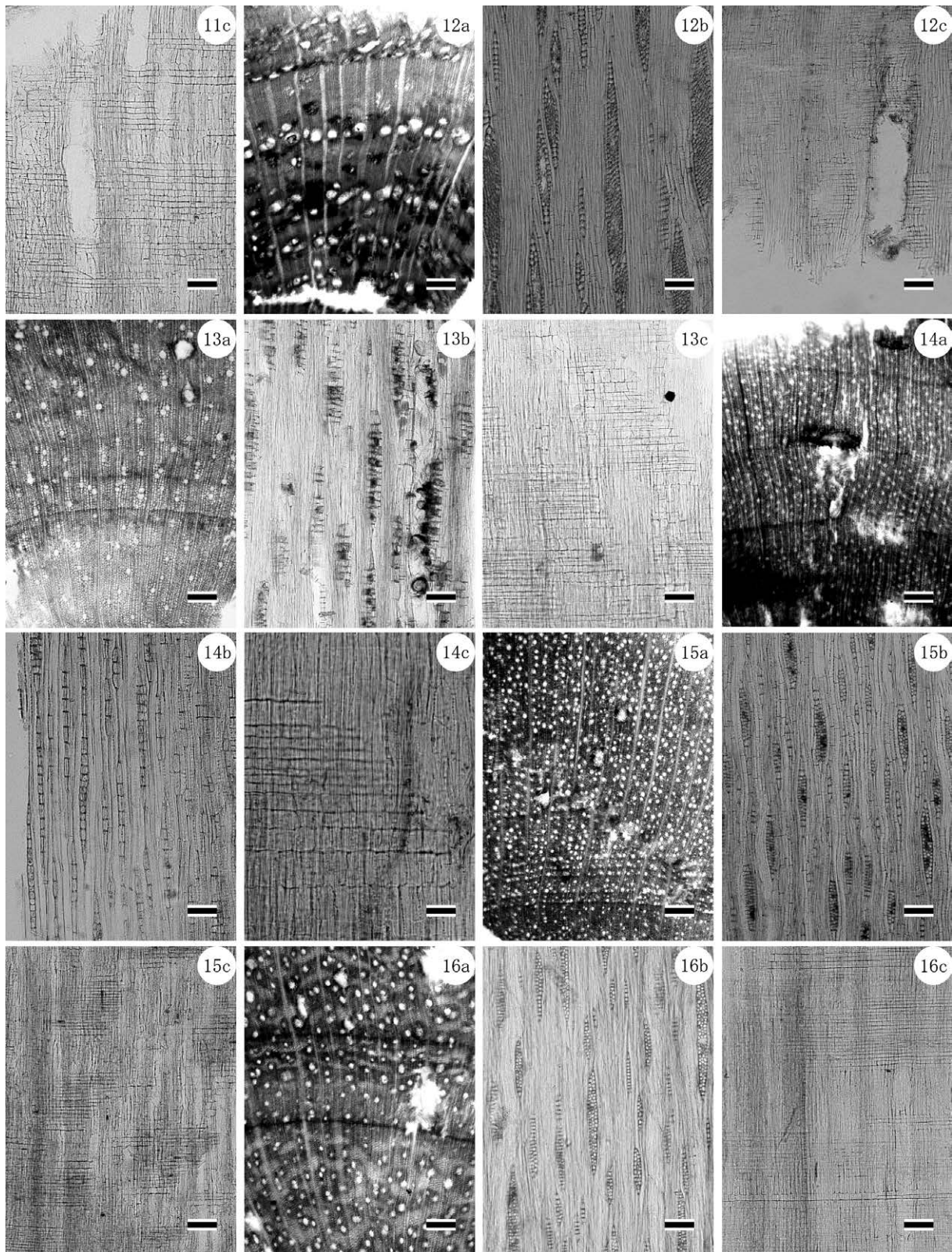


図 4-7 石岸遺跡出土木材の光学顕微鏡写真 -3

11c. コナラ属コナラ節 (No.80)、12a-12c. エノキ属 (No.79)、13a-13c. クスノキ科 (No.88)、14a-14c. サカキ (No.100)、15a-15c. カマツカ (No.52)、16a-16c. カエデ属 (No.90) a: 横断面 (スケール=250 μm)、b: 接線断面 (スケール=100 μm)、c: 放射断面 (スケール=14:50 μm ・14以外:100 μm)

3. 石岸遺跡出土の大型植物遺体

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

1. はじめに

愛知県新城市須長に位置する石岸遺跡は、雁峰山の南麓、豊川の支流である連吾川左岸にある残丘の東側緩斜面に立地する。遺構検出面の標高は、約 80m である。ここでは、7～8 世紀の溝跡などから出土した大型植物遺体を同定し、食用などとして利用された植物あるいは遺跡周辺における栽培状況や植生について検討する。

2. 試料と方法

試料は、発掘調査現場において目視で取り上げられた 21 試料である。対象としたのは、A 区で検出された溝跡である 003SD から 10 試料と、086SD から 1 試料、093SD から 1 試料、101SD から 7 試料、自然流路である 046NR から 1 試料、包含層から 1 試料である。考古学的な所見による試料の時期は、いずれも 7 世紀から 8 世紀である。

大型植物遺体の同定は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても 1 個体とみなせるものは完形として数え、1 個体に満たないものは破片とした。また、形状により、完形と動物食痕、打撃痕、破片に分類した。試料は、愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

3. 結果

同定した結果、木本植物では針葉樹のイヌガヤ種子 1 分類群と、広葉樹のモモ核とスモモ核 2 分類群の、計 3 分類群が得られた（表 4-5）。また計測可能なモモとスモモの一覧表を表 4-6 に示す。

以下に、産出した大型植物遺体について遺構別に記載する。

003SD: モモが 21 点（完形 11 点、動物食痕 4 点、破片 8 点）、イヌガヤ（破片）が 1 点得られた。

表 4-5 石岸遺跡から出土の大型植物遺体（括弧内は破片数）

分類群	調査区 遺構名 遺構の種類 時期	A区					
		003SD	086SD	093SD	101SD	046NR	包含層
		溝跡				自然流路	包含層
		7～8世紀					
イヌガヤ	種子	(1)					
モモ	核(完形)	11			7	1	
	核(動物食痕)	4			2		
	核(打撃痕)		(1)				
	核(破片)	(8)		(3)	(12)		
スモモ	核				1		

086SD：モモ（打撃痕）が1点得られた。

093SD：モモ（破片）が3点得られた。

101SD：モモが21点（完形7点、動物食痕2点、破片12点）、スモモ（完形）が1点得られた。

046NR：モモ（完形）が1点得られた。

包含層：礫であった。

次に、産出した大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) イヌガヤ *Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc. 種子 イチイ科

赤褐色で、完形ならば上面観は両凸レンズ形。側面観は長卵形で両端がやや尖る。表面には顆粒状の浅い隆起がある。種皮は厚く硬い。長さ15.1mm、幅10.1mm。

(2) モモ *Amygdalus persica* L. 核 バラ科

黄褐色～茶褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は卵形～楕円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面には不規則な深い皺があり、片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。計測可能な24点の大きさは、長さ18.9～35.4（平均22.8±3.9）mm、幅16.5～22.4（平均19.0±1.7）mm、厚さ12.4～17.5（平均15.6±1.2）mmであった。

(3) スモモ *Prunus salicina* Lindl. 核 バラ科

赤褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は紡錘形。縫合線に沿ってやや深い溝が入る。表面は平滑だが、臍付近に縦方向の不規則な皺がある。長さ15.5mm、幅12.1mm、厚さ8.2mm。

4. 考察

7～8世紀の溝跡などから産出した大型植物遺体を同定した結果、栽培植物のモモとスモモ、野生植物のイヌガヤが得られた。モモの形状は完形個体が多いが、半分以下に割れた個体やアカネズミによると推定される円形の食痕を持つ個体も見いだされた。086SDでは、縫合線に沿って割れていないため打撃痕と判断した個体が1点含まれていた。

山梨県内の遺跡から出土したモモ核の事例を集成した新津（1999）によると、モモの核は時代

ごとに大きさや形状が変化しており、弥生時代では比較的大きくかつ丸味が強い核が多いのに対し、平安時代から近世には縦長になる傾向があるという。さらに、鎌倉期では大きさの変異幅が大きく、江戸時代後期になると大型になり、平均核長2.69cm、最大で3.8cm程度の核がみられるとしている。石岸遺跡から出土したモモ核は、平均で長さ2.28±0.39cm、幅1.90±0.17cm、厚さ1.56±0.12cmで、大きさの変異に幅があり、比較的大きくて縦長のタイプ（長さ3.56cm、幅2.24cm、厚さ1.53cm：図4-8-2）と小さくて丸みの強いタイプ（長さ2.38cm、幅2.06cm、厚さ1.61cm：図版4-8-4）がみられた。また、モモは食用可能な植物であるが、呪術的な意味を持つため、しばしば祭祀との関連が推定される。石岸遺跡では溝跡から46点が産出したが、特定の溝跡や位置から集中して出土する産状はみられなかった。

イヌガヤは種子内部の胚乳に油分を含むため、油として利用可能な植物である（長沢，2012）。1点しか産出していないが、堅い種子が破片で産出しており、利用された可能性がある。

今回検討したのは、発掘調査中に目視で取り上げられた種実で、良好な状態で残存していた。したがって今後、堆積物中に含まれる大型植物遺体を解析すれば、当時の植生や植物利用についてのより詳細な検討が可能になると思われる。

引用文献

長沢 武（2012）野外植物民俗事苑，443p，ほおずき書籍。

新津 健（1999）遺跡から出土するモモ核について—山梨県内の事例から—，山梨考古学論集IV，

表 4-6 石岸遺跡から出土した計測可能なモモ・スモモ一覧（括弧内は破片値（mm））

地区	グリッド	遺構名	分類群	部位	長さ	幅	厚さ	形状	図版No.
A区	10I12k	003SD	モモ	核	27.3	22.2	17.5	完形	No.3
			モモ	核	23.1	20.0	(15.1)	完形	
A区	10I13j	003SD	モモ	核	25.0	20.3	15.9	完形	
			モモ	核	22.0	(21.0)	16.3	動物食痕	
A区	10I13k	003SD	モモ	核	23.8	20.6	16.1	完形	No.4
			モモ	核	20.0	18.9	16.0	完形	
			モモ	核	20.6	17.5	15.1	完形	
			モモ	核	(18.4)	16.5	13.6	完形	
			モモ	核	20.1	(17.9)	14.9	動物食痕	
			モモ	核	19.2	17.2	14.7	完形	
			モモ	核	19.6	18.3	16.7	完形	
A区	10I14k	003SD	モモ	核	20.3	18.6	15.6	完形	
			モモ	核	23.6	(20.2)	17.0	動物食痕	No.8
			モモ	核	29.4	(21.7)	(12.8)	動物食痕	No.7
			モモ	核	20.3	18.6	15.6	完形	
			モモ	核	35.6	22.4	15.3	完形	No.2
A区	10I14k	086SD	モモ	核	25.0	17.7	(8.9)	打撃痕	No.6
A区	10I12j	101SD	モモ	核	22.2	20.0	15.8	完形	
			モモ	核	19.8	17.0	16.2	完形	
			モモ	核	20.6	19.7	16.8	完形	
			モモ	核	22.8	18.6	14.9	完形	
			スモモ	核	15.5	12.1	8.2	完形	
A区	10I13j	101SD	モモ	核	21.0	20.5	16.9	完形	
			モモ	核	24.7	18.4	12.4	完形	
			モモ	核	(19.2)	(10.6)	15.3	動物食痕	No.9
A区	10I13j	046NR	モモ	核	18.9	17.4	13.6	完形	No.5



スケール 1-10:5mm

図 4-8 石岸遺跡から出土した大型植物遺体

1. イヌガヤ種子 (003SD、10I12k)、2. モモ核完形 (003SD、10I14k)、3. モモ核完形 (003SD、10I12k)、4. モモ核完形 (003SD、10I13k)、5. モモ核完形 (046NR、10I13j)、6. モモ核打撃痕 (086SD、10I14k)、7・8. モモ核動物食痕 (003SD、10I14k)、9. モモ核動物食痕 (101SD、10I13j)、10. スモモ核 (101SD、10I12j)

4. 石岸遺跡の黒曜石原産地同定

井上 巖 (第四紀 地質研究所)

1. 実験条件

分析はエネルギー分散型蛍光X線分析装置（日本電子製J S X-3200）で行なった。

この分析装置は標準試料を必要としないファンダメンタルパラメータ法（F P法）による自動定量計算システムが採用されており、6 C～9 2 Uまでの元素分析ができ、ハイパワーX線源（最大30 k V、4 m A）の採用で微量試料～最大290 mm ϕ ×80 mm Hまでの大型試料の測定が可能である。小形試料では16試料自動交換機構により連続して分析できる。分析はバルクF P法でおこなった。F P法とは試料を構成する全元素の種類と濃度、X線源のスペクトル分布、装置の光学系、各元素の質量吸収係数など装置定数や物性値を用いて、試料から発生する各元素の理論強度を計算する方法である。

実験条件はバルクF P法（スタンダードレス方式）、分析雰囲気＝真空、X線管ターゲット素材＝Rh、加速電圧＝30 k V、管電流＝自動制御、分析時間＝200 秒（有効分析時間）である。

分析対象元素はSi, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, K, P, Rb, Sr, Y, Zrの14元素、分析値は黒曜石の含水量＝0と仮定し、酸化物の重量％を100％にノーマライズし、表示した。

地質学的には分析値の重量％は小数点以下2桁で表示することになっているが、微量元素のRb, Sr, Y, Zrは重量％では小数点以下3～4桁の微量となり、小数点以下2桁では0と表示される。ここでは分析装置のソフトにより計算された小数点以下4桁を用いて化学分析結果を表示した。主要元素と微量元素の酸化物濃度（重量％）でSiO₂-Al₂O₃, Fe₂O₃-TiO₂, K₂O-CaOの各相関図、Rb-Srは積分強度の相関図の4組の組み合わせで図を作成した。

2. 関東・中部・東海の黒曜石

2-1・1 長野県

長野県内に分布する黒曜石は、和田峠周辺の西餅屋、東餅屋、小深沢地区をあわせた和田峠系—1、男女倉5～7地区と星ヶ塔地区をあわせた和田峠系—2、北八ヶ岳の麦草峠周辺と冷山地区をあわせた蓼科系の3地域に分かれる。和田峠系の黒曜石はフォッサマグナ中央部の大規模流紋岩中に産する。高松山—虫倉山の南斜面を北西—南東方向に走る鷹山断層の南側での黒曜石はガスの抜けた気泡痕がなく、均質で、ハンマーでうち欠くと貝殻状に割れ、鋭利な刃先が打ち出される黒曜石である。この黒曜石を産する流紋岩は新生代第四紀の約70～130万年前に噴出、あるいは貫入したものである（手島、1994）。麦草峠と冷山の黒曜石は第四紀に噴出した八ヶ岳火山群の丸山溶岩流に被覆された同じ流紋岩の中に形成されたもので、26～27万年前とされている（河内、1974、1998）。

A) 和田峠系—1

a 長野県和田村西餅屋

西餅屋の黒曜石は和田峠の西側に隣接する標高1657 mの山体を取り囲んでリング状に分布する。この黒曜石は現在、芙蓉パーライト（株）によって採石されている。試料は同社の採掘現場である坑道内で採取した。坑道内の黒曜石岩体は全体として亀裂が多く、10～15 cmの角礫状であるが一部に30～50 cm大のものもある。黒曜石は黒色で気泡跡に乏しく、小片にすると透明性が高く、貝殻状に割れる。

b 長野県和田村東餅屋

和田峠東の東餅屋の黒曜石は標高 1500 m 付近の採石場跡の露頭に分布し、厚さ 1 ～ 2 c m の薄い黒曜石脈が流紋岩と互層して産する。黒曜石脈の厚いところでは 15 ～ 20 c m、黒色で気泡跡と亀裂が多く 3 ～ 5 c m の小角礫に分離する。

c 長野県和田村小深沢

小深沢の黒曜石は和田峠北のビーナスラインの道路沿い標高 1600 m 付近に分布する。現在黒曜石はほとんど採掘されつくされその規模は定かではない。試料はこの採石場跡の法面から採取した。法面は高さ約 30 m、幅 80 ～ 100 m と広い。顆粒状の 5 mm ± の黒曜石が厚さ約 1 ～ 2 c m の縞状の流紋岩中に互層して挟まっている。本来の黒曜石岩体はもっと大きいと推察される。その痕跡として段切りした法面で 10 ～ 15 c m の角礫状のものが採取される。この黒曜石は黒色で気泡跡に乏しく、貝殻状に割れる。

B) 和田峠系—2**a 長野県和田村男女倉**

男女倉地区の黒曜石は男女倉川の東側、標高 1300 ～ 1350 m の斜面に分布し、北から男女倉—5、6、7 とほぼ南北に分類されている（和田村教育委員会、1993）。

男女倉—5 の黒曜石は標高 1350 m の山腹の南側斜面から沢に至る地すべり地内で採取される。この地すべり地末端を横断する林道の切通し法面（高さ約 15 m）に斜面上部から移動し、堆積した多量の黒曜石岩塊が露出している。黒曜石は黒色で 50 ～ 60 c m の垂円礫で気泡跡が点在する。男女倉—6 は黒曜石の採石が行われた跡地で、黒曜石の岩塊は黒色でジョイントが多く、5 ～ 7 c m の角礫状を呈し、気泡跡が多い。

男女倉—7 は林道路盤に露出するもので、男女倉—6 と連続する黒曜石である。

b 長野県和田村星ヶ塔

星ヶ塔の黒曜石は和田峠東方、新和田トンネル諏訪側出口の東を流下する御料沢の上流域、標高 1576 m の山体にリング状に分布する。現在は山体北側斜面の標高 1350 ～ 1400 m で芙蓉パーライト（株）によって黒曜石が採石されている。黒曜石の試料採取は現在稼働中の採石場の岩体で行なった。黒曜石は幅 20 ～ 25 m、高さ約 10 ～ 15 m の岩体で、ジョイントが多く入り、10×5 c m 程度の角礫となるが大きなものでは 50×30 c m のものもある。黒曜石は黒色で気泡跡に乏しく、均質で、貝殻状に割れる。薄く割ると透明となる。

c 長野県長門町鷹山

鷹山の黒曜石は標高 1350 ～ 1400 m の鷹山部落の鷹山川沿いに河床堆積物として分布する。大きなものでは人頭大のものが採取されたといわれているが、現在はペンション脇の支流の小さな法面と支流の河床中で採取される。黒曜石は黒色、硬質で、打ち欠いた薄い断面では透明で、気泡跡に乏しく、均質で、貝殻状に割れる。

C) 蓼科系

麦草峠と冷山との間には丸山溶岩が広く分布し、両地域の黒曜石は異なる時期に生成したように見えるが冷山と麦草峠の黒曜石は同時期の流紋岩の中に生成したものである（河内、1974、1998）。冷山の黒曜石はサカサ川の上流域の標高約 1800 m 付近に広く分布し、麦草峠の黒曜石は麦草峠（標高 2120 m）から白駒池駐車場の東側、国道 299 号の道路法面にかけての広い地域に分布する。両者の距離は直線距離で、約 3.0 km である。

a 長野県茅野市冷山

冷山の黒曜石は麦草峠の西斜面で、サカサ川の上流域の標高約 1800 m 付近に広く分布している。露頭は高さ 10 ～ 15 m、幅 50 ～ 70 m の広

い範囲で急崖をなす。露頭の下部では黒曜石は厚さ1～2 cm、3～5 mmの顆粒状を呈し、黒曜石と流紋岩との間で厚さ2～3 cmの互層をなす。黒曜石は上部にむかって厚くなり、最上部では1 m+の厚さを有し、黒色で気泡跡に乏しく、透明性が高い。岩塊では黒色であるが、貝殻状細片では透明となる。

b 長野県八千穂村麦草峠

麦草峠の黒曜石は麦草峠（標高 2120 m）から白駒池駐車場の東側、国道 299 号の道路法面にかけての広い地域に分布する。白駒池駐車場の東側、道路法面両側に露頭する黒曜石の岩体は 30 × 50 m と大きく、黒曜石は黒色で気泡跡が点在し、露頭ではジョイントが多く 5 ～ 8 cm 程度の角礫に分離する。この岩体を中心として斜面上部と下部では黒曜石は貧弱となり、流紋岩の中に 3 ～ 5 mm の顆粒状の黒曜石として互層する。

3. 分析結果

表 4-7 化学分析表には分析結果、表 4-8 原産地対比表には分析結果に基づいて原産地も記載してある。

1) 図 4-9 R b – S r 図に示すように、和田峠系－1 は 1 個も検出されず、和田峠系－2 が中心となる。

2) 最も多く検出されたのは弱被熱・和田峠系－2 が 5 個、弱被熱・和田峠系－2 C a タイプが 3 個である。

3) 弱被熱・和田峠系－2 C a タイプとは焼成の際に小枝など木類の火に当たったもので、弱被熱・和田峠系－2 の K a タイプとは火の種類が異なると推察される。

4) 和田峠系－2 のうち男女倉 5 は黒色でガスの抜けた小さな跡があり均質ではなく、透明感のある材質からするといし石岸遺跡の遺物は均質な星ヶ塔に近い。

引用文献

- 井上 巖 (2000) 東北・北陸北部における原産地黒曜石の蛍光 X 線分析 (X R F) 北越考古学、第 11 号、23-38/
- 井上 巖 (2001) テフラ中の火山ガラスの同定に関する一提言、軽石学雑誌、第 7 号 23-51.
- 井上 巖 (2008) 東北日本の原産地黒曜石 関東・中部・東海編
- 井上 巖 (2008) 東北日本の原産地黒曜石 東北・北陸編
- 井上 巖 (2008) 東北日本の原産地黒曜石 北海道編
- 井上 巖 (2008) 東北日本の原産地黒曜石写真集

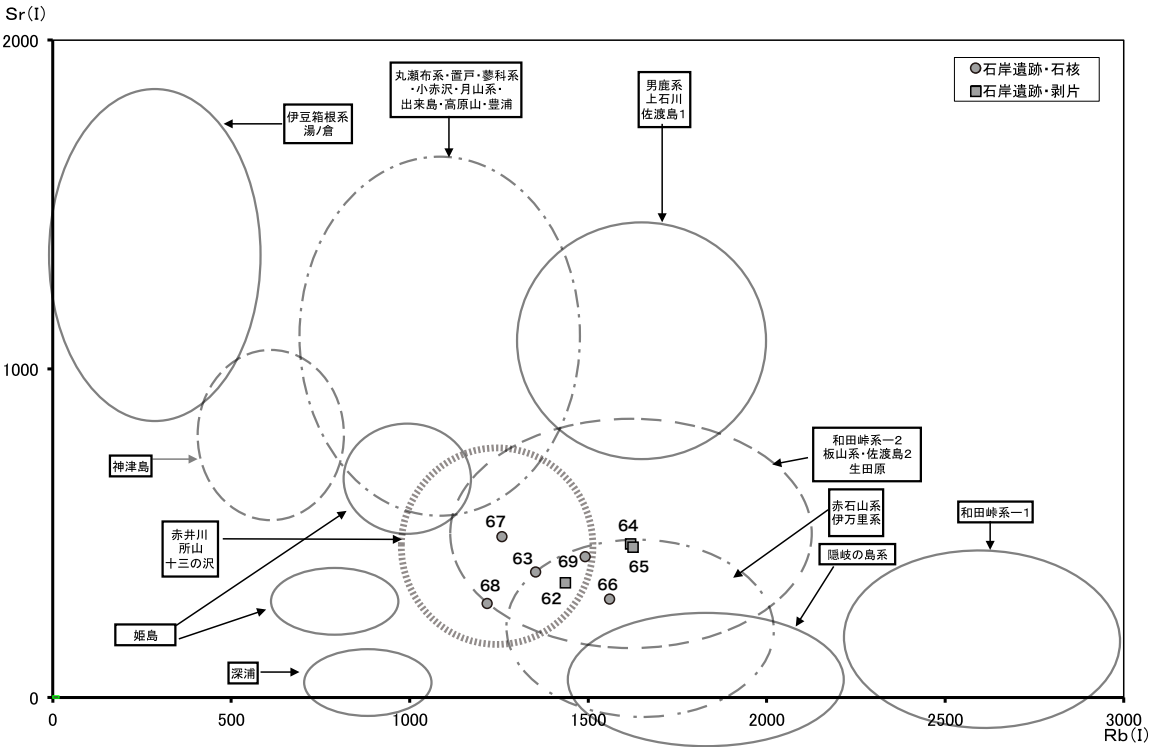


図 4-9 石岸遺跡 Rb – Sr 図

表 4-7 化学分析表

試料名	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	P2O5	K2O	CaO	TiO2	MnO	Fe2O3	Rb2O	SrO	Y2O3	ZrO2	Total	Rb(I)	Sr(I)	原産地	器 種	整理番号	登録番号	
IS-62	3.0095	0.0000	11.7728	77.7997	0.5463	4.8403	0.5419	0.2343	0.1165	1.0832	0.0263	0.0065	0.0036	0.0190	99.9999	1436	349	弱被熱・和田峠系-2	C a	剥片	21	
IS-63	3.0182	0.0000	11.8680	77.4456	0.5650	4.8387	0.6407	0.2446	0.1345	1.1863	0.0275	0.0079	0.0021	0.0208	99.9999	1353	382	弱被熱・和田峠系-2	C a	石核	31	
IS-64	2.6670	0.0000	11.2859	75.4214	0.6362	7.8359	0.7065	0.1477	0.1254	1.1051	0.0341	0.0100	0.0027	0.0221	100.0000	1618	465	弱被熱・和田峠系-2		剥片	241	74
IS-65	2.9490	0.0000	11.8025	77.6482	0.6002	4.9897	0.5371	0.1639	0.1271	1.1209	0.0314	0.0090	0.0007	0.0203	100.0000	1623	456	弱被熱・和田峠系-2		剥片	426	
IS-66	3.0912	0.0000	11.8562	77.3024	0.6571	5.0347	0.5160	0.2205	0.1188	1.1465	0.0301	0.0059	0.0045	0.0161	100.0000	1559	300	弱被熱・和田峠系-2	C a	石核	769	17
IS-67	2.5456	0.0000	10.8677	79.4699	0.5561	4.7929	0.5024	0.1615	0.1139	0.9407	0.0228	0.0090	0.0048	0.0126	99.9999	1260	488	弱被熱・和田峠系-2		石核	772	18
IS-68	2.9116	0.0000	11.2409	78.9706	0.5899	4.6133	0.5402	0.1265	0.0935	0.8614	0.0218	0.0052	0.0080	0.0170	99.9999	1217	287	弱被熱・和田峠系-2		石核	833	48
IS-69	3.1180	0.0000	11.1100	78.3116	0.5994	5.1532	0.4857	0.1752	0.1090	0.8882	0.0264	0.0077	0.0046	0.0109	99.9999	1493	428	弱被熱・和田峠系-2		石核	1023	49

表 4-8 原産地対比表

試料名	原産地	器 種	整理番号	登録番号
IS-64	弱被熱・和田峠系-2	剥片	241	74
IS-65	弱被熱・和田峠系-2	剥片	426	
IS-67	弱被熱・和田峠系-2	石核	772	18
IS-68	弱被熱・和田峠系-2	石核	833	48
IS-69	弱被熱・和田峠系-2	石核	1023	49
IS-62	弱被熱・和田峠系-2 C a	剥片	21	
IS-63	弱被熱・和田峠系-2 C a	石核	31	
IS-66	弱被熱・和田峠系-2 C a	石核	769	17

第5章 総括

この石岸遺跡に所在した、柱掘り方が1mを超える大型総柱建物 650・1013SB に関連して、古代（3期）の遺構群について纏め直すことにより、総括としたい。

第1章で詳述したように、本遺跡の古代はおむね7世紀中葉から10世紀後半におよぶ。そして、それを3-1～3-4期に区分して変遷案を示した（表5-1・図5-1）。

3-1期（7世紀中葉～後半）

A区の東南部約1/3は河道046NRが機能している。ここに南西から北東に伸びる溝190(086)SDが掘削され、この溝の埋没とともにA区西半部で竪穴建物の築造が開始される。築造されたのは037・144・042・036SIの順で、このほか032SIも3-1期に属するとみられる。このうち出土遺物から時期が確定しているのは036SIで東山50～岩崎17号窯式期併行。

B区には竪穴建物はなく、036SIに軸線に近い1014・1015SBがこの時期の掘立柱建物と推定される。

本遺跡の東約250mの丘陵南端部に所在する須長10号墳（直径約14mの円墳）が平成22粘土の発掘調査によって岩崎17号窯式期併行（7世紀後半）であることがわかっており、この古墳

に併行する時期で最も近いこの石岸遺跡が、須長10号墳の被葬者が居住していた集落である可能性がきわめて高い（愛知県埋蔵文化財センター2014）。

須長古墳群は10基からなる群集墳とされているが、石岸遺跡の東の丘陵上に所在するのは9・10号墳のみで、1～4号墳は北の丘陵部、5・6号墳は北東側の尾根筋、7・8号墳は本遺跡の北西の独立丘陵上と立地がばらつくことから、本来はひと纏まりの古墳群ではなかった可能性が高い。また、発掘調査で時期が確定したのは10号墳のみであることから、現況では10号墳に限って石岸遺跡3-1期に関連する古墳としておく。

3-2期（7世紀末～8世紀前半）

A区では河道046NRと西の微高地の境に、新たに溝003SDが掘削される。この溝の調査区北東端からは当該期の弓や火鑽臼などの木製品が出土している。003SDはA区の中ほどで分岐し、微高地の縁に沿って北西側に伸びる溝001SD-B(110SD)・101SDからは東山50号窯式期を含みつつ岩崎17号窯式期併行、003SDからは高蔵寺2号窯式期併行の須恵器が比較的纏まって出土している。001SD-B・101SDの埋没後に093SD・095SIが築かれる。

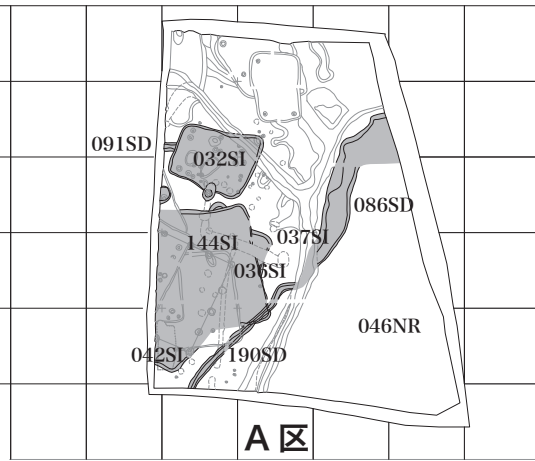
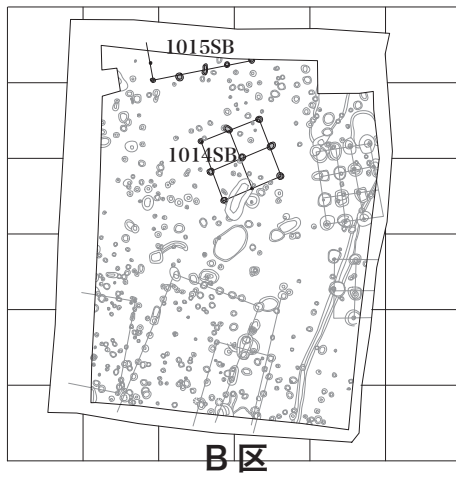
表5-1 3期の遺構変遷表

		3-1期 (H-50～I-17)	3-2期 (I-17～C-2)	3-3期 (I-25～O-10)	3-4期 (K-14～H-72)
A区	河道	046NR			
	溝	(086SD) 190SD 091SD	003SD 101SD 110SD(001SD-B) 093SD		004SD 002SD (001SD-A)
	竪穴建物	037SI 144SI 042SI 036SI (032SI)	035SI 033SI 034SI 031SI 095SI (038SI)		
	掘立柱建物				100SB
B区	土坑	145・150・161・163・164SK 058SK	500SD		
	溝				
	掘立柱建物	(1014SB) (1015SB)	(1016SB) (1017SB)	650SB 1013SB	(651SB)
	柵列		(1018SA)		

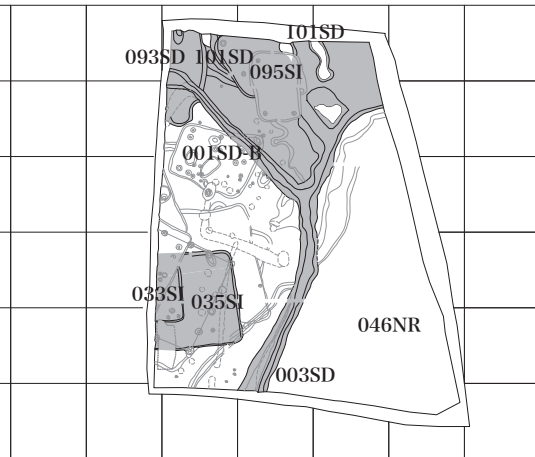
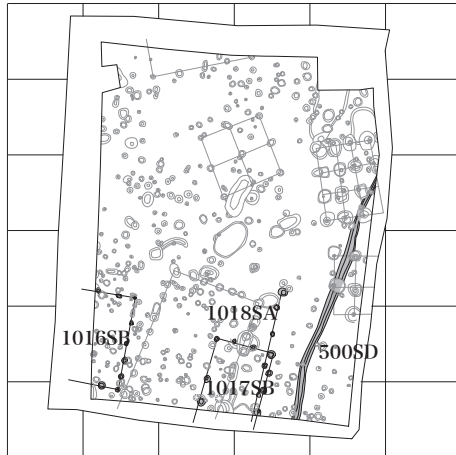
須長10号墳

※ 太ゴシックは時期の明確な遺物が出ている遺構、かっこ付は所属時期の決め手に欠ける遺構

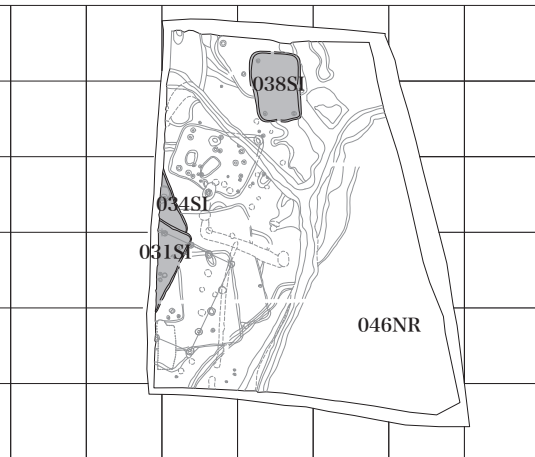
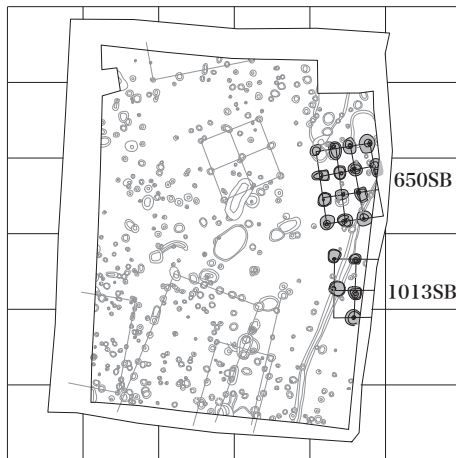
3-1 期



3-2 期



3-3 期



3-4 期

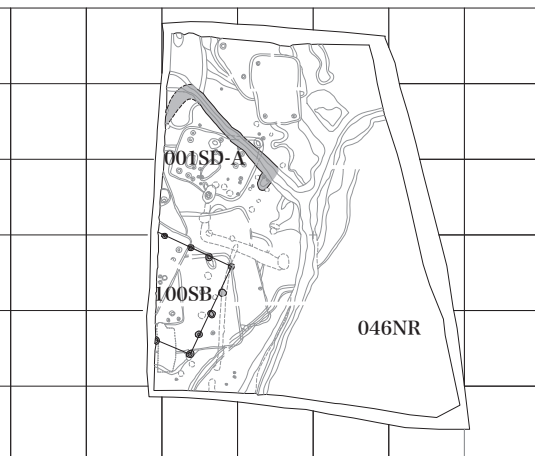




図 5-2 石岸遺跡 3-3 期と周辺の地形 (新城市都市計画図 1:2,500 より作成)

また、003SD の西側では 035SI、次いで 033SI が築かれる。

B 区では、A 区の 003SD から西に分岐した 001SD-B (110SD) の延長とみられる 500SD が調査区の東端を南北に走る。この溝に平行して建てられた 1016・1017SB と 1018SA がこの 3-2 期の掘立柱建物および柵列と推定している。

3-3 期 (8 世紀中葉～末)

大型の総柱建物 650・1013SB が B 区に築かれる時期。650SB の柱抜き取り穴から出土した完形の短頸壺が城ヶ谷和広氏の同定により猿投窯産鳴海 32 号窯式期に属することから、8 世紀後半にこの建物が廃絶したことがわかる。南の 1013SB は建物の主軸が 650SB よりも真北に近い方位をとるが、西側の柱筋が揃うことを考慮すれば、同時併存と考えておくのが自然であろう。

北で 10°前後西に振れる 650SB の軸線は、この石岸遺跡周辺の水田地割などにおいても認められる (図 5-2)。また、雁峰山から伸びる尾根筋の縁を走る現道の、本遺跡に最も接近した場所での方位もこれに近い。巨視的にみて、この本遺跡周辺で古代からの交通路が存在していたとすると、この雁峰山の山裾の道が最も可能性が高く、現在でも設楽郡田口から長野県飯田市に抜ける主要幹線道路のひとつとなっている。現在の道は尾根を深く削り込んでいることから、丘陵間の狭い谷筋が本来の道であった可能性が高い。

B 区で 650・1013SB 以外の当該期の掘立柱建物は不明だが、第 1 章で述べたように調査時に西側の整地層を重機で掘削し過ぎたために滅失した掘立柱建物の大型柱穴が調査区西側の壁面に複数認められることから、650・1013SB よりも西側にも数棟同規模の掘立柱建物が本来は存在していた可能性が高い。

この整地層は B 区壁面の土層断面と出土遺物をみる限り、7 世紀中葉から 10 世紀にいたるまで、幾度にも渡って造成されたと考えられる。この石岸遺跡が載る微高地は、遺跡の西側を南北に伸びる独立丘陵の東斜面にあたる。この独立丘陵の地勢を子細にみると、本遺跡の北西側のみが不

自然にえぐれていることがわかる。おそらくは、この部分の土砂を削り取って B 区から A 区西半分に渡って整地をほどこしたのであろう。また、丘陵を削ることによってその部分も平坦面を確保することができ、およそ 80m 四方の平坦面を造りだしている。このような大土木工事を最初に計画・差配した指導者こそが須長 10 号墳の被葬者であった可能性が高い。

この B 区で確認できた掘立柱建物のうち、滅失したものを除けば 650・1013SB のみが柱掘り方の一辺が 1m を超える方形である。しかも総柱であることから、機能は倉庫と考えて差し支えなく、なんらかの公的な性格を帯びていた可能性が高い。本遺跡の約 1.3km 南西に位置する神田遺跡 (新城市教育委員会 2009) や約 1km 南西の大宮・塚田遺跡 (森田 2001) では奈良時代の瓦が採取されていることから、この石岸遺跡 3-3 期の性格もまた、周辺の遺跡との関わりでみていく必要性があろう。

3-4 期 (9 世紀前半～10 世紀後半)

A 区では 3-2 期の溝 001SD-B が再掘削され、コの字状に南に開く溝 001SD-A となる。その南には 4×3 間以上の掘立柱建物 100SB が築かれる。

B 区の掘立柱建物 651SB もこれと主軸を同じくすることから、当該期と考えられる。側柱には 2 つの柱穴を 1 つの掘り方で掘削するという布堀建物に近い建築方法がとられている。

A・B 両調査区ともに 11 世紀以降の遺物がほとんど認められないため、10 世紀後半を境に本遺跡は廃絶したと思われる。

引用文献

愛知県埋蔵文化財センター 2014『須長 10 号墳』
新城市教育委員会 2009『八剣遺跡・神田遺跡発掘調査報告書』
森田勝三 2001「新城市大宮・塚田遺跡出土の古瓦」
『伊勢湾考古』15



A区3面完了 西から



A区3面001・003SD完掘状況 南から



A区3面 001SD-B 全景 南東から



A区3面 003SD・046NR 南から



A区3面 037・144SI 全景 西から



A区3面 046NR 木製品出土状況



A区3面 101SD 土器出土状況 西から



A区3面 101SD 土器出土状況 南から



A区3面 101SD 土器出土状況 北から



A区1・2面遺構検出状況 南西側 東から



A区1・2面遺構検出状況 南西側 南から



A区1・2面遺構検出状況 南西側 北から



A区1・2面遺構検出状況 北東から



A区1・2面完了 西から



A区1・2面完了 東から



A区1・2面完了(南半) 東から



A区1・2面001SD・032・038SI 全景 西から



A 区 2 面 003SD
木製品出土状況 西から



A 区 2 面 003SD
木製品出土状況 南西から



A 区 2 面 003SD
木製品出土状況 北から 1



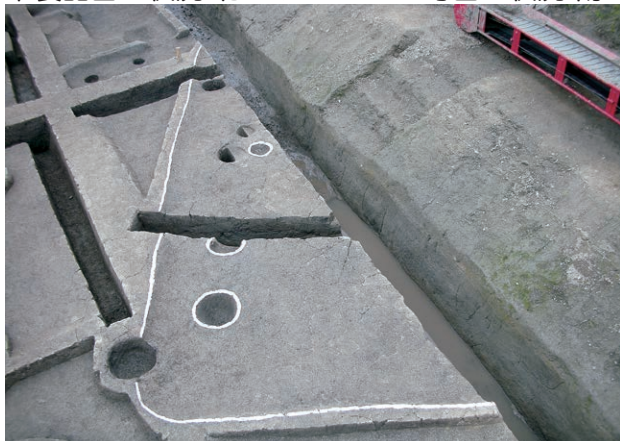
A 区 2 面 003SD
木製品出土状況 北から 2



A 区 2 面 003SD
弓出土状況 南から



A 区 2 面 003SD
火鏃臼出土状況



A 区 2 面 031SI 全景 北東から



A 区 2 面 032SI 全景 東から



A 区 2 面 033SI 全景 西から



A区2面034SI全景 西から



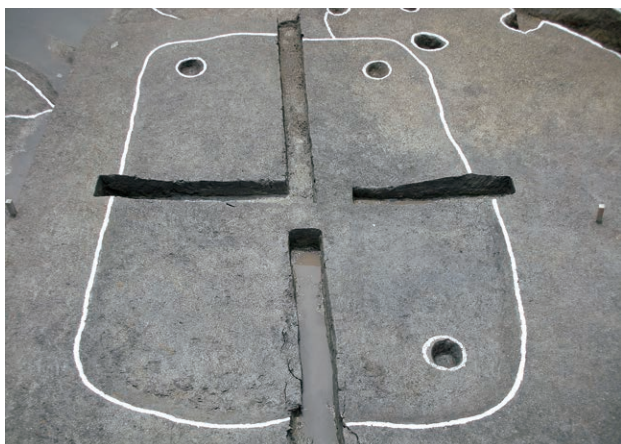
A区2面035SI全景 北から



A区2面036SI全景 西から



A区2面036SI全景 北から



A区2面038SI全景 北から



A区2面042SI全景 北西から



A区2面095SI全景 北東から



A区2面086SD 石器出土状況



A区2面093SD 木製品出土状況



A区1面 100SB 全景 北西から



A区1面 100SB 全景人入り 北西から



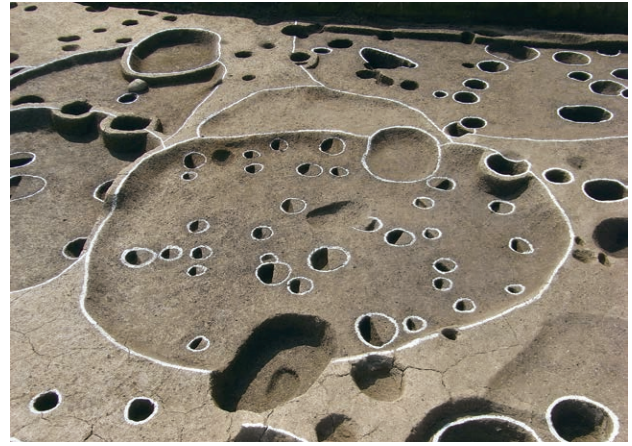
B区3面全景 南東から



B区3面全景 北から



B区3面671・672SI 西から



B区3面672SI 東から



B区3面677・678SI 北東から



B区3面699SK・670・675・676SI 西から



B区3面736SK 石器出土状況



B区1・2面全景 西から



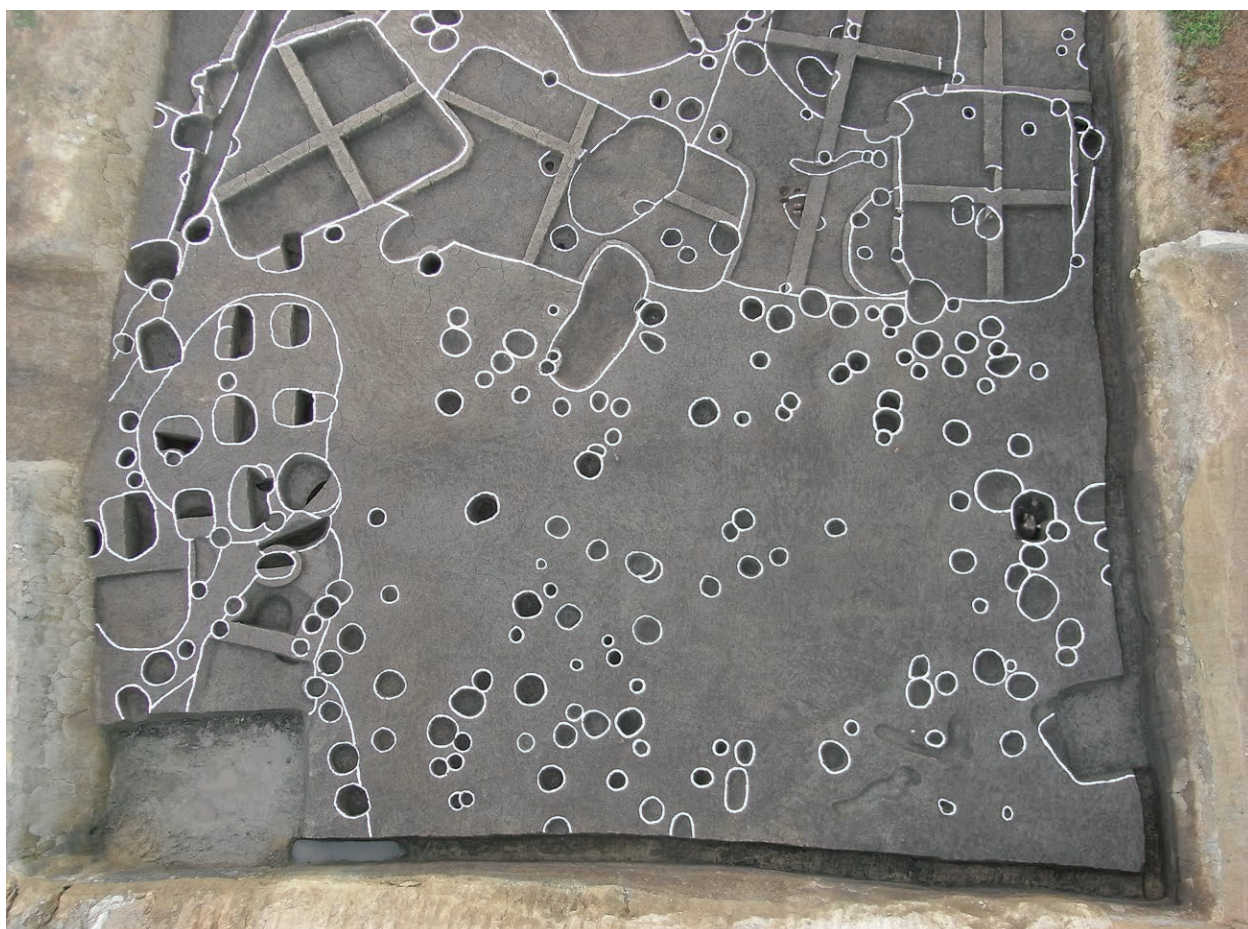
B区1・2面全景 北から



B区1・2面(南半)全景 西から



B区1・2面(南半)全景 北から



B区1・2面(北半)全景 北から



B区2面 502・511・512・513・514SI 北西から



B区西壁セクション 東から



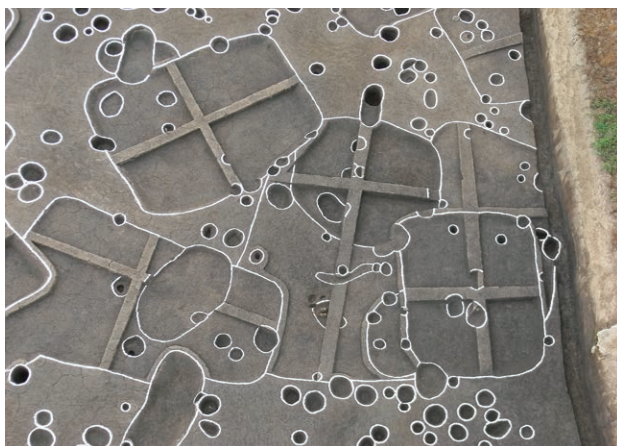
B区西壁セクション 北から



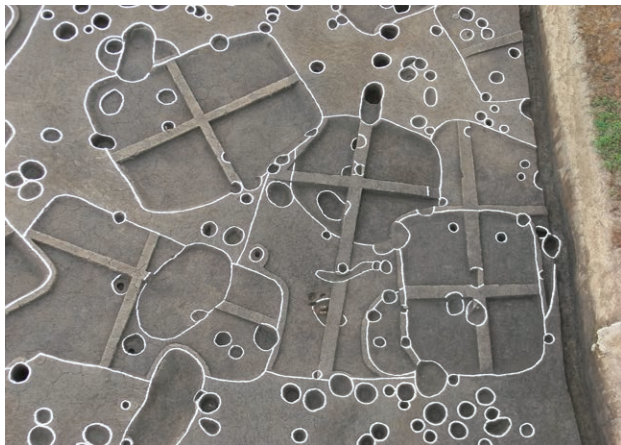
B区南壁セクション 北から 1



B区南壁セクション 北から 2



B区2面 503・504・505・506・507・600SI 北から 1



B区2面 503・504・505・506・507・600SI 北から 2



B区2面 508・509・510SI 北から 1



B区2面508・509・510SI 北から2



B区1面650・1013SB 北から



B区1面650・1013SB 人入り 北から



B区1面650・1013SB 西から



B区1面650SB 西から



B区1面650SB 北から1



B区1面650SB 北から2



B区1面433SK (650SB) セクション 南から



B区1面 433SK (650SB)
完掘状況 西から



B区1面 433SK (650SB)
長頸瓶出土状況 西から



B区1面 433SK (650SB)
長頸瓶出土状況 南から



B区1面 433SK (650SB)
長頸瓶出土状況 北から 1



B区1面 433SK (650SB)
長頸瓶出土状況 北から 2



B区1面 459SK (1013SB)
完掘状況 西から



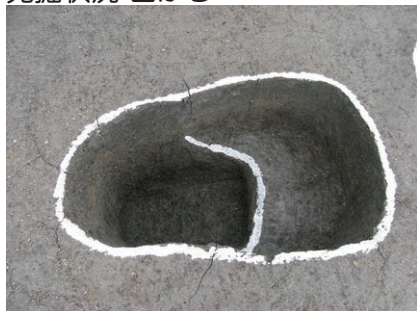
B区1面 461SK (650SB)
完掘状況 西から



B区1面 567SK (650SB)
完掘状況 西から



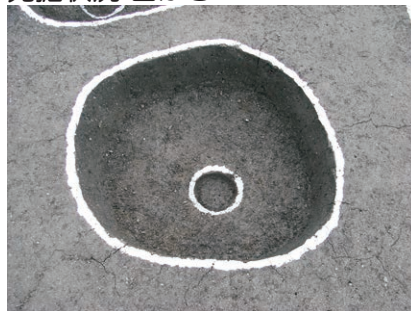
B区1面 594SK (650SB)
完掘状況 西から



B区1面 599・624SK (650SB)
完掘状況 南から



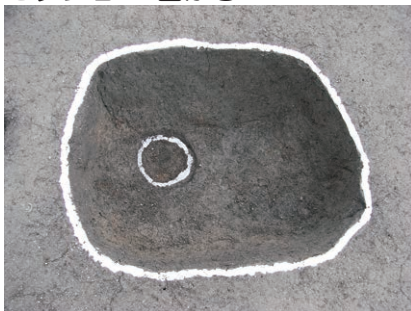
B区1面 609SK (650SB)
セクション 西から



B区1面 609SK (650SB)
完掘状況 西から



B区1面 610・634SK (650SB)
セクション 西から



B区1面 610SK (650SB)
完掘状況 西から



B区1面 618SK (650SB)
セクション 西から



B区1面 618SK (650SB)
完掘状況 西から



B区1面 624SK (650SB)
セクション 東から



B区1面 625SK (650SB)
完掘状況 西から



B区1面 625SK (650SB)
セクション 西から



B区1面 627SK (650SB)
セクション 南から



B区1面 627SK (650SB)
石器出土状況 東から



B区1面 627SK (650SB)
完掘状況 西から



B区1面 628SK (650SB)
セクション 北から



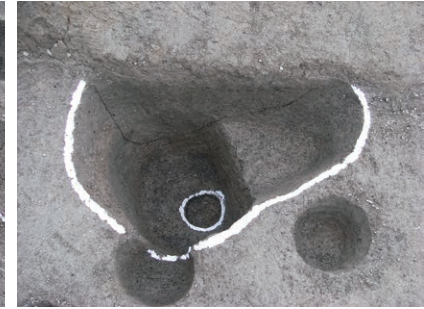
B区1面 633SK (650SB)
セクション 東から



B区1面 637SK (650SB)
セクション 西から



B区1面 637SK (650SB)
完掘状況 西から



B区1面 638SK (650SB)
完掘状況 西から



B区1面 638SK (650SB)
セクション 西から



B区1面 639SK (1013SB)
セクション 西から



B区1面 639SK (1013SB)
完掘状況 西から

B区1面640SK (1013SB)
セクション 西からB区1面640SK (1013SB)
完掘状況 西からB区1面641SK (1013SB)
セクション 西からB区1面641SK (1013SB)
完掘状況 西からB区1面690SK (1013SB)
セクション 南から

B区1面651SB 西から

B区1面644・645SK(651SB)
セクション 東からB区1面646SK (651SB)
セクション 東から

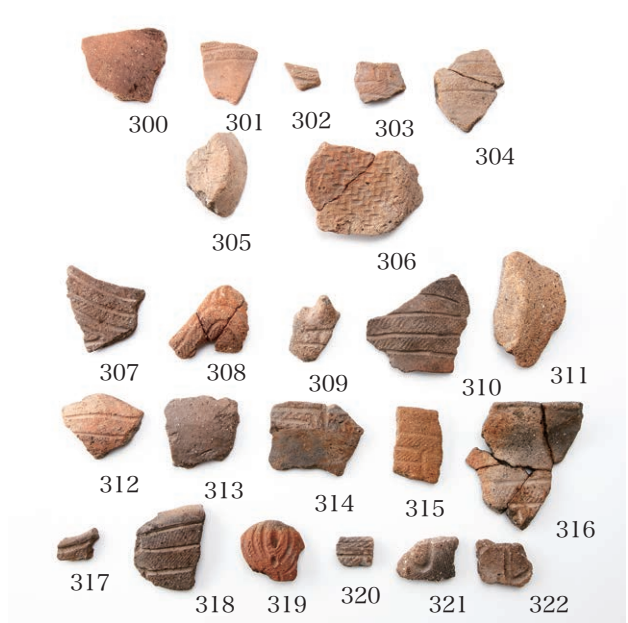
B区1面651SB 北から

B区1面432SK
土器出土状況 西から











350



351



352



353



359



361



364



374



391-1



382



389



391-2



392



394



395





427



429



435-1



436



437



435-2



442



451



455



456



457



458



463



466



467



468



470



475



477



480



484



486



487



488



489



492



495



499



500



501





530



536



539-1



537



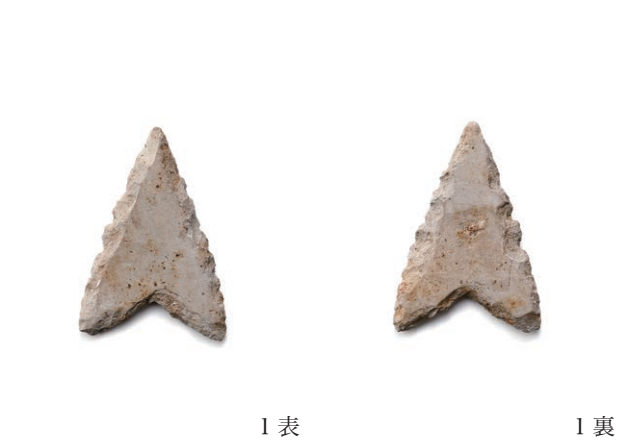
578



540



539-2



1 表

1 裏



16

17

18



19

20

21

22

23

24

25

26







001



002



002 細部 1



002 細部 2



006



008



018



024



012



013



014 細部



014



015



020



023



025-1



025 細部



025-2



001



002

ふりがな	いしぎしいせき
書 名	石岸遺跡
副 書 名	
巻 次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 195 集
編著者名	樋上 昇・鬼頭 剛・蔭山誠一・川添和暁・佐々木由香・バンダリ スダルジャン・小林克也・井上 巖
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦 2015 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もりした 石岸	あいちけんしんしろし 愛知県新城市 すながあざいしぎし 須長字石岸	23221	760285	34 度 55 分 39 秒	137 度 31 分 34 秒	2008.5.12 ～ 2008.9.20	800	第二東海 自動車道 横浜名古屋 屋線建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石岸遺跡	集落跡	縄文時代中期 ～後期	竪穴建物、土坑	縄文土器、石器	
		弥生時代中期	竪穴建物、溝、土坑	弥生土器	
		飛鳥～ 平安時代	掘立柱建物、竪穴建物、 溝、土坑、自然流路	須恵器、木製品、 金属製品	柱掘り方の一辺が 1m を超える大型の総柱建 物が 2 棟 官衙施設の 可能性あり

文書番号	発掘届出：埋文（19 埋セ第 123 号） 発掘届出：県教委（20 教生第 206 号） 完了報告（20 埋セ第 123 号） 文化財認定（21 教生第 315 号）
------	--

要 約	豊川中流域の右岸に位置する 7 世紀後半～11 世紀の集落。A 区は自然流路・溝・竪穴建物・掘立柱建物からなり、B 区は分厚い整地層の上に建てられた掘立柱建物のみ。なかでも 8 世紀後半の総柱建物 2 棟は、柱掘り方の一辺が 1m を超える巨大なもので、一般集落よりも官衙的な機能が想定される。
-----	---

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第195集

石岸遺跡

2015年3月31日

編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

印 刷 サンメッセ株式会社